



彼の病気の治し方

&  
楽しみ方

あなたの病気と  
死への不安消します

国東高行 著

彼の病気の治し方  
&  
楽しみ方

あなたの病気と  
死への不安消します

国東高行 著

## はじめに

天地金乃神様とのご神縁に恵まれ、差し向けられた病気により、天地金乃神様のお働き体感できたことで、天地金乃神様の人を助けたいという切なる御心がわかりました。

そして、今、病気や死への不安が消えている自分がいることに、自身が驚いているのです。

自分のような者でも、そのような心になれたことを、天地金乃神様や教祖様に、どうしてもお礼を申し上げたくて、受けたおかげを書き残し後世に伝えることにしました。

後世の人の助かりのお役に立てることを願っています。

国東 高行

「痛い 痛い」

昭和三十四年、三才の彼は、その時に泣き叫んでいた。

場所はおそらく病院の処置室のベッドの上であつたのだろうと思います。

一歳半になつても歩けなかつたので、両親が医者に診てもらふことにしたのです。

診察の結果、左の股関節を脱臼して、「今からの治療は難しいと思います。普通に歩くことは諦めてください」と医師から告げられたそうです。

当時は今のようにな、赤ん坊の定期健診などが無い時代でしたから、彼の股関節脱臼を見つかることが、遅れてしまつたのです。

彼の両親は、諦めずに何軒かの病院に当たり、取り敢えず治療をしてくれる病院を見つけたのです。

それから彼は長い間、下半身を石膏ギプスで固定して過ごすことになりました。

つまり、そこからギプスがとれるまで歩くことが出来ず、這うことしか出来ない生活を余儀なくされたのです。

人の体の骨の形成は、三才までに歩く事によりその基礎ができ上がるそうです。

彼は三才まで這う生活をしたために、小学校の低学年までは、上半身が異常に発達をして、鉄棒の片手懸垂や逆立ちが、軽々とできました。

人の体は日常生活の中で毎日繰り返し鍛えたものは、着実に成果になることを目の当たりにしました。

冒頭のシーンは、彼の足の石膏ギプスを外すために、看護師がはさみで石膏を切っていた時に、誤って左膝の身まで切ったために、思わず彼が叫んだのでした。

その後は記憶にないのですが、今も左膝にくの字型の傷跡がハッキリと残っているので、何かを縫<sup>ぬ</sup>わなければいけないような傷であったようです。

今も残っている傷跡は、その当時、両親が苦勞して諦めずに治療してくれた幼少期のことを、彼が忘れないように、神様が付けてくださった傷のように、彼には思えるのです。

その頃すでに彼の両親は、K教にご縁を頂いて、大阪のN教会にお参りをしていたのです。K教の神様の御名は、天地金乃神様です。

両親は、彼が普通に歩くことができるように、必死に天地金乃神様をお願いしていたことは容易に想像ができます。

医者が難しいと言った彼の足が、普通に歩けるようになったことは、その祈りのおかげもあると思っっています。

※楽しむポイントは、子の立ち行きを親がお願いすること。

彼の幼少期から高校生までの家族構成は、両親と姉と伯母（父の姉）の五人家族でした。

父とその伯母は年がかなり離れていて、父の母親代わりのような存在であり、彼は伯母を「おばあちゃん」と呼んでいました。

このおばあちゃんが、信心が趣味という人で、彼の人生に大きな影響を与えることとなるのです。

彼はマッサージなどのリハビリを終えて、普通に歩き、走る事もできるようになっていました。

ところが、小学校に入学した彼は、一年生か二年生の時に人生で初めて手術を受けることになったのです。どういう経緯かは彼はよく知らないのですが、母親から聞いたところでは、丸に悪い所が見つかり、手術をしなければ将来的に、子どもができないかもしれない状態だったそうです。

手術室に運ばれる時に、凄く心細かったのと、麻酔から覚めた時の、母親のニッコリした顔が彼には印象に残っています。

これが彼の入院のし始めで、これ以降五回（令和五年まで）の入院生活を経験することになるのです。

彼にとって、この手術はありましたが、小学校低学年は比較的体調が良く過ごせた時であり

ました。

この頃から、お正月休みには、家族や親戚、父親の友人などと、麻雀や花札で遊ぶのが習慣となり、彼が高校生まで続くのでした。この時、大人に混じって覚えた麻雀が、彼の人生を大きく切り開く元になるのです。

小学四年の時に、彼は何が原因かは解らないのですが、突然喘息になったのです。ここから彼が、天地金乃神様を意識し、彼のおばあちゃんの信心の影響を受けていくスタートとなったのでした。

喘息が酷く、苦しむ彼に対して、彼のおばあちゃんが、「教会と一緒に参りして、神様にお願いしようか」と誘いかけてきたのです。

彼のおばあちゃんは、大正時代に流行したスペイン風邪に当時の家族全員が病気に罹り、危ないところを、その当時すでにご神縁を頂いて、お参りしていたK教団の天地金乃神様に、お願いして誰も死なずに済んだのでした。

元々が信心好きであった彼のおばあちゃんは、K教団の天地金乃神様に助けて頂いたことに感激をして、家族の命を助けて頂いたお礼に、いつの頃からか教会に朝参りをするようになっていました。

また、戦後の時代が落ち着いた頃からは、K教団の本部へも、月に一度はお礼参りをしてい

ました。

そんな彼のおばあちゃんからの誘いです。彼は天地金乃神様のことはわかりませんが、喘息が治るならと思いました。

こうして、彼は朝四時半に起きて、おばあちゃんと一緒に、ともかく朝参りなるものを始めたのでした。

彼の体質が朝型の人間であったのか、いつも寝起きは良く、横に寝ていた彼に、彼のおばあちゃんが声をかけてくれると、直ぐに起きることができました。

ただ喘息の発作が出た晩は、朝方にうとうとするので、流石に朝起きるのがしんどいです。孫のような彼が、発作で夜あまり寝ていないことを知っているので、普通のおばあちゃんなら可哀そうに思い、彼を起こさずにそのまま寝かせておこうかと思うところでした。

しかし、彼のおばあちゃんは、彼がどんな状態でも起こして、朝参りに連れて行くのでした。非情というか情けがないというか、彼もその時は（このしんどさがわからないのか）と思いきも立つのです。

「おばあちゃん、今日もしんどいからお参り休みたい」

「しんどいからこそ、お参りしたら治して下さるんやで、神様のおかげ頂きや」

このように言って彼を引き起こして、お参りに連れていくのでした。



今であれば人情を捨てて、神情をもつておばあちゃんは彼に向っていたことが、彼にも理解できるのです。

もし可哀そうに思い寝かして置いたら、喘息は治らないのです。彼のおばあちゃんは彼を喘息から救うために、心を鬼にしてお参りに連れて行き、どうしても天地金乃神様に治してもらおう一心だったのだと思います。彼の心は、喘息が治りたいだけのお参りでしたが、約一ヶ月続いた夏休みの間に、いつの間にか喘息が出なくなり見事に治ったのです。

※楽しむポイントは、疑わずにお参りをしてお願いすること。子どもの祈りは神様に届きやすいこと。

彼の心に天地金乃神様がいることを、初めて実感した最初の大きな体験でした。

しかし、彼は何分まだ子どもですから、治れば当然のごとく、天地金乃神様が必要でなくなり、夏休みが終わると朝参りも止めてしまいました。所詮は苦しい時の神頼みだったのです。まあ、大人の人でもこのような方が多いと思えますが。

それから半年が経った頃から、また喘息が起きてきたのです。彼は慌ててまた、朝参りを始め、天地金乃神様をお願いをしたのです。

しかし、今度は一ヶ月、二ヶ月、三ヶ月経つても治る気配がなく、状態は悪くなっていくのでした。

夜になると発作がでて、横になれず布団に座る形でいました。咳と息が苦しく、酷い時は咳で胃の中の物を吐く時もありました。家族も心配して起きてくれ、彼の背中をさすってくれたりしていました。出されていた薬もあまり効き目がなく、本当に苦しい思いをしました。

ある時、薬で死ぬかと思ったことがありました。それは、喉の奥に吹きかけるスプレータイプの薬で、時間を必ず空けて使うように注意されているのですが、使うと暫くは息が楽になるので、つい詰めて使用したのです。使用后、いきなり心臓の鼓動がドキドキと早くなり、意識が飛んでいきました。暫くして布団の上で気が付きましたが、それ以来薬も怖くなり、使えなくなつたのです。

天地金乃神様にお願ひしても何故か今度は治らない、薬もダメ。そういう状態が、小学校五年から中学校二年生半ばまで続きました。

それでも苦しい中で、おばあちゃんとの朝参りを、出来るだけは続けていました。

そういう状況が続くと彼に、天地金乃神様が一度は治してくれたのに、今度はなぜ治してくれないのかと、だんだんと天地金乃神様を恨み、天地金乃神様に腹が立ってきました。

ところが、天地金乃神様はそんな彼の心を見透かしたように、時々おかげを見せてくださる

のです。

例えば、小学校六年生の時には、その当時は修学旅行で、必ずお伊勢参りをすることがありました。もちろん彼も、修学旅行には行きたいので、天地金乃神様に、喘息の発作が起きず無事に行けるようお願いをするわけです。すると、修学旅行の前日と当日は発作が起こらず、帰った晩に発作が出るというお繰り合わせを頂くのです。

特に彼の中学一年の時は、喘息のために学校に行くのもしんどくて休むことが多く、中間・期末テストもまともに受けることが難しいようなことでした。自宅から学校まで歩いて十五分ほどでしたが、特別に自転車通学を許可してもらい通学していたほどです。

彼の喘息の状態が悪いまま、中学二年の半ばを迎えた時でした。ある夜に、彼の両親が、彼は寝ていると思っていたのか、

「今日は、発作が出ずに寝られたらいいのになあ・・・」

「そうやね、たまに私達もゆつくりと安心して眠りたいね」という本音の会話が聞こえてきたのです。

その瞬間、彼の心に両親に対して、突然に何とも言えない、相済まない思いが沸き上がったのです。それまで、(何で自分一人だけが、これだけ苦しくしんどい目にあうのか)という思いしかなく、家族に対する思いやりなど、全く頭になかったのです。確かに、彼が晩に喘息

の発作で苦しんでいる時、親も起きてきて背中をさすってくれたりして、お世話をしてくれていたのです。彼も熟睡安眠していないが、彼の両親も熟睡安眠していなかったことに、初めて気が付いたのです。

今まで天地金乃神様には、

『苦しいから喘息を治して欲しい』

と願うだけでした。その夜から、彼は天地金乃神様に、

『両親が熟睡安眠のできるように、喘息を治して下さい』

と願うようになったのです。

すると、それから一週間もしないうちに、喘息の発作が起きなくなったのです。

この体験は、後々の人生の上で、大きな宝となるものでした。少しだけ天地金乃神様からおかげを受けるコツを得たのです。

天地金乃神様は、自分の助かりを中心にお願いするより、周りの助かりを中心にお願いした方が、願いが叶い立ち行く道がつきやすい、そのことを彼は体験したのでした。

※楽しむポイントは、神様へのお願いは、親や周りの助かりを先に願うこと。

天地金乃神様は、最初はすぐに、彼におかげを下さつて、彼に天地金乃神様の存在を、まずは知らしめようとされたのです。そうしないと、二度と彼が、天地金乃神様に、本気で向かうことがないと、天地金乃神様が判断されてのことだと思われれます。天地金乃神様からすると、おかげを受けたら、彼にそこからもっと近づいてきて欲しかったのです。しかし、その時の彼は喘息が治れば、天地金乃神様は必要ではない存在でした。

つまり、天地金乃神様をお医者さんと同じに考えていたのです。病気が治れば、お医者さんにはもう行くことはありません。同じように病気が治れば、天地金乃神様にお問い合わせが必要が無いわけです。彼のおばあちゃんのように、信心が趣味で、お参りそのものが、楽しみであり喜びである人とは違うのですから、当然と言えども当然のことだと言えます。

何事もないのに、神仏に手を合わせるのが好き、神仏にお参りすることが嬉しいという人は、『好きこそものの上手なれ』という例えがあるように、好きな所に通う心で神仏にお参りすれば、自ずと素晴らしい結果を、人生で得るようになります。

今回、彼は考えました。ここでお参りを止めると、喘息がまた起きるような気がして、取り敢えずお参りを続けることにしたのです。

その後の朝参りの中で、彼は彼のおばあちゃんの、天地金乃神様に向かう一心の在り方が、あり得ない奇跡を起こすことを体験するのです。今では考えられないのですが、その当時の

国鉄（今のJR）は賃上げ闘争の為に、ストライキを実行して電車の運行を止めることがあったのです。

当時は、彼が住んでいた最寄りのS駅から大阪のN駅まで、国鉄に乗ってお参りをしていたのです。その日、ストライキがあり電車が動いていないことがわかっているのに、彼のおばあちゃんは朝参りをするために、S駅まで行くと行って出かけるのです。S駅まで行って電車が動いていなければ、しかたがないから、そこから教会の方に向かって遥拝をして帰るといふことでした。

それでS駅に向かって幹線道路を歩いていると、一台のトラックが二人の傍に止まりました。トラックの運転席から「こんな朝早くどこ行くんや」と声をかけてくれました。

「大阪のN駅まで行くつもりで、まずS駅に行くところですねん」と彼のおばあちゃんが答える  
と、

「今日はストライキで国鉄はまだ動いてないで」

「わかっています、取り敢えず駅で待って、動かなければ帰るつもりです」

「それやったら、このトラック、中央公設市場に行くから、N駅まで乗りや」と親切に運転手が言ってくれたのです。

まさにあり得ないことが起きて、その日の朝参りができたのです。

普通であれば、ストライキが解除されていないのですから、お参りを諦めても仕方ないところですよ。

ところが、彼のおばあちゃんは、行ける所まで行ってみるという姿勢で、天地金乃神様にお願ひし、お参り出来るおかげにしてしまったのでした。

※楽しむポイントは、お願ひしながら、できるところまで行動すること。心で思っているだけではダメ。

彼はこのような、彼のおばあちゃんの、天地金乃神様に向かう姿勢をみて、天地金乃神様からおかげを受けるあり方を、少しずつ体得して行くのでした。

こうして、彼はおばあちゃんと、毎朝お参りを続けるのですが、まだ天地金乃神様が有難くお参りするのではなく、病気への恐れから、お参りをしなければという思いなので、当然しんどいお参りだったのです。

世に神仏を信心している人の多くは、この時の彼のように、お参りしないと心配や不安だからという人が多いように思います。

世の中に神仏を信じている人はたくさんいるでしょう、けれども神仏が助けて下さると信じ

切れて、神仏から自分にとって都合の悪いことを差し向けられても、お礼の心で神仏に向かえる人が、どのくらいおられるでしょうか。

そういう人が、天地金乃神様から信じて頂ける人だと、後々に彼は理解したのです。

正しく、K教の教祖様がそうでした。

天地金乃神様を信じている人は多いが、天地金乃神様に信じられる人は、ごくわずかな人しかいないのではないのでしょうか。

このように、親の安眠を願うことにより、鮮やかに喘息が治り体調が戻ってきた彼ですが、丈夫な体とはいえません。まだよく風邪などは引いていたので、常に体に対して自信がなく、天地金乃神様を放したくても放せないという状態でした。それが、お参りが続いた大きな一因ですから、しっかりと元氣にならず、この時期に体が弱かったことも、大きな天地金乃神様からの、お繰り合わせであったと思います。

※楽しむポイントは、神様をお願いしていると、病気が本当に助かる元になること。

さて、彼には二学年上に姉がいました。彼は中学・高校時代はシスコンであったと思うのです。彼の姉は、彼と真逆でほとんど病気をせず、学校も休むことなく、常にコツコツと努力を



重ねられる人でした。

彼が余りにも小さいころからひ弱だったので、よく面倒をみてくれ、可愛がってくれました。彼はいつでも、姉から庇護を受けているような関係なので、彼は彼の姉と喧嘩をした記憶がないのです。これは、両親にも言えることで、体のことで親に心配ばかりかけていたので、親とも喧嘩したことがなく、いわゆる思春期にある、親への反抗期というような時期が、彼にはなかったのです。

彼は朝参りを続けていたので、朝四時半に起きるために、夜遅くまで勉強をするだけの、体力がありませんでした。かといって、朝参りを止めて勉強するのも、また病気になるのではという、怖い思いもありお参りを止める事ができませんでした。そんな勉強の仕方ですから、彼の進学した高校は、学力にあった家から歩いて五分で行ける、府立S高校に入りました。

彼の高校時代は、ごくごく平凡なもので、体調も比較的によくて、中学生の時から仲が良かったO君やK君などと、良く遊びに出かけたりしていました。

やがて、大学受験を迎えますが、やはり努力不足で現役では不合格になりました。これは彼にも納得がいくことであり、あまり気落ちもなく浪人生となったのです。予備校にも通い、再度大学を受験することを目指しました。人生で一番に勉強した時かもしれません。

時間はあつと言う間に経ち、受験生にとっていよいよラストスパートとの時期に入る十二月

の初めに、彼の体に異変が襲ってきたのでした。

それは、体が異常に疲れやすく、やがて尿が黄色くなり、手や白目の所も、黄色くなる症状が出てきたのです。これは間違いなく肝臓が悪くなると出る黄疸の症状ですが、彼にはまだその知識はありませんでした。

母親と共に病院へ行き、医師に診てもらおうと、急性肝炎だと言われました。最低三か月ぐらゐの入院は覚悟して下さいとの診断でした。

彼はその言葉を聞くと、

「それは困ります入院はできません」

彼にとつて余りにも衝撃的な言葉に対して、咄嗟に答えていました。

「どうして？ 今も体が酷くしんどいでしょう」

「しんどいですが、年が明けたら大学受験があるので、三ヶ月も今から入院できません」

「もし入院しないで悪くなったら、肝硬変や慢性肝炎になる可能性もありますよ。受験も大事ですが、体を治すことはもっと大切です」

「今すぐの入院は嫌なので、取り敢えず今日は帰らせて下さい」

「それではとにかく検査を受けてください。検査の結果を見て判断しましょう」

このような押し問答をした後、彼は強引に医師を押し切り家に帰りました。

家まで帰るバスの中で、彼は天地金乃神様に、何とも言えないほどのやり場のない憤りをぶつけていました。

（天地金乃神様どうしてですか、毎朝頑張ってお参りをして体の健康をお願いし、無事に大  
学受験が出来ることをお願いしてきたのに・・・）

（いよいよ勉強のラストパートをかける時期に、入院が必要な病気になる・・・。これ  
はどういう意味ですか。）

彼は今ここで入院することは、今までの朝参りと勉強の努力と苦労が、全て無駄になる気が  
したのです。

彼はその晩、家族に彼が考えた末に出した結論を伝えました。

「今度の病気は入院しない。ここまで毎日朝参りをして健康のお願いをしてきた結果が、こ  
の時期のこの病気では天地金乃神様のお働きの意味が分からない。だから天地金乃神様に責任  
を取って頂き、今回の急性肝炎は天地金乃神様に治してもらおうと思っっている。そのため、  
改めて一カ月の日を切つて命がけで朝参りをして、天地金乃神様にぶつかってみたい。そして  
天地金乃神様のお働きをはつきりと確かめたい」

ある意味で天地金乃神様に対しての、彼の反発であり挑戦であったのですが、彼がこのよう  
な決断が出来たのは、やはり喘息が治った体験があったからだと思えます。

ありがたいことに、家族は反対することなく、彼の思いを受け入れて、しかもみんなでお祈り添えをしてくれることを約束してくれました。

家族が一つの神様に心を向けているということが、いざという時に、物凄く心強いものだと、彼はこの時に思ったのでした。

※楽しむポイントは、開き直って、神様に身を任せてお願いすること。家族が心を揃えてお願いできること。

母親はこの一カ月だけ一緒に朝参りをしてくれました。実は、彼の母親は大変な低血圧で、朝起きは大の苦手な人だったので。

この母親の行動を、彼は本当に嬉しく思い、親が子を思う大きな愛を、改めて感じました。また、母親が朝参りをするには、父親や姉の理解や協力も必要ですから、まさしく家族で、彼を応援してくれたということになります。

その状況で一カ月の日切りの朝参りをしていましたが、彼の黄疸は中々よくならず、尿の色も白目の部分も相変わらず黄色でした。その中で、天地金乃神様のお庇いかな、と思える不思議なことを、彼自身の体の体調や、ある事によつて感じる事ができていました。それはまず

は食欲があったことです。

肝炎になり黄疸が出ると普通は、食欲が落ちて油ものなどが食べられなくなるようですが、彼は何でも美味しく食べることができていました。

それとお参りの行き帰りの電車で、すべて座ることが出来たことです。行きは始発ですから当たり前ですが、帰りは通勤の混む時間に当たります。ですからそれまで帰りは、ほとんど座った記憶がないのです。彼は若かったので、あまり座ることを意識していなかったからかもしれません。

しかし黄疸が出てからは、ずっと立っているのが辛いのです。直ぐに座りたくなるのです。彼が帰りの電車に乗ると、必ず目の前に座席が空いているのです。まるで「さあ、そこはあなたの席です。どうぞ座りなさい」というように。

このような天地金乃神様のお働きを感じながらも、日が経つにつれ、良くなる気配がないことに、言いようのない不安が少しずつ大きくなっていくのです。

彼は自分の心ながら、天地金乃神様に向かう自分の心が、これほど頼りなくいい加減なものであることを、改めて自覚をする機会となったのでした。彼は天地金乃神様に一心が定まっていなかったことを、ありのままにお詫びして、不安な心のままにお願いをするのでした。

ありがたいことに、三週間近く経った頃から、急に黄疸も尿の色も元に戻り、体の疲れやし

んどさもましになってきたのです。

年が明けて、直ぐに病院に行き検査をした結果、肝臓の数値は正常値になっていました。彼は心の中で、（よっしや！）と叫んでいました。正しく天地金乃神様のお働きを、病院で証明してくれたように思いました。

彼は後々、天地金乃神様をお願いして病気で病院に掛かることは、天地金乃神様のお働きを確認しに行くことだと思ふようになったきっかけです。

このように体調が戻ったといえ、まだ無理ができる状態ではありません。天地金乃神様に、日切りをした一カ月の期間は、朝参りから帰ると、すぐに布団に入って安静にしていました。時々参考書を開く程度しか勉強ができなかつたので、大学受験においては大きな痛手です。

しかし、彼の心の中では病気が奇跡的に治つたことで、大学も奇跡的に合格のおかげを頂けると、なんの根拠もなくそのように確信していたのです。

彼の全く都合の良い解釈ですが、何故かその時はそう強く信じて思っていたのです。例えて言えば、模擬テストでDやEの判定の人が、稀に合格することがあるようなことを、彼は期待していたといえればよいでしょうか。

二月を迎えていよいよ主な私学の試験が始まりました。彼は浪人生なので、どうしても何処かに進学したくて、今回の受験は、私立大学も受けること親に伝えました。親も承諾してくれ

て何校かを受けました。

体調に問題なく、無事にすべての私学の大学を受けることができました。

その中には所謂滑り止めの所もありましたが、結果は見事にすべて落ちたのです。ショックはありましたが、行ける大学は一つでいいので、国立二期に入れたら良いのだ思い、私学への入学金を払わなくてラッキーという感覚でもありました。

病気が奇跡的に治った体験が、彼は親が喜ぶ大学合格のお願いを、天地金乃神様は絶対に願いを叶えて下さると、当時は本当に信じ切っていたのです。

国立一期は国立二期の腕試しのつもりで受けたので、不合格は当然の結果として受け止めていました。

よく考えれば、十二月に黄疸が出た状況を思えば、無事に元気で予定通りに、すべての試験を受けられただけでもおかげであったと言えます。

今なら天地金乃神様への受験のお願いとおかげは、受験生が元気で勉強が出来て、予定通りに試験が受けられる。ここまでが、天地金乃神様が受験生に対して、お守り下さるおかげだと判るのです。

当時の彼は、そんなことを思いもせず、天地金乃神様に、お礼を申し上げることなどありませんでした。長年お参りしながら、お礼の信心ということが身についていなかったのです。

最後の国立二期大学の発表がある日を迎え、合格番号が張り出してあるボードの前に行き確認しました。彼の番号がないのです。いくら見ても。

呆然としながらも、とにかく家にいる母親には知らせなければならぬと思い、公衆電話から連絡しました。彼はその後、最寄り駅から環状線に乗り何周かをして、心を落ち着かせて、これからどうするかを考えていました。もう一年勉強して来年再び受験するのか。両親は彼が頼めばそうさせてくれるだろうが……。

彼の一番の不安は、勉強をしていてまた病気になるのではないかということでした。

彼は電車で揺られながら、この結果は天地金乃神様から『大学へ行くな』と言われていた気がしてきたのです。そうであれば、もう一年勉強しても無駄ではないか。

少なくとも高校三年と浪人してからは、大学合格と元気で勉強ができることを、彼なりに一心に、天地金乃神様をお願いしてきた自負みたいなものがありました。

だから元気で必要な勉強ができて、無事に大学受験を終えて、彼にあつた大学に合格すると信じていたのです。ましてこの時点で、彼の大学合格は、両親の大きな喜びにもなるものですから、もちろん天地金乃神様に、

「親が喜びますから合格させて下さい」  
と祈ることもしていたのです。



でも天地金乃神様は彼の願いを叶えずに、一番受験の大事な時期に、彼は急性肝炎になり、普通なら三カ月ほど入院せねばならぬ状況にされたのでした。

彼は電車で環状線を回る間にいつしか、『病気も天地金乃神様から差し向けられるものではないか』という思いが、頭の中に浮かびあがって来たのです。

暴飲暴食をしてお腹を壊すのは、天地金乃神様のお差し向けではなく、自分のした自業自得だといえます。しかし人が、癌や認知症など、自分の努力や生活の仕方ではどうにもならない病気は、天地金乃神様が差し向けられている病気だと、その時に彼は捉えたのです。

本人に原因があつて病気になったものは、本人がその原因を改めない限り、天地金乃神様にも治せないのではないか。しかし、天地金乃神様から差し向けられた病気であれば、天地金乃神様に一心を向けてお願いすれば、治して下さるのは当然のことではないか。

だから彼の肝炎は自分が無理したことであつた病気なのか、それとも何かの訳があつて、天地金乃神様が差し向けられた病気なのか。勉強の追い込みのために、体に負担をかけて肝炎になつたのは、暴飲暴食でお腹を壊すことと同じなのか？

彼は肝炎の治り方からして、やはり暴飲暴食でお腹を壊すのとは違い、この肝炎は天地金乃神様が差し向けられた病気だと判断をしたのでした。

天地金乃神様から差し向けられた病気により、大学が不合格の結果に導かれているなら、天

地金乃神様がこれから先で、彼が納得のいく答えを見せてくださるだろう。

このような心の整理ができてから、環状線から乗り換えてS駅で降りて、家に帰り着いたのは午後四時頃でした。彼は自分の事しか頭になかったのですが、彼の母親は彼の帰りが遅いので、かなり心配していたのです。

「ただいま」

「お帰り、遅かったね、どこ行ってたん」

ほっとしたような母親の顔がありました。

「うん、ごめん、電車の中で考えごとしとった」

「そうやったん、遅いから心配したわ。帰ったばかりやけど、今すぐ大学不合格のお札に教会にお参りするから一緒に行こう」

彼は母親が外出着になつていることを、この時初めて気づきました

「えっ　今からお参りするの・・・。」

「そうや、お礼のお参りは早ければ早いほどいいから」

「いや。合格やったらわかるけど・・・。」

「だから、不合格のおかげを神様から頂いたんやから、急いでお礼のお参りをせんと神様に勿体ない。お礼をせんと、これから後の神様のお繰り合わせも頂けなくなるからね」

この思いもしない母の言葉が、この時の彼を助けたと思います。

彼が環状線をグルグル回る電車の中で感じた、大学不合格も神様が導いてくださったものではないか、という思いに寄り添うような言葉だったのです。

「不合格のおかげ」彼のこの後の人生の展開を知れば、言い得て妙な言葉なのでした。

この時の母親の言葉が、

「不合格で残念やったね、神様のおかげを頂けなかつたね」

であつたら、もつと大きなダメージ心を受けて、天地金乃神様に対して悩み苦しんでいたと思うのです。

そして、もう一つ彼を驚かせた母の行動が、この後にありました。それは、不合格のおかげのお礼に、大学入学に用意していた入学金を、すべてお供えしたことでした。

彼のお参りする教会は、お願いする時にはお供えはしなくても良いのです。何故なら天地金乃神様は、お金や物で人の願いを叶えることは絶対にはないからです。願いが叶うか叶わないかは、その人の心の在り方次第なのです。つまりは天地金乃神様のおかげとは、天地金乃神様に向かうその人の心にあると言うことです。

天地金乃神様の方は、人が真に助かるのであれば、いつも人の願いを成就させてやりたいとの、御心でいつもおられるのです。だからこそ天地金乃神様をお願いして、願いが成就した時

には、必ずお礼のお参りをさせて頂き、喜びの心でその人ができる心任せのお供えを、天地金乃神様に奉ることが大切なのです。

彼は長い間のお参りにより、そのことは理解しているつもりでした。実際に彼は、中学生になつてから貰い始めたお小遣いは、ほとんど中間テストや期末テストが無事に受けられたお礼にと、天地金乃神様にお供えしていたのでした。彼のおばあちゃんが、事あるごとにお礼のお供えを喜んでしていたのを、見ていた影響が大きいと言えます。

でも実際に不合格がおかげにしても、そのお礼に入学金をまるまるお供えするのは、お供えのし過ぎではないかと、彼は正直なところ思つたのです。

そして、母親がこのような思いを持つて、天地金乃神様に向かつていることを見せられて、彼は彼の母親の天地金乃神様に対する凄い思いの一端を、感じる事ができたのでした。

※楽しむポイントは、何事も親の神様へのお礼の行動が、子どもの助かりになること。

その晩、彼は環状線を周りながら思つたこと考えたことを、素直に彼の両親に伝えました。彼の両親も理解をしてくれ、彼は大学には行かず、このまま就職をして働くことを選択したのです。

三月ももうすぐ終わりという時ですから、簡単に働く場所が見つかるとは思いませんでした。しかし、彼のおばあちゃんの信心友達が、事情を聴いて近鉄大阪線のK駅から歩いて五・六分のところにある会社を紹介して下さったのです。

彼にとって突然の人生の方向転換ですから、その時はまだどの様な仕事をしたという希望もなく、とにかく社会に出て働いてみたいという思いだけでした。

すぐにその信心友達の方に案内されて、会社見学もかねて面接を受けに行きました。床のワックスを製造販売している会社で、四月から彼ともう一人新しい人が入れば、十人程度が働いている所でした。

会社の社長とお会いして、直接色々な事を質問され、彼もそれに答え、彼から質問もして四十分ほど経った頃に社長から、

「あなたが良ければ、四月一日から勤めて下さい」

とのお言葉を頂いたのです。そう言われて彼も、

「どれだけ働けるか分かりませんが、宜しくお願い致します」

と自然に答えていました。

一応は正社員として入社して、健康保険や厚生年金などの手続きをして頂けたことから、働く人にとって良い会社であったと思えました。

彼の自宅があるS駅から通勤するには、遠いように思いましたが、紹介をくださった方の親切な思いと、会社の和やかな雰囲気が入り、四月から彼はここに勤める事を決めたのです。実は彼がこの会社に勤めようと思った大きな理由に、自宅から会社までの通勤時間が、長く掛かることも関係していたのです。

彼のその時の心境は、天地金乃神様への期待の思いを、思いつきり詰めて膨らませた風船が、いきなりパンと破裂して跡形もなく消えしまった状態だったのです。正直に言えば、約九年あまり続けてきた朝参りを、一度この機会に止めたいと考えていたのです。通勤時間が掛かることが、止めるよい口実にできたのでした。

この時の彼は、自分の願い通りを聞いて下さるのが神様のおかげであって、それ以外は、ただおかげを頂けなかったと受け取るぐらいのレベルだったのです。

確かに天地金乃神様のお働きはある。それは実際に体感もしたけれど、最後の最後に、天地金乃神様から見捨てられた気分だったのです。彼はこの天地に色々な人にお世話になり、空気や水や食物をはじめ、天地金乃神様が作り与えて下さる色々な物によって、天地金乃神様に生かされて生きていることを知ってはいました。しかし、彼はまだ知識として知っているだけで、実感として身体には感じていなかったのです。

彼のおばあちゃんや彼の家族はそこがわかり、天地金乃神様に向かっているので、何があつ

でも願いが叶わなくても、天地金乃神様を離すことなく、お参りを続けることができた訳です。彼は家族の中で、本来一番信心の心が弱く、天地金乃神様を放し易い存在だったのでしょう。ここに彼に対しての、天地金乃神様のご苦勞があつたのだと思います。

彼は、天地金乃神様に一心にお願いして、願い通りにならなければ、それは後々にもっと大きなおかげとなる事を、再び天地金乃神様に向かうようになった時に、はつきりと知ることになるのです。天地金乃神様から見れば、神の本当の心がわからない、この時の彼の存在は、ひたすら愛おしく可愛いものだったでしょう。

※楽しむポイントは、親の心を子知らず、神の心を人知らずということ。

四月になり、彼の生活は大きく変わりました。

まず、朝起きる時間が四時半から六時になり、午前七時過ぎに家を出て、S 駅から電車に乗り、大阪駅で環状線に乗り換えて、T 駅で近鉄大阪線に乗り換えて、K 駅で降りて、午前八時三十分までに会社に入る。そして夕方まで働いて家に帰る。昼飯は会社で用意された物を食べるのです。

通勤の服装も、会社で制服に着替えるので、背広もいらさず自由で、ジーパンに普段着で気を

遣わずに済んだことも、彼にはとても楽でした。

このように割とスムーズに、彼の会社勤めが始まりました。彼の勤めている会社に対しては、不満もなく勤め易い所だと思えました。

しかし、彼はこの会社で一生働く思いがあつたわけでもありませんでした。七月に入つてすぐでした、珍しく朝起きるのがしんどくて、トイレに行くとおシッコが黄色いのです。しかもトイレをしている少しの時間なのに、彼の膝がガクガクと笑う感じで、立っているのが辛くなつてくるのでした。

彼は二、三日前から、体に嫌な疲れを感じてはいたのです。やはりそこから来ていたのです。とても会社へ行けそうにありません。仕方がなく会社に電話して、状態を説明して病院に行くために、お休みを頂いたのです。

その日、母親に付き添われてタクシーで病院にいきました。体のしんどさも酷いのですが、彼の心から気力もなくしていたのです。前の急性肝炎の時は、肝炎の症状もましであつたし、何より心には、受験に向けて気力は満タンにあつたのです。

前と同じ病院の同じ医師に診察を受けました。

「今度は間違いなく、今から直ぐに入院して下さい。そうしないと、慢性肝炎から肝硬変になる可能性があります。最低三カ月の入院と思つてください」



彼の予想していた通りの展開で、完全にギブアップという状態に陥りました。すでに彼に入院を拒否する元気はありませんでした。また勤めているのですから、診断書を書いて頂き会社に提出して、休む手続きをする必要があります。家で養生するというわけにはいかない状況でした。

病室のベッドの上に横たわったとたん、彼は直ぐに眠りに落ちました。それから三日間ほど、食事とトイレ以外はほとんど眠り込んでいたのです。前の肝炎の時からすると、比べようがないほど悪い状態でした。三日目を過ぎたくらいからようやく、彼の頭が少し働き出してきました。入院して治療を受けているのですが、ベッドに安静にしてブドウ糖の点滴を受けるだけのことでした。

一週間もすると体の疲れも幾分かとれてきて、それにつれて心も落ち着いて自分の置かれた状況を、彼は冷静に見つめられるような状態になりました。

彼の頭の中にあるのは、仕事のこと、そして天地金乃神様のことでした。

仕事については社員の人達が見舞いにも来てくれ、休んでいる間の給料も、六割は出るような待遇をして頂ける良い職場でしたが、三ヵ月後に退院してから再び勤めることは、体力的にとっても無理だと感じていました。だから退院したら良い会社であるけれど、退職をしようと思っていました。勤めても再び倒れるような気がしていたのです。

大学進学の道を止めて、今また仕事を続けることも不可能な状態となり、これからどうすればいいのか、彼が出来る仕事はあるのか。ここに至ってようやく、彼の心が、天地金乃神様に再び向かう時節となったのでした。

彼のこの時の頭の中を覗くと、

（確かに喘息や前の急性肝炎、また幼い頃の股関節脱臼などで、天地金乃神様のお働きと思える事実を体験はしていた。でもそれは本当に、天地金乃神様の働きだったのか、たまたま偶然にそうなったのではないか。第一に天地金乃神様は本当に自分を助けてくださる存在なのか。それならなぜ今の、先の見えない絶望とも言える状況に自分を追い込んだのか。いや、自分はここ三ヶ月ほど、天地金乃神様から実際には遠ざかっていたのであるから、喘息が再発したように、肝炎が再発して今の窮地に落ちたのは、天地金乃神様の責任ではなく、自分に責任があるのではないか。人の助かりは、天地金乃神様の責任なのか、人の責任なのか、どちらにも責任があるのか）

こんな問答が、彼の心で堂々巡りをしているのです。考えてみれば彼はその時まで、K教団の天地金乃神様しか知らずにいました。

※楽しむポイントは、人が神様を放しても、神様は見守り待っていてくださること。

たまたま彼のおばあちゃんや両親が、K教団にご縁があったので、彼も自然な成り行きで、K教団の天地金乃神様に、手を合わせてお願いするようになっていたのですが、彼自身が幾つかの神仏に触れて、見比べた中から選んだ神様ではなかったのです。彼はこの先、天地金乃神様に向かうとするなら、その天地金乃神様が、どのような救済を人に与えてくださるのかを知って、手を合わせるべきだと気づいたのでした。

彼はK教団の天地金乃神様に、おおかた十年程のお参りしていましたが、この天地金乃神様が自分にどのような救済を差し向けてくださるのか。どの様に彼の人生を導く教えがあるのか、この時点ではまだほとんど理解をしていなかったのです。ただ天地金乃神様をお願いをして、願いが叶えば天地金乃神様に、お供えをしてお礼を申し上げる。その繰り返しがあるだけの天地金乃神様との関係でした。

彼がおぼろげに、その時点で知っていたK教団の天地金乃神様は、

- 人に命を授けてくださっていること。
- 人や動物や草木が存在している天地が、天地金乃神様のご神体であること。
- そのご神体の中に住んでいるすべての人は、天地のお働きのお世話になって、天地の間に生かされて存在していること。
- 天地が天地金乃神様のご神体であるから、どの土地もどの方角も、天地金乃神様の尊い場

所・尊い方角なので、人はどこに住んでいても、神天地金乃様にお土地を借りているので、お礼を申して住むことが大事である。

ということぐらいでした。

あつ、もう一つだけ彼の生活の中に根付いていた、天地金乃神様の教えがありました。それはすべての食べ物、天地金乃神様が、人の命のために作り与えてくださる物だから、何かを食べてはいけないということは一つもなく、何を食べても飲んでも適量をありがたく食べれば良いということでした。

また、断食や何かの食べ物断ちをすることは、天地金乃神様にとって、お喜びになることなく、人が何でも好きな物を、適量に食べて飲んで体を大切にして元気でお役に立つことが、天地金乃神様が、本当にお喜びになる行いであると教えられていたのです。

彼はK教団の天地金乃神様の教えにより食べ物、天地金乃神様のお働きと、人のお世話になって整えられた尊い物として、ありがたく頂くように心がけていたのです。

彼は幼い時から、食事のおかずを残すことや、お茶碗に米粒残すような食べ方を、することはなかったのです。このように食物を大切にしてきたことが、天地金乃神様が認めてくださっていたのでしょうか。この二回の肝炎の療養中において、彼の食欲は医学の常識とは違って落ちることはなく、何でもいつも通りに食べることができたのです。当時の病院は、付添人の

ために、自炊のできる場所があり、また外から出前を頼むこともできたのでした。彼はさすがに自炊をしませんでしたが、若いゆえに病院の食事だけでは物足りずに、週に二、三度は出前を頼んでいました。現在の病院のシステムからすると、考えられないようなことですが、当時はまだ時代が緩くて、何となくおらかだったのです。もちろん彼が、食事制限のあるような、病気の患者ではなかったからできたことですが。

まだ入院して二週間ぐらいの頃です、たまたま彼が出前の天ぷらうどんを食べている時に、主治医が彼の所へ来たことがあったのです。主治医は、彼が美味しそうに、天ぷらうどんを食べている姿をまじまじと見て、不思議そうな顔をして言いました。

「えらい食欲があるようやね、天ぷらが美味しく食べられるの？」

「すいません、病院で出る食事だけではお腹が空くので、時々出前を頼んでいます。食べたらいけませんか」

「いや、別に食べても良いが、君のように黄疸が出て肝臓の数値が悪いと、普通は食欲が無くなり、特に油ものやひつこい食べ物、口に入らなくなる人が多いけどね」

「そうなんですか、前の急性肝炎の時も、食欲だけは落ちることなくありました、今回も食欲だけはあります」

主治医は、目の前に展開する患者の病状が納得できないようで、小首をひねるようにして、

「念のためにお腹に蟯虫がいなか、直ぐに検査をしてみましよう」と言いました。彼に食欲があるのは、お腹に蟯虫でもいるせいではないかと疑われたのです。

もちろん検査の結果は、主治医が期待していた蟯虫は、見つからずに終わりました。

その時には思いませんでしたが、こういうところにも知らず知らずに、天地金乃神様のお庇いを、彼は頂いていたことになりました。

※楽しむポイントは、普段からお願ひしていると、病気をしても、その中に神様のお守りが必ずあること。

病院のベッドにいる彼には、自由な時間が贅沢に与えられていたので、この機会に色々な神様について勉強を試みようと思いました。

幸いに病院からの外出許可もできる位に回復していたので、K教団について、教外者の宗教学者が書いている解説書や紹介書を図書館で借りて読んでみたのです。

彼はまずK教団において、神様と人の関係は親子であり、神様があつて人があり、人があつて神様があること。つまりどちらが欠けても、お互いの存在が成り立たないもので、如何なる人も、天地金乃神様から魂を授けられている、尊い天地金乃神様の子であること。

天地金乃神様は、子どもである人を助けたい一心でおられ、子である人が願いますが、つてくるなら、いかなることでも守り助けてくださること。

決して人に罰を当てたり、教えによつて人の生活を縛りつけたりするのでなく、人が何でも、天地金乃神様にお願ひすることにより、すべて自由に生きることを保証してくださるものであること。また人の助かりは、自身の中にある天地金乃神様の、分け御霊としての魂の存在に気づき、我が心の中にある神に願つて、我が身を助けることが、本来の人の救済の姿であることを知りました。

天地金乃神様は、人と仲良くしたい、そして、人を助けたい一心である。それが、天地金乃神様だという事が、彼にわかつてきたのでした。後はそれを行動により、確認して裏付けていくことだと考えていました。

その時に読んだ本の中で、もう一つ感銘を受けたことがありました。

ある宗教学者がK教団の教えの中には、『我が信じる神ばかり尊みて、他の神仏を侮る事なかれ』という教えがあり、他の宗教に対しても寛容性がある稀な宗教で、世界的な宗教になる可能性を秘めていると、書かれてあつたことでした。

彼はやはり自分には、K教団の天地金乃神様が一番あつている神様である、との思いを強くしていく、病院での日々となつたのでした。

※楽しむポイントは、色々な神様の教えを調べて、自分にあつた神様を見つけること。

そんな時に、隣のベッドにいた年配の人が声をかけてくれたのです。

「なあ、お兄ちゃん、私は明日退院が決まったから、良かったらこの雑誌を退屈凌ぎに読まないか」

そう示された雑誌は、旅行の案内記事が書かれてある旅行〇〇という月刊誌でした。

「ありがとうございます。読ませて頂きます」

と言つて受け取り、彼は翌日から、ゆっくりとその雑誌に目を通していきました。

三日ほどで読み終えた後、彼の頭の中に何故か二つの場所が気になりました。彼自身も理由は解りませんが、何故か彼が訪ねて見なければならぬ場所を感じた所があつたのです。その場所は、鹿児島県十島村に属しているトカラ列島と、北陸の古都金沢でした。

彼が病院を退院して自宅に戻つたのは、九月の末のことでした。会社の方は、体力的に自信がないことを理由に、退職を申し出て、辞めさせて頂いたのです。四月から九月までの半年の勤めで、三十万円程の貯金が出来ていました。實質働いたのは三カ月です。このお金はあぶく銭のようなお金だと思ひ、彼はすべて使つてトカラ列島と金沢と、母親の叔母が住んでいる東



京へ、旅行に行く計画を立てたのでした。

十月の一ヶ月間は、入院してなまった身体のケアをして、体力回復をはかり、またトカラ列島と金沢の情報を集めて過ごしました。彼にとつて自分の中にある神様に、この旅行の間に、自分をどのように助けてくださり、どのように守ってくださるかハッキリ確認できることを、お願いしていた期間でもありました。

まずトカラ列島に行くことを決め、用意をして家を出発したのは十一月上旬でした。前から交通機関や宿泊の予約はせずに、彼の心の中の神にご都合お繰り合わせをお願いして、行き当たりばつたりの旅をするつもりでした。

そして、彼は、この旅で一人前の男として成長することを決心していました。ある意味このような、無茶苦茶というか無理難題なことを、我が心の神に叶えて欲しいと、お願いしての旅でした。出発した日も、ただお天気が良かったから、というだけの理由ですし。

S 駅で切符を買い、大阪駅から寝台特急に乗り、西鹿児島駅（現在の鹿児島中央駅）で降りて、フェリーで離島であるトカラ列島に渡る予定でした。

トカラ列島は、屋久島と奄美大島の間にある有人島と、いくつかの無人島からなる列島です。夏には海のレジャー場として若者がよく訪れて、賑わうところでもありますが、逆にそれ以外の季節は島に関係ある人でなければ、誰も行かないところでもありました。十一月はまさに誰

も行かない季節で、実は島には宿泊施設が正式には無いのです。夏場には、臨時に民宿やキャンプ場などが開かれますが、彼の行く十一月は何も無い時期なのでした。彼は宿泊する所が無ければ、フェリーの待合スペースや何処か野宿できる場所で寝るつもりでした。お風呂は彼が目指した島には、自然にできた岩風呂の温泉があるという情報を得ていて、それを使うつもりでいました。この当時、この時期に離島に渡るフェリーは不定期便で、週に一便ほどしかなく、出港する日が決まっていますが、海の波の状況次第で、欠航になることもあるのでした。

寝台列車で良く熟睡できた彼は、朝に西鹿兒島駅に無事に着きました。鹿兒島もいいお天気で、それだけでも彼は嬉しくて、お守りを受けているお礼を、彼の心の中の神に申し上げたのでした。

フェリー乗り場は、駅から歩いて行ける距離にあり、午前十時頃に場所の確認も兼ねて、フェリーの出港日を聞きにくつもりでした。フェリーの出港日まで、下手すると鹿兒島市内で足止めを食らうかも知れません。そんなことも想定しながら、ブラブラと歩いてフェリーの切符売り場に着きました。

切符売り場にはおばちゃんが座っていました。

「あのウ、すみません、フェリーは何時頃出る予定ですか」

そう声をかけた彼を、おばあちゃんは珍しいものを見るような感じで見ました。

「今日の晩に出る予定です。何処かの離島に行かれるのですか」

「はい、そのつもりです」

「今の時期はどの島も泊まる所はないですよ、知り合いでもおられますか」

おぼあちゃんは親切に問いかけてくれます。

「知っています、知り合いもいません。でもどうしても行きたいので、泊まる所がなければフェリーの待合スペースにでも野宿するつもりです。島には温泉の出る岩風呂あるみたいだし」  
変わった青年だと思ったかも知れませんが、おぼあちゃんは切符を売ってくれました。

フェリーは夜遅く出るので、いったん切符売り場を出た彼は、その場で心の中の神にお礼を申し上げました。一日も鹿児島市内で足止め食うことなく、うまい具合に離島に行けるのです。行き当たりばつたりの旅の、一発目の大きなおかげを受けたと思いました。

市内をゆつくりと探索して、晩ご飯にラーメン屋で食事してから、出港の一時間前にフェリー乗り場に戻りました。やはり乗船する人は数人しかいません。彼以外に旅行者はいないようでした。

小型のフェリーに乗船して中に入ると、畳のスペースがあつて、枕と毛布が置いてありました。そこでみんなゴロ寝をするのです。離島に着くのは早朝になる予定です。

彼が荷物を置いて、自分の寝るスペースを確保して座っていると、五十歳代とおぼしきおじ

さんが、不思議そうに声をかけてきました。

「お兄さん、何か用事でこの時期に離島に行くのかい？」

「いいえ、用事は別にないのですが、夏にトカラ列島の紹介記事をみて、一度訪れて見たいと思つたので来てみたのです」

「そうなんか、でもこの時期はどここの島にも泊まるとこはないで、泊まる所は心当たりあるの」  
「そうみたいですな、切符売り場のおぼさんからも言われました。どうにもならない時は、フェリーの待合スペースか、何処か野宿が出来る場所を見つけるつもりです」

おじさんは驚いた感じでした。そして言ってくれたのです。

「ふうん、若いから出来ることかな。島へ降りたらこの時期は、早くても一週間は帰りのフェリーは無いで、それをわかつているか？ もしお兄ちゃんが良かったら、私の泊まる所へ来るか」

今度は彼がビックリしました。早くも寝る場所をゲットできる方向で事が進んでいく気配です。

「ありがとうございます。いいのですか。そうしていただけると大変ありがたいです」

「いいよ、私は九州電力会社の社員で、島の電気施設の点検の仕事をする為に行くところや。遠慮はいらん」

「ではお言葉に甘えさせて頂きますから、どうぞよろしくお願いします」

「君は何処から来たのかな」

「大阪のS市というところから来ました。万博が開かれた近くです」

「遠いところから来たんだな。私は一週間後に、予定通りにフェリー来れば帰ることになって  
いるが、君はどうするつもりかな」

「いや、今度の旅行は、すべて天に任せの行き当たりばったりなので、帰りの事もまったく決  
めていないのです」

「まあ、それならとにかく帰りのフェリーが来るまでは、私と一緒にいたらい。島には食べ  
る店もないから、滞在中はお世話してください。家があるので、君の食事も頼んであげる。島で  
買える食べ物、この時期は菓子パンやスナック菓子くらいしかないから」

本当に親切なおじさんだと思いました。

「食事もお願いできるなら、よろしくお願いします」

彼はおじさんに改めて頭を深く下げてお願いしました。

彼はこの素晴らしい成り行きに、ビックリし感激していました。フェリーに乗ってこんなに直  
ぐに、寝る場所と食べる事のお練り合わせを頂けるとは思っていなかったからです。正しく  
電光石火のおかげが、目の前で展開したのです。おじさんが神様の化身に見えます。

「離島にはよく仕事に行かれるのですか」

「施設に問題がなければ、半年に一度の定期的な検査にくることになっている」

「じゃ、貴方にお会いできたのは、本当にラッキーなことですね」

「そうやね、ところでこのフェリーは小型で良く揺れるから、初めて乗る人はほとんど船酔いをするから、君も気を付けて覚悟しておいた方がよいと思う。もし船酔いして吐く時はトイレでしなさい」

おじさんはそんな心配までしてくれるのでした。

「へえそうですか、僕はまだ乗り物酔いをしたことないから大丈夫だと思います。もし船酔いしたら、それも旅の思い出の一つになるかもしれないですね」

「それならいいけど、十一月に入ると波が荒れることもよくあつて、船が出ないこともあるくらいだから。」

親切なおじさんの顔は、明日の朝が楽しみだというような顔に変わっていました。彼が船酔いすることを確信しているようでした。実際に船は良く揺れていたように思いました。

そろそろ寝ようということになり、彼は心の中で改めて今日一日の思いもかけない、色々なご都合お繰り合わせを心の中の神にお礼を申し上げ、船酔いしないようお願いして横になりました。体を感じる船の揺れを、快く思いながら、彼は直ぐに深い眠りに落ちていきました。

夜明けに彼は、気分爽快に目が覚めました。船酔いはありません。必ず船酔いするだろうと思っていた、おじさんの期待に応えることはできませんでした。彼は心の中の神に、熟睡ができたことと船酔いがないお礼を申し上げ、今日のお繰り合わせをお願いしたのでした。

少し遅れておじさんも目を覚まして、彼が船酔いしていないことを知ると、へえーという感じで、彼を見たのでした。

フェリーから降りて、おじさんに案内されてお世話になる家に向かいました。確かに島には、何でも屋みたいな店が一軒あるだけでしたから、もしこのおじさんに会わなければ、食べることに苦労しただろうと容易に想像がつかまりました。

案内された家は民家の離れのようになっていて、夏には民宿をしている感じの所でした。

お世話をしてくださる家の家族は、ご夫婦と小学校二年生の女の子の三人家族でした。突然にお世話してくださることになったのに、快く迎えてくださり、さつそく朝ご飯をご馳走になりました。

彼はこの時出されたお味噌汁と焼き魚が、実に美味しく感じたことを、今も思いだします。彼の滞在中に、たまたま島の小学校で運動会のような行事があり、その様子を写真に撮ってあげたりはしましたが、このご家族にはお世話のなりっぱなしの状態でした。

海は透き通った感じで、波止場の岸壁から水面下を覗くと伊勢海老が見えるのです。網です

くえるように見えます。飛び込んで潜れば捕れそうに思うほどでした。

飛び込みたい衝動に駆られました。潜ることに自信がなく踏みとどまりました。きっと目測より水面下は深いはずですよ。

実際に食卓に、伊勢海老のボイルしたものが出てきました。お世話になっている主人に、食事の際にこのことを話してみました。

「それは素人ではまず獲れません。上から見ているとじつとじていますが、いざ捕まえようとしたらすばしっこく動いてまずダメでしょう」

笑って答えてくれました。

この島で彼は、ただただぼーと海を眺めて過ごしていました。海をみている間に頭の中が空っぽになり、大きな力で包まれた感覚に満たされた時間を楽しんだのです。後にも先にも人生の中で、彼がこれほど何もせず ゆっくりとしたのは、この時だけでした。

あつという間に一週間が経ち、海の状態も良く予定通りに帰りのフェリーが出航することになりました。帰る前の晩に、おじさんに聞いたのです。

「お世話になったご家族に、どのくらいお金をお渡ししたらいいですか」

「それは要らないと思うよ」

「でもこのままお世話になりっぱなしでは、僕の気がすみません」



「それなら、明日の朝ご飯の時に尋ねてみたら」

「分かりました、そうします」

翌日、朝ご飯が済んでお茶を頂いている時に、ご主人に言葉をかけました。

「本当に何もかもお世話になり、ありがとうございます。ゆつくりさせて頂き楽しくリフレッシュできました」

「それは良かったですね」

「ところで私の宿泊と食事代に、いくらお支払いしたらいいですか」

ご主人は笑顔で手を振りながら、即座に答えました。

「そんなものは要りません。そんなつもりはないので。それよりも今だから言いますが、私達は、あなたが自殺でもしに来たのではないかと心配していたのです」

ご主人はにやにやした顔で、奥さんの顔を見ながら言いました。奥さんも頷いています。

「あれえー、そんなご心配をおかけしていたのですか。すみませんでした。考えてみればそうですよね。こんな時期に若い者が一人であらうと来ているのですから」

「そうですね、だからそれとなくあなたの行動には注意をしていました。まあ、悪いことをする人ではないとは思いましたが」

「この島でもし悪い事したら、逃げようがないから流石に悪い事はできませんよ」

笑いながら彼は答えました。三百人ほどが暮らす島で、駐在のお巡りさんと校長先生が偉いと言われているような島の状況では、当然のことだと思いました。

「あの、どうしてもお金をとって頂けないなら、お言葉に甘えさせて頂きます。せめて子どもさんに、大阪に戻ったら何かお菓子を送ることにしますから、ここの住所を教えてください」

「そうですか、それなら子どもが喜ぶと思いますから送ってください」

奥さんが住所を書いて彼に渡してくれました。

荷物の整理をして忘れ物が無いことを確認して、おじさんとフェリー乗り場に向かいました。帰りは午前十時に島を出港して、夕方に鹿児島港に着くスケジュールでした。帰りのフェリーでも彼は酔うことがなく、鹿児島港に無事に着きました。親切なおじさんにも、厚くお礼を言つて別れました。彼は鹿児島市内で一泊しようかと思いましたが、寝台特急の切符が取れたので、その晩に列車に乗り大阪へ戻ることにしたのでした。気がつけば、この旅の間、一度も傘をさすことがない、お天気のご都合も頂いていたのでした。

彼の母親は、行き当たりばつたりの彼の旅行を、やはり大変心配していたようです。よく考えると、その間一度も、母親に連絡を入れていない彼でした。若いという事は、そういう所がまわらないのです。二十日ほど掛かるかも知れないと言っていた彼が、十日も掛らず帰つた事に安堵していたようでした。

彼は東京へ行く時は、母親の伯母の所で泊まる予定なので安心だろうから、金沢へ行く時は、泊まる所だけは決めて母親に伝えておこうと思いました。

翌日、さつそく阪急デパートの地下に行き、お世話になった家の子どもさんにも、日持ちのするお菓子を送りました。また親切なおじさんにも、改めてお礼の手紙を出したのでした。

彼が心の中の神にお願いした、半分の無理なお願いは、ちゃんと聞いてくださり、鮮やかにお守りお繰り合わせを、彼に見せてくださったと納得できたのでした。

さて、それでは残り難題の方は、どのように彼の神が、解決をしてくださるのかと楽しみました。

しかし、次に向かった東京では難題を解決しては頂けずに終わりました。

彼が金沢に向かったのは、本格的に冬に向かい始めた十二月に入ってから直ぐの事でした。金沢駅に着いたのは午後四時くらいだったと思います。宿泊の予約を入れていたビジネスホテルを指して歩き始めました。そのビジネスホテルは駅から歩いて行ける距離にありました。一応三泊の予約を入れて、金沢に滞在するつもりでした。

母親が心配することの無いように、泊まるビジネスホテルの電話番号と、最低三泊はすることを伝えておきました。彼のこの当時の、勝手気ままにも見える行動について、彼の両親が何

も言わずに見守ってくれたことは、彼にとって大変にありがたいことでした。きっと両親は見守るだけでなく、天地金乃神様に、彼のことをお願いしてくれていたと思うのです。

金沢での行動については、泊まる場所以外は、何の予定も組まずにいました。彼の心の中の神に、その場その時に念じてお願いをして、すべて神のお計らいを受けて行こうと考えていたのです。彼の心の中の神と正直に真剣勝負をして、どのような結果になっても、悔いのないようになりたいと思っていました。

彼はホテルに着いて、荷物を置いて夕食を食べに出かけることにしました。

フロントには、若い女性が一人で立っていました。

「お出かけですか。いつてらっしゃいませ」

声も明るく落ち着いた良い感じがしました。

「ちよつと街をぶらぶらして、食事をしてきます」

部屋の鍵を彼女に手渡しして、彼がホテルの外に出ると、パラパラと雨が降っていたので、凄く驚きました。先ほどまで、雨の降る空模様ではなかったことと、トカラ列島でも東京でも、一度も雨が降らなかつたからです。彼はお天気のご都合を、必ず頂けると思い込んでいたので、傘を持ってこなかつたのです。

しかしこの雨は、天地金乃神様が彼に差し向けてくださったおかげだったので。

この雨により、素晴らしい人とのご縁に繋がり、彼にとって素敵な思い出を残すことになったのでした。

※楽しむポイントは、頭だけで神様を判るのではなく、実際に行動をして、そのお守りを肌で感じることに。

彼の心の中の神に導かれ、これ以上はないだろうと思う、最善のお繰り合わせを頂いた旅になりました。

『感無量の喜び』という表現が、ぴったりと当て嵌る思いでした。彼は自分が生きていることが、天地金乃神様が存在する証であると思えました。天地金乃神様は確かに存在したのです。しかも自分の心の中にあると実感できた旅でした。

自分の心にある神様にお願いをすれば、自分自身の助かりを、確実に生み出していくことが出来るようになっていく。

【天地金乃神様は、人を誕生させる時に、自分で自分を助けられるシステムをちゃんと与えておられたのです。すべての人が必ず助かる完璧な救済の方法は、一人ひとりの心にある神を自覚して、自分の心にある神に自身が願うことです】

いくら素晴らしい徳のある人に縋つても、いくらお金を神様に献金しても、人の本当の助けや安心は、得ることはできないと思います。人が感じることでできる神は、その人の心に信じて存在している神しかありません。

つまり、彼自身が感じる事ができた神は、彼自身の心に存在している神しかないわけですね。

彼の心にある神は、すべての事をお願いしてすれば、他の人を欺き傷つけ苦しめることではなれば、すべてを自由にさせてくださり、その上で良いようにお守り導いてくださる神でした。

【天地金乃神様は、人が自由に楽しく喜びを感じて生きることを応援しておられるのであって、教えによって人の行動を縛ることや、生活の在り方を制限されることは決してないと思つたのでした。天地金乃神様は人と仲良くしたい。そして、人を助きたい一心でおられる】

それが真実の天地金乃神様である事に、彼はこのトカラ列島と東京と北陸の古都金沢の旅で、気づかされしつかりと確認をしたのでした。

※楽しむポイントは、時には神様にありのままを願ひ、神様を試してみて、神様の存在を確認すること。

旅行から帰った彼は、翌年の昭和五十一年五月の中旬に、K教団のご本部にいました。旅行から戻った彼は、再び彼のおばあちゃんと、教会への朝参りを復活させたのです。彼が再びお参りを始めると、お参りしていた教会の先生から、K教の先生になることを勧められました。彼はその時まで、K教団の先生になることなど、一度も考えたことがなかったのでビックリしました。彼はこのまま、またサラリーマンとして働くことも、何と無く気が進まない状況であったので、体と心を鍛えるために、K教団で修行を試みるのも、悪くはないかなと思つたのです。それに、K教の天地金乃神様や、御教えを広められた教祖様のことを、もっと知りたいたとも考えたのでした。

彼は彼なりに、旅行で確認をした、彼の心の中の神を、これからの人生で活かすためには、K教の先生になることが、一番良いのではないかと感じていたのです。家族も賛成してくれただこともあり、彼は自宅から通いの修行生となりました。彼のおばあちゃんは、本当に喜んでくれました。

修行生としての彼の生活は、朝参りをした後、そのまま教会に残り、朝ご飯を食べてから掃除や雑用などをしていました。その当時、教会では朝参りの午前五時三十分以外に、午前十時から信者さんと共に拝礼をする、ご祈念がありました。

それにも参加して、お参りに来られた信者さん達とお話をさせて頂いて、時には信者さんか

ら悩みや相談を持ち掛けられることもありました。

それから、昼ご飯を頂いてご用の続きをして、夕方に自宅に帰るといふ生活でした。何もすることがない空き時間は、K教の先輩の先生方が書かれた本を読みました。特に感銘を受けた本は、大阪のT教会のY先生の信話集と、アメリカで、K教の教会を開かれたF先生の本でした。F先生は、ご自身の病気が治ったことがきっかけで、東京大学を出て周りから、将来を期待されていたのに、K教の先生になられた方でした。K教の教師になった後に志願して、アメリカに渡って布教をされて、多くの人を助けられたのでした。さらに、第二次世界大戦の戦中戦後には、日系人として状況が非常に厳しく苦しい中で、人助けの上に大きな活躍をされた先生でした。

また、Y先生も病気で命を助けられたことから、信心を始められやがて教会を持って、最盛期には一日千人以上のお参りがある教会に発展させた方でした。

お二人とも病気を助けられ、そこから信者さんの立場からK教団の先生になられたところに、彼は自身の境遇を重ね合わせていたのでした。

彼は三月半ばにあった、K教団の先生の育成機関であるK教学院の試験に合格して、無事に入学をしたのです。ありがたいことに、K教学院は入学金も学費も要らず、寮での住まいと食事も、すべて無料で提供してくださるのです。そんな教団は、他の宗教教団では考えられない



ことだと思えます。たいがいは高額な研修費や、何某かのお金を請求されるのではないでしょうが？でも、逆にそこまでする人は真剣ですから、人が作った偽物の宗教に、かえって洗脳されてしまうこともあるのです。本当に人を助けたい教団なら、高い研修費などのお金を取るはずがないのです。お金がない人でも、本当に志がある人なら、研修会などにはお金がなくても参加できることが、本当の宗教の在り方ではないでしょうか。

K教学院での生活で新たに用意をする物は、修行生活の中で着る制服（ブレザーと羽織袴の黒衣）と教科書だけです。これは後々も自分で使う、私物になるものですから、これはお金を出すことは当たり前でしょう。つまり人の生活に必要な衣食住のうち、食住はK教学院に居る間は、K教団から保証されているのです。

五月半ばから翌年の四月半ばまでが、K教学院の修行の期間でした。その間に夏に二十日ほど、冬に一週間ほど在籍の教会に戻る期間がありました。彼が在学した当時は、八十人を超える入学者がありました。普通の学校とは違い年齢もばらばらで、下は高校を出たての人、上は八十才に近い人もいました。約八十人の人が男女に分かれて、男子寮と女子寮で集団生活をします。一つの部屋に三人が、寝起きを共にして過ごすこととなります。

当時の学院生の一日は、朝五時二十分に起床のカチの音で起こされます。そこから本部の会堂に参拝する用意をして、午前六時に会堂で学院生の代表が、K教団の教主様にお礼やお願い

いのお届けをします。その代表者が先唱して学院生が全員で、神様にご祈念をして拝礼を行い、その後各班に別れて掃除や炊事の準備などをしてから、学院の食堂で朝ご飯を摂ります。

午前九時から昼ご飯まで、講堂で授業がありK教団のことや、宗教全般を勉強する時間となります。昼ご飯が終わると、午後一時からはその時々に応じて、必要な作業を色々で行います。その後再び、本部の会堂でご祈念があり、朝と同じように各班に別れて掃除に取り掛かります。その途中で、会堂のお広前での一日御用を終えられて、私邸にお戻りになる教主様を、学院生の代表を先頭にして、学院生全員でお見送りをさせて頂くのです。

それから再び掃除をしてから、学院に戻り夕食を済ませて、午後七時から学院のお広前で、一日の最後のご祈念をさせて頂きます。その時に先唱する人が、他の学院生にお話しをする決まりがあり、自分がその時に感じている神様や、信心の事を述べる事が行われていました。それから、お風呂のある日はそれぞれに適当に入り、午後十時に消灯就寝となるのでした。

学院寮の各部屋には、一切の冷暖房はなくて、夏は暑くて蚊に悩まされ、また時々ムカデとも出くわすことがあります、ヒヤッとすることもありました。

幸い彼は、一度もムカデに噛まれることなく過ごせました。学院生の中には噛まれた人もいたのです。

ご本部は大阪より冬は寒く、時には廊下を雑巾掛けすると、そこが凍ることがたまにあります。

した。とは言え、高齢者の学院生は学院の許可を得て、暖房器具は使えるようになっていたようです。

もちろんテレビなどはなく、外部との連絡は電話が一つだけでした。娯楽の無い修行生活ですから、午後七時のご祈念後から就寝までの間は、気の合う者同士が集まって、ワイワイガヤガヤとなることは当然でした。

彼はそのような学院生活の修行の場で、まずは自分の体の体調管理をしっかりととして、自分が病気をして、他の学院生に迷惑をかけることがないように心がけていました。

そんな日々を送る中で、彼は大きな失敗をやらかしてしまったのでした。

それは、教主様が一日の御用を終えられて、私邸にお戻りになる時に、雨が降っている場合には、会堂から出られたら傘をお渡しする役目が学院生にあるのです。

その日は雨が降っていました。彼は傘をお渡しするお役目に当たっていたのですが、教主様にお渡しするのではなく、そのお付きの先導される先生に渡すことになっていたのでした。教主様には他の学院生が渡すことになっていました。そして順番では他の学院生が先に、教主様に傘をお渡しすることになっていたのでした。しかし、彼はお付きの先導される先生が、教主様を先導するために先にこちらを向かれたので、思わず先に、お付きの先導される先生に、傘を渡そうと前に出てしまったのでした。結果として歩き始めようとされた教主様に、ぶつかり

そうになり教主様を驚かすことになったのです。

幸いにぶつかりはしなかったのですが、お付きの先導される先生から叱責をされたのでした。教主様は、何ごとも無かつたように、ゆつくり歩いて私邸の方に向かわれて行かれました。彼は、教主様にお詫びの言葉も出せずに、茫然として見送っていたのでした。教主様を学院生の代表として、先頭でお見送りすることが後二回は必ずある。彼はその時に雨が降って、教主様に傘をお渡しさせて頂き、心の中でお詫びを申し上げたいと強く感じて、それからは毎日そのことをお願いしたのでした。

そのようなこともありながら、可もなく不可もなくというような学院生活が過ぎていききました。やがて夏の在籍教会での実習の時期を迎えて、大阪に戻った彼に、ビックリする話が飛び込んできたのです。

彼の母親の体に動脈瘤があちこちにできていて、大きいものは今すぐに手術をしないと、いつ命が終わるかも知れない。半年はもたないかもしれない。手術が成功しても、すべての動脈瘤を取ることはできないので、後のこともどうなるか分からない。そんな非常に厳しい内容でした。母親はちょうど五十才を迎えていました。彼の母親は生まれた時から、あまり体が丈夫な方ではなかったもので、いつも自分はきつと早く死ぬと冗談のように言っていました。今それが現実になってきたのです。

彼は母親がどうしたいかということを最優先に、天地金乃神様にお願ひしようと思ひました。彼の母親の思ひは、天地金乃神様に身を委ねて手術をしないで、このままの生活を続けたいということでした。彼の、天地金乃神様に向かう心のギヤが、数段上がりました。

今までは、彼の心の中の神に、無事に健康で修行生活ができるように願うことがメインであったのです。もちろん教主様の傘のことのお詫びは願っていました。

ここからは、彼の願ひのメインが、彼の母親の助かりを願うことに変わったのでした。

「お母さんが手術をしたくないなら、それでいいと思う。僕も神様にご本部で、しっかりと願ひさせて頂くから」

「ありがとう。何とか普通に生活ができるように願ひしてくれたりいわ。それとあなたのこれからの先が心配だから、あなたが安心できることを見届けるまでは、何とか生きていたいと思つているから」

改めて彼は、彼の母親がずっと体が弱く、出来ない息子のことを、どこまでも心配していたのだと知りました。

「わかつた。ご本部に戻つたら教主様にお願ひさせてもらうから。それから僕のこれから先のこととは心配せんといひ、必ず神様からおかけを頂くので」

彼自身は、先の旅行によつて神の確かなお働きを確認しているのですから、自分自身のこれ

から先のことは、彼の心の中の神にお願いすれば、解決ができると確信をしていたのです。彼にとつて人の助かりを、本気でお願ひした初めてのことでした。

そして彼はその時すでに、自分以外の人を助けるには、お取次の座にお座りくださるお手替わりの方に、教祖様の手続きをもつてお願いすることが、最善の方法であると悟っていたのです。

八月の末にK教学院に戻った彼は、教主様に母親の助かり立ち行きをお願いしました。K教団ではこのことを、『お取次』と呼んでいます。つまり、お取次をしてくださる方が、天地金乃神様に、お参りした人のお願ひを届けてくださり、時にはその人がおかげを頂けるように、天地金乃神様からのご教示を、必要に応じて伝えて頂けるのです。

彼は、教主様のお取次を頂き、彼の母親の助かりをお願いさせて頂くことで、彼の母親が助かる最善の手立てを行ったのでした。

※楽しむポイントは、子のことは親が願ひ、親ことは子が願ひ願ひ合いができること。

彼は母親が、自分の先々を心配していることに対して、母親に安心してもらうように、彼の心の中の神に、三つの願ひ立てをしたのです。

K 教学院を卒業後は、

一、三年の内に、教会長としてお役に立つこと。

二、昭和五十八年の K 教団の教祖百年祭までに、結婚をして子どもと共に家族でお参りをさせて頂くこと。

三、後々に、千人も万人もの人を、助けさせて頂けるようにお役に立つこと。

毎日、この三つの願いを、彼の心の中の神に念じ続けたのでした。

※楽しむポイントは、願いは具体的なことにして願うこと。

K 教学院の前半の、とにかく体が元気で無事に卒業できれば良いと思つて、割とのんびりと過ごしていた修行生活から、一辺して後半ははつきりとした願う目標ができて、毎日が張り合いのあるものになったのです。

その中で、彼は再び、天地金乃神様から、粹なお働きを体験することになりました。この体験をしただけでも、K 教学院に入った甲斐があったと思えました。

教主様が、私邸にお戻りになる時に雨が降れば、彼が傘をお渡しできる、最後の機会となる日が回ってきました。朝から良いお天気で、雨の降る気配など微塵もない感じなのです。とて

も傘を渡せるようにはありません。教主様がお戻りなる時間の五分前に、彼は教主様が、会堂から出てこられる入口で待機をしていました。空は日が射しているお天気です。彼が心の中で『ああー教主様に傘をお渡しすることができないなー』

と恨めしく空を見上げてつぶやいたと同時に、ぱらぱらと雨が降ってきたのです。

所謂、狐の嫁入りという現象でしょうか。

係りの方が慌てて用意をされた傘を持つて、スタンバイしたのです。彼の心は舞い踊っていましたが、何とも言えない喜びで。

やがて教主様が、会堂の入口からお付きの先導の先生と共に出てこられました。

彼が、緊張しながらも傘をお渡した瞬間、

「ありがとう」

教主様がお礼の言葉を小さな声で、確かにハッキリとおっしゃったのでした。彼は無言で受け取られるだろうと、勝手に予想をしていたので、本当にビックリしました。その後、この数分間に起きた出来事に感動が止まらず、目に涙が溜まりこぼれそうになりました。

そんな目で捉えていた教主様のお引けの姿が視界から消えた時に、雨も止んでいたのです。天地金乃神様が、わずか数分だけパラパラと雨を降らせて、彼にお願い以上のおかけをくださったのでした。



後にも先にも、彼が教主様から「ありがとう」とお礼の言葉を聞く機会は、生涯でこの瞬間しかないと思うのです。

※楽しむポイントは、願いは一心に願いつづけること。

この年から、K 教学院では在籍外教会実習なるものが初めて行われたのでした。年明けの昭和五十二年一月に、彼は S 教会に、二週間ほどお世話になりました。この S 教会の当時の教会長は、独特の個性のある方でした。ここで彼は、朝三時に起きて掃除してから、ご祈念を仕えて始まる修行生活を経験したのでした。

この教会長は、信者さんに朝参りを奨励しておられて、特別なお願いがなくて、他の時間に信者さんがお参りすると、「朝に参つて来なさい」と叱るような感じでした。食事の時間は、【ただいま食事】という看板を出して、その間は、お参りがあつても出て来られることはありませんでした。しかし、他の時間は、午後四時に下がられるまで、ずっとお取次の座にお座りなっていたのです。

彼は、これは見習うべきことだと思い、自身が教会長になった時に、S 教会長以上に、お取次の座に座ることを実行したのでした。ご本部の教主様がお取次の座を下がられる時間に、S

教会も閉門されていました。

彼は修行中、お広前で正座して殆ど座っていたのでした。教会長が奥に入られた食事でも、彼に出された食事を、お広前の隅の机で食べていたのでした。まあ座る修行ができたといえます。

また、その当時に一番お参りが盛んであった、A教会の夜の月例祭に、教会長の長男の先生とお参り出来たことも、ありがたいことでした。生きている神徳のある人から、神徳を頂くことが一時的な助かりの手立てにはなることを、A教会の教会長に触れて実感したのです。しかし、それは長続きのしない神徳でもあることを、後々に彼は知るのでした。

彼は、K教学院に居る間に、K教の教典を読み勉強をしました。そこに、こういう御教えがある事を発見したのです。

『願ひ事があると、遠方からわざわざ参つて来て頼む人が多い、人を頼むには及ばない。眞の信心をして、自分で願つておかげをいただけ、人を頼まなければ、おかげがいただけないとすれば、お取次ぎをする者のそばにつききりでいなければなるまい。神はそういうものではない。自分で願つて、自分でおかげをいただけ』

これは彼が、K教学院に入る前の旅行で、彼の中の神にお願いして行動をし、大きなおかげを頂いたことが、ある意味で正しかったのだと判ったことも、K教学院での大変な収穫であつ

たと思いました。ただ、こういうおかげを頂くには、やはり教会へお参りして、願う稽古、祈る修行がある事が、必要だろうと思うのです。

※楽しむポイントは、人の祈りによる助かりは、一時的な助かりでしかなく、自分の本当の助かりは自身が祈ること。

K 教学院での修行生活を終えた彼は、在籍の教会に、四月中旬に戻っていました。彼の母親の動脈瘤もその後は、表面上は落ち着いて、普通の日常生活ができていました。そんなある日、彼が教会の火鉢のある横で座っていると、二人の方がお参りに来られました。おばあさんと中年の男性でした。彼は初対面の人で、その時はまだ、誰かわかりませんでした。

拝礼が終わった後、教会にあるお取次ぎの場で、お礼お願いのお届をされているのを聞いて、信者さんではないことがわかりました。

お届けが終わられると、おばあさんが彼の傍に来られてじろつと彼を見て、  
「あんた誰や」と言われます。

「初めまして、学院から出たての修行生の T と言います」

「へえ、すると先生か」

「はい、六月に教主様から認められると、一応先生の資格を頂きます」

「あんたここで、何かすることあるのか」

「まあ、掃除とかご祈念、信者さんとお話をしたりしています」

「そんな仕事なら、あんたがここにどうしてもおらんでもええとちやうかな」

何か強引というか、図々しく彼に言葉をたたみかけてこられます。次の瞬間、お取次ぎをさ  
れていた先生の方を向いて、

「N先生、この若い人、うちへ来てもらえませんか」

呆然とする彼に、たたみ込むように、

「私な、教会に一人でいてるんや。うちに来て私の手助けして欲しいなあ」と言われ、再び

「N先生、ええやろ、後々うちの教会を継いでもうてもええし」とN先生に頼まれるのです。

このおばあさんは、南海電鉄のN駅から歩いて十分ほどの所にあるM教会の先生でした。ご  
主人であった前の教会長が亡くなられてから、一人で教会の御用を務めておられたのです。

M教会は、彼の在籍する教会の子教会でした。中年の男性は、その教会の信徒総代の方だっ  
たのです。後々には、ある大企業の社長も務めた方で、彼はこの方には、M教会で大変お世話  
になったのです。

この方は、その大企業の現役の社長の時に亡くなられ、ご葬儀を仏教でされたことを、彼が

後々に聞いた時は、非常に残念に思ったことを記憶しています。この方にはぜひ、K教でご葬儀を仕えて頂きたかったと、彼は思っていたのでした。この方は、おばあさん先生にも良くお仕えになつていて、この時もおばあさん先生を、自分の車に乗せて連れて来られていたのです。

それから、あれよあれよという感じで話が纏まり、というかこのおばあさん先生が、強引に話を纏めたのでした。彼は修行を兼ねて、おばあさん先生のお世話係として、まず一年の期限でM教会に、お世話になることが決まったのでした。この一年間のM教会で経験したことが、彼にとつて後に非常に生きてくることになるのでした。

おばあさん先生は、我が道を行くというタイプの先生で、思ったことは遠慮なくズバズバと言われます。でも何か憎めないところがあるのです。竹を割ったような性格で、裏表のない人だったからでしょうか。それが天地金乃神様には気に入られていたのか、天地金乃神様と何処か繋がつておられるように、感じさせる部分がありました。それを、信者さんも感じておられたのでしょうか。信者さんへのお取次でも、時に厳しいことを言われるのですが、おばあさん先生から、離れずにお参りをされていました。彼にはそこが、このおばあさん先生に対して、最大の魅力を感じていたのです。また、お茶とお花を教える事も出来る方で、信者さんにも教えておられました。彼も教えて頂いたのですが、今はすっかり忘れてしまいました。

おばあさん先生に対して、彼が困っていたのはタバコをのべつ幕なしで、時間があればプカ

プカと吸われることでした。タバコの苦手な彼には、おばあさん先生と暮らす上で一番に辛い所でした。教会の日々の生活も、自分のやり方を貫いていく御用をされていきました。その一つに生活の中で、食料品は買わないということがありました。教会には大概、神様、教祖様、霊神様にお礼を申し上げるためのお祭りが、毎月お仕えになります。

M教会では、一日、十一日、二十一日がお祭日でした。この時に信者さんが、野菜や乾物缶詰や卵などをお供え物として持って来られるのです。それが、次のお祭日までの副食、つまりご飯のおかずになるのです。お米や味噌も、全て信者さんからのお供え物でした。当然のことですが、肉や魚なども、お供えが無ければ食べられないのです。

彼が、M教会での初めての日は、信者さんが歓迎会をしてくださり、信者さんの手づくりの料理を頂きました。

その晩に、おばあさん先生から、

「Tちゃん、明日からあなたが、食事を作ってや」

といきなり言われたので、彼はびっくりです。

「すみません、僕は料理を殆どしたことがないのですが」

「そんななかめへん、教会のある物で、Tちゃんの好きな物をこしらえたらええねん。ごちゃごちゃ言わんとやってみなさい」

そこまで言われたら、彼もやるしかないのです。これも修行の内だと思いました。しかし考えてみると、何を作って、どんな味付けになるか判らない。そんな彼のおかずを食べることになる、おばあさん先生も、ある意味でいい度胸があると言えたかも知れません。

ご飯は、神様に毎朝お供えをされるので、おばあさん先生が炊いてくださるということでした。彼はおかずを作るわけです。おばあさん先生は、続けて言うのです。

「これから、お風呂の用意をしてもらうけど、ここは五右衛門風呂やで、外からマキでお湯を沸かすんや」

幸いなことに、彼の実家も彼が小学生くらいまで、五右衛門風呂で、外からマキやコークスと呼ばれていたもので、お風呂のお湯を沸かしていたのです。

「それは、家でも少しやったことがあります」

「教会の水道は、井戸からポンプで汲みあげるから大事に使うのやで、無駄に使っていたら水が出んようになるからな」

「わかりました。やってみます」

この後、彼は何とか風呂の用意をして、おばあさん先生に入って頂いてから、彼もお湯に浸かったのです。久しぶりの五右衛門風呂です。お風呂の釜の中にある、円状の木の蓋の上に乗りながら入るのです。

彼はお風呂の中で、心を固めていました。明日からの生活を、すべて修行として受けていき、思い切りここでの生活を楽しむことにしよう。

※楽しむポイントは、何処にいても、神様から与えられた修行の場だと思えば楽しむこと。

彼が寝起きする場所して用意されたのは、六帖の畳の部屋でした。そこに布団を敷いて寝ていました。学院と違い流石に夏は扇風機、冬は石油ストーブを使うことができました。ただ、テレビは学院と同じではありません。おばあさん先生の部屋にはあったのですが。M教会では新聞を取っておられなかったので、世間の情報をラジオから得ていました。またラジオを聴くことが、彼の唯一のこの部屋での娯楽だったので。

翌日、朝のご祈念の後に、早速食事の用意に取り掛かりました。メニューは玉ねぎとわかめ入りの味噌汁、目玉焼き、おばあさん先生がぬか漬けを作っておられたので、その中から胡瓜をいただきました。また、味噌汁に入れるネギは、教会の庭に植えてあり、それを上の方だけちぎって、刻んでいれました。そうすると味噌汁の見栄えがするのです。

因みにこの教会は、二百坪以上の広さがあり、庭も広く草取りも大変でした。

「先生、食事の用意ができました」



と声を掛けて、おばあさん先生の部屋までお盆に載せて運びました。

「出来たんか、Tちゃんもここで一緒に食べなさい」とタバコを吸われながら言われます。

彼はタバコ臭い所で食べるのは嫌だと思いましたが、そう言われると断ることができませんでした。

仕方なく自分の分も、お盆に載せて運び、お茶はおばあさん先生が、自分の部屋にあるポットに入れてくださいました。

「いただきます」

と神様にお礼を申し上げて箸をとりました。おばあさん先生が、お味噌汁を口にされた途端に、「Tちゃん、出汁を入れてないな」

そうなんです、彼も味見をした時にしょっぱいだけで、いつも彼が飲んでいる味噌汁とは、味が違うなとは思っていたのです。

「えっ、出汁ってなんです。味噌を入れただけではダメなんですか」

「あんな、味噌汁は昆布や煮干しやかとお節で出汁を取ってから味噌をいれるんや」  
彼はまったく知らなかったのです。

「今度から、だしの素があるからそれを入れるんやで」

と教えられました。彼のご飯作りの失敗の第一弾でした。出汁入りの味噌もあるようですが、

M教会の味噌はそうではなかったのです。

朝ご飯は、お味噌汁におかずを一品とお漬物、こんな感じで終わり、お昼ご飯は主に麺類、夕食は神様にお供えされたご神飯があるので、それを使って色々な味の違う焼き飯やオムライスをつくりました。彼のオリジナルの焼き飯として、玉子かけご飯をフライパンで炒めて、それにお茶漬けのりをかけたものがありました。和風の焼き飯で、これがかなり素朴な味で中々いけるのです。

冬の夕食には、体が温まるように野菜たっぷりの雑炊や、お粥におかずが多かったのです。実際に、彼は自分で料理をしてみても、それが全く苦にならず、その時々のある物を使って、どんなものが作れるかを挑戦することが楽しいくらいでした。

M教会での生活が始まって、一週間ほどした頃でした。おばあさん先生が、

「Tちゃん、毎月お小遣いを三万円渡すと約束をしていたから、通帳を作って入れといたで」いきなり彼名義の通帳を見せられました。彼は、確かに毎月三万円のお小遣いを渡すと、おばあさん先生から言われていたのです。その当時は、まだ郵便局もだいぶ緩い感じで、割と簡単に、他人の通帳を作れたのです。

「若い人は、無駄遣いをする人が多いから、こうして毎月貯金しとくから」開いた通帳には三万円が打ち込まれています。

彼は取り敢えず、

「ありがとうございます」

と口ではお礼を言っていました。

彼はM教会に来て、一週間経つても彼は一円のお金も使ってはいないのです。だから何となく心に、おばあさん先生の言葉に納得出来ないものがありました。だいたい彼は、自分は無駄遣いをする人間ではないと思っていたのです。普段から酒もタバコもやらず、外食や買い食いをすることもないわけです。趣味と言えば本や漫画を読むくらいで、趣味らしきものに、お金を使うこともなかったからです。だから、無駄遣いをするから預金するという言葉に反発を覚えたのです。

結果として、M教会での生活の中では、彼は殆ど自分のお金を使わずに終わるのです。彼が、M教会から外へでる機会は、月に一度のご本部参拝と、彼の在籍教会のお祭日に、おばあさん先生の代わりに参拝するだけでした。例外としてこの時期に、彼の姉が六月に結婚をしたので、その結婚式に出席することはありましたが。教会の御用と関係がない外出をしたのは、その時だけででした。岡山にあるご本部への参拝は、信者さんが運転する車で、おばあさん先生のお供で付いて行くのです。

この時の費用は、高速料金やガソリン代や食事代も含めてすべて信者さんが、天地金乃神様

への御用として、当然の如くおかげを頂かれました。そして、おばあさん先生もこれまた、当然のように受けられます。彼は、このおばあさん先生は、自分のお金を使うことがない人だなど、つくづく実感したのでした。

お茶やお花の稽古のお菓子やお花も、稽古に来られる人が買って来られます。おばあさん先生が、お金を使うとすれば、天地金乃神様への、お供えしかないのではないかと思うのでした。

その当時、彼の在籍する教会のお祭日の祭典は、夜八時から仕えられていました。その日は、早めに夕食を済ませ、おばあさん先生から交通費とお供えを預かって、祭典に間に合うようにM教会をでるのです。在籍教会での祭典が終わるのが、九時半ぐらいになるので、その日はM教会に戻らずに、お参りして来ている彼の両親と一緒に、実家に帰るのが決まりました。そして翌日の午前中に、M教会に戻るのでした。

命の保証ができないと言われた母親の、元気な姿を見るのが、彼は嬉しくありがたかったのです。彼の母親も、彼が元気にM教会での修行生活を楽しんでいる様子を聞いて安心してくれました。彼のこの時期の、唯一の息抜きの時間でもありました。

この様にある意味に於いて、極限の生活をしていると、天地金乃神様のお働きを実感する機会が多いのです。

ある日、井戸の水が赤く濁ったことがありました。食事の用意をしていた彼が、それに気づ

いたのですぐにおばあさん先生に伝えました。おばあさん先生はご神前に行かれて、ご祈念をされてから御神酒を持って井戸の所にきて、井戸の中に御神酒を入れたのです。そして、彼に向かつて、

「明日には元に戻るから、今日は水道の蛇口に布巾を巻いて水をろ過して使いなさい」と言われたのでした。彼が、本当かなと思っていたのですが、翌日には澄んだ元の水になっていました。おばあさん先生の、ご祈念力の強さを見せつけられた思いでした。

そして、彼はこの時期に、天地金乃神様のお働きは凄いと実感したことがあります。彼はやはり若いのですから、朝のご祈念の時にギョーザや天ぷら、ハンバーグや肉料理が、ふと頭への意識もないのに浮かぶことがあります。彼が驚いたのは、ふと浮かんだ食べ物、必ず翌日かその次の日には、信者さんから思い浮かんだ食べ物、届けられるのでした。

また、教会の真向かいに住んでおられたおばちゃん、親切に持ってきてくださるのです。もちろん彼が、これが食べたいと、他の人に話したことはないのです。もし彼が、自由に買い物が出てきて、いつでも自分の好きな食べ物を食べられる状況であつたら、絶対にこの経験は出来なかつたことだと思いません。

※楽しむポイントは、不自由を楽しんでいると、神様のお守りがはつきりと判ること。

ある時には信者さんが、教会にずっといる彼を思い、教会行事としてハイキングを計画してくださり、彼が外に出られる段取りをして、食事をご馳走になったこともありました。天地金乃神様も信者さんも、修行生活を楽しんでる彼に実に優しいのです。

やがて約束の一年が経ちました。彼は、おばあさん先生や信者さんからも、M教会にこのまま残って欲しいと言われていました。そのことは、彼のM教会での修行生活が、おばあさん先生にも信者さんにも認めて頂けたように思い、大変嬉しく感じてはいたのです。彼もM教会を後継しても良いとも考えていましたが、結局は一年で在籍教会に戻ることになりました。彼の母親が、M教会を後継することに、強く反対したからでした。実は、このM教会の後継者になりたい方が、前教会長の身内におられる事が判ったからでした。その方は、おばあさん先生とそりが合わず、外に出ておられたのです。

M教会の後継者になりたい人が他におられる。しかも身内の人にいるのです。彼の母親は彼が教会を後継するなら、本当に継ぐ人が居ない教会に行くべきだと言いました。

彼も、母親の意見を聞いて納得をして、在籍教会に戻ることを決めたのです。おばあさん先生からは、かなり引き留められましたが、「すみません」と何度も頭を下げる以外に、彼は対処の仕方がありませんでした。

M教会から離れる前の晩に、彼はおばあさん先生から郵便局の通帳を渡されました。彼は、

そのお金はない物だと思っていたので、受け取りを断ったのですが、許して貰えず最後は「ありがとうございます」とお礼を申し上げて、通帳と印鑑を頂いたのです。恐らくその当ても、M教会はかなり珍しい教会の在り方であったと思います。現在は尚更のこと、このおばあさん先生のような方はいなくなったと思います。彼は何故かこのようなタイプの先生が、今のK教団いなくなったことに、少し寂しさを感じるのです。

※楽しむポイントは、神様には、素直で正直な心で向かっていくこと。

こうしてまた彼は、N教会に通いで御用をすることになったのです。彼は、在籍教会の教会長に頼みして、車の免許を取ることにしたのでした。いずれにしてもこの先、教会で御用をさせて頂く時に、車の免許は必要になるだろうと思っただけです。そして、M教会で頂いたお金を、すぐさま活かすことを考えて実行したのでした。車の免許を取るのに、二ヶ月ほど掛かりましたが、無事に免許証を頂くことが出来ました。ここで車の免許を取ったことが、結婚に至る経過で大きな役割を果たしてくれることになりました。

天地金乃神様のおかげで、免許を取るとすぐに親戚の人から、次の車検で廃車にしようと考えていた車を、譲り受けることができました。それからは電車を止めて、車で自宅から在籍教

会まで通う事になりました。もちろん、彼のおばあちゃんを、その車に乗せてです。

彼のおばあちゃんは、彼がM教会から戻り、再び一緒に、朝参りができることを喜んでくれました。車で行くようになると、特に雨の日は何度も「助かるわ」と言ってくれました。ガソリン代もすべて出してくれたりもしました。

朝は車が空いているので、在籍教会に着くのに三十分ぐらいでした。少しスピード違反をしていたと思いますが、他の車の流れに乗って走るとその時速になるのです。一台だけ遅く走ると返って危ないのです。帰る時は倍の一時間ぐらいは掛かりました。

彼の一番の心配である母親の体調も良くて、その年は平凡に穏やかに終わっていききました。※楽しむポイントは、先で必要と思う準備は、お願いして進めておくこと。

年が明けて彼の人生が大きく動き出します。一月の下旬に、K教団の青年教師の研修会がありました。その研修会の講師として、ある教会の先生が来られていたのです。この研修会に、彼が参加をしたことで、この先生との出会いを得たのです。彼の中では、生涯の一番の恩人というべき人になるのです。この先生との出会いがなければ、彼の人生は全く別なものになっていたと思います。

その日、研修会が終わり、その後講師を囲んでの会食がありました。会食の話の流れから、



この先生とその後に麻雀を打つことが決まったのですが、その麻雀を打つ面子の中に、彼も入ることになりました。彼が小学生から覚えた麻雀が、思わぬところで役に立つことになったのです。

麻雀が終わってから、初対面であった講師の先生から呼び止められて、彼が在籍している教会や年齢、教師になる前となつてからの経歴や、今の状況などを手短かに聞かれました。何故、この先生がそのようなことを尋ねられるのか、彼は少し不思議に感じましたが、ありのままに答えました。

それから、一ヶ月ほどした二月の下旬に、在籍教会長の長男の先生から話があるからと声をかけられました。

「Tくん、昨日な、放送センターの所長からお電話を頂いてな、Tくんは放送センターで、御用して欲しいと頼んでこられたんやけど。どうするそこで働いてみるか」

と尋ねられたのです。K教放送センターとは、K教のラジオ放送を制作している場所でした。青年教師会の研修の講師の先生は、そこで所長として御用のお役に立つておられたのです。設立当初は、所長も入れて四人の職員で動いておられたのですが、四月から後、二人増員されることになり、所長は御用ができる人を探しておられたのです。ちょうどそのタイミングで、彼に出会ったのです。だから、彼が御用をできる状況かを判断するために、色々な質問をされ

たのです。

彼は所長に対して、常識のある感じの良い人だとの印象を持っていたのと、ラジオ放送の制作にも興味があつたで、

「ぜひ、御用させて頂きたいと思います」と即答しました。

「そうか、それなら所長にそのように伝えとくから」

この瞬間に、彼はご用するべき教会と結婚するべき相手に繋がったことを、彼はまだ知る由もないのでした。

こうして、彼は昭和五十四年の四月の始めから、K放送センターに職員として、K教団の御用のお役に立つことになりました。任期は四年でした。センターには毎日ではなく、週に三回くらいの出務で、それぞれの在籍する教会のお祭日は、休んで良いとのルールがありました。勤める時間は、九時半から午後五時までで、間に昼の食事休憩がありました。

彼は、センターに出務する日は、在籍教会に彼のおばあちゃんと朝参りした後、家に戻り朝ご飯を食べてから、S駅から電車に乗り通勤をしていました。月に一回は、ラジオ放送に使う原稿を検討する制作会議が開かれていました。K教団のラジオ放送は週に一回水曜日の朝にラジオから流れていました。

原稿を書いてくださる先生が十数名おられ、お互いに原稿を出し合い、それぞれに意見を述べ合って、ラジオ放送に使える物に仕上げていくのです。これが放送センターのメインとなる仕事でした。

彼が出務していた頃はこの会議の後に、お集りくださった先生と、職員達でミナミに飲みに行くことがよくありました。所長が、殆どお金を出しておられたので、なかなか大変だったと思います。彼は人生の中で唯一、バーやスナックという場所を経験したのでした。放送センターに勤めていなければ、所長が面倒見の良い方でなければ、彼はそのような場所に足を踏み入れることは、生涯なかったはずです。

放送センターでは時には地方に出かけて、取材をする仕事もありました。彼も任期中に、地方にも取材に行くことがあり、これも楽しい経験でした。また、彼自身が自分で、原稿を書く機会があり、彼の声でその原稿を録音したものが、ラジオから流された貴重な体験もできたのでした。

彼は、ある意味で新たな社会経験を積みながら、充実した毎日を過ごすことを楽しんだのでした。

秋に、彼のおばあちゃんの知り合いの人から、中古の車を譲り受けて、ギリギリ車検切れの車から乗り換えることができたのです。名義の書き換え、新しく入った車の保険代などは、彼

のお婆あちゃんが、すべて出してくれました。このようにして必要な時に、必要な物を、天地金乃神様は彼に、ちゃんとお与えくださるのです。

※楽しむポイントは、何事も先に願いをながら、時節を待つこと。

新たな年を迎えました。

彼が、学院を卒業後、三年の内に、教会長として御用をさせて頂きたいと、お願いした年に当たります。さあ、どのようなおかげを、天地金乃神様がくださるのか……。彼は期待に心が膨らんでいました。

そんなある日、放送センターの中で、みんなが昼食を食べていた時に、どのような経緯かは忘れましたが、彼の今後の身の振り方が話題になったのです。

その時に、居られた先生が、

「T先生、僕の教会の手続きで、後継者の欲しいY教会があるんやけど、良かったらそこで御用をしないか」

と話してこられたのです。そこから、詳しく話された内容は、

「そこは、教会長の先生が長い間ご病気をされていて、病院への入退院を繰り返しておられ、

今はいつ亡くなられてもおかしくないような状態やねん。だから教会としての働きは殆どできていなくて、私がお祭日に行つて祭典をお仕えしている状態なんや。お参りする信者さんも少なくなつていけるけど、一人だけ信徒総代の方で、お医者さんがおられて、教会長の教会を残したいという思いを汲んで、その人から、誰か教会を継いでくださる人を、探して欲しいと頼まれているんや」

「だいたいその様なことでした。彼は一番に気になることをお尋ねしたのです。

「そこは、子どもさんはおられないのですか」

「子どもさんはおられるけど、みんな教会を継ぐ気はないのや。教会は借地やし、経済的に苦しいから。正直に言うると他の先生にも声をかけたけど、みんな断られたのや」

「教会を継いで生活をしていく条件としては、かなり厳しいようでした。しかし、彼はそのこととは、不思議とあまり気にならなかつたのです。今は食べられても、御用の在り方次第で先では、食べられなくなるかも知れないからです。

「もし、今その教会長の先生が亡くなつたら、Y教会は無くなる可能性があるのですか」  
「そうなるやろな」

この時点で、彼は心の大部分で、そのY教会を継いでもいいかなと思つていたのです。彼が継ぐことにより、そのY教会の教会長とお医者さんの信徒総代が喜んでくださる。何より天地

金乃神様も、喜んでくださることになると思ったからでした。

しかし、この先生には

「少し考えさせてください」

とお返事をしました。

この会話を聞かれていた、所長が心配されて、後でこつそりと、彼に言葉をかけて来られました。

「Tくん、よく考えて決めなあかんよ。かなり厳しい教会みたいだから。私の知っている教会で、今はまだ先生がお元気だけど、いずれ後継者が必要な所があるよ。そこは、土地も教会の物だし、信者さんも多いから」

「ご心配を頂きありがとうございます。よく考えてみます」

彼は、所長の気持ちを嬉しく思いました。しかし、その教会では三年で教会長になるという、彼の条件に間に合わないのです。それにその教会なら、自分でなくても、後継者になる方が、必ずおられると思ったのです。彼は、教主様と彼の両親と、在籍教会の教会長の承諾を得たら、この話を受けようと思っていました。

日を置かずして、彼の両親と在籍教会の教会長の承諾を得てから、ご本部に参拝して、教主様のお取次ぎを頂き、お許しを受けました。彼が、この先生にY教会の後を継がして頂くこと

をお伝えすると、そこからは、あつという間に七月十四日から、彼はY教会で御用をさせて頂くことが決まったのです。

※楽しむポイントは、人生の選択がくれば、神様が喜ばれる方を選べば良いこと。

彼の両親は、大変喜んでくれました。特に母はM教会のこともあり、彼が御用する教会の目途が付いて安心したようでした。

そして、今まで彼から預かり、貯めていたお年玉や諸々のお金を渡してくれました。彼の持っていたお金と合わせると、二百万円程になりました。彼は放送センターの給料も五万円くらいあるので、信者さんのお供えが少なくても、当座は何とかなるだろうと腹を決めていたのです。

その日までに、彼の生活の荷物を運ぶ下見も兼ねて、彼の母親とY教会を訪れました。Y教会の教会長の息子さんと、信徒総代であるお医者さんのNさんにご挨拶をしました。

息子さんには、教会の後を継ぐ意思がないことを確認し、Nさんには、これからの教会復興の上に、ご尽力を頂けるようお願いをしました。その時に聞かせて頂いたY教会の現状は、Y教会の先生の奥様が教会の留守番をされていて、普段のお参りが、二・三人あるかないか。

定時のご祈念はなく、お祭日で数人の参拝があり、祭典は親教会から先生が来られて、お仕えされているとのことでした。

この奥様は、K教団の教師の資格を持っておられないのでした。そして、毎月のお供えが約七万円あり、その中から地代として三万円を払っているということでした。

Y教会の教会長ご夫婦の生活は、直すぐ裏手に住んでおられる息子さん夫婦が見ておられました。その場合は、彼でなく彼の母親が取り仕切っていました。彼の母親は交渉事をするのが上手なのです。その母親が、Y教会が借地であることを気にしていたのです。

それで、その後に案内して頂き、地主さんにもご挨拶にいきました。地主さんも、彼が教会の後継に入ること承知していただきました。地主さんに挨拶に行くことにこだわった、彼の母親の判断が、結果として後の展開で、上手く生きてくるのでした。

彼の母親は、体は弱かったのですが、頭の回転が良く、物腰の柔らかなタイプでした。大学も出ていたし、若い時には車の免許も取って、産婦人科の女医であった伯母が、往診に出かける時には運転手して役に立っていたのです。結婚するまではその伯母の家に住んで、お世話になっていたようでした。彼にとつては、見た目はなよっとして頼りなく感じるのですが、いざという時には、お役に立ってくれる心強い存在でした。

Y教会は周りをブロック塀で囲われていて、平屋の建物で入口の前と左部分が庭になってい



ました。坪数は百二十坪ほどありました。建物の中は、前の部分がお広前になっていて、その奥が彼の住む場所でした。間取りは六畳間が二つ、四畳半が二つ、ダイニングキッチンのお風呂がありました。トイレは、外にある廊下についていました。冷蔵庫と洗濯機と扇風機はありましたが、エアコンやテレビの無い生活が始まったのでした。

Y教会の教会長は、病院から戻られている時は廊下で繋がっている離れの部屋に、ベッドを置いて療養をされていました。奥様が傍についてお世話をなさっていました。

昭和五十五年七月十四日、長年に亘りお世話になった在籍教会から転籍して、Y教会の在籍教師になられた方でした。

元の在籍教会の教会長の、ご高齢になられても黙々とご祈念される姿に、K教の教師として信者さんにするべきことを学びました。本当にお世話になり、ご恩のある教会です。今はもう、元の在籍教会には、お参りすることがないのですが、先生が鎮まっておられる奥城には、毎月お参りをさせて頂き、お礼を申し上げているのでした。

※楽しむポイントは、受けたご恩は一生忘れずにいること。

彼が教会に入った日は、Y教会長は離れの部屋におられたので、ご挨拶させて頂くと、意識

はしつかりされていきました。彼の方を見られて、ゆつくりと頷かれましたが言葉はありませんでした。

翌日から、彼のY教会での御用が始まりました。朝は四時に起きて、天地金乃神様や霊神様に、お供えするご神飯を炊くことが、一番目の御用です。ご神飯の内容は、後々変わるのでが・・・。顔を洗い、歯磨きをして、それから黒衣・羽織袴に着替えて、ご神前・ご霊前でお礼を申し上げて、午前五時になると教会の門を開けます。この時に、教会の土地建物に外からお礼を申し上げてから、ご本部の方角に向かい、教主様に遙拝して、お礼を申し上げることが朝のルーティンでした。

炊きあがったご飯を、ご神前・ご霊前にお供えして、五時半から、ご神前に於いて心中祈念で、信者さんをお願いをさせて頂き、そのまま六時からお参りに来られた方と、勢祈念を仕えました。たいがい二人の方がお参りをされました。一人はお医者さんのNさんです。もう一人は洋服の仕立て販売をされていたYさんでした。

Yさんは、当時朝晩の二回お参りされていました。その一回は、身体が悪くなってお参りができなくなった信心友達の、代参としてのお参りでした。しかも、そのお参りは修行のために往復一時間をかけて歩いてのことでした。このYさんは、時代の流れで仕立服が売れなくなり、やがて転職を考えられたのですが、その転職の条件として、教会の祭典に参拝ができることを

願われたのです。

六十才の時から、その条件にあう新聞配達をされるようになりました。この時に、身代わりの参拝で歩いていたことで、体力が自然に付くことになり、無理がなく自転車で新聞配達ができたこと、ご本人が言われていました。人のための参拝修行が、Yさん自身のおかげになったのです。

新聞配達を始めたことは経済的な理由でしたが、やがて新聞配達が生きがいとなって、九才まで約三十年間も、お元気で新聞配達のおかげを頂かれたのでした。神様に向かうあり方で、彼の印象に残る信者さんの一人でしたが、残念なことに、このYさんも子孫に信心を伝えることができませんでした。

朝六時のご祈念が終わると、お医者さんのNさんが、離れにられるY教会長を診察されました。彼も一緒に付いていき、Y教会長に、毎日ご挨拶をさせて頂きました。Y教会長は、Nさんや私が言葉を掛けると、目を開いて見てはくださるが、やはり言葉はありませんでした。それが済むと、朝ご飯を食べて午後八時の閉門まで、お取次ぎの座に殆ど座っていました。離れるのは、食事とトイレの時だけでした。放送センターに出務する日は、午前八時に教会を閉めることにしていました。

彼が、Y教会に来て五日目の十八日の朝でした。いつものように、お医者さんのNさんと、

Y教会長のところに行きました。お声を掛けると一瞬目を薄く開けられた感じがしましたが、何時もようにこちらを見られる反応がありません。Nさんが手の脈を診られて、暫くしてY教会長の奥様と、彼に告げられました。

「先生は今、お亡くなりになりました」

実に穏やかに、苦しむことなく、静かにこの世を去られたのでした。

彼は、Y教会長が、そんなに長くはないと、覚悟はしていましたが、まさか五日目とは思っていませんでした。Y教会の先生は、彼が後継者になることを知って安心して、この世を去ることができられたと思いました。

この事実には直面した時、彼の大学不合格は、本当におかげであつたと実感したのでした。

彼が大学に行っていたなら、たとえK教団の教師になつたとしても、このY教会の後継者には、間に合わなかつたことだけは確かでした。

※楽しむポイントは、天地金乃神様は、願えば必要な時期まで命を継いでくださること。

それから、お葬式が済むまでのことは、親教会の先生やY教会長の息子さん始め、周りの方々にすべてお任せ状態で過ごしました。信者さんの顔や名前すら、数人しかまだ覚えていない状

態で、必要な書類や祭典の道具が何処にあるのかも、把握できていない時なので仕方ありません。彼はただ周りの先生や信者さん達に、「よろしく願います」と頭を下げるだけでした。そして、ただただ暑かったことを記憶して居るのでした。

このお葬式が、彼がY教会を継いだことの、お披露目の機会にもなったことは、彼にとつて幸いでした。これを機会に、教会から遠ざかっていた信者さんがちらほらと、お参りされるようになったのです。

お葬式の後、信徒総代で医師のNさんが朝参りの後、お取次の座の前に来られて、

「先生に一つお願いがあるのですが、聞いて貰えますか」

と改まって言われるのです。彼は何を言われるのかと、緊張をしてNさんを見ました。

「先生は、放送センターの御用もおありですし、忙しいとは思いますが、ぜひ信者を代表してご本部に、毎月お参りをして頂きたいのです。新幹線の交通費は、お供えさせて頂きます。どうかよろしくお願いいたします」

とお願いされたのです。彼は緊張が解けて、

「Nさん喜んでお参りさせて頂きます」

と答えました。実は、彼もY教会を後継したら、ご本部にお礼の月参りをしたいと思っていたのです。だから、正に渡りに船だったのです。Nさんはそれ以降毎月一日に、ご本部の参拝

費用として二万円をお供えされたのでした。彼は、天地金乃神様から、ご本部へのお引き寄せを受けたように感じ、本当に嬉しく思いました。彼のご本部への月参拝は、この時から今に至るまで一回も欠けることなく、続くおかげを受けているのです。

さて、彼にはしなければならぬ手続きが、山ほどあるなかでも、大事なことが二つありました。教内ではY教会の、次の教会長に彼がなるかということ、教外では教会の借地について、地主さんとの話し合いがありました。Y教会の教会長については、彼が、親教会の教会長にお取次を頂き、お伺いしたところ、「あなたがされたら良いでしょう」とお答えになったのです。彼の心の中の神に、学院の時から、学院を卒業後に三年経ったら教会長として、何処かで御用が出来るように、ずっとお願いしてきたのです。だから教会長を受けることに、彼自身に迷いはなかったのです。

「ありがとうございます。では教会長としての御用ができるようお願いいたします」とお答えしたのでした。

ところが、元の在籍教会お届けに行くと、そこにおられた教会長の長男の先生が、「Tくん、君の年で直ぐに教会長になつたらあかん。暫くは親教会の先生に兼務教会長になつて貰うように、君から頼むのが正しいことや。教会長になることは断りなさい」と、殊の外強く言われたので困りました。

結局は、親教会の教会長に再びお取次を頂き、元の在籍教会のご子息の先生がおっしゃったままをお伝えして、教会長の判断をお伺いしたのです。

親教会の教会長から明快に「気にせず、あなたが教会長になったらよろしい」とのお言葉を頂いたのです。それで、ご本部への手続きを進めて、教主様から八月十六日に、Y教会の二代教会長に任命されたのです。その当時のK教団に於いて、一番若い教会長になったのです。彼は二十四才でした。彼の母親の病気が判ってから、母親を安心させるために、お願いしてきたことが一つ叶った瞬間でした。

※楽しむポイントは、何事も先のことを、神様をお願いしておくこと。

お葬式が済んでから数日して、いつもの通りお取次の座に座って御用をしていると、

「こんにちは」

と玄関の引き戸を開けて男の方が入ってこられました。彼がどなたかと思つて顔を見ると、地主さんが立つておられました。新たに借地代の契約に来られたのです。この時に地主さんとの話し合いで出された結論はこうでした。

『月十萬円の地代を払つて住む』

『来年の十二月十日までに、三千五百万円で土地を買い取る。それまでの地代は三万円に据え置く』

『土地を買い取ることができなければ、相場の立ち退き料を貰い、速やかにここを立ち退く』  
という三つから選択することになりました。

まあ、地主さんも借地権を認めてくださり（母親と挨拶に行っておいて良かったのです）、普通なら一億円くらいすると、三千五百万円にしてくださいなのは、良心的ことなのです。

彼はその晩、ご神前に端座して、彼の心の中の神ではなく、そこにK教団の教祖様が、お越しくださる事をお願いしました。K教団の教祖様は、『自分は体が無くなれば、来てくれという所には、何処でもいつて助けてやる』とのお言葉を残しておられるのです。そこに教祖様がおられると思つて、彼は声を出してお願いをしたのでした。

「天地金乃神様・教祖様、来年の十二月十日までに教会の土地を買い取らなければ、ここを立ち退くことになりました。私は人を助ける御用にここへきたので、土地を買うためにここへ来たのではありません。だから私はここを立ち退くことになつても文句はありません。しかし、この場所は初代教会長が、長い間御用をされたお土地です。できれば人の助かる教会として、ここで引き続き、私も御用をさせて頂きたいと思います。土地を買い取るには、三千五百万円



のお金が必要です。今あるお金は、私がつけてきた二百万円しかありません。後のお金は、信者さんからのお供えになります。しかし、教祖様のみ教えにあるように、信者さんに頼んで、無理な寄進勸化はしたくありません。(教祖様のみ教えに、氏子に、寄進勸化を強いることは、天地金乃神様の御心に叶わないとあるのです) 教会の現状を、信者さんに説明はさせて頂き、土地購入献納箱を作つて、そこに自由にお金を入れて頂き、土地購入代金を集めようと思いません。教祖様のお祈り添えで、ここで教会がこのまま存続が出来るように、天地金乃神様にお取次ぎください」

と教祖様に申し上げたのでした。

翌日、朝参りをされた、信徒総代の医師であるNさんに事情をお話すると、「ぜひとも土地を購入させて頂きましよう」と、力強く言つて下さいました。ずっと昔に、土地を買いたいと言つたことがあつたそうで、その時は、地主さんが売らないと断られたそうです。

彼が継いだY教会は、初代教会長の十年以上のご病気もあつて、教会は衰退していました。しかし初代教会長の時代も、土地購入をしようというくらいに、教会に勢いのある時分があつたということです。Nさんは

「売ると言われたのは、土地を買うまたとない機会です。神様のおかげです」

と言われたのです。彼はこの言葉は天地金乃神様が、Nさんを通して自分に言つてくださった

と思い、勇気百倍の思いになりました。彼はNさんに、土地を購入するお金の集め方について、自分の思いを伝えました。それは、お広前に教会土地購入献納箱を置いて、献納の思いある方に自由に入れて頂き、信者さんに無理のないように配慮して集めることでした。Nさんに、絶対に信者さん達で声を掛けて、寄付を集めるようなことはしないように頼みました。

このことは、彼の両親には電話で伝え、親教会へは参拝して、お取次を頂いてお願いをしました。

「T先生、おかげを頂きましょう。私も、ある時払いの催促なしで百万円は、お貸しします」とおっしゃってくださいました。信者さんには、初代教会長の五十日・合祀祭の場で、経過説明をさせて頂き、用意した献納箱を、お賽銭箱の横に置きました。

彼はこれ以降、土地購入のお金について、信徒総代をはじめ信者さんを集めて相談をするとは、一度もありませんでした。それは、無理な献納を避けるためでした。信者さんが集まっている金額を聞いて、それならもう少し献金しなければいけない、と思われることのないように配慮したのでした。

信者さんの中には、

「先生、いくら集まりました」

と聞いてくる方もいましたが、

「おかげを頂いて、そこそこ集まっています」

と答えていました。実際にもありがたいことに、彼の二百万円も含め、彼の両親、彼の姉、彼のおばあちゃん、女医であった母の叔母からの献金の合計だけでも千三百万円が集まり。そこに信徒総代や、主だった信者さんの献金を合わせると、その年の暮れには二千二百万円ほどになっていました。つまり、後十一ヶ月間に千三百万円を集めればいいところまでできていたのです。月に七万円ほどの収入しかなかったことからすれば、奇跡に近いことが起こっていたのです。

K教団では五百万円を十年間で返すことが条件で、七パーセントの利息で貸してくれる制度がありました。彼は誰にも借金をするつもりはなかったのですが、この制度だけは、親教会長から進められたこともあり、K教団に申し込みの手続きをしました。

昭和五十六年十二月十日の地主にお金を払う期日が、後十日になる十一月末にK教団からお金の振り込みがありました。彼は振り込まれた金額をみてびつくりしました、五百万円ではなかったのです。毎月返す返済のお金の、最初の一回分の約七万円が引かれていたのです。その時期の七万円は、彼にとって大変大きな意味を持つものでした。何故なら、その時に教会にあったすべてのお金を計算すると、三千四百万円までになっていたのです。つまり、残り百万円を十日で集めれば良いと考えていたのに、それが百七万円になったのです。ギリギリの状況

での七万円は痛いのです。

十二月一日のお祭日の御用が終わった晩に、彼は親教会長から、百万円をお借りしようか迷っていました。お借りすれば、地主に払う土地購入代金がそろうのです。土地購入の土壇場に來て、彼は楽な方に傾いていく、自分の心があるのに気づいて恥ずかしくなりました。やはり、親教会であつても、彼の性分からするとお借りしたくはないのでした。

ご神前に、教祖様がおられると思つて、

「教祖様ありがとうございます。皆さんの真心のおかげを頂きまして、土地購入代金が後百七万円で揃います。この十日が支払う日です。親教会からも借りることなく、九日にはすべて集めてください」

と、改めて彼はお願いをさせて頂いたのです。

八日になつて、後三十万円までできました。その晩の閉門間際に、親子でお参りされた方がありました。その方が献納箱に封筒を入れられてから、お取次ぎの場に來られました。

「先生、遅くなり申し訳ございません。息子にボーナスが出たので、僅かですが献納箱に入れてさせて頂きました。よろしくお願いいたします」

とお届けがありました。

「お供えができてありがたいことですね。神様にご家族の真心が届くようお願いさせて頂き

ましよう」

と親子に伝えて、共に天地金乃神様にお礼を申し上げました。

親子が帰られ、閉門してから献納箱の封筒の中を確認すると、何とそこに三十万円が入っていたのでした。こうして、約束の十二月十日に無事に教会の土地購入ができたのです。

後で思うと当然のことですが、地主さんが十二月の十日分の地代を請求されたのに、彼はどつきりしました。とにかくお金がギリギリだったからです。

半年ほど前から新しくお参りされるようになった信者さんに、建築と不動産をされている方がありました。その方の知り合いの司法書士の人に、土地の名義変更の手続きをして頂きました。

※楽しむポイントは、お願いすれば、天地金乃神様は必要な時に、必要なお金や人を差し向けてくださること。

その日に、親教会にお礼のお参りをさせて頂きました。お礼のお参りは早ければ早いほど、天地金乃神様に、実意が届くのです。

「ようできられましたな。先代の先生も喜んでおられるでしょう。私もいつでも百万円は用意

していたのですが、無駄になりましたなあ」

と笑いながらおっしゃって、大変喜んでくださいました。

その晩の彼には、二枚の千円札と小銭があるだけで、まさしくスツカラカンになっていました。いや、正確に言うところ本部への四百九十三万円の借金があるのでマイナスの経済状況でした。放送センターの、所長もずっと気にかけてくださっていたので、報告すると

「大変やったけど、いい経験をさせてもらったな。Tくんならできると思っていたよ」と褒めて頂きました。

さて、彼の御用の在り方ですが、教祖様の真似をしてお取次の座にとにかく居て、信者さんがお参りされてくるのを待ちました。放送センターに出務する時は、午前八時に教会を閉門しようと思っていきましたが、初代教会長の先生が亡くなられたことで、その奥様がお留守番をしてくださることに、これは大変ありがたいことでした。食事の面では、教会の裏に住んでおられた、初代教会長の息子さんの奥さんと、放送センター所長に助けて頂きました。奥さんの里がお米屋さんであったので、お米をお供えして下さり、彼が結婚をするまでは、放送センターに出ずに教会に居る時は、夕方におかずを度々持って来てくださったのです。お米が切れずにお供えにあるのですから、兎にも角にも、彼が餓死をする心配はなかったのです。

彼が放送センターに、週に三回出る内の一回か二回は、午後五時に仕事が終わると、当時は

所長が、職員に声をかけられて、ちよつと一杯やっていこうかと誘われるのです。

放送センターの最寄り駅の付近にある小料理屋に、みんなで行くのですが、彼が飲めないことを知っておられるので、「Tくんはしつかり食べて帰りや。教会に帰って食事を作るのは面倒だろうから」と親切におっしゃってくださいるのです。

彼は、所長のご厚意を、ありがたく素直に受けてしつかり食べたのでした。もちろん支払いは所長がしてくださいるのです。本当に、所長にはこういう所でも、彼はお世話になってばかりでした。彼の当時の食事は、教会では朝はインスタントの味噌と卵かけご飯か、インスタントラーメンが多かったのです。

放送センターでのお昼は、出前を取るか、みんなで外に食べに行くかでした。天地金乃神様はこう言う点でも、彼が食べることに心を煩わすことのないようにしてくださいるのです。彼が、七月十四日に継いだ翌月の八月から、一日を教祖様、十八日を靈神様、二十一日を天地金乃神様のお祭日にすることを決めました。十八日は初代教会長のご苦勞を忘れないようにと思い、お亡くなりになった日を靈祭日にしたのです。これにプラスして、第一日曜日か第二日曜日を信者さんの勢参拝日として、世界平和と人の助かりをお願いさせて頂く勢祈念をお仕えることにしたのでした。

彼は、お祭日に野菜や果物やお菓子を買って、お供えをさせて頂き、祭典が終わるとお参り

された方に、天地金乃神様からのお下がりとして、信者さんにお分けして持つて帰って頂いた  
のでした。

信者さんによって、庭が綺麗にされて、彼の車を入れる車庫や、信者さんの使われるトイレ  
なども、新しくできたのでした。これらのことは、彼が信者さんをお願いしたことも、頼んだ  
こともなく、信者さんからの申し出があつて、すべて行われたのです。

また、彼の御用をサポートする意思のある信者さんが集まつて、信徒の有志の会が発足しま  
した。その会報も毎月発行されるようになりました。この会報にお亡くなりになった信者さん  
のご命日を載せて、霊神様のご祈念をしたことで、霊神様を大切にしてくださいと喜ばれ、お  
参りをされる方もありました。

彼が、教会のお取次の座に座り、人の助かりを祈っていると、天地金乃神様から、お引き寄  
せを受けた方がやはりお参りされるのです。

足の遠ざかつていた古くからの信者さん、他の教会にお参りしていたが、Y教会の近くに引つ  
越してきてご縁を頂く方、信者さんにお導きをされてお参りをされる方、飛び込みで新しくお  
参りされた方など、色々な形でお参りが増えてきました。

彼のこの時期のお取次は、信者さんのお願ひに対して日切りをして、教祖様の手続きで願  
いすることが多かつたのです。するとやはり、その日切りした日におかげを頂くのです。



たくさんありますが、強く記憶に残っている事例を幾つかあげましょう。

※楽しんでポイントは、神様に、日切りをしてお願ひすることで、自身の願ひをはつきりと強くすること。

ある日、初代教会長の時代に、祭典で典樂の御用をされていた、昔からの信者さんがお参りされて、

「先生偉いことになりました。息子の嫁に癌が見つかり、十日後に大きな病院で再検査をすることになっています。どうか助けてください」と言われました。彼はご神前に進み、教祖様の手続きで天地金乃神様にお願ひしました。ご祈念した後、

「十日後に安心できるおかげを頂きましょう」

と言葉が出ました。十日後に再検査すると、前に写っていた癌が見つからないという結果がでたのです。その方は大喜びでお礼のお参りに来られました。彼はその時に、

「ありがたいことですね。ぜひ息子のお嫁さんをここへ連れてきて、後のおかげになるようにしてください」

とお願ひしたのですが、息子のお嫁さんはお参りされることはなかったのです。結局は七年

後に、他の場所の癌で亡くなったことを聞きました。

信者さんでその当時、ご主人がある銀行の支店長をされている方がいました。

「先生、主人の銀行で行員の使い込みがあり、その使い込んだ人が行方不明になっているので。本人が見つかり使い込んだ事情が分かれば、使い込んだ人の親が、使い込んだお金は返すと言われているので、それなら銀行も刑事事件にはしないという話になっています。まあ、刑事事件になれば、本人も銀行にとつても恥ですから、お金さえ戻れば穏便に済ませたいのです。何とか本人が見つかりますようにお願いします」

そのようなお願いをされました。

彼は、ご神前で教祖様の手続きで、天地金乃神様にお願いをしました。

「三日でおかげを頂きましょう」

と言葉ができました。三日目の夕方に、  
「先生おかげを頂きました。今主人から連絡があつて、大阪にあるサウナに居る所を、同僚の行員がみつけたそうです」

とその方から電話がありました。使い込みをした行員も、サウナで裸では逃げるに逃げられなかつたのです。その後、ご主人の転勤で四国の愛媛にいかれました。

ある日、おばあさんの信者さんに導かれて、三十才半ばくらいの男性がお参りをしてきました。お取次の座の前に来て、おばあさんに促されて、話を始められました。

「初めてお目に掛かります。このおばあさんとはいつも懇意にしております。今困っていることがあって、それをおばあさんに話したら、そら教会でお願いしてもらいなさいと言われて来ました。実は恥ずかしい事ですが、家内に逃げられたんです。どうも男ができたようです。子どももいるし、私自身は今すぐに戻ってきてくれたら、家内ともう一度やり直したいと考えているので、戻ってくることをお願いしてもらえませんか」

「どうやら、ご主人の方が、逃げた奥さんに未練たつぷりのようでした。」

彼はご神前に出て、教祖様の手続きでお願いしました。取次ぎの座に戻って、その方に「神様に、この夫婦がこの先、幸せな家庭を築いていけるなら、一週間の間に奥さんに戻してくださいとお願いしました。」

もし一週間で戻らない時は諦めて、奥さんの幸せを祈ってあげてください。それであなたもまた幸せになれます。もちろん、お子さんの立ち行きもしっかりとお願いしましょう」とその男の方に申し上げました。傍にいたおばあさんの信者さんから、

「今、先生の言われたことをしっかりと受け止めて、あんた自身もお願いせなあかんで」

と諭されていました。その方は、それから毎日教会にお参りをされ、ご自身でもお願いをされたのでした。

奥さんが戻って来られたのは六日目でした。それから、このおばあさんが亡くなるまでは、時々夫婦でお参りを続けられ、子どもさんの受験などもお願いされました。二十年ほど前に引越しをされ、やがて縁が切れてしまいました。

このように日切りをしておかげを頂くのですが、ある時に、彼は気がついたのです。日切りをしておかげを受けた方の、後のお参りが殆ど続かない事に。

このままでは、天地金乃神様に、大きな借金をするだけになるような気がしたことと、また自分の教導の在り方に問題があるのだと思ひ、そのことを天地金乃神様にお詫びして、その後は日切りをすることは、あまりしなくなつたのです。

※楽しむポイントは、おかげを受けさせるだけでなく、その人を導き、神様と仲良くできるようにすること。

そんな日々を過ごす彼は、Y教会で教会長として御用をさせて頂くことで、大変なおかげを

知らず知らずに、天地金乃神様から受けていることに気づいたのです。それは、彼の身体がいつの間にか丈夫になり、時には徹夜のご祈念をしても大丈夫なほど、無理の効く体になっていくことでした。実際に、彼が徹夜のご祈念をしたことは、二回しかないのですが。

一回目は、ご主人が風邪から脳にウイルスが入り、命も危ないと言われてお参りをされた家族の時に、幼い三人の子どもさんがおられました。この時は命を頂けて頂くことができませんでした。その後、Y教会の建築工事に、この方の家族は深く関わることになるのでした。

二回目は、平成十三年三月十九日に天地金乃神様の元に帰った、二十代の女性の時でした。この女性は風邪のような症状が良くならず、病院で診て頂くと、ある難病であることが判りました。

この女性の父親が、お願いに来られたのです。彼はお願いしましたが、病状がどんどん悪くなり、水分を飲むことも、制限されるような状態になっていきました。天地金乃神様に、どうか助けてくださいとお願いしているうちに、気がつけば徹夜になっていたのでした。彼はこの時、初めて自分の寿命を分けてでも助けて欲しいと、天地金乃神様に願ったのでした。

後で知りますが、このお願いの仕方は、天地金乃神様のみ心には沿わないものなのでした。人に命を授けてくださっている天地金乃神様は、他の人の命を犠牲にして、人を助けることはされないのです。

ある教団の教祖様は、百十五才まで生きると信者さんに公言されていたのですが、実際には九十才で亡くなったのです。その時に、この教団はそのことを、『世の人を助けるために、自身の寿命を縮められた』と説明をしたのです。この教団の教祖様も、天地金乃神様の可愛い子なのです。だから、その可愛い子の命を削って、他の命を助けることはされないのです。

天地金乃神様は、他の人を助けるために、祈った人に身代わりの修行をさせられることはあつても、祈った人の命を削られるようなことは、決してなされないのです。

唯一の例外は、子どもが六才までに、事故以外で死ぬことです。これは親の命の立ち行きのために、天地金乃神様がされることがあります。

この時には、親は子どもが死んだと、天地金乃神様に文句を言わずに、

「自分のめぐりでこのようになってすみません。育つ子をお授けください」

とお願いして子どもの霊祭を大切して、後の立ち行きを受けることが大事なのです。子どもが死んだと、天地金乃神様を恨んでしまうと、身代わりに死んだ子どもが犬死になります。

彼が、Y教会でお取次のご用をする中で、二十代の若い人を死なせたことは、彼女だけでした。K教の教祖様は、『十五才にでもなれば、自分のことは自分でお願いできるやしなければならない』とみ教えくださっています。

彼は亡くなった彼女自身が、もつと若い時から天地金乃神様に、お願いができていたら……。

持つて生まれた宿命が、変わっていったのではないかと思つたのでした。

彼女のご葬儀は仏式でされたのですが、K教に直ぐに改式をされて、五十日・合祀祭からとK教の儀式でお仕えができたことは、彼女の霊神様にとって、最大の助かりになつたと彼は思ひ。彼自身も助かる思いでした。

※楽しむポイントは、中学生くらいになれば、自分の事は自分でお願いができるようになること。

彼が人並み以上に、身体が丈夫になつたことは、

『人を助けて自分が助かる道である』

そう教えられているK教の、正にそれを証明するおかげを頂いたのです。

教会長としての立場上、人の助かりを祈ることが、必然の毎日だつたおかげです。天地金乃神様は、彼に丈夫な体を授けるために、K教団の先生になる道を、付けてくださったとも言えるのです。

彼が思つていた以上に、Y教会は順調に発展をしていきました。彼の信心以上のおかけを、天地金乃神様から頂いていたのです。またそれと同時に、彼の母親を安心させるために、お願

いしていた結婚の事も動きだしていたのでした。

放送センターの職員が結婚されることになり、一人の職員が退職することになったのです。その補充の職員として入ってきたのが、E先生でした。E先生は、その年の昭和五十六年五月にA教会の会長であった父親を亡くしていたのです。

大学を卒業後にK教団のK教学院に行き、K教団の先生の資格を得てから、一般の会社に就職して働きました。しかし父親の死をきっかけに仕事を止めて、教会で母親の御用のお手伝いをしていたのでした。

彼がこの話を聞いたのは、彼の車の中でした。その日は、放送センターから帰る時分になって、雨が降り出したのです。かなりの本降りだったので、傘を持っていなかったE先生を、A教会まで送ることにしたのでした。

彼は、放送センターでは、それまでほとんどE先生と個人的に話をすることはありませんでした。

初めての会話で、彼がE先生に好印象を持ったのは、E先生が会社で働いていた時に、頂いたお給料の全額を、そのまま教会にお供えをしていたと聞いてからでした。自分で働いたお金ですから、すべて自分で勝手に使っても良いのに、そうせずに教会に、お給料袋のままお供えしていたようでした。



E先生に好印象を持った彼は、それ以降タイミングが合えば、時々E先生を教会まで送るようになったのです。その後、E先生とお付き合いするようになったのでした。E先生の名前はT代です。

実際に付き合ってみると、まあ付き合うと言っても、T代をA教会に送る車の中での会話が主ですが、朗らかで思った以上に、真面目で一途なところがある、甘え上手な女性でした。ただ真面目で一途なところは、一面凄く頑固であるとも言え、いったん決めた予定を変えることを非常に嫌がるのでした。

二人の軽いケンカは、彼が二人で決めた予定を、思い付きで急に変更した時に起こるのでした。そのかわり、決めたことは、多少の無理なことでも、段取りを付けて果たしてくれるのです。

また、弱い立場の人や困っている人には、精一杯親切な対応をする感じでした。彼が、土地購入が出来た直後に、お金がないことを知ると、T代から購入のお祝いを、二人でしようと提案してくれたのです。

それで放送センターの仕事終わりに、お好み焼きを食べにいったのですが、その時は私がご馳走するからと、T代がお金を出してくれるようなところがありました。

ちよつとした事ですが、彼にはT代のその心遣いが嬉しかったのです。付き会っていた時に、

T代と食事に行ったことはこれだけでした。他には二人で遊びに行く時間を、彼には当時はずいぶん少なかったのです。

年が明けて、一月にT代の誕生日がありました。

「なあ、T代の誕生日祝いを、俺の教会でしないか」

「えっ、お祝いをして貰えるのなら嬉しいな。一度、先生の教会も見てみたいと思っ  
ていたし・・・。母親には友達と食事すると言うわ。先生も広い意味では友達に入るから」

T代は明快に愉快に言葉を返してくれました。

その日は、放送センターの仕事がある日でした。放送センターが終わった後に、何処かで食事を済ませて、Y教会の閉門の午後八時前に、教会に着くように考えていました。

彼のY教会に向かう途中の側道に車を止めました。そして、本当は二人で食事をした時に、話そうと思っていたことを口にしたのでした。

「なあT代、Y教会で俺と一緒に御用をしないか？」

これが、彼のT代へのプロポーズと言える言葉でした。照れ臭かったので、車の正面を見てつぶやくようにいったのです。言った後、T代の横顔を見ていました。数秒後にT代も彼の方を見て、

「私で良かったら御用をさせてください」

と受けてくれたのでした。

「ありがたい。受けてくれて嬉しい、これからよろしく。今更やけど、俺のどこが良くて受けてくれたのかな？」

この問いには、T代は即座に答えてくれました。

「それはね、私の周りにいる先生の中で、先生が一番神様を信じている人だと思えたから、先生についていけば安心な気がするの」

彼はこの答えを聞いて、T代を人生の相棒に選んでよかったと思いました。優しそう、真面目そう、誠実そう、面白そうなどが答えなら、彼は全く自信がありませんから、これから先の二人の生活に不安を覚える所でした。しかし、彼は天地金乃神様から授かっている、彼の心の中にある神を信じていることだけは、誰にも負けないと思っていたのです。そこをちゃんと感じていてくれていたT代に、惚れ直す思いでした。二人が結婚すれば、間違いなくおかげになると確信した瞬間でもありました。

初めてY教会に入ったT代は、

「へえ、結構広いね、ここで生活することになるのやね」

「うん、結婚するまでもう少し住みやすいようにするつもりやけど」

「ありがたい、でも無理しなくてもいいから」

「エアコンもテレビもないで」

「そんなの無くて大丈夫よ」

「そう言つて貰うと助かる。今、コーヒーを入れるから」

彼が入れたインスタンのコーヒーを飲みながら、お互いに思うことを話し、繋がりを深めたのでした。

二人の話は尽きませんでした。T代の母親が心配してはいけなないので、A教会に電話させてから、車でT代を送りました。

この話し合いで、二月四日の彼の誕生日に、ご本部へ一緒にお参りをして、まず教主様に結婚をするお届けをさせて頂くこと。一週間後の建国記念日の十一日に、T代が彼の実家に挨拶に行くこと。十四日には彼がA教会に行き、T代の母親に挨拶に行くこと。それが終わつてから、親教会と放送センター所長に報告することを二人で決めたのでした。T代を送った帰りの車で、気づいたのです。誕生日のお祝いのケーキがなかったと。

翌日の成人の日に、母親に電話して、結婚したい彼女を二月十一日の祝日に連れて行くことを伝えると、母親は本当に喜んでくれました。

彼の誕生日の二月四日に、二人はご本部にいました。これが、初めての二人のデートらしきものだと言えます。

無事に、教主様へのお届けも済み、帰りの新幹線の中でのことです。

「ねえ、先生、結婚式を挙げるつもりかな？　もしするのならT代、一つだけお願いがあるの、聞いてくれるかなあ」

彼に対する、T代の頼み始めでした。

「うん、俺の両親も、結婚式を楽しみにしていると思うから、出来る範囲でするつもりやけど。何かな」

「あのね、怒らないかな」

「そら聞いてみなわからんけど」

「ほら、結婚式の披露宴でお色直しがあるでしょ。普通は白無垢の着物とドレスが多いのよ。でもね、T代はドレスだけにしたいの。それでね、そのドレスはレンタルではなく自前で作りたいの」

彼は、T代の言葉を聞いたものの、内容がよく理解できませんでした。

「ごめん、正直よくわからん。でも衣装のことはT代の思い通りで良いと思う」

「ほんまあ、T代の思い通りにしていいの？」

彼は、結婚には思いがあっても、結婚式には全く思い入れがなかったもので、T代にその部分は任せました。レンタル衣装よりは高くはなったのですが、女の人にとっては、一生の思い出

になるものですから、後々文句を言われることのないようにしたのです。後々、教会でこの自前ドレスを四十代になっても、時々着てはコスプレを楽しんでいたのです、彼はこれも良かったかなと思えました。T代のスタイルは子どもを産んだ前後以外は、若い頃と同じスタイルだったので、着ることが出来たのです。

さて、建国記念日の祝日に、彼の実家に、T代を連れて行きました。両親、彼のおばあちゃん、彼の姉夫婦が待ち構えていて、T代は少し緊張していましたが、すぐに打ち解けて和やかに話が進められました。

彼の母親は、この場でも彼を置き去りにして、どんどん結婚の話をT代と詰めていきます。T代が帰る時には、九月十二日の日曜日に、結婚式はY教会で、披露宴は姉が、小学校の先生をしていたので、その関係の式場ですることまで、おおかた決まったのです。

※楽しむポイントは、親が喜び安心しますから、お互いに良い結婚相手を差し向けてくださいますようお願いすること。

後で考えると、彼の母親は、その時は元気な様子でしたが、自分の寿命がもう余り無い事を、何処かで感じていたのかもしれない。

彼の母親はそれから三ヶ月も経たない、五月三日に天地金乃神様の元に帰ったのでした。しかし、医師から命の保証が出来ないと言われてから、ほぼ五年、元気な状態で生きることができたのです。この命を継いで頂いた五年の間に、彼の母親が心配していた、彼の御用の場所と結婚の相手が決まり、母親が安心してくれたことは、天地金乃神様から、大きなお繰り合わせを受けたと思えました。

十四日には、A教会にお参りして、T代の母親にお会いして、T代との結婚のお許しを頂いたのです。

その後、予定通りに親教会、放送センター所長、元在籍教会の先生、Y教会の主だった信者さんには、結婚することを伝えました。この頃に彼の母親は、東京の病院に入院していた母の伯母の、お世話をするために上京をしたのです。彼の父親や彼のおばあちゃんが、彼の母親の体のこともあり、東京に行く事に反対していました。しかし彼の母親は、「伯母には若い頃に、大変お世話になったから、少しでもそのお返しに、伯母のお世話をさせて頂く」と言って東京に向かいました。

彼の母親は、彼がY教会で御用をするようになってから、色々な面で、御用をサポートしてくれました。

例えば、彼の書いたお祭りの祭詞の清書や、毎月出していた会報のあて名書きや、たまには

留守番もしてくれていました。その中でも助かった手助けがありました。

当時Y教会の信者さんで、育児ノイローゼの状態の方がおられ、幼児を育てることが難しい状況がありました。その幼児を、彼の母親が、少しの間ですが、実家で預かってお世話をすると言ってくれたのです。彼の御用の立ち行きを、一番に願っていた母親の思いが、そうさせたのだと思います。彼も母親の体のことを心配しながら、母親に甘えて少しの間ですが、幼児を預かってもらったのでした。彼が後継したY教会がその後、順調に展開して土地購入もでき、結婚も整ったことで安心して、大阪を離れても良いと思った所も、彼の母親が、東京へ行く事を決めた理由の、一つであったのかも知れません。

しかし、この彼の母親の思いには、やはり無理があつたようで、伯母の付き添いをしている時に、そこで動脈瘤が破裂して、自分自身も入院をする状況になったのです。

そこで治療を受けていたのですが、輸血が必要になったことと、彼の父親が母親の看病をする関係で、彼の母親の妹のお世話で、静岡県浜松市にある病院に、転院することになったのです。

彼の父親が休暇を取って、その病院に泊まり込んで、看病をすることになりました。彼も病院に様子を見に行きたかったのですが、教会と放送センターの御用があり、中々行く機会が作れません。



その中で一度だけ見舞いにきました。T代もお見舞いに行きたいと言ったのですが、彼の母親が断ったのです。彼の姉も結婚してからも、小学校の先生の仕事を務めながら、子どもを出産していた関係で、一度しか行けなかったようでした。

彼が、母親に集中治療室で面会すると、

「来てくれたたんか、ありがとう。でも今あんたが来てくれても、何もしてもらえないから、すぐに帰って御用しなさい」

と、開口一番に彼に言ったのでした。

確かに、彼がここでできることは何もないのです。

「うん、それはわかってはいるけど。でも何かすることないかな」と言うと「アイスクリームが食べたい」

と言います。看護師さんに食べさせて良いか聞きに行くと、医師から許可が出ていないからダメだと言われてしまいました。

「ごめん、ここでは食べることはできへん。元気になって大阪に戻ってきたら、なんぼでも食べさせてあげるから」

彼の母親は少し頷きながら、

「Tちゃんありがとう、もう帰って御用しなさい」

彼の母親は気丈夫に言いました。彼が聞いた母親の最後の言葉となりました。

四月と五月は、K教においては、ご大祭が仕えられるので、いつもより忙しいのです。病気をしながらも、母親は彼のことを心配してくれていたのです。

母親の妹からは、電話でもつと会いに行くように、何度か催促をされましたが、母親の言葉もあり、会いに行くことはなかったのです。母親の妹からは、宗教の先生をしているのに、薄情な息子だと思われたようですが・・・。

四月の下旬に彼の父親から、いよいよ母親も容態が悪いと連絡がきました。彼はできる精一杯のご祈念をしました。

五月になると、一日、二日、三日と関係教会のご大祭があり、五日には、彼自身のY教会のご大祭があるので。

三日に御用に出かけた教会で、彼は母親が、天地金乃神様の元に帰った知らせを受けたのです。教会にかえって直ぐに親教会に電話をしました。そして、T代にも、容態を気にしていたので、連絡を入れました。電話に出たT代は、母親が亡くなったことを伝えると、一瞬息を止めるような間があった後に、

「そう・・・、何か私にお役に立てることがあれば、遠慮なく言ってください」と言ってくれました。

「うん、ありがとう。何かあったら頼むわ」

電話を切つてから、ご神前で母親が今までの五年間を、元気で過ごせたお礼を、天地金乃神様に改めて申し上げたのです。天地金乃神様は、彼の願いを聞き入れて、彼の母親を、五年間は、元気に長生きさせてくださったのです。

※楽しむポイントは、人の生き死にを決めておられる天地金乃神様にお問い合わせ、安心ができるところまでは命を継いでいただけること。

彼の母親のお葬式の日程は、彼のY教会の状況を最優先に考慮されて、Y教会のご大祭の済んだ五日の晩に終祭、翌日に告別式を仕えることに決まりました。

これは不思議な巡り合わせで、T代の亡くなった父親もA教会のご大祭の夜に終祭、翌日に告別式が仕えられていたのです。

何かT代との間に、因縁的なものを彼は感じるのです。

今から考えると、本当に盛大と言えるお葬儀でした。家族葬が主流になっている現在を思うと。彼の父親も、公務員として現役で勤めていたし、教会の関係だけでもたくさんのお参りがありました。もちろん、放送センターからも、全員の会葬があったのです。

ご葬儀のことがすべて終わり、彼が流石に疲れを感じる中で、七日にY教会で五日のご大祭の後片付けをしていると、昼過ぎに電話がかかってきました。

母親が亡くなったので、お葬儀をして欲しいと言う内容でした。Y教会の信者さんではなく、大阪市内にある教会の信者さんでした。色々な事情があって、Y教会で仕えて欲しいと頼まれるのです。しかも、その日の晩に終祭、翌日に告別式の日程でして欲しいと言われます。彼は返事を保留して、直ぐに大阪市内の教会に電話して、事情を話すと、Y教会で仕えて欲しいと頼まれたのです。

彼は、お葬儀を断られたこの教会が、信者さんに対して薄情な気がしました。それでお葬儀を引き受けることにしたのです。振り返ると、彼の御用人生の中で、ある意味でここが一番体力的にしんどい所だったと言えます。

その方にお葬儀を受ける事を連絡して、午後六時に教会に向かえに来て貰う事にしました。この時に、初めてお葬儀の場所が、奈良の檀原であることを知りました。

亡くなられたこの方の母親は、この方の姉と住んでおられて、その場所が檀原だったのです。終祭は午後八時からにしました。それからすぐにT代に電話をして、

「済まないが、お葬儀を頼まれたので、すぐ来て手伝ってほしい。留守番と祭詞の清書を頼みたい」

彼は、お葬儀で奏上する祭詞の清書を頼みたかったのです。それまでは、彼の母親に清書をして貰っていたのです。

彼は教会の教師でありながら、筆で書くことが苦手だったのです。

「なんかお葬儀が続いて大変やね、直ぐに行きます。食べる物を買っていくから」と快諾してくれました。

「ありがとう。頼むわ。それと泊まる用意をして来て、お葬儀の場所が遠いし、帰ってから告別式の祭詞を作るので、その清書もして欲しいから」

「うん、わかった。これから、先生の祭詞の清書書きと背中搔きはT代の御用にするわ」

T代が笑いながら答えるのが、電話を通して伝わってきました。

実はこの当時、身体に湿疹が出ることもあり、時々T代に背中を搔いて貰うことがあったのです。T代が残した名言の一つでした。

T代が来るまでに、終祭の祭詞を作りました。仏式とは違い、ただ決まった読経をあげるだけではないのです。K教は、一人ひとりの人生のお礼を、天地金乃神様に申し上げるので、一人ひとりに違う祭詞がいるのです。

T代が来て直ぐに、終祭の祭詞の清書をして貰い、かろうじて午後六時に間に合いました。終祭から戻り、ほとんど徹夜の御用になり、明け方に少し寝ただけでした。T代もそれに付

き合ってくれて、何とか告別式に必要な準備が済んだのでした。

T代が、彼の朝ご飯の用意をしてY教会を出たのは、Y教会の開門の時間の午前五時のことでした。その日は、T代の教会でも御用があつたのです。T代の協力により、何とかこの局面を乗り越える事ができたのです。改めてT代を結婚相手に選んだ事が、正解だったと思つたのでした。

その後、彼の母親の五十日・合祀祭も無事に済み、Y教会の方では部屋を増築して、T代の荷物を入れる場所と夫婦の寝室を確保したのです。

仏教なら、親が亡くなって直ぐの結婚は、喪中とかでダメかもしれません。しかし、K教団では人が亡くなることも、天地金乃神様のおかげと捉えていて、

『生まれてくるのがめでたいなら、死んで神になるのはなおめでたいではないか』との神言があるのです。

※楽しいポイントは、信心のあつた人の死は、忌穢れではなく、神様のおかげであること。

予定通りに、二人の結婚式の準備が着々と進められていきました。仲人役は、放送センター所長ご夫婦にお願いをしました。Y教会のお広前で、親教会長に結婚式をお仕え頂き、披露宴

は場所を移動して、大阪市内にあるN会館で行う予定でした。

新婚旅行は、ご本部へ参拝した後に、四国に渡り、高知に行く事を決めていました。T代が好物のカツオのたたきを、高知で食べたいと言ったからです。

事件は突然に、結婚式を挙げる三日前に起きたのでした。T代の母親が、腹痛を訴えて病院に行くと、急性盲腸炎で急遽手術となりました。この時点で、二人の結婚式に、T代の母親が出席する事が不可能になったのです。

この事態によりT代が、母親が結婚式に出られないなら、式を延期したいと言い出したので困りました。その晩に、彼がお見舞い行き、手術が終わって病院のベッドに寝ていたT代の母親と彼とで、付き添いでいたT代に、一生懸命に説得したのでした。ここまで来て、結婚式を止める選択は、彼にはまったくなかったのです。

結局は披露宴の後に、T代の母親に、病院までその日に結婚の報告に行く条件で、何とか予定通りに結婚式を挙げる事に、同意をしてくれたのでした。

こうして結婚式の当日を迎えた二人に、再び試練が襲ってきたのです。それは、台風が大阪に近づいてきていたことでした。正に一難去ってまた一難という感じでした。

Y教会で三々九度の儀式と誓詞を読み上げて、無事に式が終わりました。  
祭主のご挨拶で、M先生から、

『信心も夫婦の仲も同じこと、はじめの時を忘れずにいけよ』とのお言葉を頂いたことを、彼は今も覚えていたのでした。

お天気はそれでも、披露宴会場のN会館に移るまでは、嵐の前の静けさと言う感じで、雨も降らず風も無風状態でおかげを頂いたのです。披露宴に来てくださった人にも良かったと思えました。

しかし、披露宴が終わって二人がT代の母親の病院に、結婚式が無事に済んだ報告をするために、タクシーで向かう頃には、台風らしい雨風にお天気は変わっていました。タクシーのラジオから流れる情報で、二人がこの後に乗る新幹線が、運転を取り止めていることを知りました。

二人はその日の内に、岡山のホテルに行く予定になっていたのです。そのタクシーに待っていて貰って、病院でT代の母親に会ってから、取り敢えずそのタクシーで大阪駅まで行ってみる事にしました。

在来線もダイヤは乱れていましたが、何とか快速電車に乗り、姫路で乗り継いで岡山に着いた時には、日付が変わろうとしていました。

T代は披露宴では、殆ど何も食べられなかったので、新幹線の食堂車で食べようと思っていたのが、当てが外れてしまったのです。彼は大阪駅の売店で、飲み物とただ一つ残っていた五



百円の幕の内弁当を買い、T代がその中で食べられる物を食べて貰い、残りを彼が食べることにしたのでした。

食べ終えたT代は、何時しか彼の肩に頭をもたれかけて眠っていました。母親の緊急入院や、女性にだけある結婚式の準備で、疲れのピークが来たようです。

彼は、肩に重さを感じながら、無防備に彼に身を傾けて眠るT代に対して、これからT代をしつかり守っていかなければと思っていたのでした。

ホテルには大阪駅から、遅くなることを電話で伝えてありました。

ホテルのフロントに行くと、対応した係りの人が、

「台風の中をよくお越しくございました。それでこちらの感謝の気持ちを込めて、お部屋を無料でスイートルームに変更をさせて頂きましたので、ゆっくりお過ごしください」  
そう言われて部屋に案内されたのです。

予定を狂わせた台風が、二人にホテルのスイートルームをプレゼントされる結果を生んだのでした。二人が人生で、スイートルームに泊まった、唯一の機会となりました。

部屋は広々としていて、ソファアールとテーブルが二箇所置いてありました。またベッドルームも二箇所あり、一つは大きなダブルベッド、もう一つはシングルベッドを二つ並べてありました。

疲れ切っていた二人は、直ぐにお風呂にはいつてから、せっかく二つベッドルームがあるのだから使おうということになり、彼がダブルベッド、T代がシングルベッドで休むことにしたのでした。新婚初夜らしい、ロマンティックなムードも何もなかったのですが、後々で二人の間では、笑い草になる忘れられない出来事で、思い出深いことのひとつとなりました。

天地金乃神様が、彼に対する人生のご演出は、ドッキリやハラハラとさせることも多く、またそれが愉快で楽しい彼の記憶となつて残るのです。

翌日は、日本晴れのお天気でした。このお天気は、彼のおばあちゃんが、留守番をしてくれているY教会に帰るまで続いたのでした。

朝ご飯を終えて、ご本部に向かいました。この新婚旅行は、泊まるホテルだけを予約していて、後は自由に行動をすることにしていました。ご本部で教主様に結婚のお届けを済ませて、教祖様の奥城にお参りをさせて頂いて駅に向かいました。

電車に乗りM駅で降りて、そこから船で四国に渡りました。目指したのは次の宿泊地の宇和島でした。そこまで在来線を乗り継いで行きました。宇和島のホテルで、初めてゆつくりと夫婦の時間を過ごす事ができました。

翌日、宇和島から高知まで、普通電車ではなく特急電車を使う事にしました。この時に、新婚旅行だから、少しばかり贅沢をしようかと言うことで、これも人生で初めて、二人はグリー

ン車に乗ったのです。ホテルのスイートルームとグリーン車で、新婚旅行の気分を味わった二人でした。

高知に着いて、駅前に止まっていたタクシートの運転手と交渉して、観光地を案内してもらう事にしました。

この時に、自殺の名所でもある所へも行った後に、タクシートの運転手が、二人が自殺をするのではないか、と思っていたと言われたのにはびっくりでした。当時はもう、新婚旅行と言えば、ハワイか北海道が主流になっていた時でした。ですから、新婚旅行に四国ということは、まずないことなのです。

それに二人の会話で、T代が彼のことを、先生と呼んでいたのです、タクシートの運転手は、二人が先生と生徒の不倫の関係で、お忍びの旅行に來ていると、勝手に勘違いしていたのです。彼が自殺者に間違われた二回目でした。それを聞いて、二人で大笑いをしたのです。何故か彼は、T代よりも、かなり年上に思われていたのです。実際は一つだけ年上なのですが。因みに、彼はT代から、どここの場所・場合でも『先生』か『うちの先生』と呼ばれていたのです。彼は、T代ことを『T代』、信者さんの前では『T代先生』でした。

それで、息子が生まれて、言葉を喋り始めた時に、T代のことをおかあさんでなく、彼の真似をしてT代と呼び出したので、息子の前ではT代を、おかあさんと呼ぶようにかえたのでし

た。

高知のホテルでは、T代が皿鉢料理で、カツオのたたきを堪能して満足をしたのでした。

翌日、高知空港でお土産をいっぱい買って、プロペラ機のY Sで伊丹空港に着きました。最初はどうかと思つた新婚旅行を無事に終えて、Y教会に戻つたのでした。

※楽しむポイントは、お願いをしておく、一時は具合が悪いように思えても、願い以上のおかげにしてくださいること。

二人のY教会での御用がはじまりました。

朝は、二人とも午前四時に起きます。実家のA教会で午前三時に起きていたT代にすると、一時間遅くなつたのです。T代の父親は、神様の御用に対して非常に頑固で、厳しい所があつたようでした。

T代にとつて、Y教会の御用はかなりユニークで楽に思つたのか、しばらくして「先生と結婚して良かったことは、御用が楽になつたし、T代が食べたい時に、食べたい物をいつでも食べられるようになったから」と言いました。

天地金乃神様に毎朝お供えするご神飯にしても、T代の里のA教会では、午前四時までにご

飯を炊いて、キッチリとお供えしていたのです。

Y教会では、ご飯を炊いた時には度々、色々な物をご神飯に供えていました。彼にはそういう所にはこだわりりがなかったのです。

当時の彼が、拘こつとっていた天地金乃神様への御用はただ一つ、お取次の座に座る事だけでした。

彼はT代に、朝は七時、昼は正午、夕は五時にご飯の用意することを頼みました。彼はどの食事もも十五分以内で食べ終わるのです。お米の苦手なT代は一緒に食べずに、彼が食べるまで、お世話をしてくれました。

T代は自分の都合の良い時に、食べたい時に食べたい物を、Y教会で食べていたのです。T代の主食は相変わらず、パンやクッキー、ケーキにカステラなどの洋菓子と、どら焼きやきんつばなどの和菓子でした。特にカステラは福砂屋が好きでした。

T代は、毎日一リットルの牛乳を二パックは飲んでいました。お肉と魚は時々食べていましたが、お米と野菜は胃に刺さると言つて殆ど食べませんでした。ブラックコーヒは、常に入られてあり。何かをしては一口飲み、また何かをして一口飲む感じで飲んでいました。

また彼の父親が、Y教会にお参りする時には、途中の駅で買ってくる赤福餅も、彼に一つだけ「お裾分け」と言つてくれるのですが、残り全部をこれはT代の食料だからと独占して喜んで食べていました。

彼の分の食事は、頼んだ通りに、ちゃんと作ってくれるので、T代の食べる事に関しては、彼は一切口を出さずに、T代の好きなようにさせていたのです。二人のこの基本の生活スタイルは、この後に子どもが出来てもずっと続いていくのでした。

彼は、朝五時の開門から夜八時の閉門まで、外での御用が無い限り、この食事の時間とトイレを除いては、ずっと正座でお取次の座にいたのです。座ることが一つの修行だと思っていたのです。時には信者さんから、午後八時過ぎてもお参りがしたいとの連絡があれば、午後十時までは座っていたのでした。

『お取次の座に座ること人後におちず』です。

その当時、放送センターの御用と年祭などのお祭り以外は、Y教会から離れないと、天地金乃神様に誓っていたのでした。やがて彼の足首には座りダコができ、足に痺れがきれることがなくなつたのでした。彼が、放送センターに出る時は、T代にも他のことはしなくてよいから、お取次の座にいるように頼みました。

面白かったのは、彼がお取次ぎの座にいと五分で帰られる方が、T代がいと三十分から一時間近くお話をされて、次の信者さんがお参りに来られたら帰る、という状況になっていました。

彼が放送センターから帰ると、

「今日も、一日ずっと座っていて、トイレに行く暇もなかったわ」

「先生、信者さんはね、何もない時はT代でいいのよ。でも何かあつたら、先生でないとダメという感じなの」

とよく言っていました。

彼は、放送センターに出た時は、朝と昼の二食で夜は食べなかつたのでした。お取次の座にいるT代が、彼の食事を作る負担をなくすためでした。

Y教会に来て三年ほどで、毎日のお参りの人数が二十人を超えようとしていたのです。毎月のお供えも四十万円を切ることはないようになっていました。彼がY教会を後継した頃は、お参りが日に二、三人、お供えが七万円程でしたから、彼からするとできすぎたおかげを頂いている。そう思う反面、この天地金乃神様なら、もつとおかげを頂いても、不思議ではないとも思うのでした。

彼自身を使うお金は、放送センターでの昼食代とたまに買う本や、二ヶ月に一回の散髪代だけでした。彼は個人のお金は持たないようにしていたのです。彼の個人名義の通帳には、三十万円程度が入れてあるだけでした。後は全て、Y教会名義の通帳に入れて、お金の管理をしていたのでした。

※楽しむポイントは、夫婦はお互いの在り方を認め尊重をすること。教会長は、個人的なお金

はなるべく持たないこと。

吉報は、十月下旬にやってきました。

T代が懐妊をしたのです。予定日は翌年の六月三十日でした。二人で頑張ってお願ひした甲斐があつたのです。そのあたりで、安産のおかげを受ければ、その年の十月にある教祖様の百年祭に十分にお参りが出来ます。彼が願つてきた三つの内の、二つが成就することになるので

す。  
本当に素晴らしい、またとはない天地金乃神様のおかげだと感激しながら、ご神前に額ずき、子どもを授けて頂いたお礼と、丈夫で育てやすい子どもを、無事に安産できることを願ひしたのでした。また、ご霊前に額ずいては、彼の母親の霊神様に、ご報告して喜んで貰ったので

す。  
年が明けて、K教団の教祖様の百年祭がある、昭和五十八年を迎えました。神様をお願いをしていけば、より一層に大きなおかげを頂ける年です。彼は放送センターの四年の任期を無事に終えて、三月末で退任をしました。所長には本当にお世話になった四年でした。

すでに教会の一日のお参りが、殆ど途切れることなく続くような状況となり、とても懐妊し



ているT代にこれ以上は留守番を頼めないと思ったのです。六月にT代が出産すれば、もう彼が勤めることは不可能でした。四年の任期は無事にご用をさせて頂き、任期終了をもって放送センターを辞められたのです。

※楽しむポイントは、神様をお願いしていれば、最高のタイミグで願いを成就させて頂けること。

四月一日は、Y教会では教祖様の毎月のお祭日です。

この日をスタート日として、彼は百日の日を切つて、色々な修行に取り組むことは心に決めていました。

彼は、M教会のおばあさん先生の教会で過ごした時に分かったことがありました。それは、教会で楽に食べていこうと思うと、生活が苦しく貧乏になる。食べることを考えずに、人の助かりの為に身代わりとなり、修行をさせて頂く場だと思うと、天地金乃神様が給料を出してくださる。必要な人もお金も差し向けてくださり、すべてがおかげになる場所。それがK教団の教会だと。

彼の当時の修行内容を述べると、

※ Y教会の開門前に四キロメートル離れた、親教会に自転車でお参りを百日。

※ Y教会を閉門してから親教会に二時間かけて歩いてお参りを百日。

※ 一日一食を百日。(朝ご飯だけで、後は飲み物だけ。昼と夕ご飯の時間も、お取次ぎの座に座るため)

※ 初代教会長の奥城に、閉門してからお参りを百日。

※ 神前拝詞をご神前で一日に百回奏上を百日。

※ 夫婦生活をしない百日(T代が産後の時)

※ 散髪以外に、自分にお金を使わない百日。

などでした。

天地金乃神様が、修行として認めてくださる修行とは、百日は続ける必要があると、彼は感じていました。彼の百日区切りの修行は、彼が緑内障で入院をしたことにより、一端途切れるまで続けられたのでした。彼のこれらの修行を遂行するには、T代の協力がなければ、成り立たなかったことは言うまでもありません。よくぞこの当時、何の文句も言わずに従ってくれたと、今更に彼は思うのでした。

※楽しむポイントは、教会はもちろん一般家庭でも生活の場で修行を楽しむ心でいること。

T代は、彼の昼の御用の妨げにならないように、彼の睡眠が十分にとれることを配慮して、夫婦の寝室ではなくて、和室で赤ん坊の息子と寝るように、気を使ってくれたことをありがたく感じました。彼は、家事や育児に殆どノータッチだったのです。

T代は、彼が常に、お取次の座に安心して座れるように、全力で家事育児のご用を務めてくれたのでした。彼はT代に、大切にされているといつも感じていたので、機会があれば、T代を後ろからハグして、

「いつもありがとう」

「T代がいて助かる」

「ご苦労さん、疲れてないか」

などの言葉を、耳元で囁くようには心掛けていました。

T代は、彼が午後八時に奥へ入ると、「お疲れ様です」と必ず言葉をかけてきました。その言葉で、今日も御用が無事に終わったなあと、彼は思ったのでした。

※楽しむポイントは、夫婦は日々の挨拶や、お互いの行いに感謝の言葉を交わすこと。

そんなT代に対して、彼が誇れることは、お金の心配をさせたことがない部分でしょうか。

例えば、この赤ん坊を育てている時期に、洗濯機がこわれたのです。彼は直ぐに洗濯機に、乾燥機が付いたものを買ったのです。

電子レンジや掃除機、冷蔵庫もそうです。そういうT代にとつての必需品は、壊れたら、T代の気にいった物を、金額を気にせずに、自由に選ばせて購入させていました。パン焼き機やホットプレートなどもありました。

「買いたい電化製品を、買いたい時に自由に買えることは、本当におかげを頂いているわね。ありがたいわぁ」

と何かを買う度に言っていたのです。ただし、テレビはT代が望まなかったもので、まだY教会にはなかったのです。そうすると、信者さんが、会社のゴルフ大会の景品でテレビが当たったのでと、お供えをしてくださることもありました。

※楽しむポイントは、生活の上で必要な物は、高くても買い求めてありがたく使うこと。

現代の夫婦が協力しあって、家事育児をする時代のイクメンには、彼は絶対になれないと思うのです。

T代は懐妊が判ってから、毎日お広前で、神前拝詞を百回唱えて

「丈夫で育てやすい可愛い子どもを授けてください」

と、天地金乃神様にお願いをしました。

彼は毎日お風呂で、T代が大きくなっていくお腹に向けて、お神酒を吹きかけて、

「良い宿命を持った、天地金乃神様のお役に立てる子どもを無事に安産させてください」と、天地金乃神様にお願いをしました。

実は、人が天地金乃神様からおかげを受ける、一番に大切な時期はここなのです。人は、生まれて来る時に、天地金乃神様と、証文（宿命）を交わしているのです。病気や災難に何時遭うかとか、寿命の長い短いとか、また何時良い事があるかを、定められて生まれてくるのです。その証文（宿命）の内容を良くするのは、生まれて来る子どもの両親が、天地金乃神様に、しっかりとお願いをする以外にないのです。生まれてから、その子どもの証文を書き換える事は、かなりのお願いの苦勞を要します。

T代は、妊娠中は食べ物の好みが変わり、それまで殆ど食べなかつた、バナナを毎日食べていました。

彼の生まれてきた息子の体は、ほぼバナナと牛乳で出来ている、そう言つてよいと思います。T代は、食べ物に関して、この時も食べたい時に、食べたい物を食べるスタンスを変えませんでした。

K教団の教祖様は、

『人は好きな物を、ありがたく食べれば良いのである。無理に嫌いな物を食べなくても良い。好きな物で元気になることは、神様のおかげである』

と、御教えくださっていますが、それを実践していたように見えました。T代は自分に関して、栄養のバランスとかは全く考えてはないのです。それでも元気でご用をしていました。

昭和五十八年七月一日、予定日より一日遅れて、息子が無事に生まれてきました。その日は、Y教会のお祭日でした。

彼は、Y教会のご用を優先して、T代が退院して里のA教会に戻った日に、午後八時に教会を閉門してから、初めて息子と対面しにA教会に行きました。彼はこの時、これで自分の子孫を残せたことを、改めて実感したのです。お祭日に生まれたことは、大変なおかげなのですが、当時の彼は、まだそのことに気が付いていませんでした。

※楽しんでポイントは、懐妊の時に、夫婦で神様をお願いをさせて頂き、生まれて来る子どもの最高のお役に立つこと。

Y教会は、その十月に、K教団のご本部で、お仕えされた教祖様の百年祭記念大祭に、六十

六人のお参りができたのでした。上は九十才に近い人から、下は八月二十日に生まれた赤ちゃんまでいました。もちろん彼も、彼の願い通りに家族でおかげを頂いたのです。本当にありがたいお参りでした。

T代は、出産と同時にあれほど食べていたバナナを、全く食べなくなったのです。

彼が「バナナは要らないのか」と聞くと、T代いわく、「一生分のバナナは食べたわ」と言  
って笑っていました。

安産で生まれてきた彼の息子は、夫婦のお願いした通り、丈夫で育てやすい子でした。病気を  
して、お医者さんに走る事は一度として無く、人見知りしない上に、泣くこともぐずること  
もあまりないので、誰にでも可愛いがられて、お参りされる方によく世話をしして頂き、遊んで  
貰う事が出来ました。彼らが夫婦で御用する上で、大変ありがたいおかげだったので。

願うべき時に、願うべき天地金乃神様に、願い方を知って願えたから、受けることができた  
おかげです。

彼がお願いした天地金乃神様は、すべての人の生き死にを決められ、人が持つて生まれる宿  
命を、定めておられる唯一の神様であったのです。この事実を、K教団の信者さんが、どれほ  
ど認識しておられるか。そしてどれほどお願いすることを、実意に実践しておられるか。

人の人生に於いて、願うべき時に、願うべき天地金乃神様に、願い方を知って願えることが、

どれほどの価値があるかを本当にわかっているなら・・・。自分の子どもや孫に、この天地金乃神様のことを、必ず言い伝えねばならないと考えることは、可愛い我が子を持った親として、当然のことだと、彼は思うのでした。

彼は、K教の教祖様の導きにより、天地金乃様との触れ合いの実践経験を経て、確かに確認してきたので、改めてここに書き残して、子孫に伝えたいと思っていたのでした。生まれてから、何かあつて苦労しても、天地金乃神様に不足は言えないのです。それは、人が願うべき時に願わなかつた結果だからです。

どんなに良いギターやピアノがあつても、引手が悪ければ、それなりの音色にしかなりません。最高の天地金乃神様であつても、願う方がいいかげんであれば、おかげもそれなりになつてしまうことは当然だと言えます。

※楽しむポイントは、神様にお願ひさせて頂くことが、どれほどありがたい結果を、後々に生み出していくかを知ること。

彼は幼い息子に病気の心配は皆無でしたが、息子の行動には、度々ハラハラドキドキさせられました。



例えば、彼の息子が三才になる前に彼の父親が、その当時に駅近くにあった、デパートの屋上の遊戯場に、遊びに連れて行ったことがありました。彼の父親が、トイレをする時に、孫にトイレの入口で待っているように言ったのです。ところが、トイレを終えて入口に行くと孫がいないのです。彼の父親が、慌ててそこらを探してもいません。すぐに店員に申し出て、館内放送で迷子の知らせをしましたが出てきません。教会にも、彼の父親から電話がありました。彼はT代に見に行くように言い、直ぐにご神前に額ずいて「どうか無事に戻ってきますように」と祈りました。

お取次ぎの座に戻り、「見つかった」という電話が鳴るのを待っていると、教会の入口の引き戸が開いて、「おとうさん、ただいま」と、無邪気に呼ぶ息子がいました。

慌てて彼は、息子に駆け寄り、

「ただいまじゃない、おじいちゃんはどうした？」

そう問うと、息子は何事もないように、

「どこかでないなくなった」

と答えました。彼は直ぐにデパートに連絡をして、息子が帰ったことを伝えました。彼の父親とT代が、暫くして戻って来て、事件は無事に一件落ち着いたのです。

息子から話を聞くと、おじいちゃんがおらんから、一人で帰ろうと思い、デパートの屋上か

ら一階に降りて、電車の高架下沿いをテクテクと歩いてきたようでした。T代と何回か歩いた道を覚えていたのです。普通に三才前くらいの子どもなら泣いて、「おじいちゃんがない」とかいうものだと思います。

泣けば周りの大人も気づくのですが、泣かずにしつかりと歩いているので、周りの大人も見過ごしたのです。息子本人が、迷子とは思っていないのですから、それも当然かもしれません。また、二才になるころには、網戸のサッシに突進して、サッシもろとも庭に落ちたことも二回ありました。でも二回とも怪我もせずにおかげを頂いたのです。こういう事では、親を驚かす息子ではありません。

※楽しむポイントは、子育てでは、親の目の届かないことも多いので、神様に日々お守り頂くようにお願いすること。

この少し前頃、彼のご神前で、天地金乃神様に向かう姿勢に、人の目には見えない変化がありました。

お取次の座で、信者さんのお願いを聞くと、ご神前に出て「○○のお願いを教祖様のお取次ぎで成就させてください」と、彼はそれまで祈っていたのです。しかし、ふとお参りをされる

方は、天地金乃神様の、すべて大切な我が子である、という思いが一層に明確になってきて、「天地金乃神様の、お子である〇〇様が、このようなお願いをされています。教祖様の手続きを持つて、本人にご無礼や信心の足らぬところがあつてもお許し頂き、何卒〇〇様の願いを成就させてください」

そう祈るようになりました。つまり彼は、お参りした方を〇〇と呼び捨てにせず、〇〇様と申し上げることで、天地金乃神様の子である人を、軽く見ないようにしたのです。

そして、お参りされる方の弁護士になつて、天地金乃神様に向かう立場になるようにしたのでした。それまでは、お参りされた方の信心を見て、

「こんな信心では、なんぼお願いしてもおかげにならないやろ」

という思いの時もあつたのです。そうすると、やはりおかげにならないのでした。

弁護士は、依頼した本人がどんなに悪い人でも、何とか良い所を引き出して、罪を軽くするのが仕事です。

お参りされた方には、教会長の役目として時には厳しく、天地の道理を伝える彼です。しかし、天地金乃神様に向かつては、お参りされた方の弁護士となり、何とか、お参りされた方の願いが叶うように、彼なりに骨を折るように努力をしたのです。

※楽しむポイントは、人を軽く見ると、神様からおかげが頂けないこと。

彼の天地金乃神様に向かう、心の姿勢が変わった時分に、信者さんに導かれて、ご神縁を頂いた方がありました。

その信者さんの姪で、K・Sさんという女性でした。

幼い三人の子どもさんがあり、ご主人が風邪から脳にウイルスが入り、死ぬか助かって、植物人間になる可能性が高いと、医師から伝えられた状態でした。

彼はこの時に、三人の子どもが不憫に思いました。K・Sさんが、

「先生、主人の命だけは助けてください」

と言われます。彼は即座に、

「それは、ダメです。この神様に助けて頂くなら、お役に立てる命でなければ。植物人間として命だけが助かって、返ってあなたたちの難儀になります」

そう言葉をかけました。そして、ご神前に額ずき、

「天地金乃神様、教祖様の手続きで、お願い申し上げます。ただいまK様に導かれて姪のK・S様がお参りをされました。今まで如何なるご無礼があってもお許しください。もし、K・S様ご主人の命を助けて頂けるなら、お役に立てる体にして助けてください。もしも、お役に立てることができないなら、痛み苦しみ無くお引き取りください」

そう心中で、お願いをしたのでした。ご祈念の後、

「お役に立てる命として、助けて頂けるおかげを頂きましょう。そうでないなら、神様に痛み苦しみなく引き取って頂きましょう」

と、お取次ぎの座に戻り、Sさんに伝えました。

彼はその後、何日間か徹夜に近いご祈念をしました。せめてもの思いでご祈念をしたのでした。その時に、

「天地金乃神様に一心に縋れば助かる」

そう思わせて頂いたので、お参りされたK・Sさんに、

「もし家に色々な神様に関する物があるなら、持つてきなさい。この天地金乃神様だけをお祀りして、天地金乃神様に一心に縋りなさい。S家族は、天地金乃神様に縋るしか助かりません。

子孫までも、天地金乃神様を放してはいけません」

このようにお伝えしたのです。

直ぐに、家にあつた神社仏閣のお守り札などを、教会に持つて来られました。

彼はご神前に出て、

「K・S様が天地金乃神様だけに、縋る心になりました。どうかこのS家族が立ち行きますように、K・S様のご主人がお役に立てる身体で、助かるようにお願いいたします。後々の子孫までも、天地金乃神様のご恩を伝えて、信心に導きますから」

そのように彼は、お願いをしたのでした。

ありがたいことに、Sさんのご主人は、この時を境にして、回復に向かわれたのでした。あ  
る後遺症が少し残りりましたが、お役に立てる体で、K・Sさんのご主人は、無事に退院のおか  
げを受けることができたのです。

※楽しむポイントは、すべての神様を敬うことは大切ですが、お願いする神様は一つに決める  
こと。

おかげを頂いたこともあり、K・Sさんは、家族でその後お参りをされるようになりました。

その後、このK・Sさんご自身も、心臓や原田病という病気を患うのですが、全快のおかげ  
を受けられて七十才を超えても現役で、介護ヘルパーとして、元気でお役に立っておられます。

K・Sさんのご主人は、建築会社に勤めていたのですが、この病気がもとで会社を辞めるこ  
とになり、自分でS工務店を始められたのでした。

しかし最初から計画して始めたのではなく、しかたなく始めたようなことですから、経営が順  
調にはいきません。資金繰りがすぐに苦しくなって、そのお願いにこられました。小切手が期  
日までに落とせなければ、S工務店は倒産という状態でした。

公的な資金の借り入れを頼んでいるので、一時的に何とか小切手が落とせるお金があるのでした。彼は、天地金乃神様にお願いをして、そのお金を用立てしたのです。しかし何とか、その危機は乗り切つても、綱渡りみたいな経営状態が続いていました。

彼の教会も、土地購入のためにK教団から借りた五百万円を返している時期でした。彼は、教内のある本を読んで、一つの願いを立てていたのです。それは、信心していて借金をしたら、三十年ローンなら十年で返す、十年ローンなら三年で返すのが、天地金乃神様のおかけを頂くことだ、という内容が、その本には書かれていました。彼は、これを読んで、K教団から借りた五百万円を、昭和五十八年十二月までに、K教団に全額返せることを、天地金乃神様にお願いをしていたのです。その先生が三年なら、自分は二年でおかけを頂くと思っていたのです。教祖様の百年祭のお年柄でもありますから、息子を授かり、借金も返せたらありがたいことだと思つて、彼は天地金乃様にお願ひしていました。

その時期にS工務店が、どうしても百万円がいる局面がきたのです。彼の手元に、K教団に返すために、用意していたお金があったのです。

彼は、ここで百万円をS工務店に貸しても、おそらく返せないと思つたので、S工務店に負担の掛からない、お金の渡しかたを考えました。彼は考えた末に、何時になるかわからないが、教会を新築する際の、設計図を書いてもらうことにしたのでした。

その設計代として百万円を、先にS工務店に支払うことにしたのです。

これで彼は、その年の間にK教団への借金を、全額返済することは無理だと覚悟をしました。その代わりにS工務店は、これにより何とか立ち行くことができたのでした。なぜ彼が、ここまでS工務店に肩入れをしたのかと言うと、彼もまだ若かったのです。K教の御教えに基づいた経営をする会社を、実現したいという思いがあったのです。それはY教会で、

『天地金乃神様を社長として、実意丁寧な仕事をして、真つ当な利益を得ながら、世のお役に立つ会社』

そういう経営理念を持った会社を育てたかったのです。

具体的に一つ言うと、京都に本社がある世界企業の創設者の稲盛和夫氏が、見積書を相手に出す時、常に精一杯の値引きした金額を提示することで、信用を得ていかれたようなあり方を求めたのでした。

彼は将来、S工務店が少しずつ大きくなり、何代も続いていく確かな経営の会社として、社会に残したかったのでした。

※楽しむポイントは、神様を社長と思ひ、天地の道理に叶う経営をすれば、会社は代勝りに大きくなること。



この年の十二月の中旬に、ある信者さんがお参りをされ、お取次ぎの座に来られて、

「先生、土地購入の借金はまだ残っていますか」

と尋ねられました。

「なぜ、そんなことを聞かれるのですか」

と問うと、

「実は退職したので退職金を頂きました、それで今までお供えができなかつたので、ぜひおかげを頂きたいのです」

と答えられました。

「そうですか、それはありがたいですね。お供えはあなたがありがたい思いで、神様にさせて頂こうと思うだけされたら良いです」

と伝えました。この信者さんのお供えにより、彼の願い通りに昭和五十八年十二月末に、K教団に借りたお金の全額を返せたのです。彼が我が願いよりも、S工務店の立ち行きを優先させたことに対して、その心意気よしというように、天地金乃神様は、鮮やかに働きくださり、彼の願いも見事に叶えてくださったのです。

※楽しむポイントは、人を助けて我が身が立ち行く、神様のおかげの世界があること。

このようにして、素晴らしい天地金乃神様の、お繰り合わせを頂いた昭和五十八年が終わり、新年を迎えました。Y教会の開教六十年祭の記念の年に当たり、五月五日の子どもの日に、その祭典をお仕えることになっていました。記念祭をお仕えるには、それなりの準備と費用がいるのです。

しかし、昨年末にK教団への借り入れたお金を、全額返したので、Y教会は、財的に二度目のスツカラカンになっていました。ですから四月半ばまでに、その費用を用意しなければと思つて、天地金乃神様に元旦にお願いをしたのです。

午後二時から元日祭をお仕えして、お取次の座に着きました。順番にお取次する中で、お医者さんの、信徒総代のNさんの番になりました。

「明けましておめでとうございます」

と新年のご挨拶を終えると、いきなりNさんが、

「先生、今年はY教会の記念祭の年ですね。記念祭の費用は、私がおかげを頂きますから盛大にしてください。教会が後継されて、このようになったのが嬉しいのです」

満面の笑みで言われます。

彼はびつくりしました。朝にお願いしたら、もう費用のおかげを頂いたのです。あまりにも早いおかげに、啞然とするばかりの彼でした。ありがたく思つて早速、記念大祭の祭典後の食

事は、Y教会から徒歩で行ける、この地域では由緒ある料亭であることを決めました。記念祭に出す冊子に、S工務店に頼んだ教会の新築図面を載せて、次の記念祭までに、老朽化して雨漏りのするお広前の新築を発願することも決めました。

先生方も、ご縁ある先生方に案内状を出させて頂き、出来るだけ盛大になるようにと、心がけて準備をしていきました。講師は、お世話になった放送センター所長に、お頼みして引き受けて頂いたのです。

このように着々と記念祭に向けた準備が進む中で、四月七日の昼に、信徒総代のNさんの家族から、電話が掛かってきました。

「教会の先生ですね、午前中の診察を終えて、お昼を食べた父親が倒れて、いま救急車で病院に運ばれました。神様にお願いしてください」  
切羽詰まった声でした。

結局、信徒総代のNさんは、三日後の四月十日に天地金乃神様の元に帰られたのでした。それはK教団のご本部のお祭日でした。天地金乃様から、安心のおかげを頂かれたのです。（お祭日は、おかげの成就日で、安心できる日であることが後々わかるのですが）

Nさんは、自分が戦時中に命を助けて頂き、子孫を残せることができているのは、K教団の天地金乃神様のおかげであると言われていて、K教に改式しておられました。Nさんは地元の

名士であり、現役の医師で自衛隊の関係の役職にも就いておられたので、千人を超える会葬者があつたことは、Nさんの生き方に相応しいお葬儀でした。もちろんK教の関係の方も、たくさん会葬に来られていました。

こうしていかにもあっけなく、天地金乃神様の元に行かれたNさんですが、考えてみれば、最後まで医師としてお役に立たれ、長患いすることもなく、この世を去られたのですから、大きなおかげを頂いたとも言えます。ただこの後、信徒総代のNさんの思いが、子孫には伝わらず、K教に改式されたNさんの願いが、無になったことは残念なことでした。それはNさんの息子さんが、再び仏式にされたからです。

彼はこの後、四月十日には、いつもNさんの霊神様に、お詫びをするのでした。この成り行きにより、突然に記念祭の費用も、すべて白紙になってみて、彼はいつの間にか、天地金乃神様より信徒総代のNさんを、頼りにしていたかもしれない、自分に気づかされたのでした。

※楽しむポイントは、頼りになる人がおられても、人を当てにすることなく、心は神様に向けておすが継りすること。

改めて天地金乃神様にお詫びをして、無事にありがたい開教六十年記念大祭を、信者さんと

共に喜びの心で、仕えられるようにお願いをしたのでした。

何とか費用も整い、迎えた五月五日は晴天でした。

ここでハプニングが起きました。講師の放送センター所長から朝に電話があり、

「母親が早朝に亡くなったので、お話だけしたら直ぐに帰る」

との連絡がありました。

「そういう事態でしたら、無理をなさらずに」とお答えすると「御用なので、お話はさせて頂きます」

とお言葉を頂いたので、お話をして頂けるだけでもありがたいと思い、改めてお願いしたのでした。当時としての、精一杯の祭典を、無事にお仕えさせて頂くことが出来て、初代教会長の霊神様や、故人となった信徒総代のNさんの霊神様に、喜んで頂けたのではないかと、彼は思いました。

祭典後の料亭での食事の時に、ある先輩の先生が、彼に声をかけてきました。

「さつきの先生の挨拶の中で、土地購入のK教団からの借金も昨年に戻済できたので、次の記念祭までに老朽化したお広前を新築すると言われたが、教会新築なんて十年では中々できないで」

と真顔で言われたのです。彼はその先輩の先生をまじまじと見ながら、

「できるかできないかは、わかりませんが、願いを立てなければ神様のおかげは頂けませんから、願いを表明しただけです」

教会は天地金乃神様が、人の助かる場所として存在するのであれば、その先生の器に応じた建物は、天地金乃神様が整えてくださるのが、当たり前のことだと、彼は思っていたのです。自分のためにはお金は使わずに、外食などの贅沢もせずに生活することを心がけていました。お広前新築の費用の集め方は、土地購入の時と同じで献納箱をお広前に置いて、信者さんによって入れて頂くようにしたのでした。

※楽しむポイントは、あれこれと思案せずに、まず神様に願いを立てること。

実際に新築工事に取り掛かったのは、平成五年三月二十一日の、Y教会の春季霊祭が終わってからです。

建築基準法の関係で、お広前の部分と教職舎の部分に分けて建てることになりました。従って記念祭で出した設計図ではなく、彼自身が間取りを考えて元になる図面を書きました。それをS工務店のSさんに渡して、正式な図面にして貰いました。

一時は命が危ない、植物人間になるといわれたSさんですが、天地金乃神様のお役に立てる

おかげを頂かれたのです。

天地金乃神様に、お願いする時に肝心なことの一つに、お願いは出来るだけ、具体的にということがあります。天地金乃神様も、その方が願いを叶え易いのと、自身もしつかりとしたイメージを持てるメリットがあり、おのずとお願いも強くなるのです。

※楽しむポイントは、神様へのお願いは、出来るだけ早く具体的に願うこと。

Y教会の新築工事の中でも、お繰り合わせをたくさんに頂きました。当初エアコンは、予算の関係で配線だけの予定でしたが、電気工事を請け負った信者さんが

「私がエアコンをお供えます」

と、言われて三台の業務用エアコンを付けてくださったのです。因みに、三十年近く経った今でも、そのエアコンは現役で動いています。真心でお供えされたものはありがたいです。

このようにして、九月の秋季霊祭までに、無事に竣工するおかげを頂き、同時に全ての工事を、S工務店に支払うことができたのでした。

やはり天地金乃神様は、必要な時に必要なお金は、ちゃんと用意して下さることを確認したのでした。それは、即ち天地金乃神様が、建ててくださった建物であることの証明だと、彼は

感じていました。このお広前が新築されて直ぐに、結果として、彼の生涯で一度だけであった結婚式のご用を仕えさせて頂く機会がありました。

新しいお広前でお役に立てて、ありがたいことだったと、後々彼は思うのでした。

※楽しむポイントは、教会の建物は、教会長の分相応の物であれば、借入なしで神様が立ててくださること。

昭和五十九年五月五日から、この平成六年五月五日までの十年は、彼の気力体力が、最も充実していた時期であったといえました。

彼が三つの大きな出来事を、経験した時でもありません。前記で書いたお広前の新築。彼自身の失明の危機。彼の信心の導き手であった、彼のおばあちゃんの死。の三つです。

彼の失明の危機とは、彼は昭和六十三年の三月初めごろから左目に少し違和感を覚え、頭の後頭部に時折、鈍痛があるようになりました。

そんな中で、三月二十一日の春季霊祭の準備をしている時に、台所の水道だけが水が出ないようになりました。原因を調べている間に、十分程で自然に出るようになり、ほっとしている



と、今度は全ての電気が切れて停電のようになったのです。ブレーカーにも異常は無く困惑している、ほどなく電気もついたのです。

彼は「お祭日に不思議なことがあるなあ」思いましたが、それが天地金乃神様からのメッセージであったことが、三月二十八日に眼科を受診したことにより、彼は初めてわかるのでした。

眼科を訪れて、色々な検査を受けた後で医師から、

「左目の眼圧が非常に高く緑内障ですね。視野検査で視野の欠けている所もあるから、このままでは失明の危険があります。いずれ正常な右目にも、影響が出てくると思います。薬を出しますから飲んでください。これから毎日眼圧を測りにきてください」

この後、更に医師から緑内障について説明がありました。緑内障とは、眼球の中で行われている水溶液の循環が上手く流れず、それにより眼球の眼圧が高くなって、視神経を圧迫することで、視神経が委縮していき、やがて失明に繋がる病気ということでした。

治療法としては、体内の水分を減らすために、水分をたくさん飲まないようにし、薬で体内の水分を出して、眼圧を下げることでした。

この医師の説明を聞いて、ようやく春季霊祭の不思議な事柄が、天地金乃神様のお知らせであったことに、彼は気づいたのでした。水道が出なかつたのは、水が上手く流れていないこと、電気が消えたのは失明することの、お知らせだったのだと。

それから毎日眼圧を測りに、病院に通いましたが、出された薬を飲んでも、彼の高い眼圧は、あまり下がりませんでした。

四月二日に医師が

「眼圧が下がりませんね。このままでは失明する可能性があるのです、手遅れにならないうちに、手術をされることをお勧めします」

彼はその場で、彼の心の中の神に祈りました。そして医師の言葉に従うことにしたのです。医師から直ぐに、大阪市内にあるS市民病院を紹介して頂き、六日に初診察を受けることになりました。

教会に帰り、T代にも病状の成り行きを説明して、入院手術になるかもしれないと伝えました。S市民病院で検査を受けた結果、医師から

「やはり眼圧がかなり高いので、早急に入院手術をされた方がいいですね。一番早くてこちらの都合では十五日入院、十九日に手術となります」

「そうですか。手術をするとしたら、どの位の入院になりますか。仕事の都合もあるので」

「そうですね。まあ、緑内障なので手術後のケアも含めて、一ヶ月ほどと考えておいてください」

「えっ、一ヶ月もですか」

「ええ、緑内障は難しい手術ですから、一回で終わるとは限りません。ですから一か月の入院は、最低でもと考えていてください」

彼にとつてこの告げられた入院期間は、全くの想定外のものでした。

彼は目の手術だから、二週間程度を考えていたのでした。

四、五月は教会にとつて大祭を仕える時期で、十九日が手術であれば、翌日の二十日に毎年恒例で仕えられる、親教会の大祭にお参りも御用も無理になる。彼自身の Y 教会の五月五日の大祭も御用ができなくなる。これはえらいことだと思い、

「先生、すみませんが五月五日以降に手術をしていただけませんか」

彼のこの言葉に医師はすぐ、

「そんな呑気な状態ではないですよ。なるべく早くしないと視力や視野が悪くなります。緑内障の手術は病状の進行を止めるだけで、視力や視野を回復させるものではないのです。いったん失った視力や視野は戻りません」

ここに至つては、彼も手術を受け入れるしか、仕方ありませんでした。

「わかりました。それでは手術をよろしく願ひします」

医師は頷いてから、

「それでは八日に、手術前の総合検査をしますので、必ず来院してください。ところで今日こ

の後に、レーザーを当てる手術を試してみよう。六十才以上の人には、割と効果があるのですが、あなたのように若い人には、ほとんど効果が得られないことが多いのですが、万一でも効果があれば幸いと、思つて受けてみてください」

医師の勧めで、彼はこの後、目にレーザー手術を受けたのでした。内容はただレーザーに向かつて、目を開いているだけのもので、痛くも痒くもなく、簡単なことで時間も短時間で済みました。しかし、会計の時に驚きました。このレーザー手術代が三万円を超えていたからです。初めに費用を聞いていれば断つていたところです。（笑い）

手術日が決まったことをT代に伝え、親教会にもお取次ぎを頂き、大祭の参拝と御用ができないことをお詫びしました。また当時、大祭の行き来があつた教会にも連絡を入れて、御用ができないことをお伝えしました。

それから、八日の手術前の検査をして、後は彼ができる大祭の準備を精一杯にして、T代に御用のバトンを渡せるように、段取りを進めたのでした。そんな中で、十二日にS市民病院から電話があり、

「肝臓について、危険なデータが出ているので、再検査したいので、明日来院してください」と連絡がありました。

「すみませんが、入院までに全力で仕事の整理をしているので、行ける時間がありません。十

五日に入院してから検査してください」

と彼は断ったのでした。

これより一年ほど前に、彼のおばあちゃんが教会で同居をするようになっていたので、T代と彼のおばあちゃんに後を頼んで、予定通り十五日に入院をしました。

当日の診察で、

「やはり眼圧が高いので、予定通り手術をします。レーザー手術の効果は、残念ですがでていませんね。それから連絡したように、ウイルス性肝炎の疑いがでています。今日、再検査しても、手術日までに結果が出ませんから、他の人に感染しないように、手術の順番を最後の五人目にします。病室からあまり出ないようにしてください」

そう医師から指示を受けました。

どうなっているのかなあと当惑しましたが、実はこれが天地金乃神様からの深いお計らいだったのです。

入院まで病状に囚われずに、精一杯にご用をしたので、看護師さんが

「大丈夫ですか。しんどいですか」

と心配してくださるほど、時間があればひたすら、彼は睡眠を取りました。

十八日はT代が彼に代わり、月例霊祭を仕えてくれるので、ベッドから遙拝しておかげを受

けました。

体の疲れが取れてくると、絶対に無理なことなのに、二十日の親教会の大祭に、何故かお参りをしたいと思うようになったのです。親教会に対して、普段何のお役にも立てていないのに、その上に、年に二回しかない大祭の、参拝と御用まで出来ない自分の不甲斐なさを、天地金乃神様にひたすらお詫びをしていました。

手術の当日、T代が午後二時頃に、彼の病室に来てくれました。

手術の準備は午後三時から予定でした。

午前八時以降は絶食となりました。彼は朝からずっとベッドで、彼の前に手術される方の、手術の成功をお願いしていました。

手術用の服に着替え、移動用のベッドに乗り、点滴が始まりました。目薬も十分毎にさして、何時でも手術が出来るようにスタンバイを終えていました。彼は主治医が最高の手術ができるようにと、天地金乃神様に、ずっとお願いをして待っていたのです。

ところが一向に手術室から迎えが来ず、午後四時半になってもう一度、看護師が検温にやってきました。実は午後二時の検温の時に、三十七度あったのです。測ると三十七度三分でした。

「少し微熱がありますね」

看護師が手術室に連絡したようで、若い医師が病室に来て、脈拍と顔色をみて

「若いから大丈夫、もうすぐ迎えにきますから」

そう判断して手術室に戻られました。

彼はよいよいだなあと、心の中で、今手術をされている方の立ち行きを、天地金乃神様にお願いました。

ところが、暫くして看護師が来て済まなそうに、

「手術の準備をしていたのですが、微熱がでてきたこともあるし、今日の手術は中止になりました」

その言葉を聞いた彼は、手術が流れて残念というより、これはおかげを頂いた、親教会にお参りができると、即座に思ったのでした。四人部屋の同室の方々が、手術の中止を聞かれて彼に、

「兄ちゃん気の毒やなあ、点滴もして長い間待ったのに」

と声をかけてこられたのですが、彼の心は、ありがたい気持ちで一杯でした。

午後五時ごろ、主治医が病室に來られて、

「微熱もあつたようだし、肝臓の検査の結果も気になるので、今日は手術を中止しました。一週間後に改めて手術をさせて頂きます」

そう済まなそうな顔で言われるので、彼はすぐに、

「わかりました。手術が流れたのでお願いがあるのです。実は明日、どうしても大事な仕事があつたのです。今から外泊許可を頂いて、二十二日の午前中に戻りたいのです。どうかよろしくお願いします」

言葉を返しました。

「手術前ですから無理をしないでください。なるべく安静にした方がいいですよ。微熱があつたようですから、もう一度検温をして、平熱なら許可をしましょう」と、医師が言ってくれました。

彼はどうか平熱でありますように、と心の中の神にお願いしながら、早速看護師の詰所に走りました。

検温すると、三十六度九分でぎりぎり平熱でセーフでした。天地金乃神様のおかげです。これからバタバタと帰る準備をして急いで、T代と教会に戻ったのでした。この時バタバタしていたので、看護師が眼圧を下げる薬を、彼に渡し忘れたのでした。

これがまた、天地金乃神様のおかげなのです。Y教会から直ぐに親教会に電話して、手術が流れて教会に帰れたので、明日の大祭に、参拝と御用ができることを伝えました

親教会の先生も、ビックリしておられましたが無理のないようにと、無役で祭典の御用の、お役に立たせて頂くことになりました。



信者さんからも何人か晩に、手術の結果を問い合わせる電話がありました。彼が出たので、みんなをビックリさせたのでした。

こうして親教会の大祭のおかげを頂き、二十一日のY教会の月例祭もお仕えして、二十二日にS市民病院に戻って、彼は診察を受けたのです。

そして医師から、信じられない言葉を聞くことになったのでした。

「今日のあなたの眼圧は高めですが、正常値の範囲ですね」  
いかにも腑に落ちない、と言う感じで言われます。

「それと、肝臓の再検査は大丈夫でした」

医師は付け加えて言われました。

「えつ、正常値になつていゝなら、もう手術の必要はないですね」

彼が思わず喜びの声をあげると、

「いや、薬を飲んでいて、正常値ではダメなんです。あなたが飲んでゐる薬は、とても強い薬なので、長くは服用ができません。だからやはり手術は必要です」

医師は、彼を諫めるように言うので、

「先生、実は外泊の間は、薬を貰い忘れていたので飲んでいないのです」

彼は言葉を出しながら、完璧な天地金乃神様のお働きを感じていました。これは天地金乃神

様が、親教会の大祭のお徳で、目の治療をしてくださったと確信したのでした。

「無茶をしてはいけませんよ。あなたの左目は、言わばひん死状態なのですから、でも本当に薬を飲んでいないのですか？」

「はいそうです、先生すみませんが、目の眼圧がいいのなら、五月五日にまた大事な仕事があるので、手術をするにしても連休明けにして貰えませんか」

暫く医師は考えておられました、

「それでは、月曜日まで様子を見て決めましょう。状態が悪ければ、予定通りに二十六日に手術をします。薬は必ず飲んでください」

「ありがとうございます。無理を言いますが、よろしくお願いします」

彼は心で（よっしゃー）と叫んでいました。

医師の手術は受けずに、天地金乃神様に、このまま治して頂く決心をしていました。

その方が、彼には安心なのです。K教の教えに、

『神が治した病は、神様を放さぬ限り二度と同じ病を患うことはない』

という意味の教えがあるのです。実は、緑内障は、再発がしやすい病気だと言われているのです。ですから一度手術をしても、また手術をしなければいけないことも多いのです。

ところが、天地金乃神様に直接に治して頂くと、再発の心配はないのです。彼は、そのお

げの事実を、既に喘息で経験しているのです。

それから二十五日まで眼圧は正常値できました。医師が、

「取り敢えず手術を見送ります。今日から少しずつ薬の量を減らしていきます。それで眼圧が上がるようならやはり手術をします」

「ありがとうございます」

医師に答えながら、彼はこれで、Y教会の大祭の御用ができること、天地金乃神様にお礼を申したのでした。

四月二十九日には外出許可をもらい、大祭の交流がある教会に、参拝して御用のおかげを頂くことができました。

続いて一日の朝からY教会に戻り、Y教会の一日の月例祭と、続いて二日と三日の関係教会の大祭の参拝の御用を終えて、その夕方に、S市民病院へ戻ったのでした。

看護師さんからは、

「あなたのような、外出や外泊が多い人は初めてだ」

と呆れられましたがお願ひしてこのスタイルを続けました。

四日は病院で休息して、五日の昼にY教会に着くと、T代の頑張りと言者さんの真心のお手伝いで、いつもより早くお祭りの準備が整っていました。いつもと変わりなくご大祭で、彼が

祭詞も奏上させて頂き、無事に仕えることができましたのです。

先生方や信者さんとの食事も賑やかにさせて頂き、六日に大祭の後かたづけを済ませて、S市民病院に戻りました。その時も眼圧は正常値でした。診察した医師から、

「具合がいいですね。明日からもっと薬を少なくして様子をみましょう」

医師の言葉に、益々天地金乃神様のお働きを実感して、このまま手術をせずに、無事に退院ができることを、彼はベッドの上で祈りました。

七日の午後から外泊をして、八日にK教団のご本部の岡山に、Y教会のご大祭が無事に仕えられたお礼の参拝を、無事にさせて頂くことができました。

翌日の九日に、関係教会の大祭に参拝してから、夕方にS市民病院に帰りました。

十日の診察でも眼圧は正常値だったので、

「ずっと正常値ですから、十二日に退院をさせていただきませんか」

彼は医師に尋ねてみました。

「もう少し待ってください。薬が無くなつても眼圧がこのまま落ち着けばいいですが、Kさんの場合はまた上がる可能性があると思います。明日から薬を無にして十九日まで様子をみましょう」

医師がそう答えてくれました。これで退院の目途がたったのでした。

「それでは済みませんが、入院の形は残しておいて、家から毎日診察に来る事にしていただけませんか」

こうすると外来で診察に来るより、早く診察をして頂けるのでした。

「それでは、そうしましょう」

十日から十九日まで外泊許可を頂き、教会に戻りました。実に目まぐるしい毎日でした。

十一日、T代の里の大祭に参拝。十四日と十五日は大祭の交流がある教会に参拝をさせて頂きました。

十八日は病院に行かずに、Y教会の月例霊祭を仕え、十九日に診察に行きました。

診察の結果、医師から、

「Tさん、薬を無くしたら眼圧が上がると思っていました。反対に正常値の高めの範囲から少しずつ下がりましたね。今の状態では手術をする必要はないので、一応退院をして頂いて結構です。しかし、また上がる可能性もあるので、元の地元の眼科で、眼圧を定期的に計るようにしてください」

医師からこのようなアドバイスを受けて、ついに手術をせずに無事に退院ができたのです。その足で、大祭の交流がある教会に参拝をして、全ての関わりある教会に、差し支えなく参拝もさせて頂くことができたのでした。

ご大祭の時期に、思わぬ病気で入院という非常事態の中で、奇跡的な天地金乃神様のお繰り合わせを頂き、T代や信者さんには心配をかけたりましたが、立ち行くことができたのでした。

彼も最初は正直、何故このご大祭に入る時期に、天地金乃神様は、何故この厄介な病気を差し向けられたのだろうかと思いました。

しかし、振り返って結果を見れば、ご大祭時期だったからこそ、親教会のご大祭の参拝に一心になれ、

『親教会のご大祭に参拝できれば、失明してもおかげだ』とさえ思える心持ちに、一瞬でもなつたことは、彼にも不思議でした。

またこの時期だったからこそ、Y教会のご大祭の御用を務めたいがために、手術の延期を医師に申し出ることができたのです。そうでなければ、手術が延期された一週間後に、やはり手術を受けることになっていたかも知れません。

天地金乃神様が、おかげを受けさすために、彼がそういう心の状態になれる時期に、病気をさせてくださった、としか言いようがないと感じました。

お祭日はおかげの成就日である神徳を受けて、天地金乃神様に、病気を治して頂けたのです。天地金乃神様から、春季霊祭の折に、病状のお知らせを頂いていたことに気づき、彼なりに納得した上で、病気に向かうことができたことも、ありがたいことでした。

手術することを余儀なくされる中で、何故か手術前の検査で肝臓が引っかかり、手術を受ける順番が、一番目から最後に回されることになったのです。当日に、四番目の人の手術が長引く事態が起きて、その時に合わせたようなタイミングで、彼に微熱がでたことで手術が流れたのです。しかもその後、僅か数十分で平熱になり、外泊許可が出るようになったのでした。

天地金乃神様は、彼の手術が回避できるように、様々な手を打ちながら、最後は彼の心が、天地金乃神様のお祭りに対して、どう向き会うかを見定めておられたのです。そして彼の、『例え失明をしても親教会の大祭にお参りしたい』

と思つた一瞬の心を、天地金乃神様が良しとされて、直々に彼の目を治療されたのでした。失明したらどうしようと狼狽していたら、天地金乃神様が直接に治してくださいるおかげを、受けることが難しかっただろうと、彼は思つたのでした。

#### K教のみ教えに

『みな死ぬのが怖いと思うから死ぬのである。死んでもままよと思つて、神に身を任せてみよ、ない命でも神が助けてやる』  
とあります。正しくこれです。

同室の患者さんに、手術が流れてお気の毒と言われた彼ですが、手術をせずに良くなって、退院するとなつたことで、彼がK教の先生をしていることを知つた方から、

「大した神様ですね。私も御利益を頂きたいですわ」

真顔で言われたので、

「いつでもお参りしてください」

そう答えましたが、残念ながらお参りには来られませんでした。

※楽しむポイントは、神様はおかげを受けやすい時期に、病気を差し向けてられておられるので、お祭日を大切にして、心配を放して一心にお願いをすること。

これ以降、彼は一層に、お祭日や祭典を大切にすることに力を入れ、信者さんにもお祭日を大切に思い、お礼のお参りをすれば、お祭日が願いの成就日になると、教導していくようになるのでした。

その例として、仕事をしている人でも、自分の趣味やレジャーなどの遊びでは、有給休暇を取る人なら、ご大祭にも有給休暇を取って参拝すれば、後々の大きなおかげを受けることに繋がるのです。

つまり、天地金乃神様が好きであり、お参りが趣味であれば自然に、おかげを受けることができると言えます。



彼は、この病気の体験を通して、天地金乃神様との関係を、いつそうにご用生活の中で、楽しむようになっていったのでした。

彼は修行においては、開教七十年祭に向けて信者さんと共に、千日修行に取り組んだのでした。彼は信者さんの身代わりのお参りとして、平成三年八月九日から平成六年五月四日までの千日間、親教会まで参拝をしたのです。

朝の四時にY教会を出て、自転車に乗ってお参りをして、門の外からご祈念をさせて頂き、Y教会の開門前の五時までに戻る参拝修行をしたのです。

ある先輩の徳者の言葉に、

「お参りは仕事に差し支えの無い時間に参るのが、神様の喜ばれるお参りである。仕事の時間中に参ることは、仕事を疎かにすることになる」

とあったので、彼はY教会でお取次ぎの座にいる時間を避けて、早朝にお参りをしたのでした。

この時のお参りに、希望した信者さんに各自で、生年月日・氏名・生まれた干支を書いて頂いた『人形』を、持参していました。

これにより、『人形』を出された信者さんも、お参りされたことになるように、天地金乃様にお願いをすることで、彼は信者さんの代参も兼ねてお参りをしたのです。

その『人形』は、平成六年五月五日の開教七十年祭後に、参拝された方には、ご本人にお返しをしたのでした。その『人形』を包んだ紙の表には、T代が達筆でこう書いていました。

【平成六年五月五日

健康長命祈願

千日身代わり修行成就

無常の風は時を嫌わぬというが、この道は

その無常の風に時を嫌わせてやる

というおかげを受ける氏子】

と書いてもらいました。

彼の、千日参拝身代わり修行が成就したあかつきには、その信者さんが命が危ないことがあれば、一度だけは助けて頂けるように、彼は教祖様の手続きで、天地金乃様にお願ひして、約束を取り付けていたのです。

彼は、天地金乃様には厚かましく、人のためにはお願ひをしていくのでした。いや、自分のことにも、天地金乃様には厚かましくお願ひをするのですが、人のことはそれ以上にお願ひをするのです。

この千日修行を始めてから、彼は目の眼圧を、定期的に計りに行かなくなりました。何故な

ら入院することがあれば、千日修行ができなくなるからです。千日修行の成就を願い信じて、天地金乃神様にお任せをしたのでした。彼はこの千日修行の後、更にお礼の参拝を千日続けました。

その約七年間で、息子が歯医者に掛かりましたが、それ以外は、彼もT代も、病院のお世話になることなく過ごせました。これも、天地金乃神様からの、彼の参拝修行に対するお返しの大きなプレゼントだったと思うのです。

信者さんにも、同じように百日百日で区切り、参拝された方には、K教の御教えを一つコピーした紙をお渡しすることになりました。そうして、彼は、百の御教えを、信者さんに集めて頂くことで、参拝の励みになるようにと考えていたのです。百の違う御教えを集めた方には、お神酒をお下げしたのでした。彼はその当時、信者さんが少しでも、参拝を楽しめることを思っていたのです。

余談ですが、彼がこの参拝修行を実行している間に、警察官から呼び止められて、職務質問をされたことが二回、自転車のパンクが二回、暴走族に並走されたことが一回ありました。しかし何れも差し支えなく、Y教会の午前五時の開門には、間に合うように帰れるおかげを、彼は頂くことができたのでした。

※楽しむポイントは、修行は自分のためではなく、人の助かりのためです。

彼とT代と息子の三人家族の生活が、無事に順調に続く中に、息子が幼稚園に行きだした昭和六十二年の秋に、彼のおばちゃん（彼の父親の姉）に、Y教会に来てもらい同居をすることになったのです。そこから、平成四年十月二十二日に、彼のおばあちゃんが八十四才で天地金乃神様の元に帰るまで、四人での生活がスタートしたのです。

この五年間に、彼が幼い時に彼のおばあちゃんが、天地金乃神様に向かう姿勢に、彼が大きな影響を受けたように、彼の息子もまた彼のおばあちゃんから、大きな影響を受けることになったのでした。彼のおばあちゃんが、Y教会に来て直ぐに、

「これから、お祭日の夕食は孫（彼の息子）の好きなものにしたって欲しい。お金は自分が出すから」

そう申し出があったので、それ以来お祭日の夕食は、彼の息子が、その時に食べたい物を、T代が用意することになりました。

ハンバーガーやピザ、お寿司や中華料理屋の出前などが、お祭日の夕食として出されて、彼の息子は、天地金乃神様教祖様や霊神様のお祭日を、自然に楽しむようになったのです。

※楽しむポイントは、子どもにとって神様がありがたくなり、お祭日が楽しみになる工夫をすること。

本当に元気で、頭も冴えていた彼のおばあちゃんですが、流石にY教会で生活をする中で、八十代を迎えるころから、足腰が弱り押し車を押して歩くようになりました。その中でも、岡山にあるご本部への参拝は、続けていたのですが、段々と電車で参拝することが、難しい状態になってきました。

彼が車の運転をしていれば、車で連れて行くのですが、緑内障により、左目の視野が欠け視力が落ちたことで、万が一人にも迷惑をかけてはいけないと思い、病院を退院してから車を処分して運転を止めていたのです。

ある日、彼は思い切って彼のおばあちゃんに、

「おばあちゃん、電車でのお参りはもう危ないから、これからは私もご本部に月参りしているから、おばあちゃんの代参も兼ねて、お供えを預かっていくから、そうしたらどうかなあ……」

彼の言葉に、彼のおばあちゃんは当然のように、

「ありがたい、でも体の動く限りは、自分でお参りをしたいからなあ、ご本部参拝は、私の一番の楽しみやねん。」

電車が危ないなら、これからはタクシーを使ってお参りするから」

いとも簡単に言ったのでした。

「おばあちゃん、タクシーでご本部参拝したら、いくら掛るか分かってる？」

彼が、おばあちゃんの返事にビックリして聞くと、

「懇意にしているタクシーの運転手が、一日タクシーを貸し切ったら五万円というはった。それに高速代やて」

もうちゃんと、ご本部参拝の段取りを付けているのです。頭は冴えているし、そのご本部参拝にかける、思いと気力は凄いと思いました。

※楽しむポイントは、神様からのお引き寄せであるお参りは、お願いすれば必ずお参りができるので、自分の力でお参りしていると思わないこと。

こうして、ご本部参拝は続けられていくのですが、すぐにタクシーの運転手が、自分の自家用車を使い、安い金額で行く事にしてくれたのでした。また彼の息子は、このご本部参拝に同行して、彼のおばあちゃんとの触れ合いの中で、彼のおばあちゃんの天地金乃神様に向かう姿を、目に焼き付けたのです。

平成四年八月二十六日が、彼のおばあちゃんが、ご本部に参拝させて頂けた最後でした。いつもと変わることなく参拝した翌日から、お腹の具合が悪いからと言って、食事があまり進ま

なくなりました。お神酒とご神米だけを頂いて、天地金乃神様をお願いをしていたようでした。

実は彼のおばあちゃんは、医学的な薬は何故か喉を通らない人で、

『お神酒とご神米が、この世にある最高の薬で、これを頂いたら必ず治る』

そういう信念の持ち主でありました。お医者さんや薬を、嫌がっていたわけではないのですが、スペイン風邪の時に、家族がお神酒とご神米で助けられてから、お神酒やご神米を頂いて、天地金乃神様をお願いすればどんな病気でも、天地金乃神様が治してくださると信じていたようです。

実際に彼のおばあちゃんは八十四才まで、彼の記憶では眼科と歯医者と、転んで骨を折り外科に行った以外では、お医者さんに掛かったことがないくらい体の丈夫な人でした。何時ものようにすぐに良くなると思っていたのですが、予想に反して、ますます食べられないようになってきて、トイレに行くこともしんどそうな状態になったのです。

それで彼のおばあちゃんを説得して、懇意にしているタクシーの運転手を呼んで、彼がタクシーで病院に連れていったのが八月三十一日でした。

医師が、彼のおばあちゃんの状態を診てから、その場で入院が決まりました。医師の判断によると、軽い肺炎ということでしたが、体が弱っているので十日ほど入院して、点滴を行なうということでした。

彼は教会に戻り、代わりに入院に必要な物を整えて、T代に病院に行ってもらいました。翌日、九月一日はY教会のお祭日でしたから、彼は夜八時に閉門してから、病院に向かったのです。

当時は、夜の九時まで家族は面会可能なのでした。四人部屋にいたので、小声で彼は声をかけました。

「おばあちゃん、気分はどうや。軽い肺炎やから十日ほどで退院できるから安心しいや」  
すると彼のおばあちゃんは目をつぶったままで、

「今回は神様の所に行くから、お世話になったみんなによろしく言うと言ってや」  
ハッキリとした口調できっぱりと言ったのでした。彼はビックリして、

「何言うてるねん。すぐにようなるから、しつかりしてや」

彼のおばあちゃんは首をゆっくり振りました。仕方なく彼は、

「しつかり良くなるようにお願いさせて頂くからな」

そう言い残して、教会にもどったのでした。

翌日から、T代が夜だけ彼のおばあちゃんのお世話しに、病院に泊まりこんでくれました。まだそういうことができる時代でした。

医師の言葉に反して、彼のおばあちゃんの容態は段々と悪くなっていきました。彼のおばあ



ちゃんの言う通りの展開になっていくのです。

入院して一週間ほどした時に、やはり四人部屋で泊まり込むのは、T代がしんどいといったので、たまたま個室が空いたので、そこに病室を替わりました。T代がそこで一泊した翌日に、彼のおばあちゃんの容態が急変して集中治療室に移されました。それでT代が付き添いをできなくなつたのです。まるで個室に居るのを、彼のおばあちゃんが遠慮したように思いました。当時でも個室は一日八千円掛かつたので、彼のおばあちゃんが教会に負担をかけることと、T代にこれ以上世話をかけることがないようにしたように、この出来事から感じたのでした。

集中治療室に入ってから、酸素マスクを付けた状態になり、面会時間も十五分に制限されました。彼が言葉をかけても、殆ど反応をしなくなりました。この状態が続く中で、十月二十二日の朝に天地金乃神様の元に帰つたのでした。

その日はご本部のお祭日でした。彼のおばあちゃんが、長年に亘り、ご本部へのお参りを続けたことを、天地金乃神様が祝福されたように、彼は思いました。何故なら、お祭日はおかげの成就日だからです。

彼のおばあちゃんの人生は、大正時代のスペイン風邪の時に、この天地金乃神様から命を助けて頂いてからは、この天地金乃神様に何があっても身を任せて生きていた人でした。

そして、多少の強引な所もありましたが、信念をもってK教に多くの人を導き、人を助ける

ことを実行した尊い生き方であったと、彼は認識をしているのでした。

彼のおばあちゃんが、自分が天地金乃神様の元に帰ることを分かっていたかのような言動が、彼が後々に『神上がりの道』を残し、世の人に本当の安心と助かりを、伝えたいと願う原点になる出来事だったと言えるのです。

彼のおばあちゃんのご葬儀は、彼がY教会でお仕えをしたのでした。ご縁のあつた多くの方が見送ってくださった、本当にありがたい告別式でした。

※楽しむポイントは、神様が好きで、ありがたいお礼参りやお供えができていれば、安心してこの世を去れること。

Y教会開教七十年記念大祭を平成六年五月五日に迎えました。

晴天に恵まれ、お広前正面の駐車場にも椅子を用意するほどの、多くの参拝がありました。  
(当日一日のお参りは、二百五十名ほど)

半年後の十一月五日の大祭で、彼と共に千日参拝修行に取り組んだ信者さんには、その参拝の日数に応じてお神酒をお下げしました。

その中でも参拝を頑張った方に、岡山のご本部参拝の旅費をプレゼントしたのでした。実は、

このお礼の千日参拝が終わる四十二才頃まで、彼とT代は次の子どもが欲しくて、天地金乃神様に夫婦でお願いをしてきたのですが、それは叶うことなく終わりました。彼は、長男があまりにもすんなりと授かったので、子どもは次々と授かれるものだと錯覚していたのです。ですから彼はこの頃になってやっと、天地金乃神様から頂いた途轍もない大きなおかげに気づいたのでした。

彼の持つて生まれた宿命は、おそらく小学二生の時の脳丸手術もあり、子どもができずに子孫が絶えるめぐり合わせだったのでしょう。それを、彼の母親を安心させるためにと、K教のK学院に居る時から、教祖百年大祭に子どもと共に家族でお礼参拝が叶うことを、ご本部のお広前で祈り続けたのです。その祈りが功を奏して、人の生き死にを決める唯一の天地金乃神様が、彼の宿命を変えてくださり、長男だけはお授けくださったのだとようやく悟ったのでした。やはり、親の喜び安心することを願いの中心にすると、天地金乃神様は、無理なお願いでもなんとか叶えてくださるのです。

※楽しむポイントは、子どもは自分の力で作れるものではなく、神様のお授け下さること。

教祖様のご神徳により、教祖百年大祭という節目の年が、彼の大きなおかげの成就する年と

なつたわけです。(今、彼がこれを書いているのが、教祖様の百四十年の節の年に当たります)

天地金乃神様に、普段から願いをかけている人には、ビックチャンスOfYearです。これは、彼だけが受けることのできるおかげではなく、天地金乃神様や霊神様のお祭日を大切に思い、参拝やお礼のお供えを心から喜んで行う人なら、それこそ誰でも頂けるのです。天地金乃神様は、誰でも平等におかげを授けてくださるのですからね。そこにえこひいきはないのです。

彼は、天地金乃神様から十分なおかげを受けようと思うなら、お祭日の参拝やお礼のお供えは欠くことのできないことだと確信して、信者さんたちに声を大にして伝えていっています。

※楽しむポイントは、お祭日のお参りやお供えは、神様や霊神様へのご恩を忘れないため、おかげを受ける上で大切なこと。

この開教七十年祭を挟んだ、前後の二千日間の約七年、彼は病院に一度も掛かることが無かったのです。しかし、これが終わるのを待っていたかのように、すぐに尿路結石による激痛で三回病院のお世話になり、平成十三年からは、高血圧で医師に定期的に診て頂くようになったのでした。尿路結石は、腎臓にまだ結石はあるのですが、天地金乃神様に、「結石はあつても無いおかげを頂きますように」とお願いしてから、根切れのおかげを頂きました。高血圧は今

もそうですが、生活には影響がなく、御用には差し支えがないことがありがたいのです。高血圧は、父親からの遺伝もあると思うので、彼の代で高血圧の根切れを頂き、子孫が高血圧にならないことを祈っているのです。

※楽しむポイントは、病気があつても、症状がでないようにお願いすること。また同じ病気で苦勞しないように、根切れをお願いすること。

一方で教会の財に於いては、お広前のご造営と記念大祭の費用で、再びスカラカンになったのですが、天地金乃神様に対して、次の八十年記念大祭までに教職舎のご造営ができることを願い始めていました。何故ならT代の協力を得て、彼のおばあちゃんをY教会に引き取り同居を始めて、前記のようにご葬儀をお仕えして見送った頃から、不思議なことにY教会のお供えの額が急速に多くなったからでした。これは彼とT代が、彼のおばあさんを大切に世話したことの、天地金乃神様からのご褒美だと思ふのでした。

※楽しむポイントは、親や縁のある人のお世話は、ありがたくできれば、神様から大きなおかげを受けること。

天地金乃神様から、半分残した後ろの部分に、十年後までに教職舎を建てよと、指示されているように、彼は感じたのでした。

開教七十年から八十年に向かう十年も、Y教会や彼の家族にとって、健康面でも財の面でも全てが順調で、ありがたい時間を過ごせた時期でした。

この十年間の出来事の大きなポイントは三つあります。

一、彼の息子の大学入学までの成長。

一、彼の父親のY教会への御用の参加。

一、教職舎のご造営のおかげと失敗。

に要約されます。

彼の息子は、彼ら夫婦が朝早くから起きてバタバタするので、彼の息子も朝早く同じように起きてきていました。幼稚園の頃までは、朝の掃除をする信者さんのお手伝いをしていました。実際は邪魔をしているのですが。

「門前の小僧習わぬ経を読む」の諺ではないですが、彼の息子が小学生になった時、

「おい、小学生になったから、お父さんに代わって朝のご祈念の先唱をしてみるか」

彼が息子に問うと、やる気満々に

「うん、やる」

即答でした。これで翌日から、彼の息子が大学生になり、Y教会を離れるまで、先唱の御用を務めることになったのでした。

※楽しむポイントは、鉄は熱いうちに打てと言いますが、幼い時から、神様に手を合わず機会をつくること。

彼の息子が生まれて後の昭和六十年四月に、Y教会から自転車で十五分ほどの所に新しく高校が開校していました。彼の息子もこの高校でお世話になり、ある地方の公立大学へ進学できたのです。その高校開校の時に関わった高校の先生の中に、T代のK大学院同期の女性の伴侶の方がおられました。それでその当時、ご夫婦でY教会にお参りをされるようになっていました。この女性がT代にとって、K大学院時代に大変仲が良かった親友であったので、本当に心強く嬉しいようでした。

この方が数年後、この高校を辞められて、九州に戻られ教会で御用されることになりました。彼はその時に、その教会の大祭でのお話の御用に呼ばれて、T代と共に夫婦でその教会に行かせて頂いたのです。新婚旅行以来の夫婦だけの旅行でした。

お話の御用の後、別府温泉で一泊をして、翌日に湯布院を観光して大阪に戻ったのでした。

彼ら夫婦にとって貴重な楽しい時間を過ごせたのでした。

彼は二十四才で教会長として御用に当たるようになったので、全てに自分の思い通りにのびのびと御用ができた半面、この時代に彼のプライベートな時間は殆どなかったものでした。だから彼が家族で旅行したのは、彼の息子が幼い頃にある信者さんが旅費をお供えされて、

「先生、坊ちゃんがかわいそうですから、何処かへ連れて行ってあげてください」

とお頼みがあり、賢島へ一泊したことが一回。T代が倉敷にあるアイビススクエアに一度泊まりたいといったので、家族で岡山のご本部参拝した折に、帰りに寄って一泊したのみでした。

このように家族旅行は少ないのですが、T代や親戚の人などに色んな所に、彼の息子は旅行には連れて行ってもらえたのでした。東京デイズニールランドにも彼の息子は、親戚の人に連れて行ってもらっているのです。

※楽しむポイントは、親が神様のご用のために子どものお世話ができなければ、他の人がお世話してくださること。

彼はご用の中で、大学受験で、天地金乃神様のおかげを実感した出来事がありました。それはある信者さんが、



「先生、私の娘がどうしても行きたい国立大学があるのですが、今の娘の実力ではとても合格は無理なんです。親としてどうしてやればいいでしょうか」

彼は、心の中で（それは娘さんが勉強の努力をせんと）思ったのですが、その方の切羽詰まったような感じのお伺いの姿に押されて、ご神前に進んで天地金乃神様に、この方の弁護士なつて、お願いを申し上げたのです。

すると、頭に【娘の代わりにこれから毎日午後二時のご祈念に参り願え】ということが浮かびました。

お取次の座に戻り、  
「親として、明日から娘の身代わりとして毎日午後二時のご祈念に必ずお参りしてお願い下さい」

そう信者さんに伝えました。この方は素直にそれを実行されたのです。入試直前の模擬テストでも、合格はかなり難しい判定のようでしたので、その信者さんも心配していました。しかし、見事にその国立大学に二次試験で合格して、三月末に慌ただしく下宿を探して行かれたのでした。その信者さんの約一年半の身代わり参拝が実ったのでした。

彼はその娘さんに、大学の近くのK教の教会を紹介しました。その娘さんも大学四年間、教会に参拝してお世話になったのです。

後にこの娘さんは、この大学で出会った人と結婚をされて、家庭を持ち、子どもさんにも恵まれることを思うと、正に天地金乃神様からの、大きなお繰り合わせであったと、彼は振り返かえり思うのでした。

※楽しむポイントは、人のことでもおかげが頂けないと思わずに、何事も神様にお願ひするごと。

Y教会開教七十年記念大祭をきっかけに、彼の父親や数名の信者さんに、祭典の時に祭服を着て頂き、祭員として御用を当たって頂くようになりました。

彼の父親は、その少し前に公務員の仕事を辞めていたので、それからはY教会の祭典には必ずお参りをして、祭員の御用を務めてくれるようになっていました。彼はそれまで、父親とそれほど深くは生活の中で、関わりをもった記憶があまりなかったのです。彼の目から見ると父親は、真面目で義理堅い性格でした。人に頼みごとをされると断れず、少々無理してでも引き受けるような人でした。

人に奢ることが好きで、カラオケが好きでした。Y教会に移る前に在籍していた教会でも、大祭には有給休暇を取って参拝と御用をしていたし、勿論Y教会でも大祭には休みを取って参

拝をしていました。ここから彼の父親は、T代とも楽しく関わりを深めていくことになり、彼がT代に、更に感謝をすることになるのです。

彼の母親が、五十五才の若さで天地金乃神様の所に先に帰ってから（それでも五年は寿命を延ばして頂いたのですが）、彼の父親は実家で一人暮らしとなりました。幸い隣に、彼の姉が家を建てて住んでいたのです、これにより姉の子どものお世話などもすること、気がまぎれ、共働きをしていた姉も助かった部分もあつたようです。

彼の父親が、Y教会に祭典の御用に来るようになって暫くして、彼にお取次ぎの座で言いました。

「ずっとご本部には毎月お参りしているのやろ。これからご本部参拝の交通費は、私がおかげを頂くから、いくらお供えしたらいい」

彼のご本部参拝は、Y教会で御用をするようになってから毎月続いていました。しかし、その参拝の在り方は変わってきていました。

信徒総代でお医者さんのNさんが、ご本部の費用をお供えされていた頃は、新幹線を使ってお参りをしていました。Nさんが亡くなられてからは、彼の息子が生まれたこともあり、彼のおばあちゃんに教会の留守番を頼み、家族で車によるお参りになりました。彼が緑内障により車の運転を止めてからは、在来線を乗り継いで、ご本部参拝になっていました。

勿論この頃は、新幹線を使ってお参り出来る生活の状態ではありませんでしたが、在来線を使い一日かけて、修行も兼ねてのお参りを彼はしていたのです。今もですが。

K教の二代教主のお言葉に、

「ご本部へのお参りも便利になると、ご本部へ便所しに来るような者がある」

そういう内容のことがあるので、在来線を使い修行も兼ねての参拝にしていたのです。

また、K教の教祖様が、四十二才で大病をされた後、九死一生の助かりを得たお礼にと、毎月決めた日に一日かけて、神様にお礼のお参りを実行されたことの真似でもありました。

彼は、父親の言葉に対して、

「それなら、毎月一万円をお供えしてください。ご本部の旅費と、お父さん自身のご本部のお供えに使わせて頂くから」

と答えたのです。

それ以来、今（令和五年）に至るまで彼の父親は、毎月一日に一万円のお供えを続けているのです。

いったん決めたことは、何があっても変えずに守っていく律儀さが、彼の父親にはあります。元の在籍していた教会へも、大祭のお供えは今も送り続けているようです。

※楽しむポイントは、神様へのご用は、ありがたい心で続けること。

彼のご本部参拝も、何度かの入院や手術がありながらも、欠けることなく続いていることは、ありがたいおかげなのでした。いや、逆なのかもしれません。

ご本部に毎月お礼のお参りがしたいと、お願いするから、天地金乃神様から、健康もお金も時間も都合が頂けて、お引き寄せを受けているのです。

ご本部から遠方にある教会の先生が、ご本部までの旅費がなくお参りができない時に、お金のできた所まで行き、そこでご本部に向かい遥拝をして、次はご本部にまで行けることをお願いしている、何回かでご本部に行く事ができて、それから、毎月のご本部参拝ができる、財のおかげを受けた話を読んだことがあります。

毎月のご本部お礼参拝を願うことが、健康・経済・時間のおかげを頂く、最善の方法かもしれません。

彼のおばあちゃんも、このおかげを受けていたのです。K教のご本部とは、それほどありがたい場所なのです。少なくとも国内にあるK教の教会なら、毎月のご本部お礼参拝がしたいと一心にお願いをして、教会長がお取次ぎの座に座ることをしていれば、教会が必要なお金に困ることは無いはずだと、彼は思うのです。

※楽しむポイントは、K教のご本部は、お願いの仕方次第でそれほどありがたい場所になると。

彼が毎月のご本部参拝で、一番の参拝修行であったのは、平成七年一月十七日の朝に起きた、阪神淡路大震災後の半年間のお参りでした。

Y教会を早朝に出て、最寄りのJRの駅から一番電車に乗り、京都↓福知山↓和田山↓姫路↓岡山↓ご本部と大回りしてお参りでした。Y教会に戻るのが深夜になりました。

少し経ってから、電車の不通区間で代替えバスが運行されるようになり、それを利用してお参りをしました。彼はそのバスの窓から、震災で被害にあった地域の惨状を目の当たりにして、ただただ一日も早い復興を祈るばかりでした。

現在（令和五年）、ご本部の参拝の途中で新快速の窓から見る風景には、もう震災を感じさせるものは何もないことを、彼は何時もありがたく思い、天地金乃神様にお礼を申し上げるのでした。

彼の父親がY教会の在籍となつてから、積極的に御用をしてくれるようになりました。特に、五月五日と十一月五日の大祭の時期は、二日から六日まで毎日通いで御用をしてくれたのです。T代がY教会に泊まつていくことを進めても、「自分の家が一番よく寝られるから」と言つて、夕食後に帰るのでした。

この時期の彼の父親は、祭典や御用の後で、T代が作ったお酒のあてを兼ねた夕食を頂きながら、たわいもない雑談をすることが、一番の楽しみであつたように思います。彼の父親は、

お酒が入るとよくしゃべるのですが、T代は上手に楽しく朗らかに受け答えをして、彼の父親を良い心持ちにさせるのでした。

彼は、祭典後のY教会の二階は、「スナックT代の開店や」とよくT代に言っていたのです。

このような形でT代が、父親に接して親孝行をしてくれたので、彼は父親から、「T代ちゃんはいえ子やな」

常にそう言われたことは、彼にも嬉しくてT代には、

「お相手ご苦労さん。父親も喜んでいたので、ありがとうございます」

劳いの言葉を、彼はT代にいつもかけていました。

※楽しむポイントは、結婚した夫婦が、お互いに相手の親を大切にしたら、神様がおかげをくださること。

彼の息子が大学に入った翌年の平成十四年十一月半ばから、残っていた教職舎のご造営が始まったのでした。

工期は半年ほどで、平成十五年五月五日の大祭に間に合うように予定をしていました。教職舎のご造営に踏み切ったきっかけは、その約一か月前の十月十日に、朝の新聞に入った折り込

み広告でした。

建売住宅会社の広告でしたが、その一例に上げていた建築プランが、ほぼ彼がイメージをしていたものに近かったのです。それは、一階がガレージと物入れ、二階にお風呂とダイニングキッチンと和室と洋室が一つずつあり、ダイニングキッチンの上は吹き抜けとなっているものでした。そして、三階は屋根裏部屋のような感じで、洋室が二部屋と収納スペースがあるものでした。各階にトイレがありました。彼が特に気に入ったのは、二階に吹き抜けがあることや三階が屋根裏部屋だったので、建物の高さを低くできることでした。後でわかるのですが、この会社は奈良県の桜井市にあり、Y教会のある地域に広告を入れたのは、この一回きりのことだったのです。

彼がこの広告が、天地金乃神様からの建築へのゴーサインだと感じたのは、十月十日が教祖様の神上がり日でもあり、毎年必ずご本部で、ご大祭がお仕えされる日だったからです。

彼は、天地金乃神様に願ひ続けたことに対して、これは天地金乃神様のお指図であると感じたなら、後は迅速に行動に移したのです。建築費用の準備は、まだ十分にできていなかったのですが、そこに迷いということはないのでした。

※楽しむポイントは、神様をお願いをされていて、これは神様のお働きと感じたなら、実行をすること。



すぐに、その時にご縁のあった工務店に建築プランを見せて、一階の駐車場のスペースを多目的ホールに変えて、改めて図面を書いて貰いました。

建築費用も建売住宅会社の示していた建築費を参考にして決めて、慌ただしく工事に着工したのでした。この工事に当たり、彼はこの工務店に二つのことに注意をするように頼みました。

一つは、お広前の後ろの部分を壊して撤去する時に、くれぐれも慎重に執り行い、ご神前やご霊前に影響を及ぼすことがないこと。

もう一つは、周りの家に迷惑をかけることがないように配慮することでした。

残念なことに、二つともこの工務店は、頼んだ注意を実行できませんでした。

まずは解体をする時に、慎重さを欠いてご霊前の後ろの壁を突き破ったこと。そして、Y教会の横の道に面した隣の軒先に、工事用のダンプカーが引っかかって、軒先を壊したこと。

また、棟上げをした時に初めて彼はわかったのですが、屋根裏部屋の設計が何故か普通になつていて、彼が思っていたより建物が高くなり、結果的にご近所に対して、最初の説明と違うようになったことです。本来なら有り得ないような手違いでした。彼はここでこの工務店に、工事の遣り直しを命じるべきだったのです。

しかし彼は、天地金乃神様の思いに叶う神情を貫けずに、この工務店が説明した、「建築基準法は守っている建物です」と言う説明を認めてしまったのでした。ご近所の方には、Y教会

へ嫌な思いや、不信感を抱かせてしまったことは、大きな失敗であったと、今も悔いが残っているのです。

せつかく天地金乃神様にお繰り合わせ頂き、今回も借金をする必要がない財のおかげを頂けただけに、天地金乃神様にも相済まない思いがしたのでした。

※楽しむポイントは、神様をお願いをしたことに手違いがあり、それが回りの人の気分を害すなら、神情を貫き改めること。

この教職舎の工事を進める中で、思いがけないおかげを頂いたこともありました。

新しくガスを引つ張ってくるのに、Y教会の横にある私道を通すことが必要であることがわかりました。私道の持ち主に、許可を貰いに行くと、使用料が欲しいと言われたので、彼は嫌な気分になりました。そこで彼はそれならガスを使わずに、何とかできないかと考えて、当時使われはじめていたオール電化にすることを決意したので、

結果、これが大正解で、光熱費がその後だいぶ削減できたのでした。

正しく難儀なことやと思ったことが、後々におかげになったのです。これは天地金乃神様に、お願いしている者が体験できる特権だと思います。

※楽しむポイントは、お願いしている中で問題が出てくれば、それが新たなおかげになること。

彼が四十八才、彼の息子が大学三年の平成十六年五月五日に、開教八十年記念大祭が麗しく  
仕えられたのでした。

この時に、信者さんが書いて提出された、天地金乃神様へのたくさんのお礼文の中から、四  
つほど抜粋して載せておきます。

#### ○神様へのお礼文(1)

Y教会教会長のK先生に出会わせて頂いたのは、七年程前です。

次男の病気で、心と体がとてもバランスを崩していた時にTさんに出会い、このY教会に導  
かれてきたのです。もともと○教と名の付く宗教は、受け入れにくい私でしたが、その偏見  
はとれ、K先生のお話を聴くことでK教や神様を信じる事ができるようになり、本当にありが  
たい出会いをさせて頂いたものだと感謝で一杯です。

母の介護や仕事・・・と、色々と言いつけて教会に行かず、いつも電話で先生に話を聞  
いて頂くことが多く、これではおかげを頂けないはずなのですが、どうしてかありがたいこと

が次から次におこり、一杯におかげを頂いている私です。

人生は色んなことが、次々と起こります。まるで私達は何かに操られ、生かされているようです。

そこに一つの真理、神様の意思を感じます。しかし、神様のお働きをつい忘れてしまうことがあります。

私達は人生で、少しでも善い行いを積み重ねてゆくことが、とても大切だと思います。

「神様ありがとうございます」で目が覚めて、「神様ありがとうございます」で一日の締めくくりをする私です。

### ○神様へのお礼文(2)

Y教会開教八十年おめでとうございます。

教会長様にはいつもお氣にかけて頂き、毎月お便りを頂戴しております。

家族中、健康で過ごさせて頂いておりますことは、ひとえに教祖様のおかげであり、教会長様のお祈り添えのおかげであると感謝しております。ありがとうございます。

なのに日々のご無礼本当に申し訳ありません。

はじめてY教会へお参りさせて頂いてから、十二年が過ぎましたが、我ながら信心の浅さを

情けなく感じる次第です。

毎朝、家の神棚に手を合わせて頂いている時も、お願いばかりでお札を忘れています。

まず、元気に生かされていることを、喜ぶことからスタートしなければと思いつつ、すべてが当たり前になっています。何年経っても成長しておりません。

このような私ですが、記念祭が素晴らしいご大祭なられますことを心よりお祈り申しあげています。

### ○神様へのお礼文(3)

今から数十年前、節目の年と重なってか腰痛から膀胱炎になりました。

それが原因になり不眠で何日も寝れぬ夜が続き、夜中に家の外をうろついたり、山の入口まで一人で行って見たりと、辛い日が続きました。

いつそ死んでしまえば楽になるだろうと思ったこともありました。

その時に、何故か姑が、辛い時や痛い所がでる時は、ご神米を頂きなさい。痛い所にお神酒を付けて貼り、神様にお願ひすると、きつとおかげがあると教えてもらっていたことを思い出しました。

家のK教の神棚にお願ひしながら、下腹にご神米を置いてお神酒をつけておかげを頂きまし

た。

以前は血尿もあつたのですが、それ以来少し膀胱がおかしいと思う時でも、そういうことはなくなりました。おかげだと思つています。

教会長様にはお世話になることが多くて、いつも感謝をしております。ありがとうございます。ありがとうございました。

#### ○神様へのお礼文(4)

私がK教へ入信させて頂いたのは、二才六ヶ月の時でした。

最初は阿倍野にある教会へ、祖母や母と共に引き寄せを頂きました。

私は小さい時、身体が大変弱く、病氣ばかりしておりました。

その身体の弱い私を連れて、祖母や母は私をおんぶして、毎月K教のご本部へお参りをしておりました。

小学生四年の頃、毎月二回くらい扁桃腺の熱を出して、学校を休んでいました。

それで私は、冬休みとその後の一ヶ月間を、祖母に連れられて、朝五時に起こしてもらい、真綿を胸と背中に当ててもらって、寒い中を阿倍野にある教会に、日参させて頂きました。

そうしたら、その参拝修行を境にして、扁桃腺の熱が出なくなり、根切れのおかげを頂きま

した。

成人して結婚してからは、しばらく東京に居りましたが、長男が六ヶ月の時、主人の転勤で八尾に住まわせて頂くことになり、阿倍野にある教会の先生にお許しを頂き、Y教会にご縁を頂き日参をさせて頂くことになりました。

長男もまた身体が弱くよく熱を出し、私と同じように扁桃腺にもなりました。

その中で、中学受験もおかげを頂きました。その入学前の一ヶ月間、長男を連れて朝参りをさせて頂きました。

そうしたら、長男も扁桃腺の根切れのおかげを頂き、中学高校の六年間、一日も休まずに学校へ通わせて頂くことができました。

阿倍野にある亡くなられた先生の霊神様や、Y教会の教会長先生のお祈りのまにまに、人生の色々な問題に出会っても凌がせて頂き、今の私の家族があることを、お礼申さずにはおれません。

子ども達の将来のことを思うと、心配なこともあります。心配するよりも、Y教会のK先生のお祈りを頂き、神様をお願い申し上げて、子ども達に信心の相続してもらえ真の信心をこれからさせて頂くように思っております。

このように信者さん各自で、天地金乃神様にありがたくお礼を申し上げて、Y教会開教八十年祭を仕えました。

翌日から、平成二十六年の開教九十年に向かう十年がスタートしました。

この十年間に、天地金乃神様から頂いた、大きなおかげを三つ挙げると、

- 一、彼の二度の手術とT代の入院。
- 一、Y教会の信奉者奥城完成と、お広前の改装工事及びご神前・ご霊前の新装工事。
- 一、彼の息子のK教学院入学と、その後に教団職員としての御用と結婚。そしてハワイでの御用になります。

人の体は年齢を経るに従い、やはりそれなりの不調が出てくることも、ある意味で生きていく人の道理と言えると思います。

彼は四十才になり、市から送られてくる無料の健康診断で、高血圧であることが判り、四十代半ばから薬を服用することになったのです。父親からの遺伝的なことや、年齢からくるものと、食事や運動不足などの原因が重なったからだだと思います。

そしてもう一つ、長い間の正座と椅子に座る生活により、痔が四十七才頃に出てきたのです。



暫くは葉で凌いでいたのですが、度々出血するようになり、御用にも差し支えることもあって、手術を決意したのでした。

信者さんのお医者さんから紹介を受けて、ある肛門科の病院に入院をしました。彼は全身麻酔の手術により痔を切り取って頂き、十日の入院で無事に退院をさせて頂いたのです。ありがたいことに手術後に、殆ど痛みが無く楽に入院中を過ごすことができたのでした。十日間の入院でしたが、改めていつも通りの生活ができることが、どれほどありがたいことかがわかりました。

またこの時の入院に際して、多くの信奉者の方が、私の名前でお届けお取次を頂いてくださったことは、本当にありがたく思いました。その後、彼は今に至るまで、痔の根切れのおかげを頂いているのです。

この時期に、彼は年をとったと感じることをもう一つ経験するのです。それは、前立腺炎でした、冬の寒い時でも、彼は修行のつもりでずっと裸足で過ごしていたのです。

その冷えが段々と身体に堪えていたようでした。修行も大切ですが、やはり身体を一番に考える時期にきていたのです。

K教の教祖様は、水行や断食などの修行は身体を痛めることがある、それよりは心行をせよと教えられています。心行とは、人に不足を思わないで、物事の不自由を行とし、家業を実意

に勤め、身分相応を過ぎさないよう儉約をする生活をする事です。

つまり、特別な事を別の場所で身体を使って修行するのではなく、心行とは普段の生活の中で、心の中で行う修行なのです。

この修行はさせて頂く思うなら、誰でもできる修行でもあるのでした。

※楽しむポイントは、身体の衰えは誰でも経験することであり、それを嘆くことなく、神様にお願いをしながら上手く、自分の身体と付き合っていくこと。

彼にとって教会は、修行生活をする場であると思つて御用を務めてきたので、これまで世間でいう所の休みと言う日がなかったのです。

とにかく、彼はお取次の座に座ることを最優先で生活を進めてきて、T代も彼が全力で座れるように協力してくれていました。彼はT代と結婚してからは、T代に渡した生活費で家族の食費代や衣服費などはすべて賄うように任せていました。ですから、食べることも着る服も下着も、身の回りで使う物などすべてT代が用意してくれた物を、ありがたく食べ、着て使う生活をしていたのです。

K教の教えに次のようなものがあります。

ある人が、教祖様に修行について、お伺いされたのです。

「日々ありがたいおかげを頂いておりますので、いつそうに修行に励みたいと思います。つきましては、山に籠って修行をしたいと思えます」

「ほう、山に籠ってどういう修行をなさいますか」

「はい、山に籠ったらできるだけ不自由な生活をして、修行をしようと思えます」

「なるほど、それならば何も山奥に行かなくても、あなたの心の中に山奥を作って修行をされればよろしい。そうすれば、奥さんが何を食事に出してくれてもありがたいと頂くことができるでしょう。また、どんなに不自由なことがあっても愚痴不足を言うことがないでしょう」

このような内容のやり取りがあるのです。

彼は、教会は修行の場と想っていますから、この教えをなるだけ実践していたのです。

※楽しむポイントは、神様への修行は、特別な場所や変わったことをするのでなく、普段の生活で不自由を楽しむ、愚痴不足を言わずに過ごすこと。

彼からT代に食べることや、着る物に対して何かを求めたり、注文を付けたりすることはほとんど無いのです。

彼の息子が大学に入り、夫婦だけの生活になってから、暫くしてT代が言いました。

「先生の何か食べたい物があれば言ってください。それを作りますから」

息子を中心に考えていたメニユーを、変えようと思ったようでした。

「月に一度か二度、エビフライを作ってくれたらいいな。T代の作るエビフライはゼッピンや、まあ揚げ物は何でもピカイチ上手いからなあ」

「あら、お安い御用です。でもそれならいいエビが欲しいから、先生が阿倍野にお墓参りをされた時に、デパートで大きいエビと牡蠣を買ってきてください。牡蠣はT代が好きやから」

こうして、フォークソングの『神田川』の歌詞にあるように、二人の月に一度の食事の贅沢が始まったのでした。

（阿倍野には、彼のおばあちゃんの奥城があつて、おばあちゃんのお骨を収めてからは、月に一度は必ずY教会から、彼は往復二時間かけて自転車でお参りをしていました。）

※楽しむポイントは、夫婦で共通の楽しみを持つこと。

彼が痔の手術の翌年に、平成十八年二月四日に五十才になった時にT代から、「先生、五十才を区切りに、先生も少しはリラックスする時間を持ちませんか」

そういう提案をされました。

彼は考えました。K教の教祖様は、四十六才から死んだと思つて昼夜を問わず、お取次の座にお座りくださったのです。その教祖様に対して、六十才になられた時に、天地金乃神様の方から、「人の身は生身であるから、昼夜は続かない。夜は休むようにせよ」とのお知らせを頂かれたのです。

T代の言葉を天地金乃神様からの伝言だと頂き、

「そうやな、俺も少しは年を感じるし、これからは月に一度だけ、T代にお取次の座を任して、自由な時間をもつようにしようかな・・・。T代も俺の食事のことを気にせず自由に出来る日を、月に一、二回つくるようにしたらどうや」

夫婦でこういう取り決めができたのでした。

こうして彼は、それから月に一回ですが、朝のご祈念後にすべてを忘れて、新今宮駅の近くにあるスパワールドや近場のサウナでリラックスする時間を得たのでした。勿論、天地金乃神様に、お断りお願いを申し上げてのことですが。

T代も、難波や天王寺に出て、百貨店などでウインドウショッピングを、月に一、二回して楽しむ時間を作ったのでした。

T代がサンリオのキティーちゃんに、嵌り出したのもこの頃からです。キティーちゃんに關

係あるものを、集め始めたのです。キティーのご当地切手などは、信者さんにも頼んで協力して頂き手に入れる程でした。T代のキティー好きが信者さんに浸透すると、非売品の物や手に入り難いものが集まりはじめました。

そんなある日、彼がお取次の座に座っていると、T代が前に来て少し甘えた感じで、「せんせい、T代のお願いを神様に頼んでくれる？」

彼は心で何かヤバイかなと思いました。T代の何か企んでいそうな顔をみながら、

「そら氏子のお願いは何でも神様にお届けするけど・・・」  
彼が答えると、

「あのね、T代はサンリオの株を欲しいのよ。でもT代はお金がないから、神様にY教会で買ってもらおうようにお願いしたいのよ」

彼は、おくい株かよと心で叫びました。

「何でサンリオの株が欲しいのかな」

「サンリオの株を持つと、株主限定にキティーちゃんのグッズが送られて来るのよ。それが欲しいの」

彼はそれまで株には全く関心がありませんでした。彼はご神前に進み、天地金乃神様に、T代のお願いをそのまま伝えました。

T代も賢いのです。もし普通の夫婦の会話の中で頼まれていたら、彼は即座に断っていたでしょう。しかし、お取次の座でお願いされたら否応なしに、天地金乃神様には、お伝えしなければなりません。

彼の頭に、K教の決算報告書の欄には、持ち株を記入する場所があることが思い浮かびました。ということは、株を取得することをK教団が認めていると解釈していいのでしょうか。

彼は天地金乃神様に向かいながら、そういうことが思い浮かんだので、これは天地金乃神様から、お許しを頂いたと感じたのです。

「神様からお許しを頂いたので買わせていただく」

お取次の座に戻り、彼はT代にそう答えました。それからすぐに、Y教会に一番近い証券会社に電話して、Y教会が株の取り引きができるように、直ぐに手配をしたのでした。

まあ、T代が彼の父親のお酒に付き合い、彼の御用の補佐も頑張っているのです、せめてものT代孝行になったかもしれない。

※楽しむポイントは、お願いをして、その年代に応じた身体の使い方と、心のリラックスをさせて頂くこと。

彼が今、これを書いてある時に、一部の宗教教団への高額な献金問題や、印鑑・壺などを買わず霊感商法が問題になっています。

お供えに惜しいとか、もつたいないという心があれば、天地金乃神様は、その献金を受け取られないのです。多くお供えすると、多くおかげがあるとかは、絶対にはいけません。本当の神様はお金では動きません。また、お供えをしたから、その人のした悪い行ないや罪が許されることもないのです。

もし神様が人の犯した悪い行ないや罪を許されるとしたら、恩を着せせずに人を助けることや、見返りを求めずに人のお役に立つことを、神様にお願ひしてさせて頂く以外にはいけません。

とにかく神様へのお供えは、その人が無理なく喜びの心でさせて頂くお礼が大切です。

K教のみ教えのお供えについて、天地金乃神様からこういう指示がでてきます。

『神の教えどおりに願って、願ひ通りのおかげを受け、ありがたいと言ってお礼に供える物は、神も喜ぶ。お札やお守りの代金を取るなどという神とは、神が違う』

『お供えものとおかげは付き物ではない』

つまり天地金乃神様からお金でおかげは貰えないということなのです。

『神を商法にしてはならない。お守りやお札（おふだ）は出さない。お守りは心にある』

『寄付札やお供えの額を出すことは、神の御心になわなない。神のために人に寄付集めをして



はいけない』

このように天地金乃神は、人がお供えのことで、心を痛めることを嫌われるのです。神様へのお供えは、お礼の喜びです。突き詰めれば、神社仏閣が拝観料を取り、戒名料を求めることも、天地金乃神様はお嫌いになるでしょう。

本当に人の助かりを願う宗教ならば、あつてはならないことです。神様にお金をたくさんお供えたから、徳を積めるとか、犯した罪が許されるとかはないのです。難儀をしている人、苦しんでいる人のお役に立ち、人を助けることが、唯一の徳を積むことであり、犯した罪が許される道なのです。

そして、この天地金乃神様の御心を、全ての人が知っていれば、このような騒動は起きないのです。彼にはそれが残念なのでした。

※楽しむポイントは、神様は、人がお礼に嬉しく心任せのお供えをしたものしか受け取られないこと。

平成二十二年十月二十一日のお祭日の晩に、彼がいつも通りにベッドに入り眠りに落ちようとした時、左足への激しい痛みに襲われたのでした。痛みは左足の股関節から足先まであり、

痺れも膝から下に感じます。

取り敢えず、T代にだけは状態を知らせて、ベッドの上で天地金乃神様に、御用が差し支えなくできるように、お願いをしながら朝を迎えました。

痛みに耐えながら、数歩は歩けるので、朝のご祈念も無事にお仕えができました。お取次の座にも、少しの間なら辛うじて座れます。

彼はお広前の傍の和室に、T代に頼んで布団を用意してもらい、そこに横になりました。信者さんがお参りされた時だけ、お取次の座に座ることにしたのです。T代には、そこに食事を運んでもらいました。

親教会に電話でお届けをすると、親教会にご縁のある鍼灸師の方が、わざわざY教会に来て診察をしてくださいました。彼の状態を診られた鍼灸師が、

「ぜひ、早く病院でMRIを撮られた方が良いと思います。恐らく脊柱管狭窄症だと思います。私で良ければ病院を紹介します」

「かなり悪いですか」

「そうですね、痛みや痺れの状態からすると、手術になる可能性も高いです」

彼は鍼灸師の言葉を聞いて、（手術か、できるだけ御用に差し支えないおかげを頂かねば）と内心思いました。

二日後の二十四日には、新しく出来たY教会の信奉者奥城の建立式が午前中にあり、午後には信者さんの家でのお祭がありました。

痛みと痺れを、天地金乃神様から与えられた修行と受け止めて、何とか無事にそれらの御用を終えて、鍼灸師から紹介された難波にあるT病院に行ったのは二十九日でした。

※楽しむポイントは、病気で痛みのある時は、神様からの修行と受けて身凌ぎをすること。

教会をT代に任せ、彼は二人の信者さんのお世話になり、信者さんの車で病院に向かいました。

難波の病院の近くで道を間違えて、予定より十分ほど遅れてT病院に着きました。これがおかげでした。

病院内では信者さんのお世話になり、彼は車椅子に乗り、レントゲン、MRI、血液や尿検査を受けて医師の説明を聞く時には、すでに午後四時を過ぎていました。

医師がMRIの画像を見ながら、

「尾骶骨びていこつから三つが悪くて、脊柱管狭窄症ですから、やはり手術をされた方が良いと思います。入院の期間は二週間ほど思ってください」

それを聞いて彼は即座に、

「済みませんが、仕事の都合（Y教会とT代の里の教会の大祭が済むまで）で、手術は十一月十三日以降でお願いしたいのですが」

彼がそう頼むと、医師が彼の顔を見て、

「こちらも早くても、十一月二十日まで空いていません」

そう言つてパソコンに向かい手続きを始められました。少し間があつて医師が、

「あつ、二十日は貴方の前の診た人を入れたので、手術が満員になっています。次は十二月二日ですがよろしいですか？」

彼はまたしても、天地金乃神様は、細やかにお願いを聞き届けて、おかげをくださったと思つたのでした。

十二月一日のお祭日に入院です。これがまず天地金乃神様が、おかげをやること示されたお働きで、二日に手術して二週間で退院なら、十八日のお祭日の祭典の御用もできることになります。本当に大切なお祭日の祭典の御用には、ちゃんとお使いくださるのです。

彼は内心で（これでお祭日の御用に差し支えなくて良かった）思いました。T病院への十分の到着の遅れも、天地金乃神様のお計らいだったのです。

「それでよろしく願ひします」

彼が嬉しそうに答えると、

「手術をされるなら、もう一つCT検査が必要ですが、今の時間ならギリギリで検査ができませんが、今日にされますか？受けるとしたら、これから一時間半ぐらい掛かります。日を改めて来られますか？」

付き添ってくださる信者さんには、長い時間になり相済まないことですが、日を改めて来ることは大変です。

「今、お願いします」

と答えました。

そんなことで、彼らがY教会に戻ったのは、午後八時の閉門ギリギリでした、二人の信者さんには、本当にご苦労をおかけしたのです。

彼はその晩に、天地金乃神様に一日のお礼を申し上げながら思いました。こちらが日頃からお祭日の御用を大切に思っていると、お祭日の御用をさせて頂けるように、天地金乃神様が助けてくださるのだと。

※楽しむポイントは、神様のお祭日を大切にしていると、お祭日がおかげの受ける日になると。

足の痛みと痺れも日に日に楽にして頂き、五日のY教会のご大祭も杖をつきながらですが、T代をはじめ、信者さん達の御用を得て、無事に仕えることができましたのです。この時の彼の姿を見た甥が、「凄くお年寄りになりました」と笑う感じの状態で仕えたのでした。

十一月半ば頃には、五分ほどしか立つことをできませんが、何とか家の中でも杖をついて歩き、日常生活ができるようになっていました。恒例の十一月七日のご本部へのお礼参拝も信者さんの車で行き、Y教会のご大祭が無事に仕えられたことを、教主様に申し上げたのでした。このようにありがたいことに、毎月のご本部お礼参拝も続けることができたのでした。

彼はこれほど回復してきたので、手術は止めようかとも思いましたが、手術に向けての手続きはしていたので、十一月二十五日からの三日間の脊髄に造影剤を入れてのMRI検査をして、その上で判断をすることにしました。この造影剤を入れる時はかなり痛いと聞いていて、覚悟をしていたのですが、最初のチクリとした感じだけで難なく終わりました。

尾骶骨から三つの輪切りのMRI画像を医師から見せられて、脊柱が変形して神経を圧迫していることが、彼にもはつきりと判りました。今の痛みや痺れがマシになっていることが不思議なものでした。天地金乃神様のおかげで、ご用ができるようにしてはくださっているのです。

彼が医師に、痛みや痺れがマシになっていることを告げると、医師が画像を診ながら、「これだけ神経を圧迫していたら、いずれはもっと悪くなります」

「そうですか、それでは予定通りに手術をしてください」

これでこの病院で、彼が手術をすることが決まりました。彼にとって、病気をして医師に掛かることは、他の人のように、病気を治すだけではないのです。

天地金乃神様が、お守りくださるお働きの確認と、信心の新たな助かりが判る、という楽しみがありました。

彼は、身体は痛い苦しいという状況でも、天地金乃神様が、どの様なお働きをくださるのかと、心の何処かでワクワクしているところがいつもあるのです。これは、天地金乃神様を信じている人の特権であると、彼は思っています。本当に、天地金乃神様から授かっている命を、天地金乃神様に任せて、天地金乃神様にもたれていないと、この感覚は理解できないかもしれません。

残念ながら信心していても病気になる、病気に心が囚われて、痛みや苦しみに負けて、心配や愚痴不足に支配されてしまう方が多いように思います。病気が天地金乃神様に近づくもとなり、自分の心の改まりや、新たな喜びや感謝の発見になれば、病気は、天地金乃神様からの大きなおかげだと、彼は思うのでした。

※楽しむポイントは、病気に囚われず、病気から神様のお働きをありがたく確認すること。

十二月一日のお祭日に、予定通りに入院をしました。午後一時までに病院に入れば良いので、祭典の時間を、午後二時から午前十時に変更してお仕えしてから、心置きなく病院に向かいました。

造影剤の検査から入院までの間に、彼は、信者さんの年祭や宅祭も、差し支えなくお仕えできたのです。彼は元気な時以上に、このご用を喜びの心でお仕えたのでした。

彼が緑内障を、お祭日の御徳でおかげを頂いてから、信者さんには口を酸っぱくして、お祭日の参拝やお礼を大切にすることを伝えてきました。それ以来、お祭日を大切にされる人の本人や家族が、入院や手術をはじめ、その他でも何か大事な事がある時に、お祭日に当たる事が多いのでした。お祭日を大切に思い、天地金乃神様に心を向けていけば、お祭日の御徳のお働きに助けられる。これは天地の道理だと、彼は思っているのです。

K教の教祖様の御言葉に、

「お祭日は神様のご恩を忘れないための大切な日である。丁度親の法事のようなものである。お祭日を忘れたらおかげが受けられない。何事も恩を忘れてはいけな」と神言があります。

彼は、一日にお祭日の安心の中に入院をさせて頂き、翌日の手術まで、いつもの信者さんのご祈念と、同室になって同じ日に手術を受ける方、そして手術をしてくださる医師の助かりを、



ご祈念させて頂いたのです。手術をするような時こそ、人の助かりを願うことが、我が身の助かりにつながるのです。

「天地金乃神様、手術をされる医師が、今日の手術は最高にうまく出来たと、満足して喜ぶような手術ができますように」

そう天地金乃神様に、お願いさせて頂く心になれば良いのです。

医師が満足をする手術であれば、結果として手術を受けた人も、最高のおかげを頂けたということになります。手術が上手くいくだろうか、無事に回復するだろうか、我が身の助かりを中心にお願いをするより、相手や周りの助かりに心を向けてお願いすれば、結局は、自分が立ち行くおかげとなることが、天地金乃神様の定められた天地の道理です。

※楽しむポイントは、必要な手術はできることをお願いして、医師や看護師が最高の仕事ができるように祈ること。

入院中に患者さんで、血管が出にくく注射針が入り難い方がおられました。何回もやり直されることに対して、看護師に大声で文句を言われるのです。彼はこの患者さんが、看護師が最高の仕事ができるように祈りながら、採血や点滴を受けられたら、きつと一回ですつと血管に

入るのにも思っていました。そうすれば、看護師も患者も助かるのです。彼は陰ながら、この患者さんの助かりを祈ったのでした。

彼自身は、ご縁ある人々のお祈り添えも受けて、無事に手術が終わりました。手術後の痛みもほぼ無く、順調に回復をして最短の入院日数で、予定より三日早く十二月十三日に退院ができたのでした。

退院の日に息子がレンタカーで迎えに来てくれたので、阿倍野の彼のおばあちゃんのお墓と、親教会にお礼のお参りが嬉しくできたのでした。また、毎月続いているご本部と信奉者奥城の参拝も、息子の運転で、差し支えなくおかげを頂いたのでした。

彼の場合、手術後に必要なことは歩くことでした。手術で背骨を尾骶骨から三ヶ所を削ったので、そこが弱くなっているから、しっかりと歩いて周りの筋肉を付け、その部分を補強してやるのが大切なのでした。彼は、そのためにリハビリを兼ねて、孫をベビーカーに乗せてT代と一緒に、毎日散歩をさせて頂くようにしたのでした。

たった十三日間の入院でしたが、病院の中の平らな廊下はスッスツと楽に歩けたのに、外の道はデコボコがあり、二・三日は上手く歩けずに、足もすぐく疲れるのでした。

T代から言われました。

「こうして毎日、先生と二人でW（孫）ちゃんを連れて、散歩して歩いている時間は、結婚し

てから二人で歩いた時間より長いわね」

そう言われてみると、確かに教会に二人で御用をしていると、二人で揃って外に出ることは、少なかつたなあと思つたのでした。彼が病氣をしたことにより、本来なら体験することが無かつた、夫婦と幼い孫の散歩という、三人のまたとない貴重な時間を過ごせたことは、天地金乃神様からの、素敵な時間のプレゼントのようにも感じたのでした。

また、彼は五十四才となつた自分の身体の状態を、手術前の色々な検査を受けたことで、改めて把握ができたことも、ありがたいことだと思ひました。

※楽しむポイントは、常にお願ひしていれば、神様が病氣の中にもおかげをくださっているので見つけること。

彼のこの時の身体は、血管の状態が八十才以上、骨の形、即ち骨格の変形は七十五才以上、股関節も少し悪いことが判りました。但し骨密度は、何故か二十代でした。

高血圧症に初期の糖尿病、肝機能も数値が高く、要注意だとの検査の結果でした。

骨の形のバランスが悪いのは、彼が三才頃まで股関節脱臼のためにギプスを嵌めていたので、歩かなかつたことが、ここにきて影響を及ぼしたようでした。人は三才までによく歩くことで、

将来のしつかりとした骨格が、バランス良く形成されるのです。正に三つ子の魂百までということですよ。

彼はここから食事の食べ方や内容を、改めていくことにも心がけるようになりました。天地金乃神様に、元気に御用ができるようお願いさせて頂く以上は、自分ができる努力を最大限にすることは、当たり前だと思っていたのでした。

彼は、人の病気には二種類あると認識していたのでした。

一つ目は、天地金乃神様と、生まれる時に交わした宿命による病気。例えば、彼の緑内障、また癌などの自身では予防が難しいもの。

二つ目は、自分に原因があつて引き起こした病気。例えば、暴飲暴食による嘔吐や下痢、腹痛。高血圧や糖尿病は遺伝の事の影響もあるかも知れませんが、本人の不摂生からなる事も多々あります。

一つ目の天地金乃神様から差し向けられた、宿命による病気ならば、天地金乃神様に、今までの命のあつたお礼を申し上げて、お役に立てることをお願いすれば、たとえ命の無い所でも、一度は助けて頂けるのです。

死んでもままよと思つて、天地金乃神様に身を任せることが大切なのです。彼が緑内障の時に、失明しても構わないと思つたように。

二つ目の自分に原因があるものは、天地金乃神様にお問い合わせをするなら、我が身で改まって我が身を助けられるようお願いいさせて頂く以外に道はないのです。我が身から起こした病気は、天地金乃神様もしかたがないのです。

※楽しむポイントは、自分の病気の原因がいずれにあるかを知って、神様にお問い合わせをすること。自身で改めるべきことがあるれば改めること。

彼はこの入院で色々な患者さんに触れたことで、新たなありがたいことを見つかることもできました。

同じ日に手術を受ける方に、同室になった若い人がいました。後で年齢を聞くと二十代後半でした。その方は、手首の痛みと痺れがありました。原因は背骨の首の部分の狭窄からでした。

実は同じ背骨の狭窄でも、上半身の手の痛み痺れの方が厄介なことを、この若い人と医師の会話で知りました。

人の首の部分には、色々な多くの神経や筋肉があり、手術をすることが難しいのです。だから彼のように、足の痛みや痺れの方が、医師からするとまだ手術がし易いのです。

その若い方は、半年前に一度手術をされたのですが、また再発をして再び手術を受ける状態

でした。ですから、今度の手術が上手くいくか、再発しないかを不安に思っていることが、付き添いに来ていた家族との会話で判りました。

彼は、若い方の立ち行きをお願いしました。そして、自分の痛み痺れが足であることにお礼を申し上げて、この手術で脊柱管狭窄症の根切れとなることを、天地金乃神様をお願いしたのでした。

この手術後に一つのジレンマが生まれました。脊柱管狭窄症の手術後は、とにかく歩くことが必要なのですが、彼は股関節にも問題を抱えていたので、長く歩くと股関節の方に、悪い影響がでる可能性があるのです。彼は歩くにも、上手くバランスをとらなければいけないのです。歩かないといけないが、歩き過ぎてはいけません。

この頃に、彼は病室が変わりました。三十代のサラリーマンと五十代の生活保護を受けている方、との三人部屋になりました。

このサラリーマンの方は、首を横に向いた時に、稀に意識がなくなることが病気の症状でした。その原因が判らずに色々な検査を受けておられる状態でした。つまり医師もまだ、このサラリーマンに病名を付けられないのでした。

彼はこの事実を知って、医師に掛かって病名が無事に判り、適切な処置をして頂ける事は、大きなおかげだと気づいたので。彼は病気の時に、こんな病気になったと嘆くよりも、病名

が付いて、手当を受けられることに喜び、お礼を申し上げるのが先だと判ったのでした。彼が退院の時にも、このサラリーマンは原因が掴めずにおられて、気の毒に思いました。

※楽しむポイントは、他の人の病気から、自分の身の上のおかげを知ること。

天地金乃神様が求められている、手本となる生き方はこうです。

『みな、天地金乃神の分け御霊を授けてもらい、肉体を与えてもらって、この世に生まれて来ているのである。そうしてみれば、この世を去るのに苦痛難儀をするのは、人間の心からのことである。天地金乃神からお授けくださった体がこの世を去る時、痛いかゆいがないよう、ただ年病みのゆえというように長生きをし、孫子まで見て、安心して死ぬのが、天地金乃神の分け御霊を頂いている者のすることである。天地の道理にあう生き方を守れば、末を楽しみ、安心してこの世を去ることができから、若い時から信心をして元気に働いておいて、そのようなおかげを受けるが良い』

『天地金乃神の心になつた者が少ない。財産と人間と健康とがそろって三代続いたら、これが天地金乃神の心になつたのである。天地金乃神の心になわないと、財産もあり力もあるが、健康でない。健康で賢くても財産をなくすことがあり、また大切な者が死んで、財産を残

して子孫を絶やしてしまう。天地金乃神のおかげを知らないから、互い違いになつてくる。天地金乃神の大神を知れば、無事健康で子孫も続き財産もできる」

K教の教祖様は、正しくこのおかげを實際に残しておられるのです。

K教の教祖様は七十才で、明治十六年十月十日に世を去っています。

この明治十六年に入ると、教祖様はお参りをされた何人かの方に、ご自身が世を去ることを告げられて、その日を伝えられています。その伝えられた信者さんとの遣り取りと、世を去れる時の様子を、K教団が発行している物から抜粋にて紹介させて頂き、そこに彼の解釈を付け足すことにします。

ある信者さんが、

「あなたは、何時まで生きられて、人をお助けになりますか」

と尋ねた事があった。それに対して教祖様は、

「いつまでも、と思つてもみるが、体があれば、時に痛いかゆいということもあつて、思うように願う人が助けられない」

と答えておられます。また、ある人が、

「あなたがお隠れになりましたら、この道はどうなりましようか」



と尋ねると、

「心配することはない。形を隠すだけである。体があれば、世の人々が難儀するのを見るのが苦しい。体がなくなれば、願う所に行つて人々を助けてやる」

「この方も、今までは形があつたから暑さ寒さも感じたが、これからは形を去つて真の神になるから、一目にすべての者を見守ることが出来る。形がなくなつてからは、来てくれと言う所へ、すぐに行つてやる」

つまり、教祖様は、天地金乃神様から体を頂いている者に、不死不老ということは無い、生きていればやがて衰え身を無くすことになる。しかしそれからの方が、一層に人々を助けることができる、そう教えてくださったのだと、彼は思うのです。

教祖様は、死んだ後のことについて、お尋ねした方に、

「生きている間も、死んだ後も、天と地はわが住みかである」

「人間はみな、おかげの中に生かされて生きている。人間はおかげの中に生まれ、おかげの中で生活をし、おかげの中で死んでいくのである」

「この世に生きて働いている間に、日々安心して正しい道さえ踏んでいれば、死んだ後のことは心配しなくてもよい」

「死ぬというのは、みな天地金乃神様のもとへ帰るのである。魂は生き通しであるが、体は死

ぬ。体は地に帰るが、魂は天地金乃神様から授けられて、また天地金乃神様の所に帰るのである。死ぬというのは、魂と体とが別れることである」

「天地金乃神様へのご恩返しは死んでからせよ。生きている間は、天地金乃神様のお世話になれ、世話になるのが人間である。死んで御霊になってから、天地金乃神様に、お仕えすると言う心になっておれ」

また、ある方が、

「教祖様、宗教がたくさんあつていろいろの教えがありますが、死んだら、魂はいろいろに別れるのでしょうか」

そう伺うと、教祖様は、

「そういうことはありわない。死んだ者の魂は、天地の間に舩が飛ぶように遊んでいるので、どこへ行くものでもない。わが家の内の霊舎に居るし、わが墓場に体をうずめていることからすれば、墓場と霊舎とで遊んでいるのである」

つまり、教祖様は、

『人間は死んだ後も、天国や地獄などの空想の世界に行くことはなく、魂（御霊）として、天地金乃神様に、この天地の中で、お世話になり続ける存在である』

そのように教えておられるのだと、彼は受け取っているのです。

教祖様は、ご自身が世を去る日を、

「旧暦と新暦とがあるが、先で両方が九日十日と連れ合っていく時がある。その時には神上がりする」

と伝えておられていました。その日が、明治十六年十月十日でした。

その年の夏ごろから、教祖様の体調に、様々な不調がみられるようになります。その自身の体に現れる不調に対して、天地金乃神様に実意にお願いをされ、天地金乃神様からの仰せ通りに対処して、おかげを頂いていかれたのです。

その時の事を、教祖様は、

「ご飯を食べない日はあっても、一日もお広前のご用には差し支えがなかった。安政四年に天地金乃神様のご用をするようになってから、二十七年このかたのこと」と書き残されています。

教祖様は、お広前のご用を最も大事にされて、どのような体調であっても、天地金乃神様からの御指図を受けて、休むことなく続け得たことを、無上の喜びと感じておられたのでした。

教祖様は、九月二十一日の早朝に、天地金乃神様から、

「人民のため、大願の氏子を助けるため、身代わりに神がさせる」

とお知らせを頂かれています。

教祖様のひれいのために、天地金乃神様が下げられたお言葉でした。教祖様は、ご自身が死んだ後、より一層に人を助けることができるように祈り望んでおられていたのです。

天地金乃神様が、その思い願いを叶えてやると、約束をしてくださった、とてもありがたいお知らせだと、彼は受け取っているのです。

彼が今の世に、自身が練習台となり『神上がりの道』を残すことにより、すべての人がその道を願い踏む気になれば、この世を去る時に、喜びの心で安心ができおり、しかも霊神としての立ち行きを、確信しているようにしたい。

そして天地金乃神様が、唯一、人の生き死にを定めておられることを証明したい。そう強く願う彼の大願を、教祖様も応援してくださいということですよ。

※楽しむポイントは、神様の願いを、我が願いとすること。

「身代わり」という言葉は、一般には、人の痛みや苦しみをかわってわが身に引き取る時や、人の背負うべき責任や罪を、その人に代わって引き受ける時に用いる言葉です。いわばマイナスのイメージがあります。しかしこのお知らせで、天地金乃神様が用いられた、「身代わり」というお言葉には、これから未来を生きる人に、大きな勇気と希望を与える意味で使われてい

ます。

「大願の氏子を助けるため」なのです。この身代わりは。つまり、後々に生きる人の大願が叶う、手助けをするための身代わりなのです。

ここで問題になることが、「大願」の中身です。健康でありたい、お金持ちになりたい、地位や名誉を得たいなどが、大願の内容でないことは明らかです。この「大願」とは、教祖様のように人を助けたい、世のお役に立ちたいというような願いを指しています。

後世で、このような願いを持つて生きる人が出てきた時に、天地金乃神様と教祖様から、大きな後押しが確実に受けられるということなのです。

ですから、人が世を去る時の、最後の助かり安心と霊神となる立ち行きの道を残そうとする、彼の大願を叶えてくださると信じているのでした。

それが、彼の伝える「神上がりの道」なのです。

※楽しむポイントは、自身がこの世を去る時に、喜びと安心ができていて、霊神としてお役に立てるように願うこと。

教祖様は、お取次の座にお座りになることを、九月二十七日をもって終わられたのでした。

ご子息にお取次ぎの座に座る事を託され、ご自身は控えの間に休まれたのでした。お食事は、お粥の湯、おかずは百合根を煮て卵とじをしたような物を頂かれ、最後まで便所には、人の手を借りることなく行かれたのでした。

そのような状態で十月十日の早朝を迎えられ、傍についていた妻と娘達に見守られ、眠るがごとく世を去られたのです。

その直前に、「もう何時か」と尋ねられています。それは教祖様が、自分の神上がりする時刻を、「十日の朝日の昇とともに」と伝えていたので、それを確認されたのでした。家族が、

「今、朝日がさし始めました」

と告げた時に、教祖様は何の苦しみや不安もなく、安らかに神上がりをされたのでした。

神上がりされた十月十日は、予てから、天地金乃神様からご神命により定められていた、教祖様自身の中にある、『神心』を祀るお祭日とされていた日であったのです。しかも、その前日が、天地金乃神様が命じられた、教祖様への、最後の百日修行の成就日なのでした。

生きている間は修行中であると言われていた、教祖様に相応しい生き様であられたと、彼は思うのでした。その後、教祖様のご家族は、子孫繁盛のおかげを頂かれ、今は六代目に当たる方が、教主様となられています。そして親族の方は百人以上を超えているのでした。

まさしく前記した通りの、天地金乃神様の御心に叶ったおかげを、教祖様が受けておられる

のです。そのことを今に生きている彼が、確かに確認をしているのでした。

※楽しむポイントは、人は身体のある間が、修行ができるチャンスであると知ること。

彼の五十四才でのこの入院が、天地金乃神様から彼に向けられた大きな天啓となり、彼のその後の、生き道の目標を決めることになったのです。

入院は彼に、自由な時間を与えてくれたのです。彼は教典や教祖様の生き様を書いたものに、ゆつくりと目を通しました。そして、世界の三大宗教の開祖のお釈迦様・キリスト様・ムハンマド様の生き様と、改めて比較検証を試みました。

その時に、彼が真っ先に思ったことは、全ての人に命を授け、そのご神体である天地の中に、人を生きさせてくださっている天地金乃神様が、人にどんな生き様を求めておられるかということでした。(二二八ページ 天地金乃神様が求めておられる、手本はこうです。・・・を参照)  
※楽しむポイントは、神様がどのように人を思い導こうとされているかを知ること。

ここから彼が拝察したお釈迦様・キリスト様・ムハンマド様の生き様と、世を去る時の在り

方と子孫について、彼の思う所を少し述べておきます。先に断つておきますが、彼の個人的な捉え方です。

先ずはお釈迦様です。

お釈迦様は、紀元前五六〇年から紀元前頃に存在したと言われています。正確なことは判明していません。インドの地に、釈迦族の王子として生まれました。母親と誕生直後に死別をしています。

成長したお釈迦様は、十六才で結婚をして家庭を持ち、男の子を一人授かっています。

お釈迦様は王子ですから、自身は非常に恵まれた生活ができていたのです。しかし、当時の庶民は非常に貧しく苦しい生活をしていました。それを見たお釈迦様は、人々を助けたいと思い、自身も人間にとって必然的な、生老病死にまつわる苦の問題に深く悩み、ついに二十九才の時に、世俗の生活を放棄し、家族を捨てて修行の生活に入るのでした。

K教の教祖様に、ある人が、

「しばらくの間、山に入って修行したいと思いますが、いかがなものでしょうか」と尋ねた時に、

「それは結構である。しかし、何もわざわざそんな山に行かなくても、自分の心の中に山をこしらえて、その中で修行をしたらそれで良い」



そう答えておられるのです。

天地金乃神様から、釈迦族の王子として生まれる宿命を与えられたなら、その立場を大切にされる中で修行に取り組み、悟りを開くことが正しかつたのではないかと、彼は思うのです。その場が、お釈迦様に対して、天地金乃神様から、修行しなさいと与えられた所だからです。人は生まれた所が、最初の修行生活をする場所だと、天地金乃神様が定めておられているのです。

お釈迦様は、自身の修行のために親不孝と妻子を捨てる、という決断をされました。結果的にお釈迦様の子孫は絶え、釈迦族は滅びることになりました。天地の道理に合わぬ生き方をしたために、起きた悲劇だと、彼は思うのです。お釈迦様は命の捉え方においても、全ての命は平等だと捉えて、動物を殺生して食べることはいけないことだと説きました。

教祖様は、

「他の草木や動物は、人の命のために天地金乃神様が作り与えたものである。何を食べるにも飲むにもありがたく頂く心をわすれるな」と神言されています。

つまり、神様を拝礼することのできる人の命と、できない草木や動物の命は、別物なのです。無論、無駄な殺生や食べ物を粗末にすることは、天地の道理に反することになるのは当然です。

が。

女性に対する捉え方も、お釈迦様とK教の教祖様では全く違います。

K教の教祖様は、

『女は神に近い』、『女が良くないと家はもたない』

そのようにおっしゃって、女性を尊び用いておられます。対してお釈迦様の教えでは、

『女は不浄で五障がある』とされていて、男性よりも下で助かり難い存在になっています。本当にお釈迦様ともあろう方がこのように言われたか、彼は疑問に思うのです。もつとも、女性を男性より下に置くことは、キリスト教やイスラム教でも同じなのです。人を助けたいと思われた、ご三方の御心は尊いとは思いますが。

次にキリスト様はどうでしょうか。

キリスト様の助かりのメインは、キリスト様が人の罪を背負って、十字架にかけられることにあります。

しかし、人の命を与えておられる天地金乃神様は、他の人の罪や行いに対して、身代わりとして命を奪うことはないのです。つまり、キリスト様は、自身の時節を待たない無理な行動によつて、処刑をされた、そう彼は解釈をしているのです。

実は、K教の教祖様も、人々が助かりを求めて集まりだすと、当時の山伏や宗教者から嫉妬をされて、お供えされた毒饅頭で殺されそうになるのです。

しかし、天地金乃神様から教祖様に、食べるなどお知らせがあり、難を逃れておられます。ある時は、お取次ぎの座にお座りになっていた教祖様に向かい、教えに対して難癖をつけて、刀の抜いて振りかざした人がありました。けれども平然としておられる教祖様の威徳に押されて、逃げ帰ることになったのです。

その時、教祖様は、

「人がなんぼ命を取ろうとしても、天地金乃神様がお守りくださるから、差し支えはない」  
そうおっしゃっています。

また、政府から、布教の差し止めを命令されると、天地金乃神様から労いの言葉を受けながら、黙ってこれに従い、再び布教が出来るまで、耐え忍ぶ生活を送られたのでした。物事に争うことなく、道が開ける時節を願っていたのでした。

キリスト教には、最後の審判や、世紀末思想があります。また、人に罪の意識を植え付けて、神を恐れさすようなところがあると思います。

そしてキリスト様に縋らない人は、地獄に落ちて助からない、といふように説いています。

彼は、天地金乃神様が、

『神と人とが仲良くするのが信心である、神を恐れるようにすると、信心にならない』  
と神言をされているところから、神様への恐怖を抱かすような言動は、良くない事だと思  
う  
です。

天地金乃神様は、人がお願いすることにより、すべてにお守りを頂き、人が自由に生き生き  
と嬉しくありがたく生活することを望んでおられるのです。

天地金乃神様は、世の中は少なくとも、億年は人も食べ物も切れることなく、続いていくと  
明確にされています。

宗教には往々にして、他の宗教を邪教だとして認めないことがあります。

ところが天地金乃神様は、お釈迦様もキリスト様も含め、どの開祖や宗祖もみな、自分の分  
け御霊を与えた、可愛いわが子である、という内容を神言されています。

「その子どもどうしが、<sup>そし</sup>誹りあいをするこことや争うことを、どうして親が喜ぶであろうか」  
というように嘆いておられるのです。

そういう助かりのシステムを、天地金乃神様から与えられて、私達はこの天地の中で生かさ  
れています。

さて、最後にムハンマド様です。

ムハンマド様の行いで、彼が一番驚いたことがあります。イスラム教はムハンマド様を手本にして、一夫多妻が認められています。その中の一人の妻の年齢が九才の時に結婚していることに、彼は驚きました。しかも、その時のムハンマド様の年齢が、すでに六十才近いのです。養女にするならわかりますが、六十才の男が九才の子どもを妻にしてはダメだろう、と彼は正直に思ったのでした。

現在の日本人の感覚なら、明らかに幼児虐待になる事案でしょう。ただ、この時代のこの地域では、当たり前であったのかもしれませんが。

皆さんも、これでお判りでしょう、正しいという判断は、その時に力や権威のある人が言う事になるので、時代や生活の在り方で変わるのです。いつの時代にも不変な正しい事は、天地金乃神様が定められた『天地の道理』だけなのです。

ムハンマド様は、自身の立ち位置を、この世の最後の予言者であると宣言したのです。

だから自分の言うことが、最後にして最高の神様の教えである、と説いて他の宗教、特にキリスト様より優れているとした所から、キリスト教との争いが起きることになったのです。そこに、今に続く争いが生まれたのです。

※楽しむポイントは、どの神様にお願いしても、人の心には、天地金乃神様の分け御霊の神心があるので、一心に祈れば自分自身を助けることができること。

人には誰でも、病気や事故災難、そして、避けることが出来ない死に対する、恐れや恐怖心があると思います。

その弱점에、神様を持ち出して付け込む宗教が、世の中にどれほど多いか。

天地金乃神様は、分け御霊として魂を与えた、可愛い我が子の、助かりを願うばかりなのです。人は先のがわかりません。目の見えない状態で、道を歩いているのと同じです。だから不安に思い心配がでるのです。

天地金乃神様に、人がお願いすることは、目の見えない人が、手を繋いでもらい安心して歩けることと同じです。

※楽しむポイントは、我が力で生きると思わずに、常に神様と共に生きるように思い願うこと。

天地金乃神様は、人に断食などを求めてはおられないのです。食べて飲んで体を大切にして、よく働き世のお役に立つことを望んでおられるのです。天地にある食べ物に、人が食べていけない物はないのです。何かを食べてはいけない、という心がかえって、天地金乃神様には失礼

なことになります。だってそうでしょう天地金乃神様が、人の命のために作り与えてくださった物に、人がケチをつけているようなものだからです。

人でも、自分が用意した物が、ダメだと言われたら良い気持ちにはならないでしょう。それと同じです。

※楽しむポイントは、食物は人の命のために、神様が作り与えてくださっているので、何でも適量をありがたく頂くこと。

天地金乃神様の分け御霊を頂いた人の中で、人を助けたいと思い、その働きをした人は、一つ神となるのです。天地金乃神様が始まりですが、その他の神は年々に増えていくのです。

天地金乃神様は、人を教えて縛り、支配することも窮屈な生活をさせようとも、まったく思っておられません。天地金乃神様は、人が天地の中に、嬉しくありがたく働くことを楽しみに、天地の道理というルールの中で、人をお守りくださっているのです。

※楽しむポイントは、人間は天地の中に何をすることも、嬉しく楽しく遊ばせて頂く心であること。

彼の心の中に、自分を助けてくださる天地金乃神様のイメージが、一層にハッキリとしてきたのです。

彼はこの後、天地金乃神様と霊神と生きている人の関係で、重大なことに気づくのですが、それは次の彼の入院を待たなければなりませんでした。

信奉者奥城の建立、ご神前・ご霊前の新装、お広前の改装で引き戸を指詰めしない物に、照明器具をLED電球に入れ替え、壁紙のクロスの変更など、開教九十年記念大祭に計画したことが順調に進められていきました。これらの費用には約二十万円掛かりましたが、今回も寄付箱を置くだけで差し支えなく、全ての必要な支払いが出来ました。

※楽しむポイントは、お金の使い方、心くばりをして生活をしていけば、必要な時に必要なお金はちゃんと、神様が調べてくださること。

信奉者奥城の建立については、寺院の経営するものは沢山あり、宗派を問わないというのですが、彼はそれを避けたくて公営の物を探していました。



平成二十二年のお正月でした。新聞の折り込み広告で奈良県の三郷町が管理する墓地のチラシが、彼の目に止まりました。距離的にはY教会から一時間内で行ける所にありました。その墓地の購入条件に、管理費を一括して納めれば、後の費用は一切掛からないという事がありました。

彼は後の人に負担をかける事なく、永久にY教会の信奉者奥城が存在できる、理想の場所だと感じました。

ロイヤルガーデンと呼ばれる場所は、他の所と違い墓地の区画が大きく、一つの区画に専用の水道蛇口が付いていました。また、お墓を掃除する道具を収める、専用のロッカーもありました。後々にお墓参りをした時に、これは大変便利なことでした。

この信奉者奥城には、K教の一番大切な教えである『天地書附』を、墓石に刻んだ独自のデザインを、彼が考えて建立したのです。彼がなぜ、信奉者奥城の建立を考えたかと言うと、信奉者の中に子孫が女性だけである方や、子どもが居ない方が割合多くおられたのです。

その方たちのやがて直面するであろう、お墓の管理問題や、ご自身のご遺骨の納骨場所の心配がないように、Y教会が用意しようと考えたのです。Y教会の信奉者奥城があることにより、天地金乃神様の元に帰られた御霊様が、生き通しになる道を残しておこうとも思ったのです。

※楽しむポイントは、生きている人が、誰か一人でも死んで霊神様になられた方を拜んでいれば、その方は生き通しのおかげを受けるということ。

彼はY教会の信奉者奥城が建立された二年後に、ご神前・ご霊前の新装と、その他のお広前の諸々の改装を行いました。

ご神前もご霊前も、彼が独自の発想で、自らが考えている形にする考えでした。ご霊前は出入り神具店に、特注の物を作って頂くことにしたのでした。神具店に頼んだご霊前は、彼が思い描いた通りの物ができました。

しかし、この時に仕事を任せた工務店のご神前の方は、ご霊前よりかなり簡単な作りであったのに、寸法に誤りが二箇所ありました。

また、途中で大工さんからの指摘で、柵の部分強度が足りないと言われ、形を変更することを余儀なくされたのでした。

彼は、ご神前をすべてやり直させようかと思いましたが、工期が長くなること、材料に無駄になることなどを考慮して、手直しをして事を治めたのでした。

柵の強度を得るために二本の柱を壁に立て、寸法間違いは長い部分を切り取って、最初から

そういうデザインのようにしたのです。

この工務店の手違いは、彼以外に他のどなたにも迷惑や不満が出ることではない事でした。従って彼が思い分けて納得すればよいことでしたから、天地金乃神様に、最初と違うことをお断り申し上げて、現在のご神前として納めたのでした。

※楽しむポイントは、自分の他に迷惑が掛からない事なら、思い分けをして納めること。

K教のみ教えに、

『人は生きている間に神徳を積み、生き通しになることが大切である。生き通しとは、死んだ後に、後々の人が拝んでくれることである』

つまり、御霊様になった人を、後に生きている誰かが忘れる事なく、

「何々の霊神様、天地金乃神様にお守りを頂かれ、霊神様としてお働きください」

そうお願いする人がいることで、霊神様としてのお働きをしてくださるのです。

勿論、「天地金乃神様、何々の霊神を、霊神として引き立て用いてください」と、天地金乃神様に、お願いすることが先に必要ですが。それにより初めて、身体が消滅して、霊となった人が、霊神様として生き通しになり、生きている人のお役に立てるようになるのです。

最近の世相に於いては、親先祖の御霊様を大切に思うことなく、年祭（法事）ごともせずにお墓参りなどもしない人が増えてきているように、彼は感じていきます。事実、J Rの忘れ物に、昔は皆無だったご遺骨があり、それが年々に増えているのです。

また、高齢者の孤独死が増える中で、身元が判つても引き取りに來られないために、市町村が処分せざる負えない事態が、増えているデータなどもあります。

※楽しむポイントは、親先祖を大切にしないと、自分の運命や子孫の宿命を、悪くすることに繋がる行いになること。

私たちが生かされている世界には、天地金乃神様が定められている『天地の道理』があるのです。人が天地の道理に合わない生き方をしていると、悪いめぐり合わせとして、後々に難儀として表れてくるのです。

天地金乃神様は、

『神は、人の親であるから、人のすることは何でも許してやるが、天地の道理が許さぬ時はどうする。天地の道理が許さぬ時は、神もしかたがないぞ』  
とまで神言されています。

天地の道理がどんなことかというのと、例えば人を憎み実際に殺せば、国の法律で裁かれます。でも心の中で殺したいと思うだけでは、国は裁きません。しかし、天地金乃神様が定めた天地の道理では、心の中で殺したいと思つたことが罪になるのです。病人を見て、心の中でこの人はもう助からないと思うことが、天地の道理では罪になるのです。

商売でも、人が信用していることに付け込んで、高い値段を請求して儲けることは、法律では罪に問われない上手い儲け方かもしれません。しかし天地の道理では、人に不義理をして財を作れば罪になり、子孫が難儀をするものになるのです。

物を粗末にすること、人を軽く見ることなども、天地の道理では罪になるのです。それを知らないがために起きている難儀がたくさんあると、彼は常々思っているのです。彼の知る天地の道理の中に、『何々あつての存在を尊ぶ』ことがあるのでした。

例えば、

『天があつて地が存在し、地があつて天が存在する』

『神があつて人が存在し、人があつて神が存在する』

『夫があつて妻が存在し、妻があつて夫が存在する』

『親があつて子が存在し、子があつて親が存在する』

『親先祖あつて子孫が存在し、子孫があつて親先祖が存在する』

とすることがあります。つまり、一方があるから、他方の存在が生まれる関係性を示しているのです。そのことを自覚して、自分の存在を生み出してきている相手を『尊ぶ』ことが、自身を活かすことになり、良い運を引き寄せることになります。

反対に、自分の存在を生み出してくれる相手を、粗末にしたり軽く扱ったり、文句や不足をぶつけていると、自分自身に跳ね返り、自身の立場がなくなり良い運を逃すことになります。

K教のみ教えでは、

『しんじんを信心と書くのではなく、神人と書く』とあります。

※楽しむポイントは、神と人の関係は『神あつての人、人あつての神』であるということ。

K教の教祖様は、天地金乃神様に対して、

『神を神と立て仰ぎ、神と用いる』

向かい方を、実意丁寧に貫き通されたのです。つまり天地金乃神様に対して、本当に尊び敬う実意丁寧なあり方だったのです。

そして、この教祖様の在り方によって、

『この神は昔からある神であるが、この度、この方（教祖様）があつて、神は初めて世に出る

事ができた。神からの恩人はこの方である』

とまで言われる存在になられたのでした。

彼が、最初にそうであったように、天地金乃神様に生かされているお礼も言わずに、天地金乃神様に対して、苦しい時の神頼み的な扱いであるか、使用人のように、あれをしてくれ、これをしてくれと、お願いだけする存在にしている人が、あまりにも多いのではないでしょうか。

もし、そうなら天地金乃神様を、尊び敬うように改めて、天地金乃神様を信じきり、天地金乃神様からも、信じられる人になって欲しいと、彼は思うのでした。

※楽しむポイントは、神様に対して、常に敬い尊ぶ心であること。

大学を出て、直ぐにK教学院に入った彼の息子は、約一年の修行生活を無事に終えて、平成十九年六月にK教の教師になりました。

K教の教師となった息子は、本部職員としてご用を勤めることになり、後にハワイでのご用を命じられたのでした。

彼とT代は、息子が早く家庭を持つことを強く望んでいたのです、天地金乃神様に、息子が生まれた時からずっとお願いをしてきたのです。

彼の息子が結婚した年は平成二十一年でした。その年はK教の立教百五十年のお年柄でした。天地金乃神様に、普段から願いをかけている者にとっては、大きなおかげが成就する年だったのです。

天地金乃神様は、彼とT代の願いを、彼の息子がハワイに行く前に、見事に成就させてくださったのでした。

※楽しむポイントは、子どもが生まれたら、その時から良い伴侶とのご縁があるようお願いすること。

この頃にもう一つ、おまけとも思えるおかげを、天地金乃神様から頂いていることに、彼は気づいたのです。

それは、彼が脊柱管狭窄症の手術の後で、この時期に受けたY市の無料の健康診断で判りました。肝臓の検査の数値が手術前より格段に良くなっていたのです。手術前は数値が正常値の範囲から上にはみ出ているのですが、それが正常値内に収まっていたのです。

それ以降、彼は毎年一回無料で受けることが出来るこの健康診断をしています。ずっと正常値に収まるおかげを頂いているのでした。



天地金乃神様は、脊柱管狭窄症の手術によって、彼の肝臓もついでに良くしてくださったのでした。

※楽しむポイントは、神様からは、知ったおかげより知らないおかげもたくさん受けているし、後々で気づくおかげが多いこと。

彼が脊柱管狭窄症の手術をした一年後の平成二十三年十二月二日に、今度はT代が危うく命を落としかけて、入院する事態となったのです。

T代は倒れる前日の、一日の朝から少し具合が悪そうでした。前日の十一月三十日には、難波に買い物に出るくらいだったのですが。

それでも一日はお祭日ですから、祭典でのお琴の御用は務めたのです。しかし、かなりT代はしんどかったようで、彼の父親を祭典後に、いつものようにもてなすことができなような状態になっていました。一日の朝から何を食べても飲んでも、全て嘔吐する状況になっていたのです。

彼は天地金乃神様に、お願いをしてから言いました。お祭日に起きて来ることは、すべて天地金乃神様からのおかけであり、何かのメッセージなのです。

「T代、病院で診てもらった方がいいと思う」

「ううん、大丈夫。明日には良くなっているから」

そうなんです。T代は大の病院嫌いなのです。

彼と結婚してから歯医者さん以外は、お産の時しか病院に掛かったことが無かったので。まあ、元来、丈夫な身体であったと言えますが。

「そうか、でも明日も具合悪ければ、病院に行きや」

「大丈夫。大丈夫。明日には治るから」

そう言っただけなんです。翌日は起き上がることができないようになったのです。相変わらず口に入れた物は嘔吐するのです。

「T代、これはあかん、お医者さんに診てもらわな」

T代も流石に観念したようで、

「わかった。行くわ」

と返事をしました。

T代が納得したので、彼は父親に電話をして教会の留守番を頼みました。

父親が来てくれたら直ぐに出られるように、T代を着替えさせて寝ていた二階から、一階まで移動させたのですが大変でした。T代は身体に力が入らない状態になっていたからです。

ようやくの思いで玄関まで降ろしましたが、そこで横になって動かなくなりました。

「さて、どうしようか。これではタクシーに乗せて病院へ行くのも難しいぞ。」

彼は頭の中で考えていました。

正にその時、タイミンク良く信者さんがお参りに来られたのです。その方のご主人は医師でした。

玄関で横たわるT代を見られて、

「先生、直ぐに救急車を呼びましょう。救急搬送されると何処の病院に運ばれるかわかりませんから、主人に電話して、市民病院の知り合いの先生に診て頂けるようにしましょう」

そう言われて、テキパキと行動をしてくださったのでした。

やがてピーポー・ピーポーとサイレンを鳴らして、教会の駐車場に救急車が到着しました。

救急隊員が入ってきて、玄関で横たわるT代を見て、

「どうされましたか」

その問いかけに、彼は答えました。

「家内が身体に力が入らない状態で動けないのです。熱とか痛みはないようです」

「それでは取り敢えず救急車に入れます」

T代は救急車の中に、担架に乗って運ばれました。

父親が来てくれるまでの教会の留守番を、その信者さんをお願いして、彼も救急車に乗り込

みました。

救急車に乗り込む前に、T代が彼に、小声で話しかけてきました。

「先生、寒いから上にかけるものを持ってきて」

「わかった。直ぐにとつてくる」

二階に上がりタオルケットと持って行くと、それを見たT代が、怒った顔で言いました。

「それと違う。キティーちゃんのやつを持ってきて」

この言葉を聞いて、彼は哑然として、内心で（おいおい、この非常事態に何を言う）と思いました。この言葉を聞いて、彼は哑然として、内心で（おいおい、この非常事態に何を言う）と思いました。

キティーちゃんのタオルケットを探し出して掛けてやると、T代は力の無い声でしたが、嬉しそうな表情で、「ありがとう」とは言ってくれました。

さて、救急車に乗り込んだものの、何故かいつこうに出発しません。受け入れてくださる病院も、Y市民病院と決まっているのに。救急隊員の方が、T代の血圧を測ろうとされるのですが、測れないのです。

彼は医学的な事は知りませんが、隊員の非常に焦っている様子からすると、それはT代が、かなり良くない状態であることを示しているようでした。救急隊員は、T代に言葉をかけて色々なことを質問して、意識がしっかりしているか確かめていました。

幸いに意識はすっかりしてしまいました。T代の状態の確認をして市民病院に伝え終わると、ようやく救急車は動き出しました。

彼が、後から医師より受けた説明では、

「奥さんは脱水症状になっておられて、もう少し運ばれるのが遅ければ、命も危ない所でしたよ」

と言うことでした。T代は胃潰瘍になっていて、それが胃の入口の所であつた為に、胃に蓋をする状態になり食べた物が胃に入らず、だからすべて口に入れた物を嘔吐して、それで脱水状態になつたのです。

T代は入院し、点滴を受けて、薬で治療をして頂いたのです。若い医師でしたが、親切に説明して、治療に当たってくださいました。手術をすることも無く順調に回復して、T代の強い希望もあり、十日程の入院で、無事に教会に戻りました。

T代にとってこの入院は衝撃的なショックだったようで、教会に戻るなり、お取次ぎの座に座つた彼に、

「先生、色々お世話になりました。ありがとうございます。これから先ではT代は、絶対に入院はしないので、神様に先生からお願いしてください」といきなり言いました。

「入院で何か嫌なことがあったんか？」

彼が問うと、

「うん、嫌な事というか、病院の食事が苦手やし、好きな時に好きな物が食べられない。それにお風呂も毎日はいれないし・・・」

入院すれば、誰でも守らなければ仕方がないルールですが、T代には病気の苦痛よりも、このルールに縛られることが、耐えられない苦痛であったようです。

※楽しむポイントは、神様にお願ひしていれば、病気で治療が必要なら、その段取りをしてくださること。

T代は退院したものの、五十四才ということもあり、中々元の体調には戻ることができないようでした。そこに、T代の入院を知った息子家族が、何かお役に立てればと、十二月半ばに帰国をしてくれたのです。K教団の海外派遣者は、四年の任期中に一度帰国が出来るのです。それを利用してのことでした。

思わぬ形で、お正月を初めて息子家族と過ごせたことで、彼の父親もひ孫に会えて大変喜んでくれました。

彼とT代は、この時期にある方のことに悩んでいて、その解決をご本部のお取次の座に求めたのでした。

三月末に、彼はご本部のお取次の座の前にいました。その時にお取次の座には、教主様の御手替わりの方が座っておられました。彼はどうか、教主様がお出ましになるまで待つかと思案をしました。しかし、天地金乃神様をお願いして、彼はお参りをしているのです。お取次の座にお座りくださる方が、天地金乃神様から、今の彼に、差し向けられた方だと思いませんでした。

彼がお届けを始めようとした時、お取次ぎの座にお座りになっていた方が、

「今、教主様と代わりますから、それからお届けをしてください」

正に見事な素晴らしい、天地金乃神様からの、ドンピシャなご対応です。

暫く頭を下げて待っていると、教主様がお座りになりました。彼は悩んでいることを手短にお届けした後、頭を下げて、教主様のお返事を待ちました。数十秒いや一分ほどの間があったでしょうか、教主様がスッと御神米をお下げになり、「どうぞ」と短く小さな声で言われました。それっきり教主様に、後の言葉も動きもありません。

次のお言葉を待つて、暫く頭を下げていた彼が、もう一度、大丈夫かをお尋ねしようと、顔

を上げたタイミングで、教主様がお下げされたご神米に手を触れられて、「どうぞ」と言われたのでした。これで彼は、言葉を出せずに、下げられたご神米を頂いて、お取次の座の前から退いたのでした。

彼はスッキリとしない思いで、お広前の椅子に座っていました。ご神前にある天地書附をボーツと見ていると、ふと頂いたご神米が気になりました。

ご神米の外包みを開くと、六体のご神米がありました。これを見た瞬間に、彼は目に涙が溢れてきたのです。

「ああ、大丈夫だ。」

そう悟って嬉しくて感激した涙でした。

彼は、お供えの名前に、自分とこの方の名前を書いたのです。この方は教師ではないのでした。

K教の教会長ならどなたでも判ることですが、ご神米は、教会長は三体、教師は二体、信者さんは一体を、お下げになることが通常です。ですから、彼は四体が入っていると思っていたのです。これまではそうでしたから。

ところが、この時は六体が入っている。これはこの時にお届けした方が、教会長の扱いをして頂いたことだと、彼は解釈をしたのでした。



彼の心は、これでスッキリとしたのです。彼は教主様にお礼を申し上げて、ご本部を後にして、喜びに満ちた心で大阪に戻ったのでした。

※楽しむポイントは、K教のご本部のお取次には、このようにして助かる場合があること。

おかげを受けて予定通りに四月五日、息子家族は関西国際空港から飛び立ちました。

彼の息子は、ハワイにご用に向かう前に、アナログしかないY教会に、パソコンができるようにしてくれていました。それは、パソコンがないと息子自身が不便であることと、彼とT代がハワイに居る孫と、パソコンのスカイプ画面でお互いに顔を見て、話ができるようにするためでした。

これによりハワイに居る孫の姿を定期的に確認ができ、無事に元気に育って行く様子を、楽しく見る事が出来るようになったのでした。

パソコンが置かれたことで、毎月のY教会の会報が、パソコンで自分自身が打った原稿に替わったことも、大きなおかげとなりました。それまでは、彼の手書きの原稿を、信者さんにパソコンで打ち直してもらっていたのでした。自身が打つことで、レイアウトの変更が自由にできることで、会報が作り易くなったのでした。

※楽しむポイントは、神様のお働きに、何事も無駄事はないということ。

T代の体調はその後回復しましたが、何故か食事の内容が一変しました。

今までのパンやケーキなどから、野菜（玉ねぎ・人参・南瓜）や果物（グレープフルーツ・柿・桃・みかん）が主流になり、魚のアラや豚肉・鶏肉を食べるようになったのです。飲み物の牛乳やコーヒーは、これまで通り良く飲んでいました、お米は相変わらずあまり食べませんでした。まあ、元気になってくれたのはありがたいことでした。

※楽しむポイントは、神様は、その人の身体の回復に必要な食べ物が、食べられるようにしてくださること。

息子がハワイで御用にお使い頂いたことにより、海外に行く事など夢にも思っていなかった彼でしたが、ハワイに行く機会が巡ってきたのでした。

それは、平成二十五年五月下旬のことでした。K教のハワイ教区の教師研修会に、彼が講師として御用と呼ばれたからです。

一週間ほど教会を離れるので、T代に許可を求めると、

「もちろん、ご用やから行ってきてください。そのかわり、〇〇（孫の名）の写真を一杯撮ってね。それとT代に特別なプレゼントをお願いします」

こういう条件で、彼はハワイにご用に行くことになったのでした。

彼は国内ではすでにK教の学院をはじめ、数カ所の教区や教会に講師として御用にお使い頂いていたのですが、さすがに海外までは想像していなかったのです。

彼がハワイの研修会に行く事においても、天地金乃神様のお働きを存分に頂くのでした。彼の中学時代からの友人であるK君が、ハワイにコンドミニウムを持っていて、毎年ハワイに遊びに行くようになっていたのです。

K君とは、高校では別々になりましたが、時々は交流がありました。K君が賃貸のハイツを建てる時には、彼がその地鎮祭をお仕えた事もあったのです。K君が毎年ハワイに遊びに行くことを知った彼が、K君と連絡する中で、K君がハワイに居る時期と、彼がハワイに行く時期が重なることがわかり、ハワイで落ち合うことが決まりました。そしてK君がハワイでの宿泊する彼のホテルを、格安で泊まれるように手配をしてくれたのでした。飛行機のチケット、その他の諸々の手続きは彼の息子がしてくれたので、彼は自分のパスポートを用意するだけで済んだのです。

彼はせっつかくの機会だからと思い、彼の姉に声をかけてみると、姉も仕事を休む都合をつけて、二人で行く事になりました。

彼にとつては初めての海外ですから、行き帰りの飛行機に連れがあり、気軽に話ができる相手があると、やはり良い気がしたのです。二人なら、トイレに行く時などに、荷物などを見ていて貰えて便利なのです。

※楽しむポイントは、神様はご用にお使いくださる上に、必要な人や物は差し向けてくださること。

この旅行は、最初はズッコケまくり、最後は彼が、意気消沈の展開で進んでいくのでした。まず、ハワイに旅立つために五月二十二日に関西空港に着いた途端に、彼の姉のトランクの取手が壊れ、新しいトランクを買う羽目になりました。

二人を乗せた飛行機は予定通りに、ホノルル空港に着陸したのです。彼は天地金乃神様に、無事に着いたお礼を申し上げました。

「サイトシーイング」

彼はそう言つて、差し支えなく入国手続きをおえたのですが、彼の姉が、何故か手続きに引

つかかって、別室に連れて行かれてしまったのです。

仕方なく、彼もその場所に行きました。二人には訳がわからないのです。天地金乃神様に、どうか無事に手続きが完了することを願うばかりでした。

ここで、三、四十分時間を食いました。それでも何とか無事に手続きを終えて、乗る時に預けた荷物を受け取る場所に向かいました。

すると今度は、彼の荷物が一つ見つからないのです。いくら探してもありません。どうしてよいのか判らず、取り敢えず外に迎えに来ている息子に対処してもらうことに決めて、空港の外に出たのです。予定の時間よりもすでに一時間以上も過ぎていました。

空港の外に出るには出たのですが、今度は息子がいません。時間が遅くなったからかと思いました。そこに立ち尽くすしかない二人でした。

これは困ったなと思案に暮れた時、そうだメールだと思いました。彼はこの旅行に来る前に、わざわざ携帯電話を買い替えて、国外でもメールができるようにしていたのでした。

そして急いでメールを打ったのですが、何度打っても送れないのです。エラーが出ます。思わず天地金乃神様と心で叫んだ時、息子が二人を見つけてくれたのでした。時間が遅れたこともありますが、彼が息子から指定されていた出口と、違う場所から出ていたことが、会えない原因でした。

彼が、一つ荷物が見つからないことを伝え、その対処を頼みました。息子は直ぐに処理をしてくれて、見つければ宿泊しているホテルに届くように、テキパキと手配をしたのでした。

携帯電話のメールができなかったことは、外国で出来るメールの設定をしていなかったことが原因でした。彼は店の店員がしてくれていると思っていたのです。携帯電話の使い方にも慣れていない、アナログ人間な彼なのです。

ようやく息子の車に乗り込んで、彼と姉の宿泊先でもあり、友人のK君が待っているホテルに向うことができました。

Kくん夫婦とも無事にそこで合流したのでした。

息子はいったん自宅に戻り、孫を連れて再びホテルに来てくれる段取りになっていました。彼は元気に成長している孫をスカイプでは見ていましたが、抱っこした孫は重くなっていて、それを実感しました。

彼が夕食をご馳走して、和やかに楽しい時間を過ごしたのです。場所は息子が予約した店でした。

食事を終えてホテルに戻ると、行方不明になっていた彼の荷物が、ちょうどホテルに届いたという電話が入り、無事に荷物も彼の手元に戻ってきたのでした。その荷物の中身は、息子から頼まれた、息子家族に渡す生活必需品だったのでした。

※楽しむポイントは、色々な出来事も、後々では笑い話や楽しい思い出として残る、神様のお働きということ。

彼と姉は、ハワイに滞在した一週間の間、彼のハワイ教区教師研修会があつた日を除いては、息子にガイドをしてもらい、ハワイ観光を孫と共に存分に楽しんだのです。彼が研修会の日には、姉はK君夫婦と観光に出かけたのでした。

彼の話が研修会でお役に立てたかは判りませんが、その日の夕食は、ハワイセンター所長に息子と共にご馳走になりました。

楽しい時間はすぐに経つもので、日本に帰国する日となり、T代に頼まれた物や、信者さんへのお土産も買って用意をしました。彼自身も、このハワイに来た記念のために、ハワイで『神の木』と呼ばれている木で、腕時計のバンドが作られている腕時計を購入したのです。彼が自分の身に着ける物を、自分で買ったことは、Y教会に来てから、これが初めてでした。

彼と姉を、息子がホノルル空港まで送るべく、朝に孫を連れてホテルにやってきました。K君夫婦も来て、ホテルで歓談をして、ハワイでの最後の孫との時間を楽しんだのです。

事件は、空港へ行く時間が来て、ホテルの部屋の外に出てエレベーターに乗る時に起きまし

た。

無いのです。この一週間の孫との楽しい時間を取めたカメラが……。直ぐに、部屋にとって帰り探しましたが、何処にもないのです。部屋とエレベーターまでの通路しか、彼らは移動していませんから、カメラが自分で歩いて移動することはないので、部屋か通路にあるはずなのです。

「天地金乃神様くあ」

と彼は必死でお願いしましたが、でも見つかりません。彼は焦りました。何故ならそのカメラは、Y教会で御用を務めながら留守番をしているT代から、託されたカメラだったからです。孫の姿を一杯撮ってきて欲しいと頼まれたカメラです。わざわざそのために、T代が新しく買った、カメラだったのでした。

さつきまで、部屋で孫を写していたのです。孫に持たせて孫に写させて、遊ばせていたので。しかし、その後どうしたか、彼にはハッキリとした記憶がないのでした。

飛行機に乗る時間が迫ってきます。K君夫婦に後を託して、仕方なく息子の車でホノルル空港に向かいました。彼が泊まった部屋は、K君夫婦が、その後も使うことになっていました。ホノルル空港で、孫はボロボロと涙を流して、バイバイをしますのです。彼も泣きたい思いでした。



彼は飛行機の中でカメラが出てくるように、ずっと天地金乃神様にお願ひしました。姉も氣遣つてくれるのですが、意氣消沈の彼でした。

関西国際空港には無事に着き、姉と別れて重い足取りで、彼はY教会に帰りました。

教会のドアを開けて、お広前に入り拝礼をさせて頂き、天地金乃神様にお話の御用を務め、無事に帰国が出来たお礼を申し上げました。

そして、お取次の座に座っていたT代の前に行きました。

T代に頼まれた物と信者さんへのお土産を置き、

「無事に帰りました。ありがとうございます。これをご神前にお供えしてください。そして、真に申し訳ない。実は最後にカメラが行方不明になった」

その後、彼がその時の状況を説明したのでした。彼が話終えるまでT代は黙って聞いていました。

その後、T代が言いました。

「先生のしょげた顔を見たら、何もよう言わんわ。またカメラは出てくるように思うし。先生が無事にご用ができて、帰れたから良かったやん」

これで済んだのでした。文句の一つも言われることなく、責める言葉もなく。

このお取次ぎの座にいるT代の神対応に感激し、彼は改めてT代に惚れ直したのでした。

※楽しむポイントは、夫婦の間では、相手の失敗を責めたり愚痴るよりも、相手を許すこと。

数日後、カメラはK君夫婦に発見されました。K君夫婦も一生懸命に探してくれたのでした。それでもやはり何処にもないので、もうここになかったらと、最後に座っていたソファアを、分解して調べてくれたのです。ソファア底にカメラがいたのでした。ひよつとしたら、彼がT代を惚れ直すように仕組んだ、天地金乃神様の仕業だったのではないかと、彼は思ったのでした。

年が明けて平成二十六年です。この年の五月五日には、Y教会の開教九十年祭をお仕えさせて頂く年でした。彼もT代も、記念祭を信者さんと共にありがたくお仕え出来るように、準備を進めて行くのでした。

記念祭当日の昼前に、息子家族も無事に教会に到着しました。息子と祭典のご用の打ち合わせを慌ただしく行い、祭典をお仕えさせて頂いたのでした。この祭典は、他の教会の先生には参列のご用は頼まずに、彼と息子の二人でお仕えをしたのでした。

五月五日は、子どもの日でもあるので、祭典の中に子ども代表玉串奉奠があり、孫も玉串を上げたのでした。

この五月に、Y教会の外の掲示板に書かれていた言葉は、

『お礼が足りている心に、心配や不安はない』

でした。彼は、孫が玉串奉奠をする姿を見て、お礼の思い一杯になりました。確かにそこに心配や不安がないのでした。

代表玉串奉奠のあと、彼は信者さんに挨拶をしました。

『親教会の先生、信者さんをはじめ、関係教会の先生方、典樂のご用の方、そしてY教会の信者さん、本日はご参拝いただきありがとうございます。個々の信者さんをお願いを大切にすること。Y教会として、子孫のために原発を廃止すること。そして日本近海に埋蔵されている、天地金乃神様が与えてくださった無限のエネルギー資源が実はあります。それはメタンハイドレートです。その実用化を世に提言して、日本の国を豊にできるエネルギー資源を生み出すこと。信者さんの要望である安心の家の設立を目指して、高齢化社会と災害時の安心に備えること。教祖様が残された、〈神上がりの道〉を共に研鑽して、生きている間の助かり安心と、魂となつてからの生き通しを得ること。このことを、天地金乃神様、教祖様にお願いさせて頂き、信者さんはもとより、日本や世界の助かり立ち行きの、お役に立たせて頂きたい』

と述べたのでした。

そして祭典後、四人の信者さんに、信心体験をお話いただいたのです。

その四人の方のお話を当時の会報に載せた内容と、その方たちに纏まつわる彼の思いを書いています。

一人目はS・W氏です

本日はまことにおめでとうございます。

このような大勢の皆様の前で、このY教会にお世話になってきました二十年間のことをかいつまんで、お話をさせて頂きますので、よろしくお願いいたします。

私のY教会への入信は、長い間連れ添って、お世話をしてきている妻の導きのおかげです。

二十年前、当時勤めていた会社が富山に移転することになり、私は家族の状況などから、大阪に残る決心をしてその会社を辞めました。

その再就職のお願いに、初めてY教会に参拝したことが、信心をさせて頂くきっかけでした。

まず、百日のお参りを続けることにしたのですが、三日目に頭が痛くなり、熱が出て具合

が悪くなりました。病院に行くと、医師から一週間ほど検査入院をするように言われ、早くもお参りができなくなりました。その時に、Y教会の教会長がお見舞いに来てくださり、K教の本を読むようにと、何冊か置いていかれました。

元来勉強嫌いな私ですが、教祖様の本は凄いもので、読み始めると、いつの間にか引き込まれて、朝方まで読んでしまうような有様でした。

退院したら、改めて毎日お参りをさせて頂こうと心に決めました。それが、今に続く朝参りになっています。

私は、とにかく何でもお願いする願い信心でしたが、十年経つうちにおかげを受けて、K教のお社を購入させて頂き、自宅で天地金乃神様をお祀りさせて頂き、毎年教会長にお祭りをお仕え頂くようになりました。

また、K教の御神酒のありがたいことも、Y教会におられた、教会長のおばあちゃんのような方から、「お酒は飲むと酔いますが、御神酒として頂くと水と同じですから酔いません。心からありがたく頂いたら、痛い所も治りますよ」と教えて頂きました。

私は毎年よく風邪を引き、扁桃腺を腫らして難儀をすることが多かったのですが、早速に御神酒を頂くことを実行すると、見事に風邪を引かなくなりました。同時に扁桃腺も腫れることが無くなりました。

またある時、ゴルフのコンペがあり、そのための練習の帰りにバイクで転倒事故を起こしました。

手首がみるみるうちに腫れあがったのを見て、すぐに御神酒のことを思い出し、家の近くでしたから、妻に電話をして「御神酒を持って来て」と頼みました。

持って来てくれた御神酒を、その場でかけてから、救急車で病院に向かい、医師の診察を受けると、「ギプスをして治っても、指はおそらく元通りには動かないですよ」と言われるほどの怪我の状態でした。

四ヶ月後、ギプスを外して指をゆつくりと動かしてみると、指が動くのです。

医師も「動いて良かった、動かなければもう一度手術をしなければいけない所でした」と喜んでくれました。

私は御神酒のおかげを頂いたと、心から思いました。

それ以来、毎日お風呂上りに体に痛い所があれば塗らせて頂き、ここまで元気で働かせて頂いています。

皆様もぜひ、御神酒のおかげを貰われたら良いと思います。

次に二人の娘のことをお話させて頂きます。

まず長女ですが、生まれた時の体重が、千三百五十グラムしかない未熟児で、命が危ないと医師から言われました。

その当時に、妻の母親は、すでにK教の熱心な信者でありました。孫のために一生懸命に祈ってくださり、おかげで無事に退院させて頂くことが出来ました。

その後、長女は元気に成長をさせて頂き、結婚をして二人の子どもを授かりました。

その二人の子どもの内、上の長女は健常児ですが、下の次女は障害を持って生まれたので、よく引きつけを起こしたために、度々病院に入院する事態になりました。

その度に、私達夫婦と娘婿のご両親で助け合い、子ども夫婦と孫たちが、立ち行くようにおかげを頂きました。このような状況の中で、娘が本当に優しい婿に恵まれていることを実感させて頂き、ありがたいと思いました。

また、このような支えを受けた娘も、信心をさせて頂くことが出来て、心の助かりを得ることになり、良い母親に成長してくれて、障害児を喜びの心で育てるおかげを頂いております。

上の孫は、小学校の六年間を無遅刻・無欠席のおかげを頂いた頑張り屋さんになっていま

す。  
私の次女は、阿波踊りがご縁となり、徳島にある教会に嫁ぐことが出来ました。

私にとっては、本当にびっくりすることでしたが、これも良い婿に支えられて、跡取りの子どもも授かり、田舎の生活にも慣れてきて、おかげを頂いてくれていきます。

最後に私が、おかげを頂いていると思うことは、私の妻のことです。

毎朝の食事のことから始まり、私に対して良く世話をしてくれます。特に健康の事にはあれこれと心配りをしてくれて、時に口やかましいほど、アドバイスをしてくれます。

その中に、夫婦で散歩をさせて頂くことにしたのですが、ある時、その散歩の途中で右足首が痛くなり、動けなくなりました。

翌日に病院に行くと、血管が詰まっているからすぐに手術ですと医師から言われて、カテーテルを入れる処置したのですが、足よりも実は心臓の方が悪かったらしく、死ぬ所でした。しかし、神様のおかげを頂いて、元気にならせて頂くことができました。

そして、これが機会となり、妻から長年言われてきても逆らい続けてすることが無かった、禁煙を決意したのでした。そこから神様をお願いをして努力をした結果、タバコとの縁を切ることができました。

天地金乃神様や教祖様のお働きは凄いものです。こんな私でもたくさんのおかげを頂きました。それで今は、少しでも神様や人のお役に立たせて頂ければと思います、毎日の朝参りした時に、教会の付近の道の掃除をして、ポイ捨てされているタバコの吸い殻を集めさせて頂い



ています。

これからも、神上がりをするまで、元気に朝参りをさせて頂き、神様や教会長にお世話になりながら、信者さんの力も借りて、お役に立てるように頑張らせて頂くと思っております。

どうぞよろしくお願いいたします。

至らぬ話でしたが、本日はありがとうございました。

一人目の信者さんのお話をこのような内容でした。

彼はこの方の長女に、障害児が生まれたことについて、かなり天地金乃神様に、

「何ですか？ どういうわけですか？」

と文句を言ったのです。

一方では、彼がT代の懐妊の時に、お風呂場でT代のお腹にお神酒を吹きかけて、

「丈夫で育てやすい、良い宿命を持った子どもを授かりますように」

そう夫婦でお願いしたように、天地金乃神様への、夫婦揃ってのお願いが、足らなかったのかも知れないと思い、彼なりに天地金乃神様にお詫びもしたのでした。

この娘さんは、高校時代から就職して結婚に至るまで、よくお参りをされていたのです。

そして、このお話をされた自分の父親との、人間関係の悩みをよくお届けされたのでした。結婚された時に、子どもを授かる上の天地金乃神様へのお願いの仕方、この娘さんには伝えていたつもりだったのです。だから、彼は当然健常児を授かると、思い込んでいたのです。それで、天地金乃神様に文句も言ったのです。

しかし、その後の経過を見てみると、この障害児がこの家族の絆を深め、夫婦円満で良い家庭を築く元になっているのでした。この娘さんが、障害児を育てる上で、体力的にも精神的にも相当キツイ所を経験するのです。今もですが。

人間は難儀とも思える状態が続く中で、その時に少しでも助けられると、大きな喜びとなるのです。相手のご両親や、自分の両親の手助けを受けたことで、ここにも良い人間関係が出来る元になったのです。

彼はこの状況を見て、天地金乃神様に、一時的にしても文句を言ったことを、お詫びしたのです。やはり、天地金乃神様は、お願いする者に対して、無駄ごとは差し向けてはおられないと、彼は思ったのでした。

彼は後に、天地金乃神様からわからせて頂くのですが、このように生まれつき重度の知的障害ある人は、この世を去れば、必ず霊神様として用いて頂ける、尊い存在でもあるのです。

二人目は Y・M氏です。

Y教会開教九十年記念大祭の良き日に、信奉者の一人として、お話をさせて頂く機会を与えて頂き、厚くお礼を申し上げます。

私が、初めてY教会へお参りさせて頂いたのは、確か昭和六十年の三月だったと思います。それからもう二十九年になります。その間、平凡な私たち夫婦にも、それなりに色々な事があり、その都度おかげを頂いてまいりました。

病気に関して言えば、平成四年の私の胃癌の手術、平成十一年から十三年にかけての妻の三度の脳血管腫の開頭手術と平成二十二年の卵巣癌の手術、その後の三回の抗がん剤治療などの事がありました。

それらの病気の際、教会長先生のご祈念とお導き、信奉者の方々のお祈り添えを頂き、いずれも無事に回復させて頂きました事は、誠にありがたいことでした。

二十九年間のお参りの中で、お結界お取次を通して、色々な事柄のお願いをしてまいりました。そして、お結界お取次を通して「神様に願う」、この事の大切さを私自身のこと、痛感したことが二つあります。

一つは、十年前の平成十六年に、前の会社を早期退職しました。その後の再就職活動の時に、教会長より「日切りをして、具体的に神様にお願いなさい」とのお導きを受けました。

それで、神様に「どうか今までに経験をした、総務や経理の内容の仕事につけますように」と書面にしてお取次を頂き、日切りして強くお願いしました。

実際に再就職できた会社の仕事は、商品管理が主な部署でしたが、人間関係はスムーズで、仕事も楽しく働かせて頂くことができました。

そして、二年後に総務部門の責任者の方が退職されることになり、その後任として総務の仕事をする事となりました。

その後も、会社の組織変更や代表者の交代などを経て、現在では再就職の際に強く願った、総務・経理の仕事の責任者として、勤務をさせて頂いております。

二つには、私たち夫婦は平成十一年十一月より、先ほどお話いたしました、妻の脳血管腫の治療をきっかけに、夫婦揃ってご本部へのお礼の月参拝をさせて頂こうと思い、お取次ぎを頂き、神様にお願ひして始めさせて頂きました。

そのご本部参拝が、一度途切れそうな状況になったことがありました。

それは、平成二十三年二月十八日のY教会のお祭日でした。会社で勤務中に突然に激しい腹痛が起き、キリキリとした今までに経験した事のない強い痛みに、仕事を中断して、会社の近くの総合病院へ行かせて頂きました。

受付を済ませ、診察を待っていた待合ロビーでの四十五分程が、後から思えば一番腹痛の

激しい時でした。じつと座っていることができず、心中で神様にご祈念しながら、病院内を歩いたりして、痛みを紛らわせなければならぬ程でした。

腹部レントゲン・CT・血液などの検査をしてから、医師の診察を受けると、いきなり「腸閉塞です。緊急入院をして治療を受けてください。場合によっては手術も必要になるかもしれません」と言われ、入院の申込書を渡されました。

急に入院と言われても、こちらには何の心の準備もなく、教会にもお届けができていませんので、「仕事の段取りや、妻にも連絡をしたいので、少し時間を頂きたい」と医師に答えて、診察室を出ました。

実は、翌日から一泊しての、ご本部参拝をさせて頂く予定を立てていたのです。

教会へ連絡すると、「今日はお祭日ですから、お祭日のお徳のお働きがあります。安心しなさい」とのお言葉を教会長から頂きました。

妻には、状況を説明してから、ご本部の宿泊をキャンセルしてくれるように頼みました。こうしているうちに、痛みが和らいでいく感じがし、吐き気などもなかったもので、自分なりに判断をして、返事を待つてくれている医師に、この病院だと妻が付き添うのに不便なことを告げ、Y教会やいつもお世話になっている義理の兄夫婦の住まいに近い、Y病院に紹介状を書いて頂くようお願いをしました。

そして職場に戻り、一応は入院をする段取りをして、同僚への仕事の引き継ぎをしてから、帰りに教会へお参りさせて頂きました。

先生よりご祈念を頂き、お結界で

「明日の検査を無事に終わらせて頂き、入院をすることなく、二十日にはご本部にお礼の月参拝ができるように、Mさんも強く神様にお願いしなさい」

とのお言葉を頂きました。

私自身の信心の中で、十年以上続けさせて頂いていることは、このご本部月参拝だけなので、何とか途切れれずにお参りさせて頂きたいと、心中願っておりました。おかげを頂いてその晩は、痛みが無く休むことができました。

翌日に義兄の車で教会に参拝し、先生から

「明日はご本部参りができるおかげを頂きましょう」

とのお言葉を再び頂きました。

Y病院で、再び様々な検査を受けてから、医師に診察してもらいました。

医師は「今日の検査では、特に体に問題はありません」と驚くような所見を言われました。

私が「昨日は、腸閉塞だから即入院をして、治療を受けるように言われたのですが・・・」

と尋ねると、医師からは「確かに昨日のCT検査やレントゲンでは、腸の動きが止まり、癒

着が見られますが、今日の検査では異常はありません」と告げられたのでした。

早速、教会にお礼の参拝をさせて頂き、教会長のお言葉通りに、二十日にご本部月参拝をさせて頂くことができましたのです。

教主様にも、嬉しくありがたいお礼のお届けを申し上げることが出来ました。

今、申し述べたことから、私自身が未熟であっても、お結界でお取次ぎを通してお願いしたことは、神様が覚えていてくださり、当人の信心以上のおかげを頂けるということでしょう。

私が信心をさせて頂いている上で、ありがたく思うことは、やはり教会があり、そこに居てくださる先生と信奉者の方々の存在です。

ここまで教会長には、常にご祈念とお導きを頂き、信奉者の皆様には多くのお祈り添えや励ましを頂いてきました事に、改めて厚くお礼を申し上げます。

ご清聴ありがとうございました。

このご夫婦の、ご本部へのお礼の月参拝は、今（令和五年）も続いています。

これからも、天地金乃神様からのお引き寄せがあるように、彼は祈っているのです。

次は三人目、M・Eさんです。

私は岡山生まれなので、少しお国訛りがありますが、よろしくお願いいたします。  
まず、四代教主様の和歌を詠ませて頂きます。

「時くれば 地に咲きいずる庭の花 自然の姿は目にしてうつくし」

今まさに春爛漫の五月です。時節がくれば、花は自然に咲きほこります。

私の息子は、現在は北海道におり、今はつぼみです。北海道の地で色々な人の愛情を受けてお世話になり、強く大きな根を張っています。

もの凄いい根を張っていますので、きつと花の咲く時は、大きな綺麗な花が咲くものと期待をしています。

皆様のお祈り添え、よろしくお願いいたします。

私の信心の始まりですが、私の夫の母の母、私にとって義理の祖母が、大阪の肥後橋にあるT教会にご縁を頂いておられたことから、ご神縁が出来ました。

その祖母が三十代後半で未亡人になりました。その為に、大変苦勞された事もあつたように聞いております。

そのような時に、友人に誘われてT教会にお参りすると、そこにおられた教会長が「今日はコレコレの事をお願いに来られましたね」と先におっしゃったそうです。これに祖母はび



つくりしまして、もうこの先生にお願いするしかないと思われたのです。

それから、毎朝近鉄Y駅の始発電車に乗って、日参を続けられました。本当に神様に一心の方でした。

そして、祖母のお願いの殆どが、孫のこと、つまり私の主人についてのお願いでした。

私の主人が、医学部の大学受験をする時に、祖母と主人でご本部にお願いに行かれて、「私の命に代えても、大学に合格させてください」と教主様にお願いと、「そんなに命を粗末にするものじゃないなあ」とおっしゃられたそうです。

また、私と主人が結婚する時、祖母が私の実家に来てくださり、「Mちゃん（私のことです）は、神様が選んでくださった人なので、どうぞ結婚させてやってください」と言われました。

私の両親も、娘が神様に選ばれたということをし、たいそう喜びまして、めでたく結婚ができたわけです。

その祖母も、晩年は足が弱り、車椅子の生活になりましたので、近くにあったこのY教会に、お参りをするようになりました。

義母のことは、皆様もよく存じて頂いていますが、「なるようになるさ」というような、本当に気楽な神様任せの方でした。

教会にお参りをして、お取次を頂いて、悩み事をお願いすれば、後は神様が良いようにしてくださる。と信じる事が生まれついてできておられるような方でした。ですから私から見ると、もの凄く楽な信心をされていました。

また、生まれついでにの性格の明るさ、気立ての良さで、本当にお姑さんとしては最高の人です。阪神タイガースファンでもあり、先ほどお話されたS・Wさんとよくお話が合うようでした。

またお相撲も大好きで、ご自身も食欲旺盛で、

「Mさん、私はなんぼよく食べても、お相撲さんみたいにはならんから安心や」とよく言われていました。

その義母が、あるお正月の前に、炬燵こたつで沈んだ感じでおられたことがありました。おもわず私が、

「お腹でも空いているのですか？」

とお声をかけると、

「もうすぐお正月やねえMさん、お正月に子どもを連れて、実家に帰らんといて欲しいねん。あんたと子どもがおらんと寂しいねん」

と頼まれました。年を重ねると、人間はやはり孤独を感じるのかなあと思い、義母にできる

だけの事をさせて頂こうと思いました。

義母は、今は施設でお世話になっています。意識がハッキリとしない状態ですが、まだ意識がしっかりしていた時に、

「私は、Y教会の先生に大変お世話になったので、先生にお礼を申したい。Y教会の皆様、特に朝参りの方にお礼を申したい」

とよく言っておりました。そして私には

「Mさんに、信心を伝えられて良かったわあ」

と言っておりました。

さて、この度の千日修行を、親教会のご大祭の四月十三日に、満願のおかげを頂きました。その日のY教会の二時のご祈念に来る前に、ヤンキースのイチロー選手が三千十七試合連続出場について、

「出場しただけではダメだ。成果が大事」

というようなコメントをテレビで見ました。それを聞いて、私は、

千日お参りが続いただけではダメなのか？

何か大きな成果と言えるものがあるのか？

そのように思ったのですが、しかしご祈念をしている内に、千日の間、私自身の健康のお

かげを頂いたし、お参りには主人の協力もあつたしと思ひ返して、ご祈念を終わると、教会長先生のお姉様のS先生から、「千日おめでとう！」と言われ、ハイタッチをして頂き、思わず嬉しさがこみ上げてきました。

家が近いので、千日の間、午前中・二時のご祈念・晩というように、大体一日三回のお参りをしていました。

その一回は、息子の代参という思いでのお参りで、教会長先生が私の息子の願い成就のために、別に思いを込めてご祈念をしてくださっていました。

お参りに来る道で、色々な人に出会うので、K教のことをお話させて頂くこともありました。

私の友人で、今日も参拝されていますが、午後二時のご祈念が午前十時に変わる七・八月のサマータイムをよく覚えておられ、その方と会っていて十時になると私が、

「教会へお参りしてくるわ」

と言うと、

「モーニングサービス頑張つて」

と笑顔で言ってくださるのを、何か違うなあと思ひながらも、ありがたい気持ちになるのでした。そのような中で、無事に達成させて頂いた、千日参拝の修行でした。

最後に、教会長先生の奥様のT代先生ですが、本当に喜び上手の名人達人でございます。

私がおか不足気味に言った時などに、すぐに

「でもね、何々やね」

と良い方のおっしゃるのです。

例えば強い風の日、

「今日は風が強いですね」

と言うと、

「そうね、でも洗濯物はよく乾いていいよね」

と答えられるのです。

いつか親教会のご大祭の前講をされた先生が、

「日常生活の中で、喜びを見つけましょう」

とお話をされましたが、T代先生はその名人達人です。

そのT代先生が、今から二年半ほど前に体調を崩されて救急車で運ばれたことがありました。

救急隊員が、T代先生の血圧を測っても、あまりにも低くて測れず、命に関わるような状態の中で、その時に居合わせた私に、T代先生がおかボソボソと言われるのです。

よく聞いてみたら「キティーちゃん」とおっしゃっていました。キティーちゃんのタオルケットが、欲しいということだったようです。

私は、こういう時でも、自分の好きな楽しみにしていることを思われる姿に触れて、素晴らしいと感心させて頂いた次第です。

本日は九十年の記念大祭を迎えられ、お話をさせて頂きましてありがとうございます。

彼のY教会でのご用人生の中で、最も長い間、一つのお願いのご祈念をさせて頂いたのが、この方の息子さんでした。それは歯科医師としてお役に立つということでした。その年月は、足掛け十七年に及ぶものでした。

息子さん本人も、ご両親も祖母の方も、本当にヤキモキした心配と苦勞の期間であったと思います。

彼もお取次ぎの座で、必ずこのお願いは叶はずだと思いつつながら、彼自身がおかげを頂くのではないのですから、これだけ長いと成就しないのかと、思うことも時としてあったのです。

その願いの発端は、M・Eさんの息子さんが、二〇〇〇年（平成十二年）に、高校から現役で歯学部合格したことに始まるのでした。

浪人も覚悟で受験をされたのですが、首尾よく北海道にある私立大学の歯学部に入ることが

出来ました。

受験前に、母親と本人がお参りに来られて、歯学部のある大学を受けるお願いをされました。

彼はその時に、ご神前で天地金乃神様に『この息子さん、将来歯科医師としてお役に立てるなら、大学に合格させてください』と申し上げて、お願いをしたのでした。

その結果の合格です。

彼はこの息さんが必ず歯科医としてお役に立てる日が来ると確信したのでした。ところが現役で入った油断からか、テニスサークルで活躍してしまい、息子さんは留年を繰り返すことになって、大学を卒業できた時には、二〇一一年（平成二十三年）になっていました。まあ、このテニスサークルでの人間関係が、後でおかげになるのですから、これも無駄事ではなかったともいえます。

この時の最後の卒業試験の時に、彼は夢を見たのです。

M・Eさんが、お取次の座の前で「先生ありがとうございます。今回は無事に卒業ができました」とお礼をされている姿でした。

それで、お参りされて来たM・Sさんに、「今回は合格します」と告げていたのでした。その通りに合格できたので、次にある国家試験のあるごとに、M・Eさんから、「先生、今回は夢を見られませんか」と聞かれたものでした。

さて、M・Eさんの息子さんが、国家試験に合格したのは、二〇一七年（平成二十九年）のことでした。彼はようやく、かなり重かった肩の荷が下りて、正直ホットしたのです。

M・Eさんたちの、喜びは言うまでもありません。息子さんも十七年間、体も心を患うことなく来られたことは、大きなおかげだったと思います。

晴れて歯科医師となられた息子さんは、水を得た魚の例えのごとく、その後の人生をスイスイと泳いでいけます。

まず、歯科医としてお役に立っている場所は、大学のテニスサークルの人間関係から頂かれ、この地で、お嫁さんとなる人との良い出会いがあり、家庭を築いて長女を授かる人生の展開になつていきます。ありがたいことです。

彼はこの息子さんが、天地金乃神様とのご縁を深められることが、最初に天地金乃神様にご縁を頂かれた曾祖母の方が、一番に喜ばれると思うのでした。

余談ですが、M・Eさんに授かった、内孫さん外孫さんともに、ご本部のお祭日に生まれておられるのです。

こういう所にも、M・Eさんのお参りのお徳が現れているのだと、彼は思うのです。教会にお参りができる。それも日参ができるということは、本当にありがたいおかげを受けていることでもあります。なぜなら、生活の上に、健康・経済・時間のお繰り合わせを、天地金乃神様



から頂いているからこそできるのです。

ここで、このM・Eさんのお姉さんについて、彼は少し書き残しておこうと思うのでした。実家で暮らしておられた、M・Eさんのお姉さんは昔から体が弱く、その上にある時期から強迫神経症になり、長い間苦勞をされていました。

彼はM・Eさんを通じて、このお姉さんにご縁が繋がったのでした。

このお姉さんはM・Kさんでした。やがて駅で待ち合わせて、彼と共にK教のご本部へ毎月お参りができるようになりました。

彼の息子が、K教学院に居た一年間は、T代もご本部に月参拝をしたので、その時期には三人で、楽しくありがたいお参りをさせて頂いたのです。

最初にM・Kさんとお会いした時、「先生、私の病氣は治りますか？ お医者さんは治る見込みはない、みたいに言われるのです」

とM・Kさんが問われたので、彼は言いました。

「あのね、天地金乃神様は、どのような者でも、十年辛抱すればおかげをやる。そう言われていますから、ここから十年でおかけを頂く気でいてください。

それに貴女には、母親が生きておられます。母親に今まで心配や苦勞をかけたことを、天地

金乃神様にお詫びして、親孝行ができるようにお願いされて、少しでも母親が喜ぶことを実行されたら必ず治ります」

彼は、断言したのでした。

苦節十年、M・Kさんの強迫神経症は、見事治ったのでした。お医者さんは、どうして治ったのかと、不思議がられたそうです。

強迫神経症のために、見た物、聞いた事、読んだ物のすべてが後で気になり、確認せずにおれなくなるために、テレビも見られず、新聞も読めず、何処にも行く事も億劫な状態から解放されたのでした。

彼は、「病気が治ったら、そして天地金乃神様に、本当に病気を治して頂いたと思うなら、Y教会でそのありがたいおかげを頂いたお話を、必ずさせて頂きなさい」と申し上げていました。

M・Kさんも「治れば、ぜひ、お話しします」と言われていましたが、まだその約束は果たされてはいません。

今、M・Kさんは、他の病気で療養しておられるのですが、この約束を果たす為に、天地金乃神様に元気にならせてくださいと、お願いされたらなあとは彼は思うのでした。

四人目のK・Sさんです。

みなさん、お話させて頂きます。よろしくお願いいたします。

私は今年で六十五才になります。役所からの年金の受け取りや、介護保険の通知がきたりして、否応なしに年をとってきたことを感じます。

そんな中にも、今もヘルパーとして頑張つて元気に働かせて頂いています。

私が結婚したのは二十三才の時で、その翌年に長男、その後二年ずつ空けて次男、三男と授かり、順調に生活をしていました。

しかし、私が三十三才の時に、主人が突然に倒れたのです。

丁度、小学生の長男の運動会の日でした。担任の先生に、家族が誰も見に行けない事情を説明して、長男への心配りをお願いしてから、主人を救急車で病院に運びました。

最初は原因が判らず、病院を三回替わり、手の施しようのない状況の中で、最後の病院で、ようやくC型肝炎ウイルス脳炎だと診断をされました。

「日本には治す薬がないので、外国の薬を試しますが、植物人間になる可能性が高いですし、亡くなることも覚悟をしておいてください」と医師から言われました。

その時に私の伯母が、このY教会に導いてくれて、このK教の信心をさせて頂くようになりました。

先生は「この天地金乃神様に一心になりなさい」と教えてくださり、その時に家にあった、色々な神社仏閣のお守り札を処分してくださり、共にご祈念をして頂きました。

こうして、主人のことは神様と病院にお任せする気持ちになりました。

これからの自分たちの生活を、どうするかが問題になりました。主人の勤めていた会社は、小さな工務店だったので、退職金もなく直ぐに解雇をされたからです。

長男が下の兄弟を見てくれて、私は夜もろくろく寝ずに、内職に打ち込んで、何とか家族で助け合い、生活をしていこうとしました。

しかし三ヶ月ほどしたら、今度は私が、心臓が痛くなり歩けなくなるほどでした。病院で診察を受けると、動作性心筋症で血圧も高いので、このままでは、脳梗塞や脳出血になり易いと言われました。

入院をして治療を受けるわけにもいかないので、ニトログリセリンをもらい、どうにか内職を続けて生活をしていました。

その中で医師から、植物人間になる可能性が高いと言われた主人が、奇跡的に退院ができました。神様のおかげを頂きました。

そこから、主人が工務店を立ち上げたのですが、何もない所からでしたから、生活の苦勞は続きました。Y教会の先生には、夫婦の身体のことと、当時の工務店の資金繰りの面でも

助けて頂きました。

私が四十二才の時、祖母のお葬式に田舎に帰った折に、大阪に帰る朝になって、目が急に見えにくくなったのです。

眼科に行くと、原田病と診断され、

「心労と睡眠不足などから来ている。このままだと失明するから、大きな病院を紹介する」と言われましたので、

「子どもの受験があったりして、入院をすることは無理な状態です」と答えると、「それでは、点滴をしながら来てください」ということになりました。

この時も、K教のご本部やY教会にお参りして、お願いしながら凌がせて頂くことにしました。

三男が小学校の高学年になったことを機会に、外に働きに行くことにしました。

約五年、『おはぎの丹波屋』に勤めましたが、色々な事情から転職を考えて、教会の先生にお願いしました。

「貴女の良い時に、何時でも辞めて転職しなさい」と先生が言われたので、職業安定所に行きました。

そこで介護ヘルパーの資格を取ることを進められました。資格を取りながら、給料も出る

ということだったので、勉強して資格を取りました。

それから介護ヘルパーとして働くようになる、この仕事が自分には合っていたようで、心臓も良くなり、目の方もどうもなくなり、ありがたく嬉しく思っています。

このY教会の開教九十年祭に向けての千日修行の間、教会への毎日の参拝と、ご本部への月参拝のおかげを頂きました。

この時期に、主人が仕事で東京に居た時に、身体の具合が悪くなり、周りの皆にご迷惑をおかけして、大変な心配をしました。

その折のご本部参拝で、教主様にお取次を頂くと、

「ご主人が助かりますように、S家族が立ち行きますように」とお取次ぎの座でご祈念をしてくださり、

「こちらも懸命にご祈念します。貴女もぜひともおかげを頂きましょう」

とお言葉をかけてくださり、にっこりと笑ってくださいました。私はこれで助かったと思いました。

Y教会にお参りして、T代先生にお話したら、

「良かったねえ、K子さん、ご本部は何があるかわからない良いとこやねえ」と大変喜んでくださいました。

やはりご本部に月参拝をすれば、自分の気持ちの中に、何かありがたいというものが頂けるので、それ以来教主様から、お言葉を頂くことはないのですが、これからも嬉しく、ご本部月参拝を続けていきたいと思いません。

去年の十一月に実母を亡くしたのですが、亡くなる前に、看病のために田舎に帰り、二週間ほど母につかせてもらいました。

母の介護をするに当たり、つくづく介護ヘルパーの仕事をしていて良かったなと思いました。

またこの時に、Y教会の先生から、「お母さんの容態が変わったでしょう」とメールを頂いて直ぐに母が亡くなったので、わあ、ずっと母のことをお願いして下さっていた先生は、母が亡くなるのが判っておられたんだ。凄いなあと思いました。

先生やT代先生から、これまでおかげを頂いた事を、ご大祭でお話をされたらと進められた時に、改めて考えると、私自身は大変にありがたい、Y教会やご本部へのお参りです。

しかし子どもや孫の代では、教会から遠のく場合もあるかもしれないと思い、このお話をすることで、自分の子どもや孫に限らず、何があってもやっぱりお参りしていたら、何かありがたいものがある。おかげがあるということを、若い人たちに少しでもわかって頂ければ嬉しく思います。

先生から、この記念祭を節に、若い人の手本になる信心をしなさいと言われます。

どうすれば良いのか判りませんが、何でも相談ができて、お願いして頂ける教会があり、信心仲間の声をかけて頂くことも嬉しくありがたいのです。

ですから、自分自身がまず、ありがたい気持ちでのお参りを続ける事で、若い人に、このK教の信心を伝えていこうと考えています。

そして、毎月、一・二回子どもたち家族が集まってくれることを、ありがたく思い生きていこうと思います。

今日のお話をさせて頂いたことで、改めて自分の心の中に、神様にありがたいという思いが出るように、お話をさせて頂きました。

本日はありがとうございます。

このお話を聞いていた彼は、思い出したのです。

このK・Sさんが初めて、ご主人が病気で命が危ないので助けて欲しいとお願いにお参りされた時に、天地金乃神様にお願ひした内容を、

「この方のご主人が、命を助けて頂き、お役に立てる身体に回復させて頂きましたら、そのご恩は子孫まで伝えて信心をさせますから」



確か・・・そう願ったこと。

K教は、代勝りの信心が三代続いたら、それが、天地金乃神様のみ心に叶う信心になるので。その子孫にとって本当の助かりが頂けることになるのです。

そうなることを、彼は今も願っているのです。

このようにして、四人の信者さんのお話があり、平成二十六年五月五日の、Y教会開教九十年記念大祭が終わりました。

翌日、彼とT代と孫で、朝早くにY教会を出て、新幹線に乗り一路ご本部へと向かいました。彼にとってはハワイ以来、T代にとっては初めての孫との長い時間の交流です。孫はその時四才と四ヶ月でした。親バカではない、祖父母バカになりました。この時の孫は、機嫌のよいお世話のしやすい子どもだったのです。

USJには、サンリオをテーマにした場所もあり、T代と孫はUSJを堪能することができました。記念に孫の似顔絵を描いてもらいました。

そして、無事に二泊三日の楽しい旅行を終えて、Y教会に戻ったのは八日の夕方でした。彼の息子家族は、入れ替わりに、その夜の飛行機で慌ただしくハワイに戻りました。息子には、ハワイ教区でのご用があったのです。

T代が息子家族と会うことが再びなく、この時が最後になるとは、誰も想像することができませんでした。

※楽しむポイントは、信心していても人生には、登坂下り坂、そしてまさかと言うきかもあること。

開教九十年記念大祭を終えたY教会で、彼にとって信者さんとの関りで、大きなことを二つ決断しました。

それは、彼がY教会に来て以来定めていた、お取次の座に座る時間の変更でした。午後三時から午後六時の三時間、教会を閉めることにしたのです。つまり、朝五時から午後三時までと、その後に午後六時から午後八時までお取次の座に座ることにしたのでした。

もちろん、お祭日と行事のある日は、それまでと同じ時間で座っていましたが。

脊柱管狭窄症の手術の後、彼は順調には回復はしていましたが、やはり五十代半ばになっていたこともあり、長く座ると腰にくるのです。

それまで、お広前の長椅子に横になることなど、考えもしなかった彼ですが、時々横になって腰を伸ばすことが、必要になっていました。しかし、信者さんお参りが続くと、ちよつと横

にというわけにはいかないのです。お取次ぎの座に座る椅子を、買い替えることもしました。クッションの効いた椅子より、固い椅子の方が、彼の腰には良い具合でした。

お取次ぎの座に座るといふ、簡単な修行でも若い時にしか、十分にできないものだなあと、しみじみと彼は思いました。そして、その若い時に十分に座れた自分は本当に幸せであり、良い経験を、天地金乃神様からさせて頂けたのだと、ここに至って改めてお礼申し上げた彼なのでした。

※楽しむポイントは、それぞれの年齢に応じた身体の使い方をし、無理のないようにお役に立つこと。

開教九十年記念大祭の少し前から、Y教会に一人の青年が、天地金乃神様からお引き寄せを頂かれて、お参りされるようになっていました。その青年は、若い人が百人に一人罹るといわれる、統合失調症の患者さんでした。

高校を出た頃から、統合失調症になられたようでした。

その青年の行動は、時には周りの信者さんを、戸惑わせることもありましたが。

その青年はお参りすると、お取次の座の前に、ずっと居ることも度々ありました。この青年

のお取次は、彼にしか対処が出来ないところがあり、他の信者さんのように、T代に任すことができませんでした。T代も何とか、その青年を助けたいと思いましたが、対応に苦慮することがあったようでした。

そういう事情も、午後三時から午後六時まで三時間、教会を閉めることにした一因でした。その青年にも、そのことを伝えました。

その三時間の間に、彼が担当していた祭典時にお供えする品物の買い出しや、他の雑用を済ますことにしたのです。また、信者さんの年祭や宅祭などのご用も、その時間帯でできるだけして頂けるように、信者さんにもお頼みしたのでした。

こうして彼は、その青年にいつでも万全に、寄り添えるように配慮したのでした。

※楽しむポイントは、人を助けたいと思う時は、神様をお願いして、実意をもって相手に向かうこと。

天地金乃神様が、その青年を安心させてくださったのは、令和二年四月二日のことでした。その日はK教のご本部で、天地金乃神様のご大祭がお仕えされることになっていたのでした。参拝していた彼に、Y教会で留守番をしていた息子から、携帯電話に着信がありました。出てみ

ると息子から慌てた感じで、

「○○○(この青年の名前)さんのお父さんから、○○○さんが亡くなられたって、電話があった。かなり慌ててはったから、お願いしてあげて」

そういう電話でした。

彼も驚きましたが、直ぐにこの青年が天地金乃神様から大きなおかげを頂いたと思いました。人が死ぬことは、本人にとって、安心を得ることもあるのです。ああ、○○○さんは、ようやく安心ができたのだと。天地金乃神様から、くつろがせて頂けたのだと、彼は思いました。

彼は直ぐに、ご本部のお広前でお願いをさせて頂き、そう心に感じる事ができたのです。その日は、ご本部のご大祭ですから、天地金乃神様に、人がお願いしていたことが叶う、おかげの成就日です。この青年は、病気による幻聴幻覚に長く苦しめられてきたのでした。そしていつも、将来に大きな不安を抱えていたのです。この青年は、いつも幻聴幻覚から解放されて心が安心できるように、天地金乃神様をお願いをされていたのです。

この青年のご両親も、長年にわたりご子息の安心を願ってこられていました。天地金乃神様は、この青年とご両親が、安心できるおかげをくださったのです。この亡くなった青年は、更にもっと大事で、大きな安心を、この時にご両親からプレゼントされたのです。それは、ご両親がこれを機会にK教に改式をされて、K教によりご子息のご葬儀を執り行われたことでした。

人の生き死にを唯一決めておられる、天地金乃神様のおかげを受けて、お祭日に世を去る事で、青年自身は神上がりのおかげを頂かれたことになったのです。

その上に、天地金乃神様に、霊神様としての安心と立ち行きも、この青年は受けることができたのだと、彼は思ったのです。

天地金乃神様に、改めてお礼を申し上げ、この青年の霊神様としての助かり立ち行きを、お願いさせて頂いたのでした。

※楽しむポイントは、常に神様をお願いしていれば、人の死は全ての苦からの開放であり、神様がくつろがせてくださること。

それから、彼が変えたもう一つの話は、自心祭のお仕えの仕方でした。

自心祭とは、K教の教祖様が天地金乃神様からのお言葉により、教祖様ご自身の中にある神に対して、ご自身でお礼のお祭りをお仕えになったことを真似て、年に一度、自分の心にある神に、お礼のお祭りを仕えることです。つまり、自分の心の中にある、天地金乃神様の分け御霊としての『神』を自覚して、我ながら我が助かりの元である『神』にお礼を申し上げることです。

そのお祭りを、彼が信者さんに代わり、それぞれの自宅に向いて、お仕えをしていたのでした。それを、それぞれの信者さん自身に、自分で天地金乃神様・教祖様に対して、祭詞を書いて、自宅でお祭りをお仕え頂くようにしたのでした。

信者さんが、ご自身で祭詞をお書きになることが、本当のお礼お願いお詫びの確認にもなること、彼は思うのです。

※楽しむポイントは、年に一度は自身の心の在り方と、神様から受けているおかげを、自心祭を仕えて確認すること。

このように、彼のご用の在り方に多少の変化はありましたが、T代と共に、彼ら夫婦は力を合わせて、日々の修行生活を楽しみ、ありがたく毎日を、過ごすことが出来ていたのです。

「おやすみ」

彼が、いつものように午後十時半頃に、T代に声をかけました。T代もいつもの通り、

「おやすみなさい」

そう答えたのです。

その言葉が、彼が聞いた、最後のT代の言葉となるとは、夢にも思っていないかったです。彼とT代は、冬は別々に寝ていました。T代は冬には、コタツにもぐつて寝ることが常でした。当時の彼は、コタツに入つて寝ることは、身体が温もる以上に熱くなり過ぎて、寝る事が出来ませんでした。なので、冬の間は、寝る場所を別々にしていたのでした。今は、T代の真似をして、コタツに入つて冬は寝ているので、少し冷え性に身体がなつてきたのかもしれない。

翌朝、それは、平成二十八年十二月六日でした。いつものように、天地金乃神様が起こしてくださり、午前四時頃に目が覚めました。布団を出て、T代の寝ているコタツのある部屋に行くと、T代が、身体の上半身をコタツの外に出して寝ていました。

あつ、風邪ひくがな、と見た瞬間に思ったのです。

「おい、T代そんな寝方したら風邪ひくで」

と思わず声をかけていました。しかし、何の反応もありません。良く寝ているなあと思って、彼はT代に近づいて肩に触れて、

「おい、T代。起きや」

と揺り起こそうとしたのです。

T代から何のリアクションもありません。(変やぞ)と、彼は心に思いました。



ようやく彼は、普通ではない事態だと感じたのでした。彼は自分の手をT代の口に当てて、息をしているかを確かめたのでした。

息をしている気配がないのです。えええー、そんなバカなもしかして・・・？ 直ぐに一一九番通報をしました。それから彼は、慌てて服を着替えて、ご神前に出ました。彼の心は、もう何故か不思議に落ち着いていたのです。

ご神前で額ずき、

「天地金乃神様、T代はあなたの元へ帰ったのでしょうか？ 救急車を呼びました。まだ生き返る処置ができるならお願いします。今日は、A教会（T代の里の教会）の記念大祭の日です。その日に死んだのなら、T代は天地金乃神様から神上がりのおかげを頂いた証となり、ありがとうございます。どうか後の立ち行きをお願いいたします」

ピーポ・ピーポ、救急車のサイレンが彼の耳に近づいてきました。

教会のドアを開けて、救急隊員を迎え入れると。

「患者さんはどこですか？」

「二階です」

「じゃあ、二階に上がらせて頂きます」

「どうぞ」

彼に続いて、バタバタと救急隊員がT代がいる二階に上がってきました。救急隊員はT代の脈を確かめて、

「お気の毒ですが、もう亡くなっておられます。ここからは、私達の仕事ではなく、警察の仕事になるので、警察に連絡をさせて頂きます。奥様には触らず、このままの状態にしておいてください」

救急隊員から、そのように説明を受けたのでした。

あつ、これは色々な人に連絡をしなければ、とすぐに思ったのです。息子、親教会、A教会（T代の里の教会）、大阪センター（教団の教務機関）、父親や姉……信者さんなどです。まず、連絡したのは親教会でした。電話に出られた親教会長に、

「朝早くにすみません。実はT代が神上がりしました。取り敢えずお知らせします。詳しいことは、また連絡させて頂きますので……」

「えっ、T代先生が……」

親教会長も、驚きの声を上げておられました。

その後、彼は息子に電話したのですが、これが全く繋がりません。困ったなと思っている時に、警察の方が到着しました。

さあ、それからがまた大変です。自宅で亡くなったので、変死扱いとなり、遺体が検死解剖

されるわけです。

そして、不審な事がないかの確認の作業として、彼に対しての質問がありました。T代が生命保険に入っていたか。T代の通帳、保険証、玄関の鍵は何処にあるのか？何か病気があって、医師に掛かっていたか？

彼は、生命保険の加入はしていないことは、すぐに答えましたが、後は全て何処にあるのか、さっぱり判りませんでした。また本人が病院嫌い、歯医者さん以外は、五年前に入院してから後は、病院のお世話になっていないと返事をしました。通帳はT代がどれだけの通帳を持ち、いくら貯金があるかは、気にかけていなかったもので判りませんでした。それらは、結局、警察の方が、T代が生活をした部屋の中を探して、見つけてくださったのです。警察の方のほうが、こういう場面の処理になれているなあと感じました。

T代に掛けられた生命保険もなく、T代の通報のお金に、大きな出金もないなどを確認されて、T代が使っていた玄関口のカギも見つかり、事件性はないと判断して、警察の方は帰られたのです。

T代の遺体は、既に病院に運ばれていました。

そうこうしているうちに、信者さんが朝参りに来られました。この状況を知って、皆さんたちも、びつくりされたのでした。

彼は、朝参りに来られた方に、他の信者さんへの連絡を頼みました。葬儀の日は、後程知らせる事にして。

他の所の連絡はついたので、困ったことに、肝心の息子に連絡がつきません。彼は窮余の一策で、親教会長にお願いをして、息子に知らせて貰うことにしました。それから随分時間が経って、やっと息子から電話がきました。当然のこと、息子もかなり驚いていました。この電話で、ようやく息子家族が、最短で日本に帰る日が確認できて、T代の葬儀の、日時の段取りができるようになったのです。

すぐに葬儀屋に連絡して来てもらい、八日終祭、九日告別式と決まりました。場所はY教会のお広前でした。

それから彼は大忙しでした。悲しんでいる間もなく、お広前の奥の多目的ホールを、大急ぎで片付けて布団を引き、T代の遺体を安置できるようにしたのです。

ほどなくT代の遺体が戻ってきました。葬儀屋さんがドライアイスなどで遺体を整えてくれました。翌日には、湯かんもして頂き、T代の身体をキレイにして頂きました。

※楽しむポイントは、天地金乃神様のお計らいで、人はいつ何時、この世を去るかも知れないので、この時に慌てることのないように、心の準備をしておくこと。

六日の内にT代の母親がT代の姉家族に連れられて来られました。

彼はA教会の記念大祭に、参拝ができなかつた事と、親より先にT代が死んだことをお詫びしたのでした。

彼の父親と姉も、来てくれました。

その夜、ご神前で彼は天地金乃神様に向かいあつていました。そして、改めてお礼を申し上げていたのです。

「この度は、A教会の記念大祭の日に、天地金乃神様の元に帰つたことで、T代が神上がりのおかげを頂けたことが、ハッキリと証明がされてありがとうございます。またT代が常々、天地金乃神様をお願いしていた通りの亡くなり方ができましたことは、T代も大変喜んでいてと思います。

五十九才十一ヶ月の間、天地の中で計り知れないお世話になり、ありがとうございます。

これからは、霊神としてお世話になります。T代を霊神とお引き立てを頂き、お役に立たせてください。

思えば、五年前の十二月にも、危うく命の無い所でした。そこを助けて頂き、五年の長生きができたこと、ありがとうございます。

それにより、夫婦で孫とも、楽しいご本部参拝とUSJにも行く事ができて、孫との良い思い出も残せました。

また、今度のことで、私のK家にあるめぐりを、気づかせて頂きありがとうございます。

私の代でそれは根切れのおかげを頂きますようにお願いいたします」

彼はそのように、お礼を申しあげたのでした。

※楽しむポイントは、人が死んだ時は、家族は嘆くよりもそれまで命を頂き、神様のお世話になったお礼を申すこと。

T代が神上がりしたことが、ハッキリ証明されたとはなにか？

彼は、神上がりとは、

『天地金乃神様を信じてきた人が、この世を去る時、百日以上前に、天地金乃神様からお知らせ頂くか、ご本部のお祭日、ご縁のある教会のお祭日に、この世を去る事が、そのハッキリとした証である。』

そしてその人を、子孫や縁のある人が、日々に拝礼して大切に霊神様と用いるなら、天地金乃神様が、霊神としてお役に立てることを、約束してくださったことになる』

彼は信者さんに、五十代半ばの頃からそう伝えてきたのでした。

A教会は、本来なら十一月十一日が、記念大祭を仕えるべき日なのでした。毎年この日が、A教会の大祭を仕える日と決められていて、ずっとT代の父親の代から仕えられていたのです。当時のA教会は、T代の母親が教会長のご用を務めていたのですが、身体の衰えがあり、実質はT代の妹が教会のことを差配していたのでした。T代の妹は、K教の教師の資格を持っていないので、教内のことをあまり知らなかったのです。

親教会長に記念大祭の祭主のご用をお任せ頂くことを、直前になってからお頼みしたのでした。しかしすでに、親教会長には、別のご用が入っていたために、親教会長の都合により十二月六日に、A教会の記念大祭をお仕えることになったのでした。しかし、変更した日がT代の神上がり日になったのですから、これもK教の拝詞の神徳賛詞の中にある、

『かんはか神量くすらいは奇しくて人の思いぞ及ばざる』ということのように思えます。

※楽しむポイントは、自身にご縁のある教会やご本部のお祭日に世を去る事は、霊神をしてお役に立たせてやると、神様が認められたこと。

ここに『段取りのT代』と、彼が呼んでいた所以が如実に出ているのでした。T代は、何事も余裕を持って、先に先にと段取りを考えて、行動するタイプの人だったので。日常生活で

使う物や、ちょっとした時の、人へのプレゼントなども、ちゃんとストックしていたのです。彼が、日用品で「T代、○○ないか」と、言うとき必ず出してくれるのです。また、「○○さんに、何か渡したいけど、何かあるか」というとき、これまた「はい」と言いつて品物が出てくる、そんな感じでした。その点でもT代の存在は、彼にとって本当にありがたい存在であったのです。夫婦揃って、『人に物をあげることが好き』という価値観が一致していたことも良かった、彼は思っていたのでした。

T代が、天地金乃神様に願っていた、自分の死に方とは、

「先生、私は一日も入院しないで、先生の言うように、最後まで、お風呂とトイレと食事が自分で自由にできるように、天地金乃神様をお願いしているの。そして、天地金乃神様の元へ行く時は、スツと行くのよ。それができるように、先生もお願いしといてね」という内容でした。

これは、T代自身が死ぬ一歩手前まで行つた、胃潰瘍で入院を経験した後に、言い始めた事でした。

もつと具体的に、T代自身の葬儀に関する事も、彼に言うようになっていました。例をあげると、

「刀自はいや。姫でない」と



「祭壇のお供えは、食べる物は要らない。お花だけにして」「自分の死んだ顔は、先生と〇〇（息子の名）だけにしか見せないで」

「先生ならしなと思うけど、私のためのお供えは受け取らないで」

等でした。どこかで、近いであろう自身の死を、予感していたようでした。

T代の実際の葬儀に当たり、「姫」は親教会長にお頼みして、「T代姫之霊」として頂きました。祭壇の供える物も、お花と写真だけとして、その写真は孫とUSJに行った時に、写した笑った顔を使いました。T代自身が祭壇の写真には、これが良いと言って選んでいたのです。そして会葬者からも親戚からも、いつさいお供えは受け取らなかつたのです。

しかし、葬儀の際のお別れに花を入れた時に、死に顔は止むに終えず家族・親族には見せることにしました。これはT代にごめんなさいです。

その償いと言っては何ですが、彼はこの葬儀の中で、T代が喜ぶだろうということを、一つしたのです。それは、ハローキティの骨壺にお骨を分骨して納め、息子に渡し、ハワイでお祀りするようさせた事でした。まあ、ハローキティの骨壺が存在していたことには、驚きまじたが。

この様にして正しく、段取りのT代の面目が立ったお葬儀を仕えることができたのです。

※楽しむポイントは、自身の神様へのお願いをはつきりと具体的に、家族や周りの人にも伝え

ておくこと。

でもこれは、序の口でした。葬儀後に、彼がここまで段取りをしていたか、ということが出てくるのでした。

年が明けて、一月の半ばでした。T代宛にある銀行から、五年定期預金の満期通知が届いたのでした。そんな預金があることを、まったく知らなかった彼は、ビックリしました。その額は百万円でした。

T代はY教会開教九十年記念大祭に息子家族がハワイから無事にお参りしてから、嫁や孫の名義で積立預金をしていたことは、T代から聞いて知っていました。しかし彼は、この定期預金の存在はまったく知らなかったのです。T代が、

「自分の葬儀費用は、先生に迷惑はかけませんよ。ちゃんと用意をしています」  
そうT代が言ったような、ドンピシャのタイミングの満期でした。

ただ、この定期預金を引き出すために、T代の戸籍が必要で、そのために一日かけて、三ヶ所の役所をまわることになり、相続人の一人であるハワイの息子の承認も要る事態になったのです。そのために、息子もわざわざハワイの領事館まで、行かなければなりませんでした。

自分には、関係がないと思っていた遺産相続の手続きの苦勞の一端を、図らずも彼は経験したのでした。

彼は、自身の信者の第一号は、T代だと常に思っているのです。T代にもその意識があり、彼のことを生活の場で、いつも「先生」と呼んでいたことも、その表れといえます。

彼の天地金乃神様や教祖様に対する思いを、T代が一番に理解をしてくれました。そして彼のご用がしやすいように、常にサポートをしてくれたのでした。

この度の、T代の亡くなり方が、彼への最高のサポートであったなあと、しみじみと思うのでした。つまり、彼の言う神上がりの見本を、T代が見せてくれたからです。

彼は、常々信者さんに、天地金乃神様から、おかげを頂く方法を伝えています。その方法をT代自身が実践して、見事におかげを頂いたのです。彼が信者さんに伝えていることが正しいことだと証明してくれたからです。

自身の心の中にイメージできたおかげが、天地金乃神様から、自分が受けることができるおかげとなる。

T代の神上がりのおかげは、そのことを実践した結果であったといえるのです。改めて、T代、あつぱれだ。ありがとうと、彼はお礼を言いたい思いでした。彼は、T代によって十分に

満たされた人生だったと感謝して居るのでした。T代もまた、そうだっただろうと思っ  
て居るのですが、実際はどうだったのでしょうか・・・。

※楽しむポイントは、夫婦の間で、共通の神様に向かう姿勢があること。

仏教をはじめ宗教では、往々にして欲を捨てるようにと言われますが、人間が持つすべての欲も、天地金乃神様からお与えくださっているものだ、彼は思っているのです。ただそれを正しく用いることが大切なのです。食べ物も何を食べても飲んでも良いのです。ただ食べ過ぎ飲み過ぎに注意して、身体の喜ぶところで止めることです。

性欲も人ととのコミュニケーションの方法として、お互いが楽しみ喜べるものであることが大切なのです。ただ自分の満足だけを得る性欲は、相手に苦痛となりやすいのでダメなのです。また、性欲は用いる相手を間違えることもダメなのです。

物欲も、分相応に必要な物を買いたい求めることは良いのです。そしてそれを大切に使用して頂くのです。

そして、すべての人に持つて頂きたい欲が、彼にはあるのです。それは、『人のお役に立ちたい、人を助けたい』という欲です。

※楽しむポイントは、自身と周りの人の喜びになる欲を持つこと。

さて、T代の神上がりで、彼が気づいた、K家のめぐりとはいかなるものか。

彼の母親は、昭和二年に生まれています。その母親の生みの親、彼からいうと、祖母になる人は、昭和十年にこの世を去っています。彼の祖父は、昭和三十八年にこの世を去っていますから、祖母は祖父よりも、二十八年も先に、天地金乃神様の元へ帰っているのです。

そして、彼の母親は、昭和五十七年に、天地金乃神様の元にいきました。彼の父親は、今も九十七才でまだ健在です。母親よりもすでに、四十年以上長生きをしています。

T代も神上がりのおかげを頂いて、彼より先に天地金乃神様の元へ帰りました。つまり、K家は三代続いて、夫より妻が先にこの世を去っているのです。女性の方が、長生きするとデーターにあります。これに明らかに逆行しているのです。この様に、三代続いて女性の方が先になることは、極めて珍しいのではないのでしょうか・・・。

彼は、これがK家にある家のめぐりだと、ここで気づいたのです。彼の代で、このめぐりの根切れを折っているのです。

※楽しむポイントは、人には、自身のめぐりや家のめぐりが必ずあるので、神様にめぐりのお

取り払いを、常にお願ひすること。

彼はT代の神上がり後、初めて教職舎のキッチンとリビングルームとお風呂以外の場所に、足を踏み入れ覗いたのです。そこには驚くほど物が収納され溢れていました。いつのまに……という感じですよ。

平成十四年に教職舎が建つてから、T代が神上がりする平成二十八年末までの十四年間に、全ての部屋や収納スペースが、服や色々な品物で埋まっていました。

家族親族をはじめ、信者さんや友人知人にも、形見分けとして使える物を頂いてもらいましたが、簡単に片がつくような量ではありませんでした。

第一に、T代のスタイルが細すぎて、残された服やジーパンが、他の人には殆どサイズの無理でした。大半を業者に二束三文で引き取って貰うことになったのです。その中で、T代がK教学院に居た時の親友で、彼の息子が幼児の頃、Y教会の近くに出来た、K教関係の高校の教師を、ご主人がされていたことで、一時お参りされていたご夫婦の先生が、T代の神上がりを知って、九州からわざわざお参りに来てくださったのです。

その方が、T代のコート成形見に頂いてくださり、今も大事に着てくださっているそうです。

また、ご霊前にお花を送ってくださった、彼のK教学院の同期の先生ご夫婦には、T代のブランド品の小物入れを、形見として贈ったのでした。

※楽しむポイントは、常に必要な物以外は、あまり物を持たずに生活をする事。

T代が受け持ってくれていた、日常生活の部分も、彼が行うので時間的には大変でした。しかし、T代が神上がりする前に、午後三時から午後六時まで閉門にしていたので、一人でもどうにか遣り繰りして凌げたのです。

彼がご本部やご用でどうしても外へ出る時は、信者さんに留守番を頼みました。息子家族がY教会に帰るための部屋の整理に忙しく過ごしながら、ご用をさせて頂いたのです。

K教は、『子孫繁盛家繁盛の道を教える』と神言があります。しかし、最近のK教内を見ると、子孫繁盛の元である結婚が、若い籍教師の中で、思うようにできていないと感じるのです。

若いK教団の教師に結婚する気がないのか、高望みをして相手を探しているのかわかりません。少なくとも、天地金乃神様に、

「親や先祖が喜びますから、自分にあつた結婚相手が見つかるように、どうかお願いします。そして子どもを授けて頂き、大切な子育てのご用を、天地金乃神様から与えてください」  
そうお願いすれば、願いが叶わぬはずはないのです。天地金乃神様は、世界で一番に顔が利く、仲人さんなのです。天地金乃神様は、子孫繁盛を願つておられ、夫婦が子育てのご用を、喜びの心でお役に立つことを望んでおられるのです。

天地金乃神様もお願ひされていて、人もお願ひするなら、そのお願ひは成就しない方が不思議だと、彼は思うのでした。願うべき天地金乃神様に会い、願うべき時期に、願ひ方を知つて、実意丁寧にありのままを祈つていけば、必ず結婚という形になる。彼は、自分のT代との結婚を振り返り、そう確信するのです。

天地金乃神様に、普段からよくお礼を申し上げて、何でもお願ひさせて頂き、仲良くしていれば、その人がお願ひすれば、必要な人、物、お金などをちゃんと差し向けてくださる。それが、彼がイメージしている天地金乃神様なのです。

事実、彼はここまで、天地金乃神様からそのように、おかげを頂いてきたのです。

彼一代は、慢心や我欲で信心を間違わなければ、自分のことに關しては心配がないのでした。  
※楽しむポイントは、願うべき神様に出会い、願うべき時に、願ひ方を知っていれば、神様から必要な人やお金や物などが差し向けてくださること。



K教の教祖様は、四十二才の時に九死一生の大病に罹られました。それが天地金乃神様に、たどり着かれるきつかけになるのです。

その時、その場に居合わせた人の口を通して、

「お前一代、一生まめで米の飯をたべさせてやる」

そのようなありがたいお言葉を頂かれたのです。

つまり、その時はまだ、お百姓であった教祖様に対して、これから先の、健康と生活の立ち行きを保証されたのでした。

彼は自身の実感から、本当に教祖様を神習い、人が助かりさえすれば良い、との心でお取次の座に座りきれば、K教の教師なら、天地金乃神様から、誰でも受けられるおかげだと思っ  
ているのです。彼とT代がそうであったように。

※楽しむポイントは、教会長がお取次の座に座ることに専念をし、家族がそれを全力でサポートをすること。

教祖様は、天地金乃神様からのお頼みを受けられて、四十六才からお取次の座に座り切りに  
なされました。

ご自身が四十二才で死んだものとして、天地金乃神様からの、お試しや差し向けられた修行を、すべてありがたく良い方に取り、天地金乃神様にお礼を申される生活を経てのことですが。教祖様のご一生は、実に質素でお取次の座となる場所も、ごく小さな所で行われていました。神棚もさえも、粗末なものだったのですが、そこで起きる靈験の素晴らしさとのギャップに、当時のお参りされた方が、皆驚いたと伝えられています。

その建物は今も残されています。

現在のK教において、朝から晩まで、教会長がお取次ぎの座に座られている教会が、さてどのくらいあるでしょうか？

人が助かりさえすれば良い、との思いで座る方が・・・。

K教団のお取次ぎの座の建前は、そうあるべきだと示されていますが、建前だけになってしまい、実情はかなり怪しくなっているのではと、彼は思うのです。

座つていても、お参りがないと、生活ができるだろうか、食べられるだろうか？ と心配が先に立つのでしょうか。

彼は、天地金乃神様が、自分には確かに、給料を出して頂けていたと思うのです。なぜなら、朝の五時から夜の八時まで、お取次ぎの座にいたのを、三時間でも閉めた途端に、お下がりが減りだしたからです。勤務時間が短くなったのですから、当たり前でしょうか。

それはさておき、死んだと思つて欲を放すことは中々難しいですから、無理もないのですが。もちろん、彼もそんな思いにはなれませんでした。ただ、できるだけ形の真似だけはしようとして、朝から晩までお取次ぎの座に居ることに、T代の協力を得て実行したまでのことでした。そこに、心の真似ができなくても、天地金乃神様は、形の真似をしただけのおかげを、彼にくださったのです。

各教会の初代は、大体そこを通られているのだと思うのですが。

※楽しむポイントは、教会長は、はじめは形の真似でも良いので、まずは取次の座にいます。

教会長が高齢になり、お取次ぎの座に座れなくなる前に、後継者にバトンが渡せるようにしておく。それには先ほど述べた、教会の若い在籍教師が、良い伴侶を得ておくことが一番です。

万が一、子どもが継がなくても、天地金乃神様に後継者をお願いしておられるなら、教会は存続するように天地金乃神様がしてくださいさることです。

Y教会の初代は、少し時期が遅れましたが、Y教会が人の助かる場として残ることを、諦めずに天地金乃神様をお願いされたから、彼がギリギリのタイミングで、後継者になる事ができたのでした。

各教会長が、お取次ぎの座に座ることを、天地金乃神様から託されたご用として、最優先に考えるならば、彼は次のように思います。

教会長が、ご本部や親教会に月に一回参拝をさせて頂くことは、礼儀として月に一回は、必ずおかげを頂くために大事なことですが、それ以外は基本的には自身のお広前のお取次のご用を勤めるのです。

K教の教会にお参りされる方は、天地金乃神様がお引き寄せくださる存在だと言えます。その教会の教会長が、一日に百人のご祈念が出来るなら、百人のお引き寄せがあります。十人ならお引き寄せは十人となるのです。

たまに、自分の教会にお参りされていた方が、何か訳があり他にお参りされるようになると、信者さんを取られたと言われる先生があります。仮に一人減ったとしても、天地金乃神様に、新たに一人お引き寄せくださいとお願ひすれば、その先生が一日にご祈念が出来るだけは、ちゃんと補充をして頂ける。

天地金乃神様とは、そういうお働きをしてくださるのです。それが判つていれば、教会は大丈夫なのです。腹を立てて、文句をいうから困ることになるのです。

ご用される方も同じことが言えて、ご用に先生を使うと便利ですが、ご用をしてくださる信者さんのお引き寄せが頂けないことがあります。また、ご用される信者さんを育てることがで

きずに終わることもあるので、そこは注意をする必要があります。

信者さんからの見方から言うと、天地金乃神様からのお引き寄せがあつて、お参りができています。そこを慢心して、自分の力でお参りしている、ご用していると思うと、お参りができない、ご用ができないような状態に天地金乃神様がなさることがあるので、信者さんも気をつけて頂きたいと思います。

天地金乃神様から信心させて頂けているのです。自分の力だけで、信心ができていないのです。

※楽しむポイントは、お参りもご用も、人がさせて頂きたいという願いがあつて、神様がさせてくださること。

子孫が続いてゆくことが、天地金乃神様の願いであるなら、それを生み出すものであるセックスを、彼は天地金乃神様が与えてくださった、人と人とお互いの心が分かり合える、コミュニケーションの一手段だと思つていいのです。

これは、天地金乃神様のありがたいお差し向けだと言えます。

そして生まれた子どもを育てることは、天地金乃神様から頂いた大切なご用と務めることだ

と、教祖様はおっしゃっておられます。天地金乃神様は、『夫婦の間で授かった場合は、必ず生んで育てるようにせよ』と、神言されています。

彼は、人が天地金乃神様から受けるおかげの九割は、この時の親のお願いあると思っっています。

『人間はみな、生まれる時に天地金乃神様と、約束をしてきているのである。どういう災難があるとか、こういう不幸があるとかいうことは、決まっているのである。信心を強くすれば大難は小難に、小難はお取り払いくださる。それが、お繰り合わせを頂くとということであると神言があります。』

生まれる時の約束は、生まれて来る子どもの両親が、天地金乃神様にお願ひすることによって決まります。彼とT代は、それを実証するべく、「子どもを授かりますように」と常にお願ひをしていました。そして、懐妊が判ってから、「丈夫で育てやすい、良き心と良き宿命を持った子どもを授かりますように」と夫婦でお願いして、彼がT代のお腹に、お神酒を毎日風呂上りに吹きかけていたのです。

結果、彼の息子は幼い頃から成人になるまで、病気で医者に走ることはなく、本当に育てやすい子どもを頂いたのです。

世の人がみな、子どもを授かる時に、このようにお神酒を用いて夫婦で、天地金乃神様にお

願いされたら、生まれてきた子どもと、その両親の大きな助かりになると、彼は思うのでした。

世間では、時として信じられない、強欲非道というような事件を起こす人がいます。もし天地金乃神様に、子どもの両親が、このようにお願いしていたのなら、そういう人が生まれなくなる、彼は本気で思っているのです。

※楽しむポイントは、子育てを神様からの大切なご用だと思い、良い親になれますようにお願いしながら育てること。

懐妊について、夫婦の間以外（未婚女性や未亡人、また性暴力など）で授かる場合があります。生んで育てられる状況でない時は、『月流し』（自然流産）を願えと、教祖様はおっしゃっています。これは、天地金乃神様が、人の生き死にを決めておられる唯一の神様であるから、人が助かるための願い方を教えておられるのです。

倫理道徳は、人が正しく生きる道を説きますが、宗教は人が助かること、つまり心が喜び和らぐこと、安心が出来ることがメインテーマとなると、彼は思っているのです。

世間の常識や倫理道徳、正しいと言われることは、時代社会で変わることや、国々で違うところがあります。

何時の時代でも変わらないルールは、天地の道理だけだと、彼は思っていたのでした。  
※楽しむポイントは、天地の道理を知り、天地の道理に合う願い方や生き方をする事。

彼は、宗教の存在する価値は、天地金乃神様が『人が助かりさえすれば良い』と願ってくださっている、御心だと捉えているのでした。宗教でよく言われる真実という言葉を当てはめるなら、その宗教を信心された方に、『人の助かりを願う心となり、喜び和らぎ安心が生まれること』

それが宗教の唯一の真実だと、彼は思っているのです。

仏教でもキリスト教でもイスラム教でも、どの宗教においても、その宗教を信心された方の心に、人の助かりを願う心と和らぎ喜ぶが満ち、安心が生まれる。そこにその方にとって、その宗教が真実だと言える姿があると、彼は思っているのです。

それは、天地金乃神様が、

『天地金乃神様は、神、仏をいとわない。神道の身の上も仏教・キリスト教の身の上も、区別なしに守ってやる。』

宗教は、天地の間のものであるから、何派かに派などと宗旨論をしたり、凝り固まったりす



るような狭い心を持つてはいけない。

心を広く持つて、世界を広く考えていかなければいけない』

『どの宗教を信じていてもくさすことはない。

みな、天地金乃神様のいとし子である。あれこれと宗教が分かれているのは、例えば同じ親が産んでも、大工になる子もあり左官になる子もあり、商売好きな子もあるというようなものである。

宗教が分かれているといっても、人はみな天地金乃神様の子で、それぞれに分かれているのである。

そばの好きな者や、うどんの好きな者があり、私はこれが好きだ、私はこれが好きだと言って、みな好き好きで成り立っているのであるから、くさすことはない』

『人の宗教をそしる者がある。神道がどう、仏教やキリスト教がこうなどと、そしつたりする。自分が産んだ子どもの中で、一人は神主になり、一人は僧侶になり、一人は神父になり、また、役人になり、職人になり、商人になりというようになった時、親は、その子の中で誰がそしられて、嬉しいと思うだろうか。

他人をそしるのは、天地金乃神様の心になわない。

釈迦もキリストもどの宗祖も、みな天地金乃神様のいとし子である』

などである神言から、彼が導き出した答えでした。

※楽しむポイントは、すべての人に、人の助かりを願い、和らぎ喜ぶ心が生まれる事が宗教の真実であり、神様の願いであること。

令和二年は、長く続くことになる、コロナウイルス禍との闘いの始まりでもありました。

天地金乃神様にお願ひすれば、インフルエンザやコロナウイルスなどの、流行り病には罹らないと、信じている彼には、どういう事でもないことでしたが。実際に、これを記述している令和五年四月まで、彼の家族は一度もワクチンを打たずにいますが、誰もコロナウイルスに罹らずに過ごしています。

願うべき天地金乃神様に、

「私の周りにコロナウイルスに罹る人がありませんように」と、人の助かりを先にして、願ひする方法を知って、お願ひしていればおかげを頂けるのです。

彼の心の中のおかげのイメージは、百人のコロナ患者の中に居ても、自分は天地金乃神様のお守りを頂いて差し支えないという姿でした。そういうしつかりとしたイメージを持つことが、彼は大切だと思っっているのです。満員電車で傍の人が、ゴホゴホと咳をした時に、

「嫌やなあ、風邪をうつされたら」と思うのではなく、「傍に居る方の風邪が良くなりますように」と、天地金乃神様をお願いする心になれば、風邪を引かずに済むのです。

彼自身は、大丈夫だと信じていても、やはり他の信者さんはそうはいきませんでした。もちろん世間もそうです。

彼は、流行り病に対して、一つの助かり方の手本を示しただけです。なので、しっかりとした助かりのイメージが持てない方は、それなりにワクチン接種もして、対処されることが良いと思います。

※楽しむポイントは、自分の周りの人が、コロナウイルスに罹ることがないように、神様にお願いさせて頂くこと。

彼の息子家族も、コロナウイルス禍の影響で、ハワイから帰国しました。

それを受けて、一部の信者さんから「息子家族をホテルで隔離をしてください」と、彼は言われたのです。彼は、その時にある二人の信者さんのことを、思い浮かべていました。

それは、彼がY教会に来た時に居られたお医者さんで信徒総代であったNさんとT代が、実の母親のごとく慕っていたT子さんのことでした。

T子さんは、当時は介護施設に入っておられ、面会が出来ない状態でした。

もし、NさんやT子さんが、この状況を知られたなら、きつとこう言われたらろうと思ったのです。

「先生、僭越ながらご子息ご家族には、この際ですからホテルの広い部屋で、隔離期間をゆっくり休んで頂ければと思います。掛かる費用は、私が神様にお供えします」

まあ、このお二人はそういうお人柄であり、それが出来る経済もある、おかげを受けておられたのです。本当に、神様のご用をする私たちのことを、大切に思いそのように用いてくださった方でした。

しかし、こういう頼りになる信者さんがおられると、教師にも心に注意が必要です。

『信者に不同の扱いをするな、物を余計に持つてくると、それを大切にするようなことではならぬ』

つまり、お供え多くする人とそうでない人で、接する態度変えてはならない。天地金乃神様に、お願いさせて頂く心も変えてはならないということなのです。

※楽しむポイントは、お供えの多い少ないで、お参りされる方にたいして、対応を変えてはいけないということ。

教祖様は、その当時の身分が高い方がお参りに来られても、特別扱いされずに対応させていただきます。

その流れで、今もK教は誰の紹介もなく、多額の献金をする必要もなく、ご本部のお取次ぎの座の前に行けば、どなたでも教主様にお会いできるのです。

数十万人の信者さんがある宗教教団で、このように簡単に教団トップの方に会えることは、中々ないことだと思ふのです。

※楽しむポイントは、神様の前では、どの人も平等に助かる条件があること。

K教は、教団様がいつも最前に立って、信者さんに平等に接しておられ、一番にご修行してください。と、珍らしい教団なのです。

天地金乃神様は、

『お参りする者の中には、神がおかげを遣<sup>や</sup>らうとしても、いや結構ですと断るような者もある。神は人がおかげを受けるのが嬉しいのだ。たとえ神がおかげを遣らないと言つても、いや、

おかげを頂くまで帰りません。そういう者がおかげを受ける』

そのように神言されているのです。

天地金乃神様にお願いさせて頂き、自分が助かれれば、必ず周りの助かりにもなるのです。

例えば、飛行機に乗るとして、天地金乃神様に、

「この飛行機が無事に目的地に着きますように」

そうお願いして、必ず無事に着くとイメージができたなら、無事に着くのです。

彼は、天地金乃神様にお願いさせて頂くなら、それぐらいおかげを頂くことは、当然だと思っ  
っているのです。

御巢鷹山に墜落した飛行機に、誰か天地金乃神様に、お願いして乗る方が居れば落ちなかつ  
たのではないか。

京都アニメーションの放火事件がありました。誰か一人でも、

「この建物でみんなが、元気で無事にお役に立てますように」

と天地金乃神様にお願いしたならば、事件は防げた。

それが、彼が思っている、天地金乃神様が人を助けてくださるイメージなのです。

事実、二代教主様の時代に、大阪から当時の汽車で、ご本部に参拝された先生が、汽車に乗  
る前に、天地金乃神様から『汽車が脱線する』とお知らせを受けられたことがありました。

その先生はどうされたか。

天地金乃神様のお知らせを、自分だけに活かすなら、汽車に乗らなければよいわけですが、ところがその先生は汽車に乗り、ずっと事故がなく無事に、ご本部に着くように祈られたのです。

汽車は何事もなく、ご本部に着いたのでした。その先生は、無事に着いたお礼を申しつつ、自分がお知らせを頂いたと思つたことが、違つていたのかとも感じられたのでした。ご本部のお取次の座に進まれた時に、その先生が言葉を出すより先に、二代教主様がいきなり、「道中、大変結構なおかげを頂かれましたなあ」と声をかけられたのでした。そうです、二代教主様も、汽車の脱線のお知らせを、天地金乃神

様から受けておられたのです。その先生は、喜びに打ち震えられたのでした。

※楽しむポイントは、神様から受けたおかげは、自分だけが助かるためだけものにするのではなく、周りの人を助けるように使うこと。

帰国した息子家族の隔離期間も終わり、お広前に出られるようになりました。この頃から、彼の右足に異変が出てきたのでした。

自転車には乗れるのですが、徐々に歩けなくなってきたのでした。

脊柱管狭窄症の時とは様子が違うので、良いと言われた鍼灸整骨院で針やマッサージの治療を受けて様子を見ました。もちろん、天地金乃神様をお願いしていますが。

まだ四月二日のご本部のご大祭の、代表参拝はコロナウイルス禍のために、代表者しかお参りが出来ない状況でしたが、無事にお参りができたのです。

四月末までは、彼は孫たちを公園で遊ばすこともできていました。

大阪府に、コロナの非常事態宣言が出されたので、彼はY教会の閉門時間を、お祭日や行事日以外は、午後三時に変えていました。

そして当時迎えた五月五日のY教会ご大祭は、コロナウイルス禍の影響で、政府の要請に沿った形で、祭典を仕えることになりました。

【この度は、新型コロナウイルスにより、人が一度に集まる事を避けるために、祭典は教会長が朝のご祈念の時に、一人でご大祭祭詞を奏上されます。

参拝される方は、午後八時までの都合の良い時に参拝され、お祭日のお徳を受けてください。参拝者には、ご大祭のお下がりをお渡しいたします。

皆様は、安心にお参りができることを祈っています。】

初めてこのような形で、ご大祭のご用を何とか勤めさせて頂けたのでした。



彼はこの時思ったのです。あつ、これが教祖様のお仕えになっておられた、お祭日の形に近いのではないかと。教祖様の書き残された物をご拝察すると、ご自身は、お祭日に一度も祭典をお仕えになつていないのです。ただお祭日が決まつていて、いつもよりお供え物を多くあげられ、一日かけてお参りされた方と、お礼を申し上げるような形であつたようです。

彼はお祭日の原点に返つた経験が出来て、何だか嬉しいような気分で、その日のご用を勤めたのでした。

※楽しむポイントは、どういう状況でも、神様や教祖様、霊神様に対するお祭日のお礼はできるといふこと。

その後も、右足に改善の兆しがなく、五月の末に整形外科で診て頂くことにしたのです。結果は、右股関節がかなり悪くて、人工股関節を入れる手術を進められました。彼が、脊柱管狭窄症で手術した時には、下半身のレントゲン写真を見た医師が、左股関節も少し悪くから、いずれは具合が悪くなると言われたことがあります。その悪いと言われた左股関節ではなく、右股関節であつたことは不思議なことでした。もちろん、正常な人と比べると、左股関節も悪くはなつてはいるのですが。

いざ手術をするとなっても、世の中はコロナウイルス禍のパニック状態にあつて、簡単に入院手術ができる状況ではなかったのだので、彼は迷いました。しかし、よく考えて見ると、息子家族が帰国して、Y教会でご用が出来るようになった途端に、右足が悪くなってきたこと。

彼が居なければ、対処が難しい統合失調症の青年が、神上がりのおかげを頂いていたこと。

この二つのタイミングの思し召しを考えると、天地金乃神様が、彼に手術しておかげを受けよ、とおっしゃっているように感じたのです。

そして息子には事情があり、八月下旬からは、彼はまた一人でご用を勤めることになっていました。それで手術をするなら、八月中旬までに退院ができる日程でないとダメでした。それで、信者さんのお医者さんに頼んで、Y病院の外科医を紹介して頂くことにしました。

コロナウイルス禍で、手術する時期が難しかったのですが、都合をつけて頂き、六月二十八日入院、二十九日に手術をして頂けることになりました。

手術日まで、一ヶ月の期間がありました。それでもコロナウイルス禍の中では、最短の日程でした。彼は、足の不自由な中でも、座ることに差し支えなかつたので、お広前のお取次ぎの座に座るご用が、いつも通りにできたことを、ありがたいと受け止めていました。お取次ぎの座から、ご神前に移る数歩はどうか、杖を突いて歩けたのです。

その中でも、病院の診察には自転車で行けるおかげも頂き、食事を作ることも工夫してやり、

洗濯物を自分で干せるおかげを頂けていました。

彼は、なるべく息子家族のお世話にならずに、不自由を修行と捉えて生活を楽しむ心だったので。もちろん、お風呂もトイレも自分でできていました。彼がまだ、ギリギリそれらの事ができる時に、入院の日が来たことも、ありがたいおかげでした。

考えて見れば、彼もT代も、病気の時に限らずY教会では如何なる事態でも、それを楽しむような気持ちでいたのです。天地金乃神様がどのようなおかげをくださるか。

この点でも、二人の思いが同じであったことは、ありがたいかっと思えます。

※楽しむポイントは、いかなる状況においても、神様のお働きを信じて、先を楽しむ心でお願いをすること。

彼が入院する時、彼の姉の車を借りて、息子に送って貰ったのですが、ここで思わぬ展開が待っていました。

彼の右足の、手術のメスを入れる場所を見られた医師が、

「わっ、何やこれ、これでは手術できないやないか」

そう叫ばれたのです。

T代の一年祭が済んだ頃から、彼の身体に時々湿疹が出るようになっていたのです。それは、季節により良くなったり悪くなったりを、繰り返していました。

平成三十一年（令和元年）一月下旬に、頭にできた湿疹を掻いたことで、傷口からバイ菌が入ったのです。彼の顔が腫れ上がりました。彼は熱も出ず、不思議にあまり痛みが無かったので、大したことはないと思っていたのです。

しかし、お参りされた、お医者さんの奥さんが、彼の顔を見て、ただ事ではないと思われ、直ぐに医師のご主人に連絡されました。

聞かれたご主人は、

「それは蜂窩織炎だと思う、直ぐに抗生剤を飲んで、治療しないと大変なことになる」と奥さんに伝えられたのです。奥さんからその言葉を聞いて、このご主人の医師にすぐに診てもらいました。

その医師の見立て通り蜂窩織炎でした。二週間ほど抗生剤を飲んで治ったのです。天地金乃神様は、彼が呑気に構えていても、必要な時には、やはり必要な人を差し向けて、助けてくださるのでした。

彼は、この年の一年くらい間に、この蜂窩織炎に四回もなるのでした。そして、珍しく声がガラガラになる風邪を二回も引きました。まあ、時期的に、コロナウイルスが始まる前で良

かったのですが。彼が大病をするところを、これで凌がせてくださったのかも知れません。

いずれにしても、このような状況でも、彼はお取次の座に座るご用はできたので、ありがたいことだったと、彼は思っています。

天地金乃神様のお庇かばいで、熱もなく痛みも軽かったので、寝込むことなくご用生活の継続が出来ました。

※楽しむポイントは、常日頃から、神様と仲良くしていると、神様のお守りで、身凌ぎができるようにして下さること。

T代が神上がりして、コロナウイルス禍が始まり、そこに息子家族が帰国、そして歩けなくなる。

この流れが、彼にはストレスを溜めることになったのか、ご大祭を終えた頃から、一気に湿疹が酷くなり、全身に広がりました。

その足に広がった湿疹を、外科医が見られてビックリされて、先の「これでは、手術ができない」との言葉になったのです。

とにかく、二十九日の手術は中止されて、皮膚科の診察にまわされました。

皮膚科の先生は、若い女性の医師でした。この医師は、彼の湿疹を見て、「外科の先生は何を心配されているのだろうか？ただの普通の湿疹だから、手術に差し支えないのに……。外科の先生に手術はできると伝えておきます」

そのような見立てでした。それで再び外科医に会ったのですが、やはり手術の日は変更になったのです。

しかし、何とその変更された日が、ご本部のお祭日に当たる十日でした。おかげの成就日です。これを聞いた瞬間、彼の心にあつた、一辺のモヤモヤが晴れました。彼が、お祭日を意識するようになってから、手術などに関わる時には、必ずお祭日が、何処かに絡んできていたのです。

だから、今回は入院する日も、手術の日も当たっていないことが、彼の心に一辺のモヤモヤとなっていました。まあ、コロナウイルス禍の、急な手術のことだから仕方がないかとも思っていたのです。

だから、手術の日が延びて残念という思いより、天地金乃神様のお働きを見せて頂けたように、嬉しくありがたい思いが勝ったのでした。

もし手術日が十日でなかったら、少しはガツクリしたところですが。

※楽しむポイントは、神様は必ずお守りくださっていることを、何かの形でお知らせくださる

ということ。

手術の日は延びましたが、彼は医師に頼んで、そのまま入院させて頂くことにしました。彼は、自分の足の状態から、教会に戻れば返って息子家族に、お世話をかけてしまうと判断し、病院に居る方が、湿疹を良くするのもプラスになると思っただけです。

病院は冷房が程よく効いていて、汗をかかずに済みます。汗は湿疹には大敵なのでした。Y教会で彼は、お広前には冷房を入れていましたが、T代が冷房を嫌がったこともあり、来客がある時しか、生活スペースでは冷房を使うことはありませんでした。

こうして彼は、病院のベッドの上の人になり、移動は車椅子を使うことになりました。このベッドの上で、彼は信者さんのご祈念名簿を開き、信者さんそれぞれのお願ひすることと、今までのおかげを頂いたことを思い返し、お礼を申し上げることに専念していました。

七月四日になって、医師が病室にやって来て、

「手術を十日に予定していましたが、早めて八日にします。あなたも一日でも早いほうが良いでしょう」と言われました。

彼は、一瞬心に、（あれ、お祭日から外れる）と思っただけでした。

しかし、これがまた後々におかげとなる、天地金乃神様のありがたいお計らいでした。

八日当日、手術の担当医が「最高の手術が出来た」と喜べる結果になることを、天地金乃神様にお願ひして、彼は手術室に向かいました。

そうです。ただ、手術が上手くいきますようにと、自分の助かりを思つて願うのではなく、手術をしてくださる医師の助かりをお願いして、手術を受けることが一番に大切なことです。そうすれば、手術後の痛みトラブルもなく、順調に快復ができることを、彼は今までの自身の手術の経験で判つていたのでした。それを今回も実行しました。

無事に手術が終わり、手術後の二日目からは車椅子を卒業して、歩行器を使つて歩くことになりました。

彼は、今回の人工股関節の手術後も、痛みが殆ど無く、無事に回復ができました。

その後も、順調にリハビリで歩く訓練をして、歩行器が無くても直ぐに歩けるようになりました。しかし、ここから退院するまで日数が掛かったのです。

手術により、これまでの右股関節の位置から、正常な位置に人工股関節を入れたことで、元々悪い左との足の長さに差が二センチメートルできたのです。それで、やはり歩き難いのです。左股関節も手術すれば、差は無くなりますが、左は痛みもなく今は使えているので、左の靴底を二センチメートル上げることと解決をすることにしたのです。



この靴に入れる物が出来るのに日数が掛かったので、退院が月末近くになりました。

彼は退院の日に、彼が続けているご本部へのお礼の月参拝は、病院に迎えに来てくれた息子のレンタカーに乗って、無事にさせて頂くことができました。彼がY教会に来てから、続いていたご本部月参拝が途切れずに済んだので、本当にありがたいことでした。

もし、手術日が十日なら、彼の退院が八月になって、ご本部月参拝が途切れるところでした。だから、手術日が二日早まったことも、天地金乃神様のお繰り合わせだったのです。

※楽しむポイントは、ご本部や教会に、月参りの願いを立てていければ、神様はお繰り合わせをつけてくださり、お引き寄せが頂けること。

今回は予定よりも長く入院をしましたが、出ていた湿疹を良くするためにも、それだけの入院が必要だったように思いました。彼は天地金乃神様から、知らず知らずに受けていたおかげを、ここで気づきお礼を申し上げたのです。

退院後、介護用品である靴の底上げをする靴敷きは、使い勝手が悪かったので、持っているすべての靴の左だけを、靴屋さんで手直しをしてもらい、足の長さを調整することになりました。今回は、脊柱管狭窄の手術後以上に、後のケアが必要でした。歩く稽古に時間が掛かりまし

た。家の中でも底上げしたサンダルを履いて、常に生活をするようになったのです。

彼は、リハビリの先生から、「今の歩き方だと、腰に負担をかけているので、後々で腰痛が出る可能性があります。しつかり筋肉トレーニングをしてください」と、指摘と指導を受けていたのです。筋肉トレーニングは、足の片足立ちと階段の一段を昇り降りする内容でした。高齢者で、足に不安のある方は、ぜひやってみていただければ良いと思います。当時の彼は、一本の線の上を歩こうとすると、ふらついて歩けませんでした。足が外へ外へと出して歩くので、身体が左右に揺れるようになります。そのせいで腰に負担が掛かる歩き方になっていたのです。

高齢の方が、腰や膝を痛める原因の一つには、歩き方に問題があることも多いそうです。今、問題なく歩いている方でも、高齢になり筋力が衰えてくると、いつの間にか悪い歩き方になっている場合もあるので、気をつけてください。

彼は、高齢者の歩き方で、気をつけて頂きたいことがもう一つあるのです。

それは、すり足にならないことです。歩く時にすり足になると、つまづく元になり転倒する危険性が大きくなるからです。

意識して、出した足の踵から地面につけて歩くようにすると、つまずいて転倒することが防げます。

※楽しむポイントは、お願いして手術を受ければ、神様が新たな有意義な経験をさせてくださ

ること。

彼はこの入院の間に、天地金乃神様と人と霊神様の助かりの関係について、突然に閃ひらめくものがあつたのです。それは身体が快復する以上に、この入院において、彼が得た一番のおかげであつたのでした。

すべての人間は、天地金乃神様の分け御霊を授けられて、天地金乃神様のご神体である天地の中に、天地金乃神様のいとし子として生まれてきています。

そして、天地金乃神様は、生まれてきた人すべてに、

『信心して人を助けて神になれよ』

との願いをかけてくださっているのです。

その大きな生きる目的を、知らずにいる人があまりにも多いと思つています。

『人を一人助ければ一人の神である』

と神言があります。

生きている間に、神心になつて出来るだけ人のお役に立ち、人を助けておくことで、自身が神上がりのおかげを受けて霊神となつた時に、自分の子孫や導き助けた人から、霊神様と拝ま

れるようになる。

それが、その人が一年一年に心がありがたくなる真の信心を身に頂かれて、本当に信心があったと言える証だと、彼は理解しているのです。

『よくおかげを頂いたとか、熱心な信心をしたというが、本当に信心があつたかなかつたかは、その人が死んでみなければわからない』  
と神言されています。

※楽しむポイントは、本当の信心ができていたとは、病気が治ることや財産ができたことではなく、死んでから人から拜んで頂けるようになること。

皆様は、それぞれの親先祖の霊神様を、日々拝礼をして、お礼お願いをしておられるでしょうか？

もし、親先祖の中に、天地金乃神様から霊神様としてお使い頂けている方がおられても、その子孫や助けられた方が、霊神様と用いてお願いをしなければ、その霊神様は霊神としての働きができないのです。すると子孫もお守りを受けることが出来ない、という残念なことが起きてしまいます。

まさしく宝の持ち腐れなのです。

天地金乃神様も霊神様も、「お守りください」とお願いする人に、その働きを表すことができます。

天地金乃神様は、天地金乃神様を知らずにいる人にも、平等に天地に生きる条件は、整えてくださっています。

しかし、それ以上のお守りを頂くには、天地金乃神様にお世話になつてお礼を申し上げて、お守り導きをお願いさせて頂くことが必要なのです。

天地金乃神様が、一方的に人を助けることができるのではなく、人が助かるためには、お礼を土台にしたお願いがあつて、初めて人が助かる働きが生まれるわけです。

人が本当に安心に暮らすには、『願う人におかげを授ける』という、天地の道理にあつた道を踏むことが必要です。

※楽しむポイントは、神様と人とのお互いの願い合いがあつて、はじめて神様も人も共に助かり立ち行くおかげが生まれるということ。

霊神様も同じで、子孫や導き助けた人が、お願いしてくれなければ、霊神様が助けてやりたいと思つていても、どうにもできずに、ただ見ているだけで終わります。

天地金乃神様や霊神様をお願いすることから、人の助かり安心は生まれるのだと、彼は悟っているのです。

『人が死んだら、生きている時に、どのような宗教を信心していても、すべての人の魂はこの天地の中で、天地金乃神様から、霊神としてお世話になり続ける』  
そう彼は信じているのです。

だから生きている人が、霊神様のお徳を慕いお願いをすれば、助けられることは、天地の道理に叶っているのです。彼は、入院前にそこまでは、教祖様のみ教えによつて判っていたのでした。

では、自分の親先祖の御霊様の助かりを、お願いするにはどうしたらいいのか？それは、天地金乃神様に、生きている人が願い頼むしかない。そう突然に閃いたのです。

御霊様の助かりは、すべての霊神様をお守りくださっている、天地金乃神様をお願いする以外に、方法がないのだと悟ったのです。

生きている人が、霊神様のお働きで助けられることは確かにある。

しかし、霊神様になった人が、死んで霊となつている人は助けられない。

これは、彼にとつては大変な信仰上の閃きだったのです。

※楽しむポイントは、人が生きている間は、どの宗教であつても、それなりの助かりは得られ

るかも知れない。でも、死んで御霊様になったら、天地金乃神様でなければ助けられないということ。

彼自身が、天地金乃神様から、受けようとしている『神上がり』のおかげは、天地金乃神様が、唯一の人の生き死にを定めておられる存在だと、証明することでもあります。

今、K教にご縁のある方が、子孫や周りの者に対して、T代が受けたように、お祭日に天地金乃神様の元に行くか、教祖様のように、百日以上前に天地金乃神様から、神上がり日をお知らせ頂き、

「お風呂とトイレと食事が最後まで自由に出来て、痛み苦しみが無く、和らぎ喜ぶ心で、安心してスツと天地金乃神様の元へ帰る」

この人の助かり安心の姿を、子孫や周りに見せることができたなら、……。子孫は自ずとK教でご葬儀を仕え、その方の霊祭を大切にするようになる、彼は思っているのです。

自分が死んでから後の安心と助かりは、誰も確認しようのないことです。ですが、生きている間に、自身でお知らせを頂き、安心ができれば、死んだ後の心配は無用のことになります。

人間に不死不老はないのです。誰でも長生きすれば、身体が衰えてやがて死ぬのです。何回

も病気を助けて頂いたとしても、事故災難を逃れたとしても。

※楽しむポイントは、神様に心を向けていく価値は死ぬ時に、人が生死を超えた助かり安心ができていくこと。

彼のおばあちゃんが、自身の死ぬことを示唆する言葉を彼に伝え、おばあちゃんが大好きだったご本部のお祭りに、天地金乃神様の元へ帰ったこと。

教祖様の後にお取次ぎの座に十年お座りくださった二代教祖様が、十年目のお正月に「今年でこの羽織を着ることが最後である」とおっしゃって、ご自身がその年に世を去ることを伝えられていたこと。

三代教祖様が、ご本部のご大祭が仕え終えた時に、世を去られたこと。

四代教祖様が、一月十日のご本部のお祭りに、やはり世を去られたこと。

彼はこのような確かな事例を見て、助かりの道を模索してから十五、六年経って、『神上がりの道』を人に伝え説くようになったのでした。

そして彼自身の、信者第一号であるT代が、自身の里の教会の記念大祭の日に、T代が自分のイメージ通りにこの世を去り、まずはそれを実証してくれたのです。



彼は、次は自分の番だとワクワクしているのです。

天地金乃神様が人に対して願っておられる、

『人の心が人の助かりを願うこと、和らぎ喜ぶ心でいること』

であるなら、人がそれを目指して信心をさせて頂ければ、人の生きる最後にある姿が

『神上がりの助かりと安心になる』

彼はそう思っているのです。

※楽しむポイントは、天地金乃神様から、分け御霊を頂き、天地の中で生かされて生きている人は、すべて神上がりができること。

K教の教祖様ご自身が、

「この方のことを生神というが、この方ばかりではない。このお広前参っている人々がみな、天地金乃神様の子である。生神とはここに神が生まれるということ、この方がおかげの受けはじめである。みなもそのとおりにおかげがいただける」とおっしゃっています。

彼は、そのお言葉に食らいつきたいのです。

そして厚かましくも、教祖様と同じような、世の去り方をしたいと願っているのです。

彼が、教典を繰り返し読み解いて、導き出した『神上がりの道』が成就させて頂ける条件を書いております。

一、自身の命は、天地金乃神様から授かっていることを悟る。

二、天地金乃神様が唯一、人の生き死にを定めておられる神様であると悟る。

三、真の信心は、『自分の心が一年一年ありがたくなること』だと、教えられた教祖様の言葉を確認するために、年に一度、自分の中にある天地金乃神様の分け御霊の神心を、お祀りする自心祭をお仕えする。

四、天地金乃神様、教祖様、親先祖の霊神様のお祭日のお礼を大切にしてお祭日がおかげの成就日になるようにする。

五、自身の葬儀や霊祭は、K教で仕えるように子孫に伝えておく。（自身が霊神として、生き通しとなり、子孫やご縁ある人のお役に立つため）

どうでしょうか？

五つの内に、四つ目の自心祭は、K教の教師でもお仕えになっている方は少ないかも知れません。

※楽しむポイントは、天地金乃神様に身を任せて、天地金乃神様に自身の助かりを求めらるなら、

誰でもが実行ができること。

人は大切に考えていることは、子孫や周りにハッキリと判るように、書き残して置く、そして、最後の生き様で伝えておくことが大切なのだと思います。

そのことを痛感した経験があるのです。

ある方が、彼に自分のお葬儀はK教で仕えて欲しいとお頼みになられ、事前に霊神様をお祀りできるお社まで、自宅に用意をされていました。

しかし、その思いを子どもさんには伝えられていなかったのか、その方が亡くなった時に、彼には連絡が無く、子どもさんが仏式でされたのです。

子どもさんは、まったく教会にお参りされていなかったために起きた悲劇でした。

※楽しむポイントは、自身の思い願いは、家族や周りに必ず伝えておくこと。

なるほど教会へよくお参りしただけのことはあったなあ、と子孫や周りの人が納得する様な、最後の生き様が残せたら、そこにその方の霊神の助かりが生まれるのだと、彼は思うのです。

この世を去られた霊神様の殆どは、寝入った状態でおられるのです。

その靈神様に、「○○の靈神様、お守りください」と生きている人が拝礼すれば、その靈神様が目を覚まされて、お働きくださることが生まれます。

この寝入った状態にある靈神様が、生きている間に、人を苦しめるような悪いことや、強欲非道なことをしていたら、怖い辛い夢を見て苦しむことになります。

決して天地金乃神様は、自分の生み出した子に、罰を当てる事や、裁きにかけるとはなされないのです。

この様に苦しむ靈神様が、どの人の先祖にもあるかもしれないので、生きている子孫の誰かが、天地金乃神様に、その罪や強欲非道な行いをお詫びして、靈神様の立ち行きをお願いすることが大切になります。

※楽しむポイントは、天地金乃神様に、先祖のめぐりをお詫びして、靈神様の立ち行きをお願いすること。

教祖様が残してくださった数々のみ教えから、彼は、その様に靈神様の存在のあり方と、靈神様の助かり安心の方法を見つけることができたのです。

彼は今、ある信者さんの命を助けて頂くために、令和五年元日から四月十日までの、百日間にある修行に取り組みました。

この方は、令和四年十二月に膵臓癌が判り、一月下旬に手術をされていました。

手術に当たり、開教七十年記念大祭にお下げをした、「人形」（一度だけ命を継いでもらえるよう祈願したもの）を、提出されてお願いされました。

この方は、今（令和五年四月半ば）では再び朝参りをされるようになられ、お掃除のご用もできるようになっておられます。

また、五月からは元通りに、英語の塾も再開されるようになったので、本当におかげを頂かれたなあと思います。

※楽しむポイントは、常日頃から、天地金乃神様をお願いをさせて頂き、心安くしていれば、ない命でも継いで頂けること。

彼は今に思うのです。彼自身において、幼少期から人並みの健康があれば、K教の教師にならずにいたかも知れないと。

今のようなありがたい心と、心配のない生活が出来ることは、幼少期から身体が弱かつ

たから頂けたとも言えます。

K教には、『難儀がおかげになる』という意味のみ教えがありますが、心の在り方次第で、必ずそうなることも天地の道理だと、彼は思っているのです。

天地金乃神様は、生まれて来た人に無駄ごとは差し向けておられないのです。

人の身の上にかかる病気災難をはじめ色々な事柄は、その人の心の在り方で、助かり立ち行く元になるといいう事が生まれるのです。

そして、その心の在り方とは、

『思いわけをして、物事を良い方に取って、天地金乃神様にお礼を申し上げる』  
ただそれだけです。

いや、唯一これしかない、彼は確信しているのです。

※楽しむポイントは、人生を良い方に導くには、物事を良い方に思いわけをして捉え、神様にお礼を申し上げること。

実際に、教祖様が残された事例を、二つ紹介しておきましょう。

教祖様がまだ、天地金乃神様に出会う前に、お子様が三人続けて<sup>ぼうそう</sup>疱瘡に罹り、一人が亡くなつたのです。その時に教祖様は、二人が助かったとして、わざわざ神主さんに頼んで、神様に

お礼をされました。

その神主さんが、「一人が死んでいるのに、何と面白いわけのよい人じゃ。世間では三人が助かつてもこのように、神様にお礼をされることはない」と感心されたのでした。

この様な心の在り方が、後に人として初めて、天地金乃神様にたどり着く起因になったと、彼は捉えているのです。

また、お取次ぎの座にお座りになってから、ある時、天地金乃神様から「お金が落ちているから拾いに行け」とのお知らせがあり、そこに行かれたのです。

しかし、お金は落ちていませんでした。

天地金乃神様から、「お金は落ちていないか」と問われると、教祖様は、「お金は落ちていませんが、久ぶりによく歩いたので、身体の血の巡りがよくなり、お金を拾う以上のおかげを頂きました」と、天地金乃神様にお礼を申されたのです。その言葉に対して、天地金乃神様は「あなた、どのようなことを差し向けても、良い方にとるなあ」と、その教祖様の心の在り方を讃えられたのでした。

教祖様は、天地金乃神様のことを、自分の一生死なない親であり、どこまでもお守り助けくださる存在であると思っておられたのです。

その思いは、教祖様ご自身が四十二才の時に、のどけという病気になられて、湯水も喉を通

らず、医師にも見放されて、死を待つばかりになられた時の対応にもでていきます。

その最悪の状態で、教祖様はどういう心になられたか。

神様からおかげを頂くことが出来ない、自身の信心の在り方をお詫びされた上で、改めて神仏に身を任せてお願いをされたのでした。

その教祖様の心の在り方を見られた天地金乃神様から、

「この度は熱病になる番であった。熱病では助からないので、のどけに神がまつりかえてやり。心徳をもって神が助けてやる」

そう教えられて、命が助けられたのです。

教祖様がこの時に、

「これほど神仏にお願いしても、何故こんな病気になるのか」

そう不足や愚痴を心に思われていたら、せつかくの天地金乃神様のお働きも無駄になり、宿命の通りに死ぬことになったでしょう。

教祖様が、この様なご自身の経験を書き残されたことで、彼は、天地金乃神様は、何とか人を助けてやりたい、助かってくれよと、常に人のことを願っておられるとわかったのです。

※楽しむポイントは、神様をお願いする人の身の上に、如何なる病気災難があっても、神様には、お礼を申し上げる以外にないこと。



人を助けて安心に導くことを目的にするものが、宗教と呼ぶものだと、彼は思っているのです。

一人から始まった各宗教が、やがて広まることで組織化されて、お金や権威が出来た途端に、人が助からない事になる。実に皮肉なことです。

K教の教祖様は、最初はこの助かりの道を、組織化することに反対されました。天地金乃神様の思いは、「人が助かりさえすればよい」とのことだからと、教祖様はおっしゃっていました。組織化や教団にすることで、かえって人が助からなくなることを見抜いておられたのです。

しかし、「それでは、この世にも稀有な助かりの道が、流行り神のようになるかも知れませぬ」との周りの願いを受け入れられて、政府から公認の手続きを踏んで、教団として今に残ることになったのです。

教団として組織化されたことにより、お取次ぎの座に座って人の助かりをお願いされる形が、教祖様から今に至る六代教祖様まで、一日も欠けることなく続き残ったことは、真にありがたいことです。

彼自身は、六十才を過ぎれば、みんなが、

『天地金乃神様のおかげで生まれてきた人間であるから、死ぬのも天地金乃神様のおかげでなくて死ぬるものか。』

そうであるから、生まれたのがめでたいなら、死んで神になるのは、なおのことめでたいめでたいではないか。

死ぬのが辛いと言うのは、まだ、死ぬことをいとわないだけの安心ができていないからである。

信心して、早く安心のおかげを受けておかなければならない。

天地金乃神様のお計らいでは、いついっくかも知れないのに、その際のうろたえ信心では間に合わない。

平生から、まさかの折にうろたえないだけの信心をしておかなければならない』

そう神言されている所の助かりまでは、何とかたどり着けることが大切だと思っっているのです。※楽しむポイントは、神様のご都合で、人はいつ何時に神様のところに帰ることになるかわからないから、信心をして早く安心のおかげを受けておくこと。

『天地金乃神様へのご恩返しは、死んでからにせよ。生きている間は、お世話になるだけでよい』

と神言があります。

彼が、K 教学院に居た時にお願ひした三つの最後、

『後々に千人も万人も人を、助けさせて頂けるようにお役に立つ』

それを神上がりした後に、成就させたいと思つていたのでした。

つまり、彼は身を隠してから、多くの人を助けるお役に立てることを実現したいのです。

きつと五百年後、千年後には、天地金乃神様の願われている人の助かりの心である、

『和らぎ喜ぶ心で、人の助かりを願う』

その心を持つ人が、世界に多くできて、人と人、国と国、宗教と宗教などの争いが無くなる時代が来ると、彼は信じて願つて居るのです。

そして多くの人が恐れる死が、『神上がりのおかげ』を、天地金乃神様から頂くことにより、自身の人生の最高の喜びに変わり、ありがたい姿がそこに生まれていると、彼は思うのです。

彼にこの様な、楽しみを抱かせてくださった、K 教の教祖様には、言葉では言い表せないほど感謝をしているのでした。

※楽しむポイントは、人は生きている間は、神様のお世話になれば良いので、神様へのご恩返しは霊神になつてからさせて頂くこと。

この天地に存在する物は、すべて天地金乃神様の所有物だと、彼は思っているのです。人がそれをお借りして、ありがたく大切に使用させて頂くことで、人の生活が成り立っていくのです。

その中でも住まわせて頂いているお土地は、天地金乃神様のご神体に当たる物ですから、『天地の間に人がいてもおかげを知らず、神仏の宮寺、人の家屋敷、みな天地金乃神様の地所』そういうように、御教えくださっています。

ですから、お金を出して買ったから、人が自分の土地だと思ふことは間違っています。

※楽しむポイントは、日々住んでいるお土地に、すべての人間は、天地金乃神様にお礼を申し上げて暮らすこと。

そのお土地に核のゴミを埋めなければいけないことをどう考えるのか。

原発については賛否がありますが、お土地と後世の人に十万年という期間、核のゴミ処理の

負担をかけなければいけない現状なら、やはり止めるべきだと思います。

もともと、天地金乃神様は、自然界にそんな厄介な物質を存在させていないのです。

原発に代わるエネルギー資源ですが、実は日本には、天地金乃神様から与えて頂いている、エネルギー資源が昔からあるのです。

それは、メタンハイドレートというものです。

これは、日本の近海にある物で、お金をかければ実用化できるエネルギー資源です。

ただ今は、それを使うのにコストが高つくつのですが、国が本格的に開発に力を入れていけば、コストの面でも解決がすると思います。

原発や石油や石炭などに利権がある人には、開発して欲しくないことです。

メタンハイドレートは、石油石炭などと違い、永遠に枯渇することのないエネルギー資源なのです。

そして後世の人にも、負担も迷惑もかけない貴重なエネルギー資源だと言えるのです。

※楽しむポイントは、天地金乃神様が、日本に与えてくださっている、このメタンハイドレートを使うようになれば、日本はエネルギー資源大国になって、国民の暮らしが豊かになること。

世界では、未だに国の領土をめぐる紛争が絶えませんが、全ての国のどの人も、天地金乃神様のいと子である。

そのことが判り、それぞれの国の指導者が、天地金乃神様が願われている、人が助かり安心できる在り方を目指して国を導くなら、国と国が助け合う世界が生まれ、どの国ももっと豊かになれるはずです。

天地金乃神様は、教祖様にそれが実現するように、託されたのです。

※楽しむポイントは、まず一人ひとりが、和らぎ喜ぶ心になり、人の助かりを願えるような心になること。

彼にとって天地金乃神様とK教の教祖様に、ご縁を頂けたことで、ここまで人生を楽しめる結果となり、本当にありがたいと思っているのです。

生まれ持つてきた宿命による難儀苦難は、思い返しをする事で、何事も良い方にとり、天地金乃神様にお礼を申していけば、後々大きな助かりに繋がる。

願うべき天地金乃神様に出会い、教祖様の生き様に触れて、願うべき時に願い方を知ってお願いすれば、助かり安心ができる生活になる。

自分の助かり安心は、自分の心の中の神に願えば叶う。

また人の助かりは、お取次ぎを頂き、教祖様の手続きでお願いをして一時的にも立ち行けば、後は本人が信心をすれば助かる。

日々に、天地金乃神様と向き合い過ごすことで、彼は心に天地金乃神様が、人を救済してくださるイメージを、この様に持つことが出来たのでした。

それぞれの人の助かり安心は、それぞれの心に、自分はこの様に助けられる、とイメージが出来たものが、その人が天地金乃神様から頂けるおかげとなります。

このイメージが出来ていても、最後に信心度胸がないといけません。

信心度胸とは、天地金乃神様にもたれ掛かる、つまり身を任す覚悟がいます。

ある信者さんが、

「先生、私は教会にお参りが出来なくなったら、直ぐに神様の元に行きたいのでよろしく願います」

と口癖のように言われていた方がありました。この信者さんは、最後の助かりをこの様に願われていたのです。

この信者さんが実際に、その状況に近づいたあるお祭日に、

「先生、今日のお祭日に参拝しようと用意していましたが、身体が心配でよういきません」

と電話がありました。それを聞いて、彼はこう返事したのでした。

「今さら何の心配ですか。貴女はいつも、お参りが出来なくなったら、直ぐに神様の元へ行きたいと言われていたでしょう。それなら神様に身をまかせて、神様に身体を治して頂く心で、お参りをされたらどうですか？もし、途中で神様の所に行くことがあっても、貴女のお願ひされてきた通りのおかげでしょう」

突き放したような返事のようにですが、彼は心配を放してお参りされたら、身体の上に大きなおかげを頂けると感じていたのです。

しかし、この信者さんは、天地金乃神様に、『死んでもままよ』の思いで、身を任すことが出来ず、お参りがありませんでした。

その後、お参りされることが一度もなく、やがて病院に入られて、長い間寝たきりの状態になられてから、早く死にたいと言われるような日々になったのです。

あのお祭日に、この信者さんに信心度胸があつて、お参りさせて頂くという心になられていたら、きつと大きなおかげを受けられたと思います。

彼が度胸を決めて、天地金乃神様に身を任せたことで、肝炎や緑内障が奇跡的に治ったことと同じように。

※楽しむポイントは、神様から十分なおかげを受けるには、最後に信心度胸があること。



彼は、天地金乃神様に身を任すことについて、八十才を超えたら、全身麻酔をかけてするよ  
うな大きな手術は、なるだけしない方が、長生きが出来ると感じています。

痛みがあれば、痛み止めやモルヒネ投与で痛みに対処する。その時々  
の病状に対しての治療で良いと思うのです。

信者さんにも、折に触れてそれを伝えていきます。

コロナが始まる前でしたが、手術をしなければ半年の命と言われた、八十才代の方があ  
りました。

その方にも常々、大きな手術は避けるようにお伝えしてはいたのですが、しかし医師の勧め従  
って、全身麻酔の大きな手術をされたのでした。

結果、手術後三ヶ月あまりで世を去られたのです。

※楽しむポイントは、高齢者は、大きな手術はせずに、神様に身を任せた方が、安心に長生  
きできる場合があること。

Y教会に、講師として来られた先生が、父親の死とご自身の出産とが、霊祭の日に重なった  
お話をされました。

その時に生まれたお子さんが、「神様、教祖様、おじいちゃん、お願いします」と、今に拝礼する姿に、父親が生き通しになっているおかげを感じる、という内容がありました。

彼は、この天地に生きた人がみんな、この様なおかげを受けられたら良いなあと思ったのでした。死んだ後、誰にも霊祭を仕えて貰えない生き方は、人の生き方としては残念なことだと、彼は思うのです。身体の形のある間しか、生きられない人は、もったいないことです。

※楽しむポイントは、霊神様となつてからの方が、本当は遥かに長い時間を過ごし、お役に立てること。

それは後世の人から忘れられずに、霊神様と拝礼されることで実現します。

彼は、そのためにもすべての人が、天地金乃神様から『神上がり』のおかげを頂かれたらなあと思います。

『人は一代、名は末代というが、人間は一代の内に、死んだ後へ名の残るようなことをしておくがよい。若い者の不足話をしないで、若い者から、おじいさんおばあさんの、話が聞きたいと言われる信心をなささい』

との神言があります。

彼は、そういう生き方ができればとの思いをもって、教祖様が残された、『神上がり』を自身が再現したいと願っているのです。

思いつくままを、天地金乃神様にお願いさせて頂きながら書いてきました。

『どんなによい料理屋が隣にあっても、その料理屋のご馳走を食べたことのない人は味を知らない。料理屋のご馳走は食べなくてもよいが、この方が話している天地金乃神様のおかげは、受けないわけにはいかない。』

また、多くの人の中には、私は天地金乃神様を拝まないが、それでも差し支えはない、と言う人もある。これは恩を受けて恩知らずというものである。』

そう神言されています。

彼は、天地金乃神様や教祖様の存在を、なるだけ世の人に知って欲しいと願っているのです。出来るだけ世の中に、恩知らずの人を少なくしたいと思っています。

すべての人の命は、天地金乃神様が授けてくださっていることが判り、願うべき天地金乃神様に出会った喜びに目覚め、願うべき時に願う方を知って、お願いされることができたら、

『お天道様のお照らしなさるのもおかげ、雨の降られるのもおかげである。』

人間はみな、おかげの中に生かされて生きている。人間は、おかげの中に生まれ、おかげの中で生活をし、おかげの中に死んでいくのである』

とある神言が実感できる人の生活が生まれると、彼は自身の経験から思うのです。

人の生き様の最後に、

『和らぎ喜ぶ心で、人の助かりを願う』

という姿があり、天地金乃神様に、自身の霊神としての助かり安心を、子孫や周りに託すことが出来ていれば、生き通しとなるおかげが頂ける。

それを、実感できる人が一人でも二人でも増えることになればと、彼は願うばかりです。

今さらですが、彼は天地金乃神様に問うたのです。

人が信心させて頂くことは、どうしても必要なことですかと。

『睡眠と同じこと』

それが、天地金乃神様からのお答えでした。

彼はなるほどと思いました。

眠らないで、良い生活ができる人はいないのです。やはり、天地の道理に合った、良い信心を

させて頂くことが必要だと、彼は改めて思うのでした。

最後にお伝えしたいこと

## 令和七年夏大難

彼が天地金乃神様から頂いたお知らせです。

彼が住んでいる日本に近々に大きな天災が起きるタイミングです。

彼は、令和四年の一年間に、K教のご本部へ大阪から百回のお参りをしました。

このお参りをさせて頂く前に、彼はお祭日を大切にしている内容の修行を、修行する心のある信者さんと共に、千日かけて取り組みました。

その信者さんたちの書かれた、お願いを持つての代参の百回のお参りでもありました。

彼自身のお願いは、

- 一、 神様から人のお役に立つお知らせを頂く。
- 二、 在籍教会の開教百年大祭に元気でご利用させて頂く。
- 三、 命のある間、お風呂と食事とトイレが自分でできる。
- 四、 神上がりのおかげを頂く。
- 五、 教祖様の御教えにより、世の人に真の助かり安心を伝える。

この五つでした。

彼は、JRの青春切符を使って、在来線を乗り継ぎ、一月に八回、三月と四月に三十五回、七月と八月と九月に四十五回、十二月に十二回のお参りをさせて頂き、百回の代参修行を達成しました。

往復の電車に乗っている時間が約八時間、ご本部での滞在時間が一時間半から二時間半です。彼はこの代参の中で、神様から自分は本当にお守り頂いていると実感したのです。

まず、時間帯が通勤通学であった電車で、必ず座ることができました。これは、人工股関節の手術後に杖をついていたことで、座席を譲って頂けたこともありました。この杖も、八月半ばからなくても歩けるようになったので、代参修行が彼自身の身体のリハビリにもなっていたのです。

電車の運行も、十二月に一度、向かう時に信号機のシステム故障があり、二時間ほど電車の中で足止めをされただけで、後はすべてほぼ予定通りの運行でした。人身事故や車両点検などで運行が乱れる事が多いJRにおいて、これも大きなおかげだと思えます。

そして、何よりもお天気のお繰り合わせが一番のおかげでした。

百回のお参りの中で、ご本部で雨に降られたことが、一回だけだったことです。その一回も

教祖様の奥城でお礼を申し上げている時に、土砂降りの雨が四十分ほど降って止んだのです。つまり、駅からご本部の往復の道中は百回とも雨に降られることがなかったのです。これは、杖を使っていた彼にはありがたいおかげだったのです。

令和四年十二月二十七日に修行成就の日を迎えました。

彼の五つのお願いの一つの、『神様から人のお役に立つお知らせを頂く』に対して、神様が冒頭の「令和七年夏大難」というお答えをくださったのでした。

彼は、このお知らせに、まずありがたいと思っただけです。

なぜなら、神様のお計らいによつては、今日や明日にでも大難が起きても仕方がないからです。それが令和七年夏まで大丈夫なら、少なくとも自身の身凌ぎができる準備期間があるわけです。その身凌ぎができる準備とは、天地金乃神様に大難が小難に変わるように、できるだけ多くの人が勢を揃えてお願いすることです。

その多くの人の勢を揃えたお願いにより、何も起きないことが一番良いのです。それによつて、「何だ、何もなかったじゃないか」と言ってもらえたら、彼は最高のおかげを受けたと喜べるのです。

しかし、今回は凌げても、いずれこの国に大難と呼ばれる天災が起ることは、避けがたい事実なのです。



それに対する備えを、天地金乃神様にさせて頂くことが、やはり大事だと思っております。

その備えとは、天地金乃神様に三つのお礼をさせて頂くことです。

一、天地金乃神様から授かっている自分の命のお礼。

二、天地金乃神様からお借りして住んでいる土地建物へのお礼。

三、天地金乃神様からお世話になり、生かされていることへのお礼。

この三つのお礼ができていけば、天地金乃神様のご神体であるこの天地の中で、何が起きて人も命が助かり、身凌ぎができます。

神様を感じて、お願いができる人間という存在が、天地の中に生まれてから、まだ僅かに三万年ほどです。それまで人が生きることができないような、天地の状態も長い間あったのです。それを考えれば、私たちが今、天地金乃神様からどれほどありがたいおかげを受けているかが判ります。

この三つのお礼を日々実践されて、いかなる天災大難が起きても、身凌ぎができるおかげを受けてくだされば幸いです。

この本の電子書籍版は下の QR コードを読み取ってダウンロードできます。

パソコンの方は、金光出版新社のホームページからPDF 版をダウンロードできます。

<http://konko-shinsha.jp/信心体験記/1565>



この本についてのご意見、ご感想、お問い合わせは、[9210taa3@rakumail.jp](mailto:9210taa3@rakumail.jp) までお寄せ下さい。

彼の病気の治し方&楽しみ方  
あなたの病気と死への不安消します

発行日 令和 5 年 11 月 5 日

発行者 国東 高行

印刷所 金光出版新社

<http://konko-shinsha.jp>